

宮城県文化財調査報告書第96集

朽木橋横穴古墳群
宮前遺跡

昭和58年3月

宮城県教育委員会

序

私達の生活している宮城県内には、祖先がのこした数多くの遺跡があります。これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育ぐくんできたものであり、これを愛護し、活用するとともに後世に伝えていくことが現代の私達の重要な責任であると考えます。

近年、地域の開発事業が進展するのに伴ない、埋蔵文化財の保護が重要視されてきているのもその線に沿ったものであります。

本報告書は、宮城県教育委員会がこれまで発掘調査を実施した遺跡のうち、年次計画に従って整理した『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』について、成果をとりまとめたものであります。

ここに、本書を刊行するに当たりまして、関係された方々の御協力に深甚なる敬意を表しますとともに、遺跡に対する御理解の一助となり、さらに学術上にも大きく役立つことを切に願ってやまない次第であります。

昭和58年3月

宮城県教育委員会

教育長 三 浦 徹

例 言

1. 本書は宮城県教育委員会が主体となって調査を行なった遺跡の調査報告を収録したものである。
2. 本書に収録した遺跡は次の通りである。

古川市所在 朽木橋横穴古墳群（昭和48年度実施）
亘理郡亘理町所在 宮前遺跡（昭和49年度実施）

また、別に、昭和57年度発掘届一覧、宮城県文化財調査報告書一覧を掲載した。
3. 宮前遺跡の報告をまとめるに際し、渡辺泰伸氏（仙台育英学園教諭）から古墳時代中期の須恵器について助言をいただいた。
4. 各遺跡の執筆は調査時における調査員および現宮城県教育庁文化財保護課職員の協議を得て、下記の文化財保護課職員および旧職員が担当した。

朽木橋横穴古墳群 佐々木安彦（現仙台市長町中学校教諭）・阿部 恵
宮前遺跡 丹羽茂
5. 各遺跡の調査に関するすべての資料（出土遺物・諸記録等）は宮城県教育委員会において保管している。

目 次

(1) 朽木橋横穴古墳群	1
(2) 宮前遺跡	71
○昭和58年度発掘届一覧	214
○宮城県文化財調査報告書一覧	220

くち き ばし
朽木橋横穴古墳群

目 次

I. 調査の経過.....	1
II. 遺跡の位置と環境.....	1
III. 調査の方法.....	7
IV. 発見された遺構と遺物.....	7
第1号墳.....	7
第2号墳.....	9
第3号墳.....	10
第4号墳.....	10
第5号墳.....	11
第6号墳.....	13
第7号墳.....	13
第8号墳.....	20
第9号墳.....	24
第10号墳.....	27
第11号墳.....	30
第12号墳.....	30
第13号墳.....	33
V. 考 察.....	40
1. 出土遺物の年代.....	40
2. 横穴古墳の構造と編年.....	43
3. 横穴古墳の年代.....	45
4. 朽木橋横穴古墳群の特徴と問題点.....	46

調 査 要 項

遺 跡 名：朽木橋横穴古墳群

遺跡記号：BA（宮城県遺跡地名表登録番号：27090）

所 在 地：宮城県古川市小野字朽木橋

調査対象面積：約1200㎡

発掘面積：約500㎡

調査期間：昭和48年4月25日～6月15日

調 査 員：宮城県教育庁文化財保護課 佐々木茂植、小井川和夫、佐々木安彦、阿部恵

調査参加者：東北学院大学学生 木村浩二、鈴木実夫、千葉寿郎、新沼秀二、門馬真一郎

調査協力機関：古川市教育委員会

I. 調査の経過

朽木橋横穴古墳群は、宮城県古川市小野字朽木橋地内の丘陵斜面にあり、大崎北部地区広域農道の建設と係り合いをもった。

この農道は、江合川左岸一帯の古川市、岩出山町、田尻町、涌谷町などの広域営農団地の育成と農産物の流通合理化、生活環境の整備を図るため、宮城県農政部が主体となって昭和47年春に事業着手したもので、その延長路線は18.9km、幅員6mである。

朽木橋横穴古墳群は、同農道の建設予定ルートにかかるため、宮城県教育委員会が昭和48年4月25日より緊急発掘調査を実施した結果明らかになったもので、ルート内を主体に約40基程が群集している。路線敷内では円墳1基を中心に29基の横穴古墳が取り巻いている。

当初の設計では、古墳群のある山を大きく切り崩して直線コースの道路を造ることになっていたが、発掘調査が進むにつれて、複室構造をもつ特異な横穴が検出されて注目をあびた。これらのことから朽木橋横穴古墳群は北限地帯の横穴古墳としては極めて古い様相を示すものとしてその重要性が認識されるにいたった。

この間、5月12日には地元市民を中心に現地説明会を開催して、この遺跡の学術的価値と意義についての普及につとめたが、その後ほどなく古川市の遺跡保存要請で関係者の協議の結果6月15日をもって発掘調査が打ちられることになった。この間に発掘した横穴は13基で、同ルート内の残りの円墳1基および横穴16基はそのまま保存した。

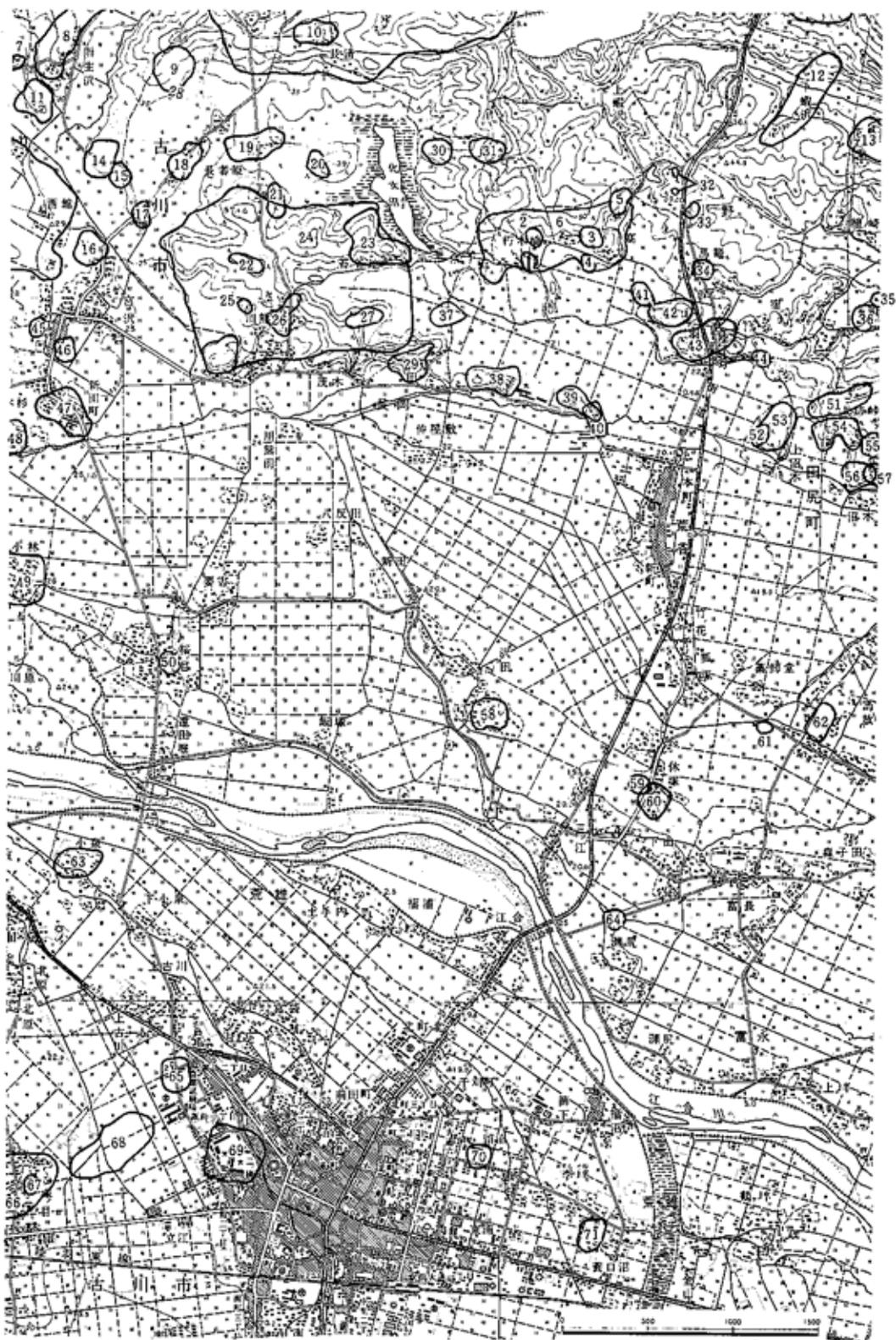
以来、路線変更による遺跡の保存に関する協議が関係機関の間で重ねられた。こうして最終的に朽木橋横穴古墳群はすべて現状のままの保存が決定した。調査で開口した横穴は埋戻しが行われ、広域農道は古墳群を右に避けて迂回され、昭和52年暮れに全線が開通した。

II. 遺跡の位置と環境

朽木橋横穴古墳群は国鉄陸羽東線陸前古川駅の北方約6km、古川市小野字朽木橋一帯に所在する。

古川市は宮城県の北西部に位置しており、東は遠田郡田尻・小牛田両町、西は加美郡中新田町、南は志田郡三本木町、北は玉造郡岩出山町、栗原郡高清水町に接している。

古川市の地形を見ると北部には奥羽山脈から派生した陸前丘陵の一部である築館丘陵が東に延び、起伏量の少ない丘陵地帯を形成している。中央部から南部にかけては、丘陵地帯の南麓を東南方向に流れる江合川や市の西端を東流する鳴瀬川とその支流多田川によって形成された肥沃で広大な大崎低地が広がっており、県内有数の穀倉地帯となっている。また河川の流域には、各所に自然堤防が発達している。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

朽木橋横穴古墳群は北部丘陵地帯のほぼ南端に立地しており、東に樹枝状に枝分れしながらのびてきた丘陵が、さらに南東方向に突出し、舌状丘陵状となった部分の南西斜面から北東斜面にかけて凝灰岩を穿って構築されている。古墳群の位置する標高は約25~40m、水田面との比高は約10mである。現状は一部が畑として耕作されている他は山林となっている。

本横穴古墳群の位置する古川市小野地区一帯には多くの横穴古墳群の所在が知られており、これらは大字名から一括して小野横穴古墳群と呼称されている。そしてこの小野横穴古墳群はそれぞれが立地する小丘陵によって支群に分かれ、その小字名から馬籠、羽黒、白山、小高、姥沢、朽木橋、岩崎の各支群名が付されている。朽木橋古墳群はその中で最も西に位置している（第2図）。

大崎平野とそれを取り囲む丘陵地帯には数多くの遺跡の存在が知られ、その時代は旧石器時代から中・近世の各時期に亘っている。ここでは古墳時代の後期から終末期にかけてを中心に朽木橋古墳群を取りまく環境を概観したい。

古墳時代になると前期の前方後円墳と考えられる青塚古墳（古川市教委：1981）、塩釜式期の住居跡1軒が検出された留沼遺跡（手塚：1981）、中期引田式の標式遺跡である引田遺跡などが大崎低地に形成された自然堤防上に立地するようになり、旧石器時代から弥生時代の遺跡が

第1表 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	朽木橋横穴古墳群	横穴古墳	奈良・平安	37	朽木橋遺跡	包含地	奈良・平安
2	小野横穴古墳群（嵯峨支群）	横穴古墳	奈良・平安	38	姥沢山遺跡	包含地・横穴古墳	奈良・平安
3	姥沢小高遺跡	竊跡・横穴古墳	奈良・平安	39	稲荷塚古墳・稲荷山遺跡	円墳	奈良・平安
4	小野横穴古墳群（小高支群）	横穴古墳	奈良・平安	40	新江川遺跡	包含地	縄文（晩）
5	・（新田支群）	円墳?・横穴古墳	古墳・奈良・平安	41	いもり塚周辺遺跡	包含地	縄文（晩）
6	姥沢遺跡	包含地	奈良・平安	42	小野横穴古墳群（羽黒・白山支群）	横穴古墳	奈良・平安
7	若林遺跡	包含地	古代	43	羽黒遺跡	包含地	古代
8	野崎遺跡	包含地	弥生	44	一貫寺遺跡	包含地	奈良
9	佐女沼遺跡	包含地	縄文	45	内林古墳群	古墳	奈良・平安
10	長谷遺跡	包含地	旧石器・縄文	46	下田遺跡	包含地	奈良・平安
11	雨生沢遺跡	城館	中世	47	新田町遺跡	基層跡	弥生（後）・古墳（前）
12	下船遺跡	包含地	弥生（後）	48	一本杉遺跡	包含地	弥生
13	華島遺跡	包含地	縄文（晩）	49	南小林遺跡	包含地	奈良・平安
14	上谷遺跡	包含地	弥生	50	石塚田遺跡	城館	近世
15	宇南遺跡	包含地	奈良・平安	51	宍谷山遺跡	包含地	奈良・平安
16	宮沢遺跡	城館	中世・近世	52	天神酒蔵穴古墳群	横穴古墳	古墳（後）
17	東横遺跡	包含地	奈良・平安	53	天神山遺跡	包含地	平安
18	新庚遺跡	包含地	縄文・奈良・平安	54	巨向前横穴古墳群	横穴古墳	古墳（後）
19	一本杉遺跡	包含地	縄文・平安	55	大畑館跡	包含地・城館	奈良・平安・中世
20	長者原D遺跡	包含地	縄文	56	菅水横穴古墳群	横穴古墳	古墳
21	長者原E遺跡	包含地	奈良・平安	57	沼水館跡	城館	中世
22	山の上古墳群	古墳	古墳	58	沢田城跡	城館	中世
23	苔ノ谷地遺跡	包含地	弥生	59	休塚館跡	城館	中世
24	国実跡 宮沢遺跡	城館	奈良・平安	60	城館跡	城館	近世
25	長谷遺跡	包含地・古墳	奈良	61	馬放日遺跡	包含地	奈良・平安
26	川除遺跡	包含地	奈良	62	馬放館跡・馬放A遺跡	包含地	奈良・平安・中世
27	長者原A遺跡	包含地	縄文（晩）	63	小高遺跡	包含地	
28	川除館跡	城館	中世	64	源尻遺跡	包含地	古墳
29	三輪田遺跡	包含地	奈良・平安	65	青塚城跡	城館	中世
30	上船沢遺跡	包含地	縄文	66	塚の目遺跡	包含地	古墳
31	嵐山遺跡	包含地	縄文	67	青塚古墳	前方後円墳	古墳（前）
32	新田古墳群	古墳	古墳	68	竹の内遺跡	包含地	古墳
33	馬籠遺跡	包含地	縄文・奈良・平安	69	古川城跡	城館	中世・近世
34	小野横穴古墳群（馬籠支群）	横穴古墳	古墳（後）	70	留沼遺跡	基層跡	古墳（前）
35	小野館跡	城館	近世	71	李塚館跡	城館	中世
36	須賀遺跡	包含地	縄文（晩）・古代				

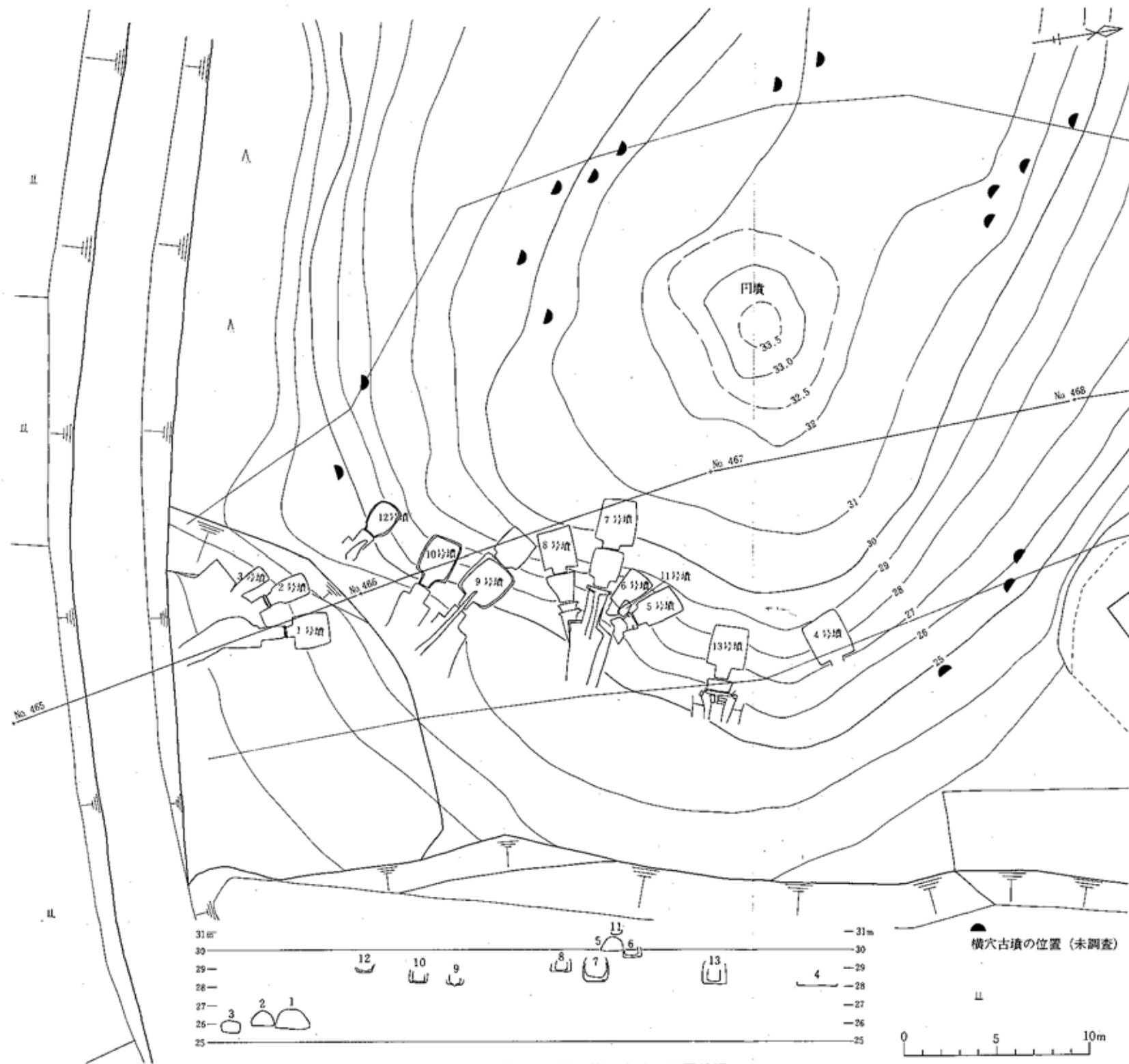
北部丘陵地帯に多く分布するのと大きく様相を異にしている。このような古墳時代前期に始まる沖積地への進出に伴うと考えられる経済的基盤の発達は、古墳時代後期から終末期になると大崎平野周縁に分布する高塚群集墳や横穴古墳の飛躍的な数の増大となって表われてくる。

高塚群集墳の分布状況を見ると大崎平野西半部に分布が集中し、東半部では小牛田町内に分布が認められるものの概して希薄である。西半部の西縁には200基以上が群集していたとされる色麻町色麻古墳群（古川：1981）などがあり、ここから北縁西半にかけての丘陵地帯には塚原古墳群（古川市教委：1970）、日光山古墳群（古川市教委：1971）に代表される群集墳が一带に多数分布している。そしてこれらのうち調査された群集墳はいずれも円墳で、内部主体は河原石積の横穴式石室をもっている。

横穴古墳群は大崎平野の南縁に松山町亀井田横穴古墳群（氏家：1981）や装飾横穴のある三本木町山畑横穴古墳群（氏家：1973）などが、東縁に涌谷町追戸・中野横穴古墳群（涌谷町教委：1973）などが、北縁にはほぼ中央に朽木橋横穴古墳群が含まれる小野横穴古墳群があり、その東には田尻町日向前横穴古墳群などが、西には2.5kmの間に数百基が分布すると言われる川北横穴古墳群（平、加藤、氏家：1970）などが連続して分布しており、西縁には宮崎町米泉館山横穴古墳群（宮崎町教委：1973）などがある。横穴古墳群は大崎平野のほぼ全周に分布しているが、墳集墳の多い西縁では分布密度が低くなっている。

これらの群集墳や横穴古墳群の造営の背景は、集落跡などの発掘例が少なく十分明らかではないが、古川市名生館遺跡は7世紀末～9世紀末の官衙跡とも考えられており（高野、沖田：1983）、多賀城創建瓦窯である古川市大吉山瓦窯跡などの存在からも古墳時代終末期から奈良平安時代の大崎地方は比較的安定した社会環境にあったと思われる。





第3図 調査区・地形図と横穴古墳の配置状況

Ⅲ. 調査の方法

発掘調査は農道路線敷内のほぼ南端部の畑に開口していた横穴古墳に第1号墳と命名し、表土を除去する作業から始めた。当初表土を除去したのは、この第1号墳の周辺と南東斜面の北端に玄室が陥没した状態で埋没していた第4号墳との間約40mの範囲で、ボーリング棒による調査も合わせて進めた。そして横穴古墳には発見順に第1～第13号の番号を付したが、その配列は第1号墳の南に第2、3号墳が、第4号墳と第1号墳の間に、北から南へ順に第5～第12号墳が位置している。また、第4号墳と第5号墳の間に第13号墳が、第5号墳と第6号墳の間に第11号墳が新たに検出されている。

検出された横穴古墳は土層観察用のベルトを残しながら、堆積土を排除することにしたが小規模な横穴古墳が多いこともあり、堆積土の状態を十分に観察、記録化することは出来なかった。

出土遺物については随時、写真や1/10、1/20の図面で記録化し、精査の終了した横穴古墳については1/20の縮尺で平面図、縦・横断図を作成し、写真を撮影した。

精査がほぼ終了した段階で、調査区全体を測量し、1/100の地形図を作製した。また、今回調査した部分以外の路線敷分についてボーリング調査を行ない、横穴古墳の存否を確認し、確認されたものについては地形図にその位置を記録した。

Ⅳ. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は横穴古墳13基である。13基の横穴古墳のなかには玄室を2つもつ複室構造のものも含まれている。複室構造の玄室については手前の玄室を前室、奥を後室と呼称することとする。出土遺物には土師器、須恵器、鉄製品、金・銀環、玉類などがある。

第1号墳（第4図）

本横穴古墳は南斜面の東端にあり、全長約6mで西側にある第2、3号墳と前庭を共有している。

〔玄門〕 玄室の前端の中央からやや左よりにある。玄門の立面形は両側壁が崩落しており不明である。床面からわずかに立ち上がりを残すだけで、玄門前端床面には幅約12cm、深さ約8cmの閉塞溝がある。

〔玄門〕 玄室の前端の中央からやや左よりにある。玄門の立面形は崩落しており不明である。床面からわずかに立ち上がりを残すだけである。玄門前端床面には幅約12cm、深さ約8cmの閉塞溝がある。

〔羨道〕 羨道の全長は約1.3mで、両側壁とも平行に羨門に向っている。立面形は天井部が崩落しており不明である。床面は羨門に向って傾斜しているが、その上面にはほぼ平坦に円礫が

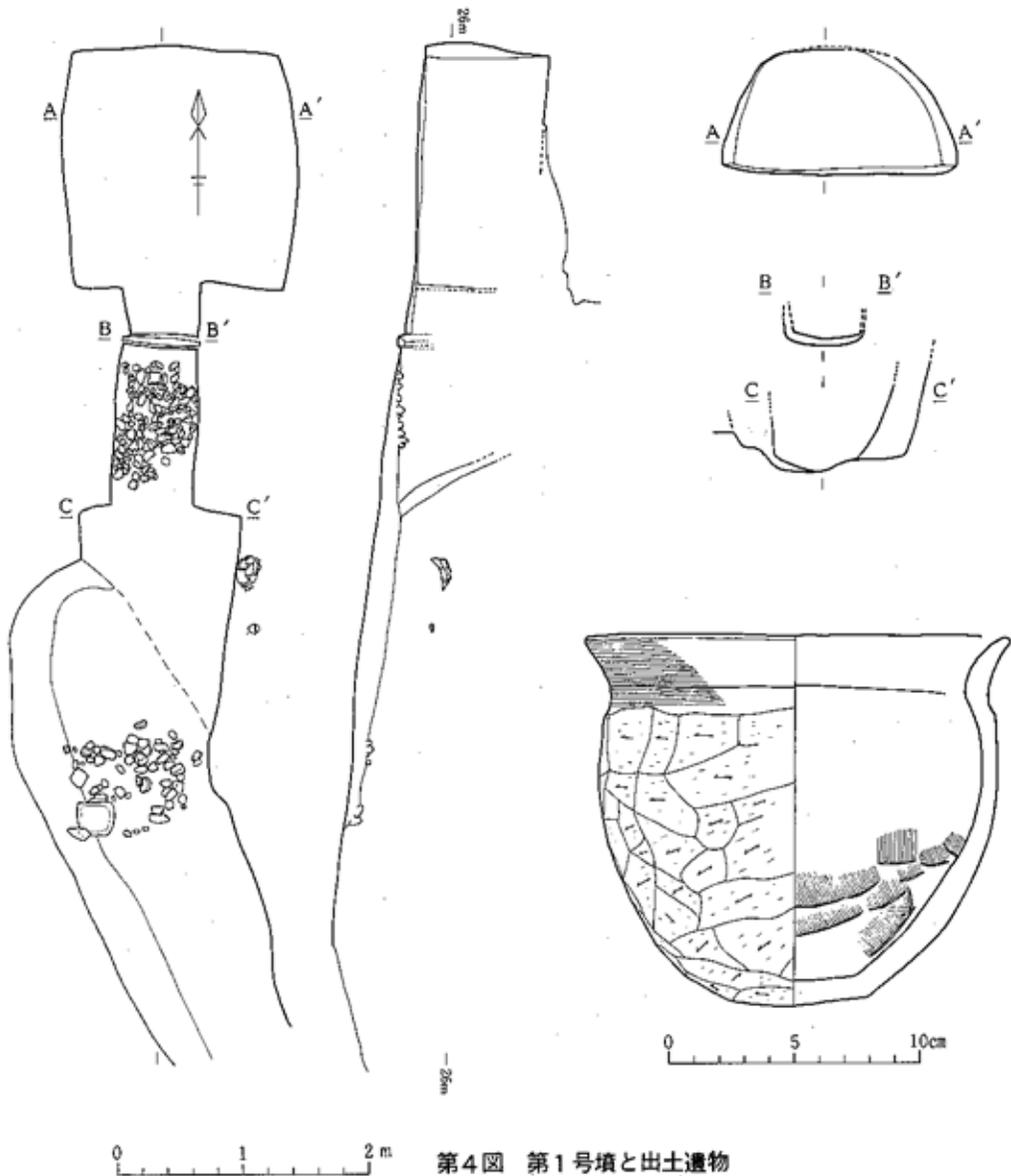
敷きつめられたような状態で認められた。

〔羨門〕 羨道前端の両側壁が右に約40cm、左に約30cm開き羨門となっている。羨門右側は約80cmの立ち上がりが残っているが、左側は15cmほどしか残っていない。

〔前庭〕 前庭部は右側壁で約2m、左側壁で約40cmほどを残して第2号墳の前庭部と思われる掘り込みによって切られている。平面形は羨門から前端に向って狭くなっている。床面は前方に向ってやや深く傾斜している。

〔出土遺物〕

羨門近くの前庭部堆積土上面から土師器甕が一括状態で出土している。



第4図 第1号墳と出土遺物

土師器概 口縁部が外反し、体部がふくらむ小型の甕である。器面調整は口縁部内外面が横ナデ、体部と底部外面が横方向のヘラケズリ、体部内面はヘラナデが施されている。

第2号墳 (第5図)

第1号墳の西隣りに位置している。全長約8mが検出された。かなり風化が進んで崩落が激しい。

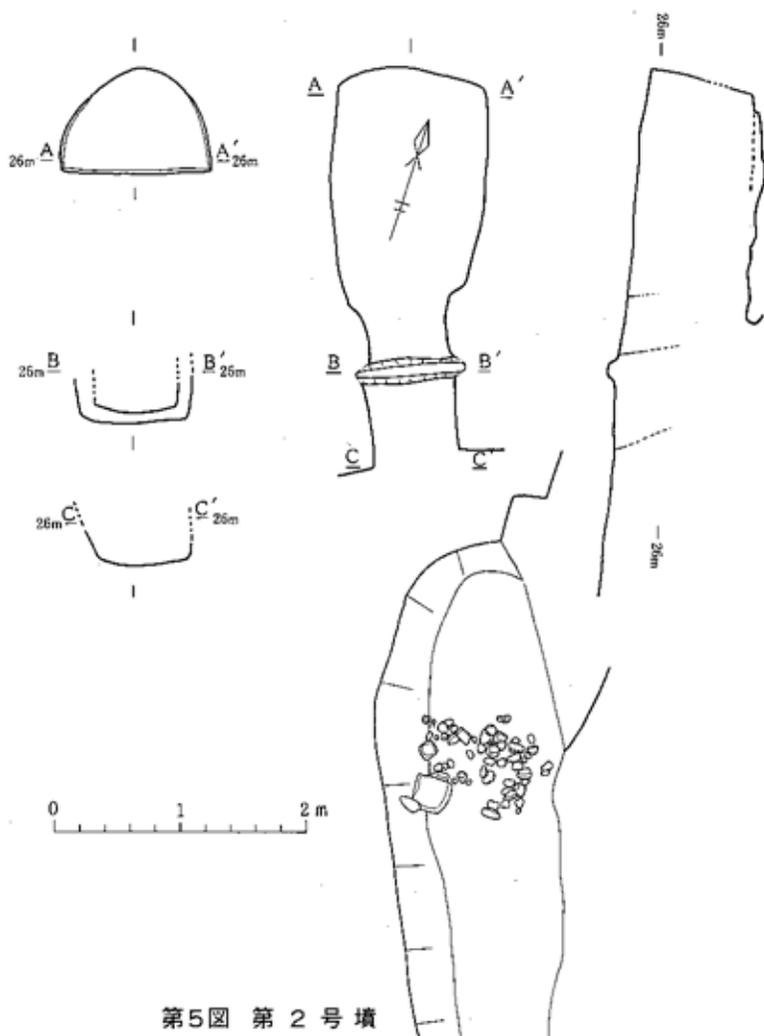
〔玄室〕 平面形はほぼ長方形で、奥壁はわずかにふくらんでいる。玄室の立面形はアーチ型である。床面は両側壁から中央部にかけてわずかに凹み、玄室前端に向って傾斜している。両側壁は奥壁付近が残存している。両壁の立ち上がり部分から天井部にかけて剥落している。天井部は玄室奥壁から約16cmのところまで残存しており、玄室前端にかけて剥落がみられる。

〔玄門〕 玄室前端のほぼ中央部にある。玄門の立面形は天井部が崩落しているため不明である。玄門の左側壁は崩落しており、右側壁がわずかな立ち上がりを残している。玄門前端の床面には幅約20

cm、深さ約8cmの閉塞溝がある。

〔羨道〕 幅約70cmで天井部はなく、わずかに残る両側壁が中心軸から右寄りに約60cm残存している。床面は前方に向ってゆるく傾斜している。

〔前庭〕 羨道の延長上に前庭部と思われる掘り込みが約4mの長さで認められ、第1号墳の前庭部を切っている。掘り込みの下端の幅は約1mである。この掘り込みの堆積土中に直径10cmほどの円礫や凝灰岩の切り石等



第5図 第2号墳

が含まれている。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

第3号墳 (第6図)

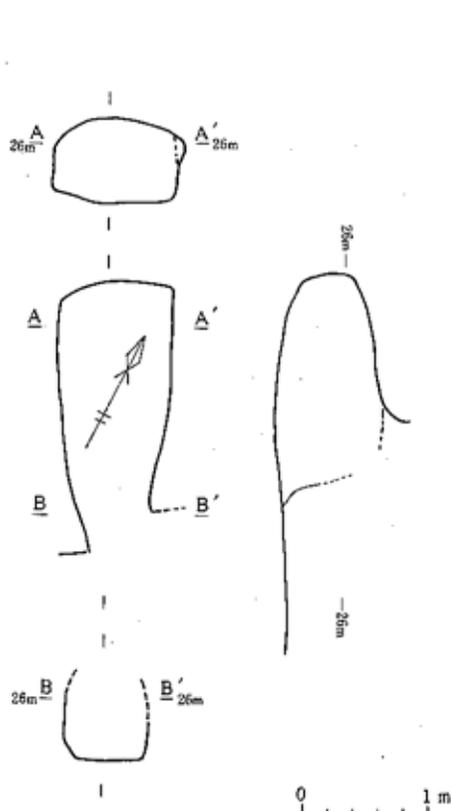
調査区の西端、第2号墳の左隣りにある。全長約1.9mと規模が小さい。

〔玄室〕 玄室前面に向って両側壁が狭くなっており、平面形は細長い台形状を呈している。玄室の立面形は奥壁から天井部にかけて、剥落が激しく不明である。床面は奥壁から約50cmのところから風化による剥離がみられ窪んでいるが、ほぼ平坦である。両側壁はわずかに残存しており、荒いノミ痕が認められる。玄門、羨道や閉塞用の施設はない。

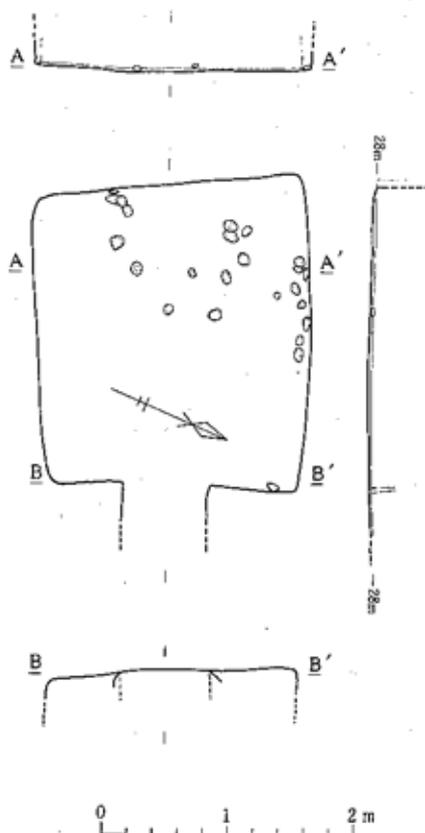
〔出土遺物〕 出土遺物はない。

第4号墳 (第7図)

南東斜面の北端にある。路線敷きにかかる玄室から玄門の一部までの長さ約2.7mの調査を行った。



第6図 第3号墳



第7図 第4号墳

〔玄室〕 玄室の平面形はほぼ正方形である。立面形はわずかの両側壁を残し崩落しているため不明である。床面はほぼ平坦であり、床面直上には計24個の10cm前後の大きさの円礫が残存していた。

〔玄門〕 玄室前端のほぼ中央にある。長さ約30cmほどしか調査していないため、幅約70cmであることしかわからない。また側壁もほとんど残っていないため、立面形も不明である。

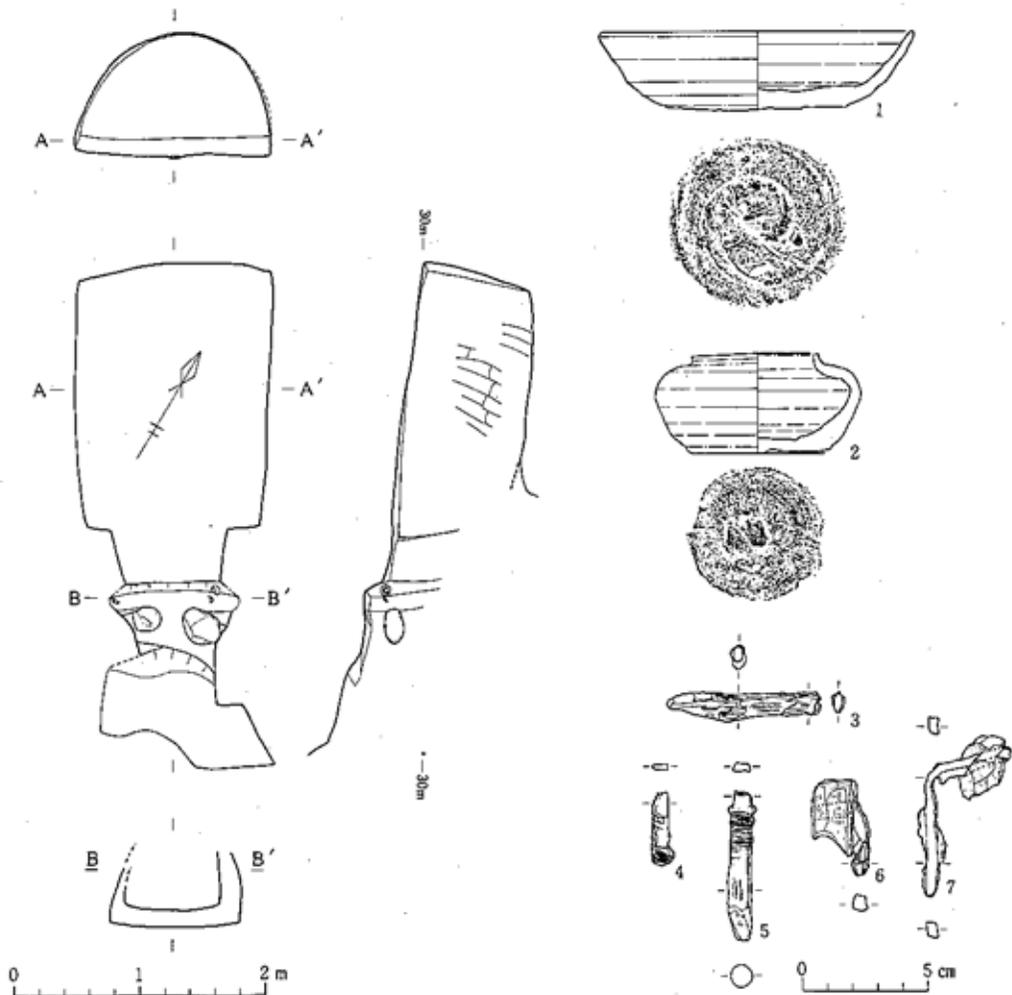
〔出土遺物〕 出土遺物はない。

第5号墳 (第8図)

南東斜面の第4号墳から南へ約11m離れたところにある。約4mの規模をもっている。

〔玄室〕 玄室の平面形はほぼ長方形で奥壁がややふくらみをもつ。立面形はアーチ形である。床面は玄門に向かって傾斜している。両壁面から天井部にかけて幅約10cmのノミ痕が認められ、ていねいに造られている。

〔玄門〕 玄室前端のほぼ中央部にあり、玄室前端の幅に比して幅広の玄門である。玄門後端より前端が狭くなっており、平面形は台形となっている。両側壁は約50cm立ち上がりが残っている。立面形は天井部が崩落しているため不明である。玄門前端には幅約20cm、深さ10cmの閉



第8図 第5号墳出土遺物

塞溝がある。

〔羨道〕 閉塞溝に接して約30cm床面が残り、その前半から前庭にかけて崩壊しているが、本来は約80cmの長さをもっていたと思われる。天井部はない。床面から浮いた状態で閉塞用に用いられた凝灰岩塊が溝と平行に両壁面に接して2個検出された。

〔前庭〕 羨道右側壁の前端から側壁が約25cm右へ屈曲している。この部分から前庭部と思われるが、7号墳の前庭にすぐに接しているため詳細は不明である。

〔出土遺物〕

出土遺物には土師器、須恵器、鉄製品がある。

土師器坏、須恵器小型短頸壺、鉄製品（刀子、鉄鏃）は玄門床面から出土した。須恵器小型短頸壺は玄門右端の床面から閉塞溝にわずかに落ち込む形で出土した。閉塞溝の左右両端に近い所からはカスガイが1点ずつ出土している。須恵器坏は前庭部右壁に接して出土したものである。

土師器坏 小破片で図示することはできない。

須恵器

坏（第8図1） 体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾する器形で、底部は回転ヘラ切り技法によって切り離されている。

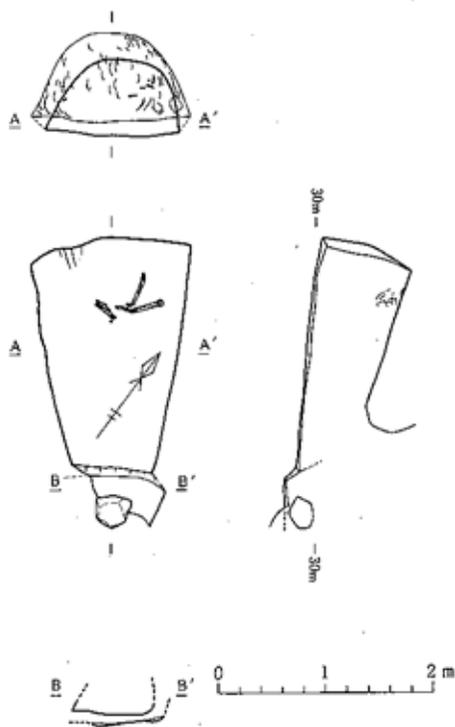
小型短頸壺（第8図2） 最大径8.2cm、器高4.0cmと小型で広口の壺である。直立する口縁部は0.5cmと短く、口縁部は角ばる。底部は回転ヘラ切り技法で切り離されている。外面の口縁部から肩部にかけてと内面底部とに自然釉が認められる。

鉄製品

刀子（第8図3） 茎の茎先部分の破片である。把の木質部が全体に残っている。

鉄鏃（第8図4・5） いずれも長頸式鉄鏃の破片で、4は先端部、5は篋被と茎の境が棘状に突出しており、篋（矢柄）は竹である。篋の残存部には巻糸も認められる。

カスガイ（第8図6・7） 6は閉塞溝の右端、7は左端で出土した。いずれも断面長方形の細長い鉄身が直角に近く屈曲しており、木質部も残る。



第9図 第6号墳

第6号墳 (第9図)

第5号墳の南、約1.5m離れたところにある。第5号墳よりやや高い位置にある。全長約2.6mと比較的小規模のものである。

〔玄室〕 玄室の平面形は丸味を帯びる奥壁の長さに対して前端が狭いため、細長い逆台形に近い。立面形はアーチ形である。床面は玄門に向かって強く傾斜している。左奥壁近くの床面にはノミ痕が認められる。奥壁には幅約10cmで弧状の突き刺し痕と思われるノミ痕が多数見られる。天井部は玄室前端に向い低くなりながら1.3mほど残存しているがその前方は崩落している。

〔玄門〕 玄室と玄門を明確に区画する施設はない。玄室前端の床面と羨道床面との間に約15cmの段差があり、閉塞用施設となっている。

〔羨道〕 約35cmの長さの床面と右側壁だけが残存して、7号墳の羨道部に移行している。床面上から閉塞に使用したと思われる凝灰岩が1個検出された。

〔出土遺物〕

玄室奥の床面上から人骨が数点出土している。このうち2点は関節部を欠くが大腿骨で、2点は脛骨の骨幹部破片と思われる。以上から人骨は1体分で、その下腿部だけが残存している可能性がある。

第7号墳 (第10図)

第6号墳の南(約1.3m)、発掘調査区のほぼ中央部に位置し、第5、6号墳より約1.5m、第8号墳より50cm低いところで検出された。複室構造の玄室をもち、全長10m以上の大型の横穴古墳である。前室は後室に比較して規模が小さい。

〔玄室(後室)〕 右側壁が玄門に向かってややふくらんでいるが、平面形は正方形である。天井部は約1.8mと高く、約50cmの幅で長さ1.6mほどがほぼ平坦に造り出されている。立面形は変形アーチ形である。床面は後室玄門に向かって傾斜しており、台床、排水溝などの施設はない。

〔後室玄門〕 後室前端のほぼ中央部に位置している。両側壁の奥行は25～35cmである。立面形はほぼ平坦な四角形に近い変形アーチ形と思われる。床面は前室奥壁ぎわ床面と約5cmの段差がある。

〔玄室(前室)〕 平面形は左右両側壁がわずかにふくらむがほぼ長方形である。天井部は後室に比してやや低く約1.5mの高さをもつ。前室奥壁ぎわの天井部は後室と同様にほぼ平坦であるが、前端では丸味をおび変換線は認められなくなる。立面形は変形アーチ形である。床面はほぼ平坦で前室玄門に向かって傾斜している。

〔前室玄門〕 玄門は前室前端のほぼ中央部に位置している。立面形は天井部が崩落しているが残存している部分から考えるとアーチ形である。奥行は約40cmで側壁はほぼ垂直に立ち上が

る。玄門前端には閉塞溝が検出された。閉塞用の溝は二重となっており、長さ130cm、深さ12cmの溝の中に長さ105cm、幅22cm、深さ10cmのやや小規模な溝がある。小規模な溝の中には直径10cm位の円礫が充填されている。

〔羨道〕 長さ約1.8mで閉塞溝部分で幅約1m、羨門部分で80cmと羨門に向ってわずかに狭くなっている。天井部は崩落によって失われている。床面は羨門に向って傾斜しており、その中央に閉塞溝に連続する幅約30cm、深さ約30cmの溝が中軸線に沿って前庭部までのびている。羨道部の溝中には閉塞溝と同様に直径10cm前後の円礫が密に充填されている。また、床面から5～20cm浮いた状態でも円礫群が認められた。

〔羨門〕 溝や段はないが羨道前端で、両側壁が左右に約60cm開いている。この部分が羨門と思われる。天井部が崩落しているため立面形は不明であるが右側壁で約20cm、左側壁で約80cm立ち上がりが残存している。

〔前庭〕 羨門前端から約2.8mまで調査を行ったが、前庭はさらに調査区外にのびている。両側壁は前方に向って狭くなっているため平面形は羽子板状となる。床面は側壁ぎわから中央に向って強く凹んでおり、全体的には前方に向って強く傾斜している。羨道部から続く排水溝は羨門部から前庭部に約70cmのびた所で不明となる。

〔出土遺物〕

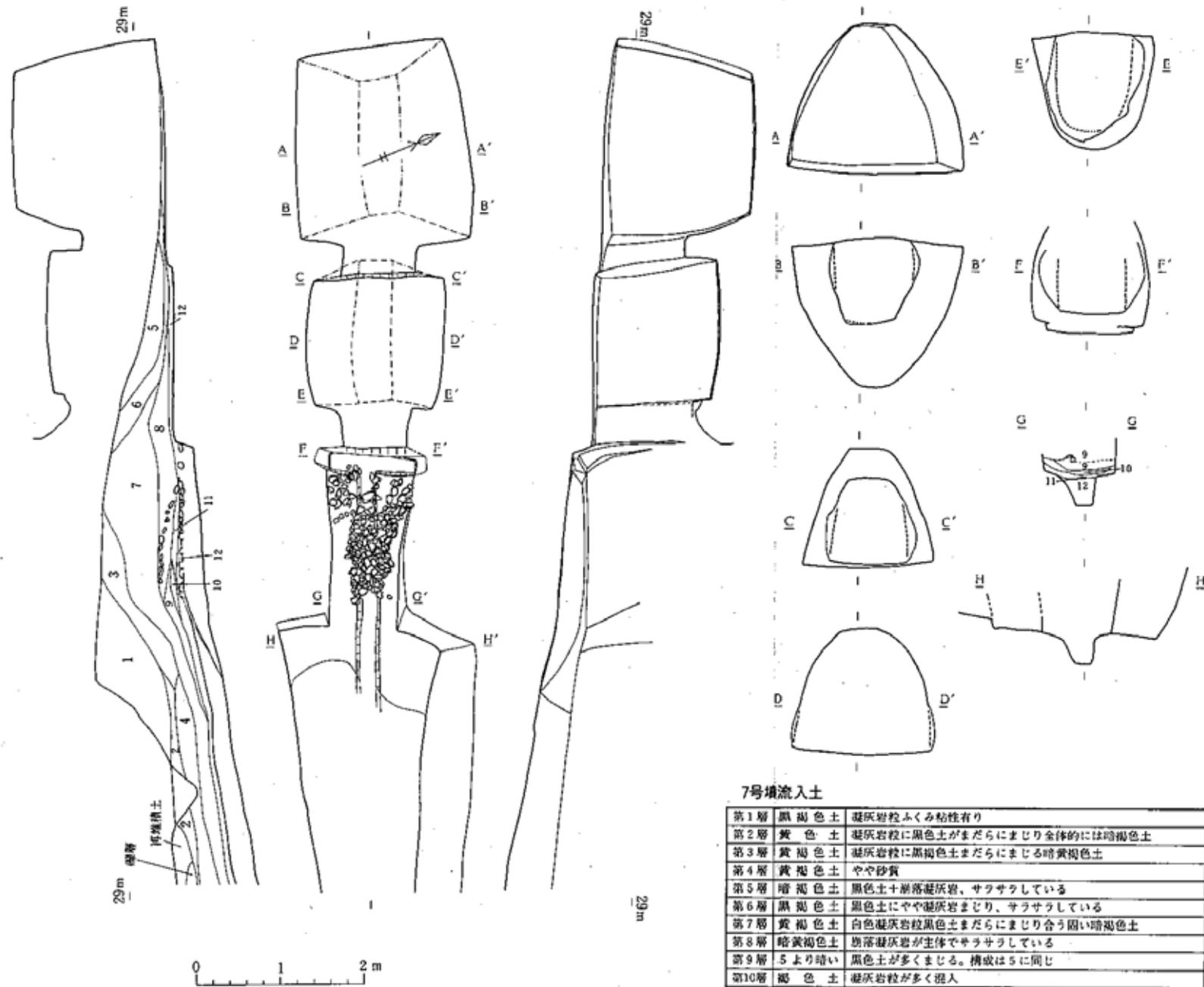
前室堆積土中から土師器坏、羨道堆積土の上部から土師器高坏、須恵器平瓶が出土し、前庭部堆積土中からも多くの土師器（坏・高坏）、須恵器（坏・蓋・壺・甕）、鉄製品などが出土している。前述したように、この古墳の羨道部右上に第6号墳が、前庭部右上に第5号墳、左上に第8号墳が位置し、それぞれの前庭部がこの古墳の羨道部や前庭で重複していると考えられる。したがって羨道部や前庭部の堆積土から出土した遺物はそれらのいずれに伴うものかは明確ではない。ここでは出土位置別に遺物について述べる。

（前室出土遺物）

土師器坏（第11図1） 小破片で法量や全体の器形を知ることはできないが、外反する短い口縁部をもち外面中位と内面上端に段が認められる。底部は丸底となると思われる。調整は外面の段から上が横ナデ、段から下はヘラケズリされている。内面は横ナデで朱が塗られている。

（羨道出土遺物）

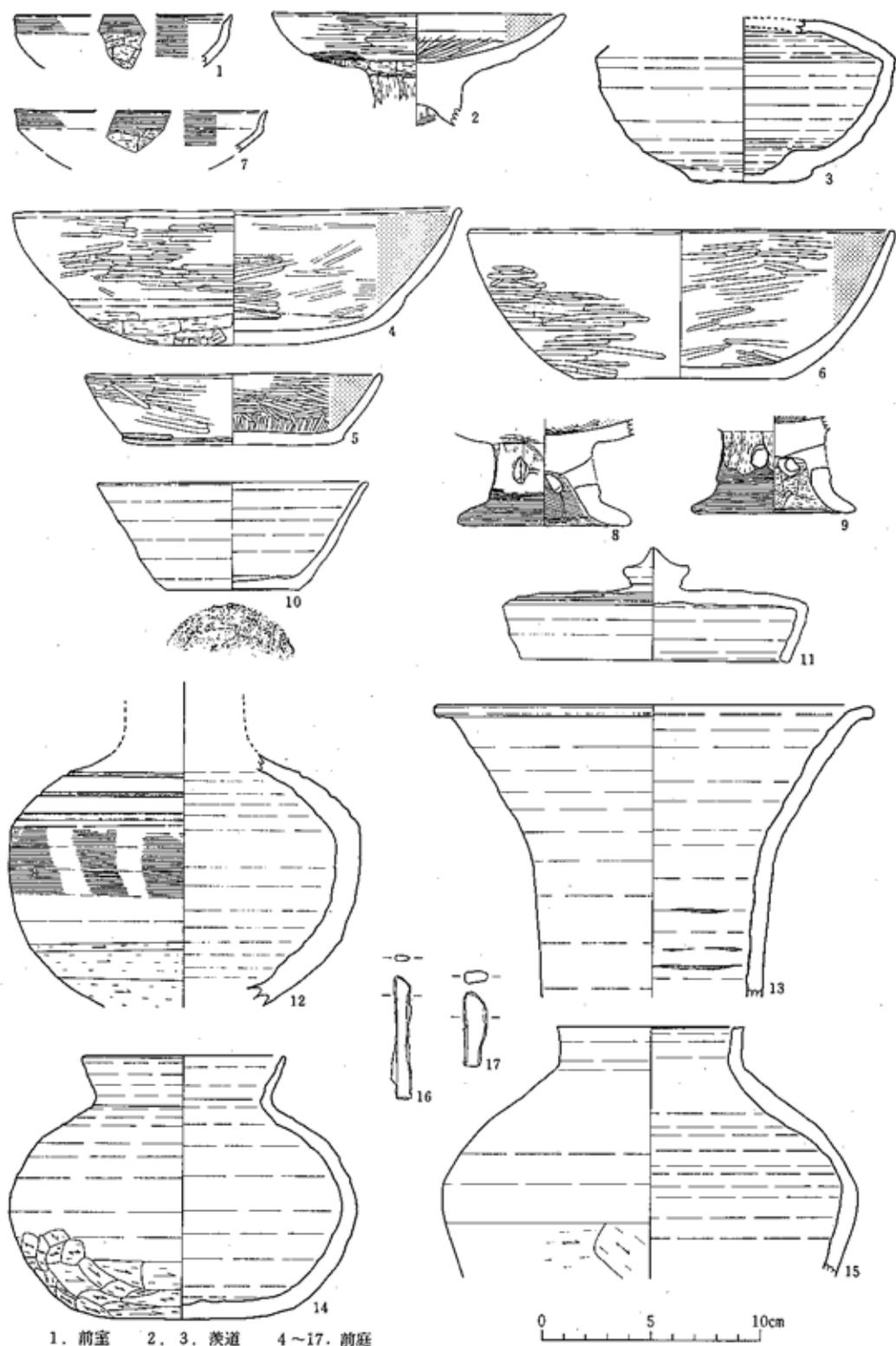
土師器高坏（第11図2） 脚部の下端を欠くものである。坏部は体部下端にわずかな段をもち、段からは内湾しながら外傾し、底部は丸底気味である。器面調整は外面の段から上がヘラミガキ、底部はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。脚部は短い中実の柱状部と急激に開く裾部の一部が残る。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデおよび黒色処理が施されている。



7号墳流入土

第1層	黒褐色土	凝灰岩粒ふくみ粘性有り
第2層	黄色土	凝灰岩粒に黒色土がまだらにまじり余体的には暗褐色土
第3層	黄褐色土	凝灰岩粒に黒褐色土まだらにまじる暗黄褐色土
第4層	黄褐色土	やや砂質
第5層	暗褐色土	黒色土+崩落凝灰岩、サラサラしている
第6層	黒褐色土	黒色土にやや凝灰岩まじり、サラサラしている
第7層	黄褐色土	白色凝灰岩粒黒色土まだらにまじり合う固い暗褐色土
第8層	暗黄褐色土	崩落凝灰岩が主体でサラサラしている
第9層	5より暗い	黒色土が多くまじる。構成は5に同じ
第10層	褐色土	凝灰岩粒が多く混入
第11層	黒色土	極めて粘性あり、べっとりしている。凝灰岩粒が少量混入
第12層	黒褐色土	極めて粘性あり、べっとりしている。閉塞溝排水溝には円礫充填

第10図 第7号墳



第11图 第7号墳出土遺物(1)

須恵器平瓶 (第 11 図 3) わずかにふくらむ肩部から底部にかけての破片で口縁部はない。外面の肩部から体部にかけて灰緑色の自然釉が認められ、内面底部付近にも自然釉が流れ込んでいる。内面にみられる釉は底部中心を若干はずれており、このためこの須恵器の器形は口縁部が中心からずれる平瓶の可能性がある。内外面ともロクロ調整が施されるが、外面体部下端と底部は回転ヘラケズリ後、ナデ調整が施されている。

(前庭出土遺物)

土師器

坏 (第11図4～7)

4・5は外面に段をもつものである。4は段が体下位につくもので段から上が内弯気味に外傾し、底部は丸底である。調整は外面が段から上はヘラミガキ、段から下はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。5は段が下端につくもので、段から上がやや内弯気味に外傾し、底部は平底である。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

6は段や沈線をもたないもので、底部は平底で、体部から口縁部が内弯気味に外傾する器形をもつ。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施される。

7は小破片で全体の器形や法量を知ることにはできないが、外面に稜をもち稜から上は短い口縁部となり強く外反する。底部は丸底となると思われる。調整は外面の稜から上が横ナデ、稜から下はヘラケズリが施され、内面は口縁部に横ナデ、体部にヘラナデが施されている。

高坏 (第11図8・9) どちらも坏部の大部分を欠く脚部破片である。外面の柱状部と裾部の境に段をもち、柱状部はほぼ中央の対応する位置に外側からの刺突による一対の孔をもつ。坏部の調整は内面ヘラミガキ、黒色処理、外面下端の残る8はヘラケズリが施されている。脚部の調整は柱状部外面は縦位のヘラケズリ、内面は8がヘラナデ、9がヘラケズリで、裾部は内外面ともに横ナデが施されている。

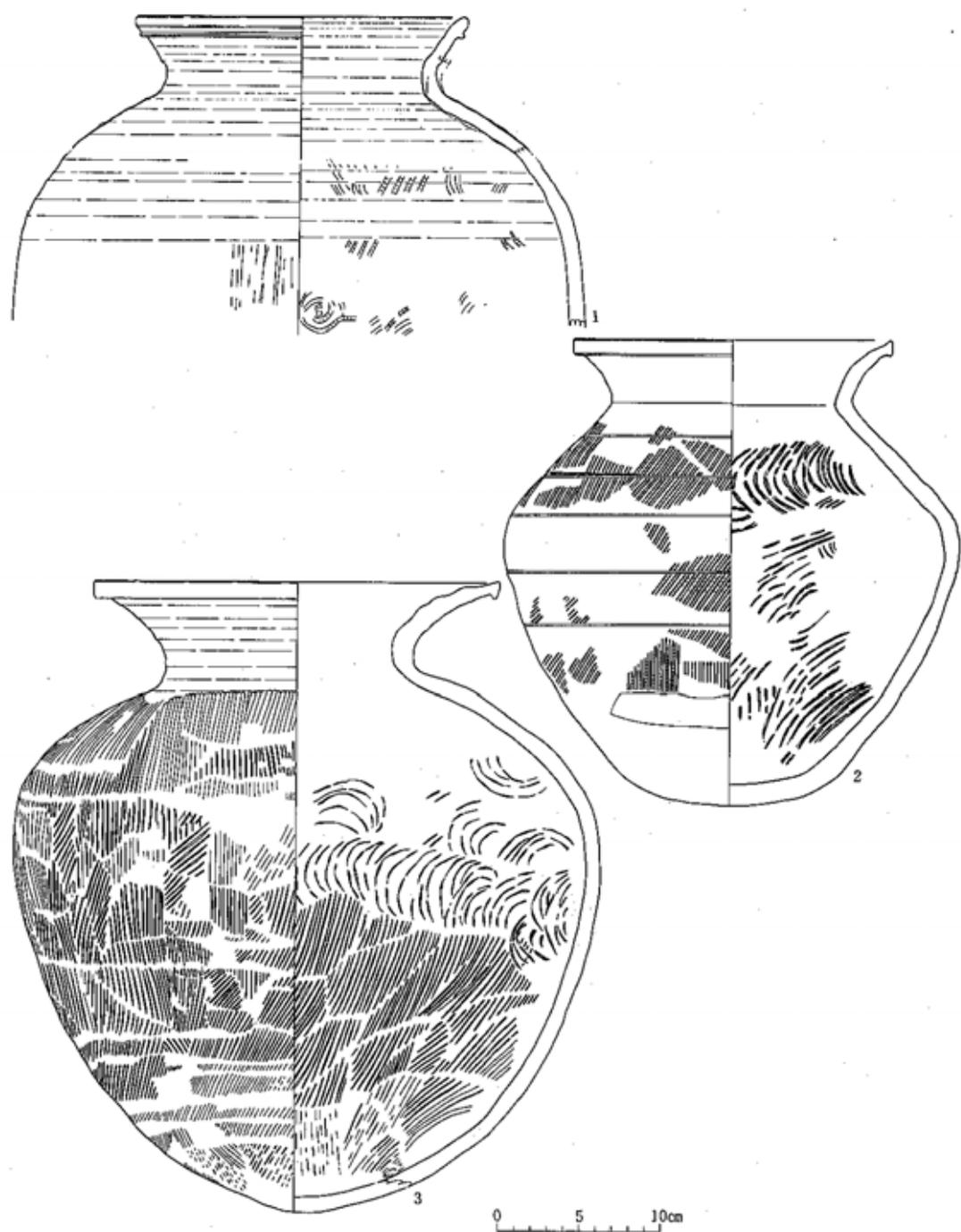
須恵器

坏 (第11図10) 体部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形で4.9cmと高い器高をもつ。底部は回転ヘラ切り技法で切り離されている。再調整はない。

蓋 (第11図11) 比較的高い宝珠形のつまみをもつ。直線的な天井部から口縁部は強く屈曲して内傾している。口縁部は角ばっている。天井部外周に沈線が一条巡り、この部分には回転ヘラケズリが施されている。

壺 (第 図12～15)

12は口頸部と底部を欠くが、長頸壺と思われる。肩部は丸味をおび、三条の沈線が巡っている。肩部と体部の境は明瞭で、体部上半にはハケ目が、体部下半から底部にかけては回転ヘラ



第12圖 第7号墳出土土器 (2)

ケズリが施されている。

13は口頸部だけの破片であるが、大型の長頸壺と思われる。口縁部は外反し、口縁端部で外方水平方向につまみ出され、口縁端は丸味をおびている。内外面共にロクロ調整が施されるが頸部内面には積み上げ痕跡も認められる。また口縁部内面には自然釉が部分的にみられる。

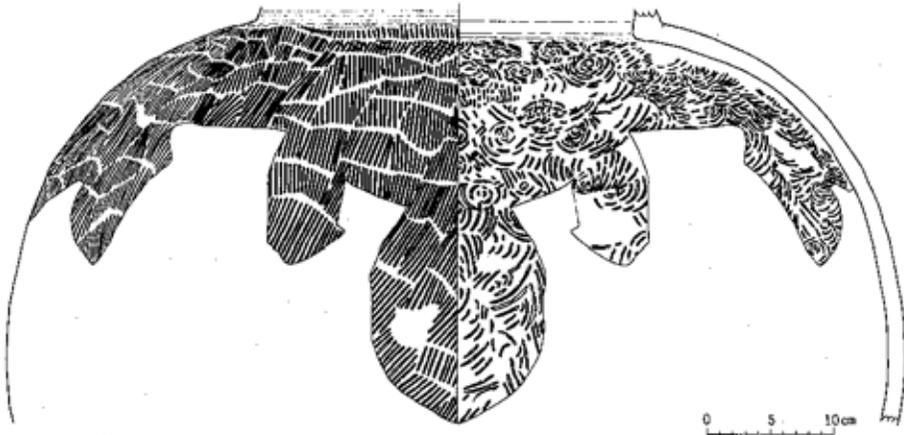
14、15は広口壺で、15は体部下半以下を欠いている。14は直線的に外傾する短い口縁部とソロバン玉状の体部をもつ。調整はロクロ調整で体部下半と底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。15は直立する口縁部と緩い傾斜の肩をもつ。体部には手持ちヘラケズリが施されている。

甕 (第12図1～3、第13図)

1は体部下半を、第13図は口縁部と体部下半を欠くもので、第13図は大甕である。1～3は口頸部で外反し、口縁端部が下方につまみ出されて口縁帯となっている。1の口縁帯下端には1条の沈線が巡っている。2の体部にも5条の浅い沈線が巡っている。調整は口縁部内外面はいずれもロクロ調整で、1のロクロ調整は内外共体部上半まで及んでいる。体部外面にはいずれも平行タタキ目が認められる。2の体部下半にはヘラケズリが施されている。体部内面は2、3、第13図では上半に同心円状の、2、3では下半に平行のアテ目が認められ、3の上半には両方のアテ目がみられる。

鉄製品

鉄鏃 (第11図16、17) どちらも長頸式鏃の先端部で、片刃状となっている。



第13図 第7号墳出土遺物 (3)

第8号墳 (第14図)

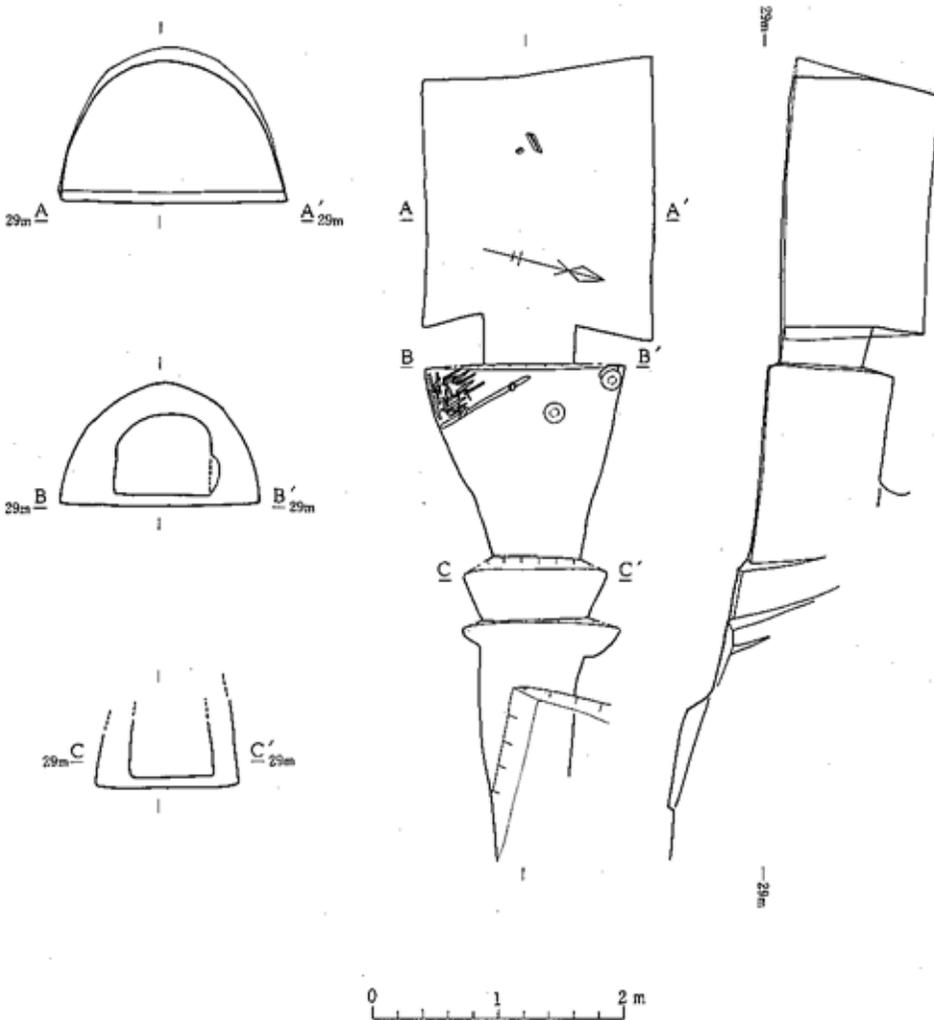
第7号墳の南隣りにあり、やや高い位置に検出された。全長約6.4mと比較的大規模な横穴古墳である。第7号墳と同様に玄室が複室構造をもつものであるが、前後室の形態に違いが認

められる。

〔玄室（後室）〕 後室の平面形はほぼ正方形であるが、奥壁右側、前壁両端が突き出している。立面形はアーチ形である。床面は後室前端に向ってやや傾斜している。両側壁から天井部にかけてははいねいに構築されている。

〔後室玄門〕 後室の中心よりわずかに左寄りに位置しており、立面形はアーチ形である。玄門両壁は平行に立ち上がり天井部は低い。玄門床面と前室床面との間には約10cmの段がつく。

〔玄室（前室）〕 前室の奥幅が約1.5mあるのに対して前幅が約60cmしかなく、平面形は逆台形である。玄室前室のほぼ中央部から前方の天井部は崩落している。立面形はアーチ形である。床面は前端に向って傾斜している。



第14図 第8号墳

〔玄門〕 前室と玄門は平面形ではその境は明瞭でなく、また天井部が崩落しているため立面形は不明である。玄門前端と羨道の床面との間には約10cmの段差がある。

〔羨道〕 前端から約30cmの所に床面にわずかな段差が認められ、左右両壁に幅20～30cm、深さ10～25cmの閉塞用の溝が掘り込まれており、この溝は高さ約80cmまで残存している。この部分の平面形は奥幅に対して前幅の狭い逆台形を呈している。ここが羨道で、溝部分が羨門とも考えられるが、それではあまりにも羨道が短い。溝部分に第1次の玄門があり、それが奥に移動した可能性もある。溝より前方は右側壁が第7号墳前庭と重なっているため不明瞭であるが前方に向って狭まる形態で溝部分より約1.6mのびる。

〔出土遺物〕

前室奥壁ぎわの床面上から土師器坏、須恵器坏、直刃2点を含む鉄製品多数が出土している。須恵器坏は右奥壁ぎわに3点重なった状態で、鉄製品は左奥壁ぎわに一括状態で出土した。後室からは数点の人骨片が出土している。また、前庭堆積土から土師器坏、須恵器小型壺が出土している。

土師器

坏 (15図1～5) 1は後室玄門前の前室床面で口縁を上向きに出土した。底部は平底風で体部は内弯気味に外傾し、口縁部は直立する。体部下端には浅い沈線が1条巡っている。調整は外面が口縁部では横ナデ、体部と底部はヘラケズリが施され、体部ではヘラケズリ後、ヘラミガキが施されている。ヘラミガキは底部の一部にもおよんでいる。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。体部の内、外両面に積み上げの痕跡が認められる。

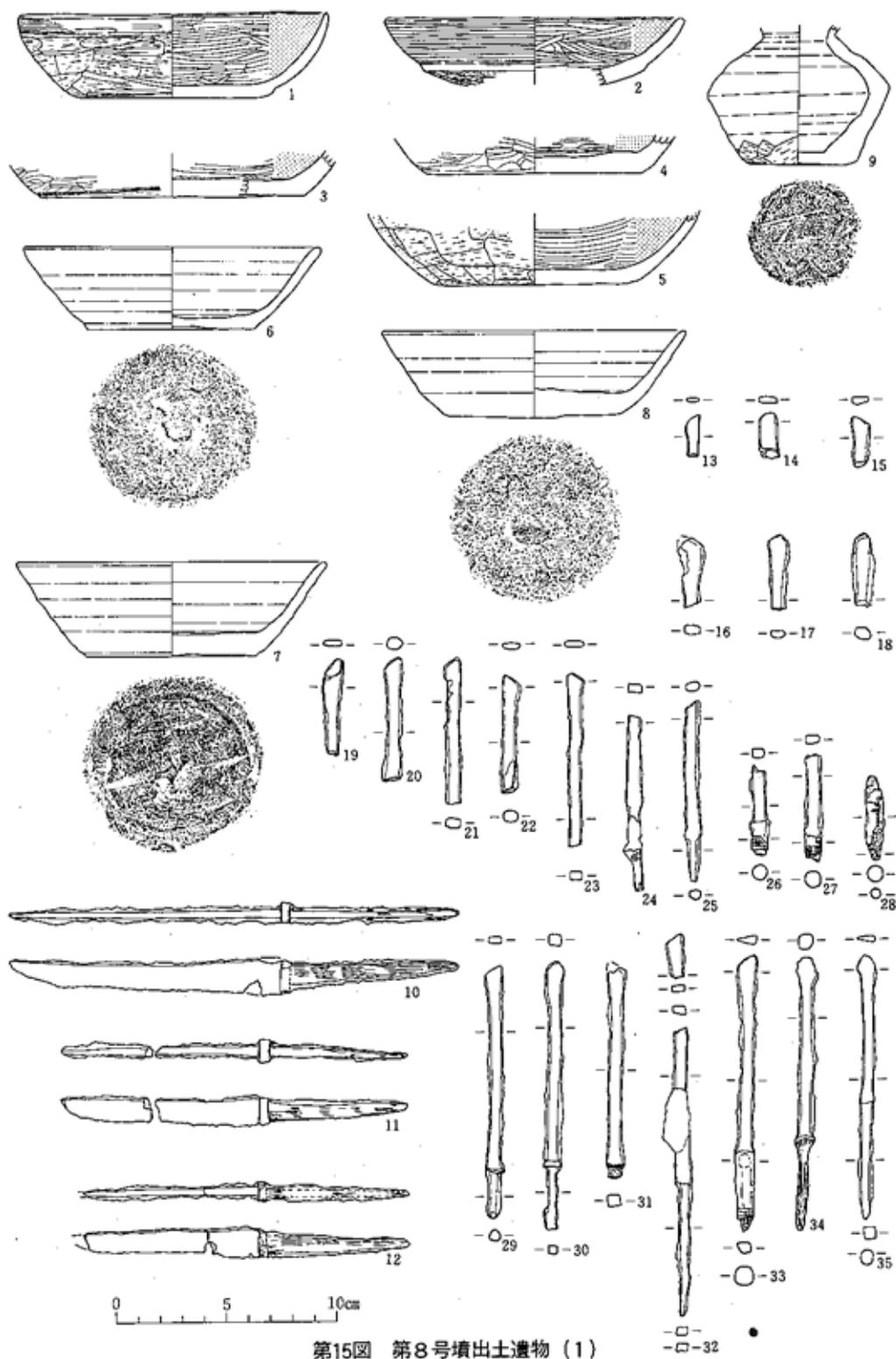
2～5は前庭部で出土したもので、完形のものはない。2は体下位に段をもつもので、底部は丸底である。調整は外面の段から上は横ナデ、段から下はヘラケズリされ、内面はミガキ、黒色処理が施されている。3～5は底部が平底のもので、いずれも口縁部を欠いている。3の体部下端には浅い沈線が1条巡っている。外面調整は3、4が体・底部共ヘラミガキ、5がヘラケズリで、内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器

坏 (第15図6～8) 前室右奥壁ぎわで口縁を下にして3点が重なって出土した。6が最も上に、8が下にあったものである。いずれも体部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形である。6・8の底部は回転ヘラ切り技法で切り離されており、切り離し後ナデ調整が施されている。7は手持ちヘラケズリが施され底部切り離しは不明である。7・8の底部は厚い。

小型壺 (第15図9) 丸味をおびたなだらかな肩部と直線的にすぼむ体部をもつ小型の壺で口縁部の大半を欠くが、口縁部は外反すると思われる。内・外面共にロクロ調整で、体部下半と底部には手持ちヘラケズリが施されている。

鉄製品 前室右奥壁ぎわで一括出土したもので、直刀、刀子、鉄鏃がある。



直刀 (第16図1、2) 2点ある。1は前室右奥壁に立て掛けられるような状態で出土したもので、2は床面上で横位の状態で出土したものである。1も本来は床面上に置かれていたものが、流入堆積土の関係で原位置から移動したものであると思われる。いずれも平造、平棟で、銚を欠いている。関の部分に銚が残るため、明確ではないが棟関と刃関をもつ両関造と思われる。

1の身幅は3.5cm、2では3.1cmである。1は茎に2孔の茎先孔と1孔の目釘孔をもち、茎先孔の身に近いほうの1孔には目釘が残っている。身にも刃関から2.5cm離れた所に刃関開を1つもつ。また1には鐙が装着されている。鐙は鉄製で、倒卵形のものである。縁に向って徐々に身厚となり、窓は8窓で、扇形に明瞭に切られている。

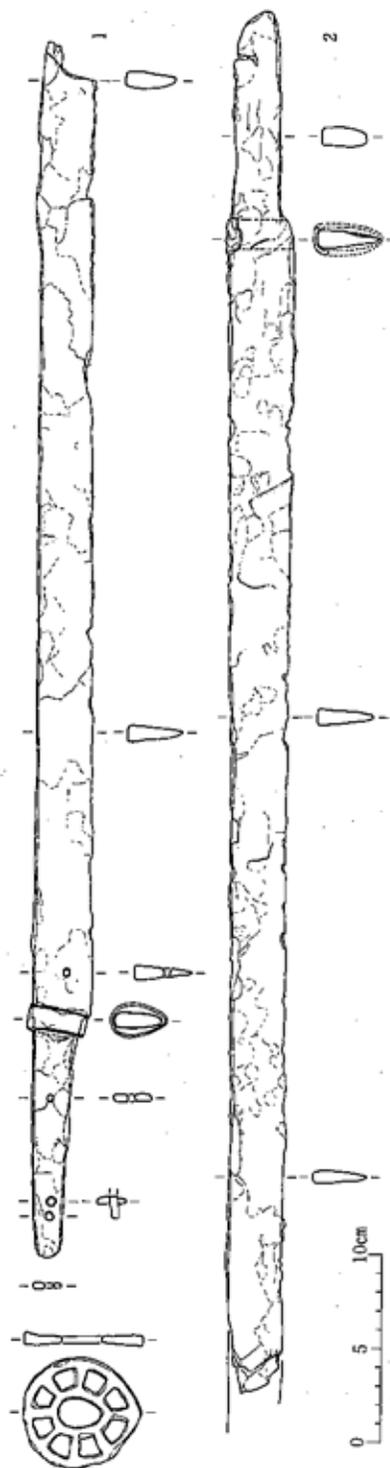
刀子 (第15図10~12) 3点あるが、12は銚を欠いている。いずれも平造、平棟である。関は両関造となっており、関の部分に銚が残っている。10は全長20.3cmと11・12に対して大振で刀身にわずかな反をもっている。茎にはいずれも木質部を残している。

鉄鏃 (第15図13~35) ほぼ全体が残るもの6点、鏃身先端部破片11点、篋被から茎にかけての破片5点を図示した。いずれも長頸式鏃と呼ばれる篋被の長いものである。身の刃部形態は銹化が著しく明らかではないが、大部分が片刃矢式で、34、35が片丸造りの鑿矢式と思われる。篋被と茎の境には棘状突起をもつものが多い。26~28・33は篋(矢柄)が残存しており、糸状のものが巻かれている。

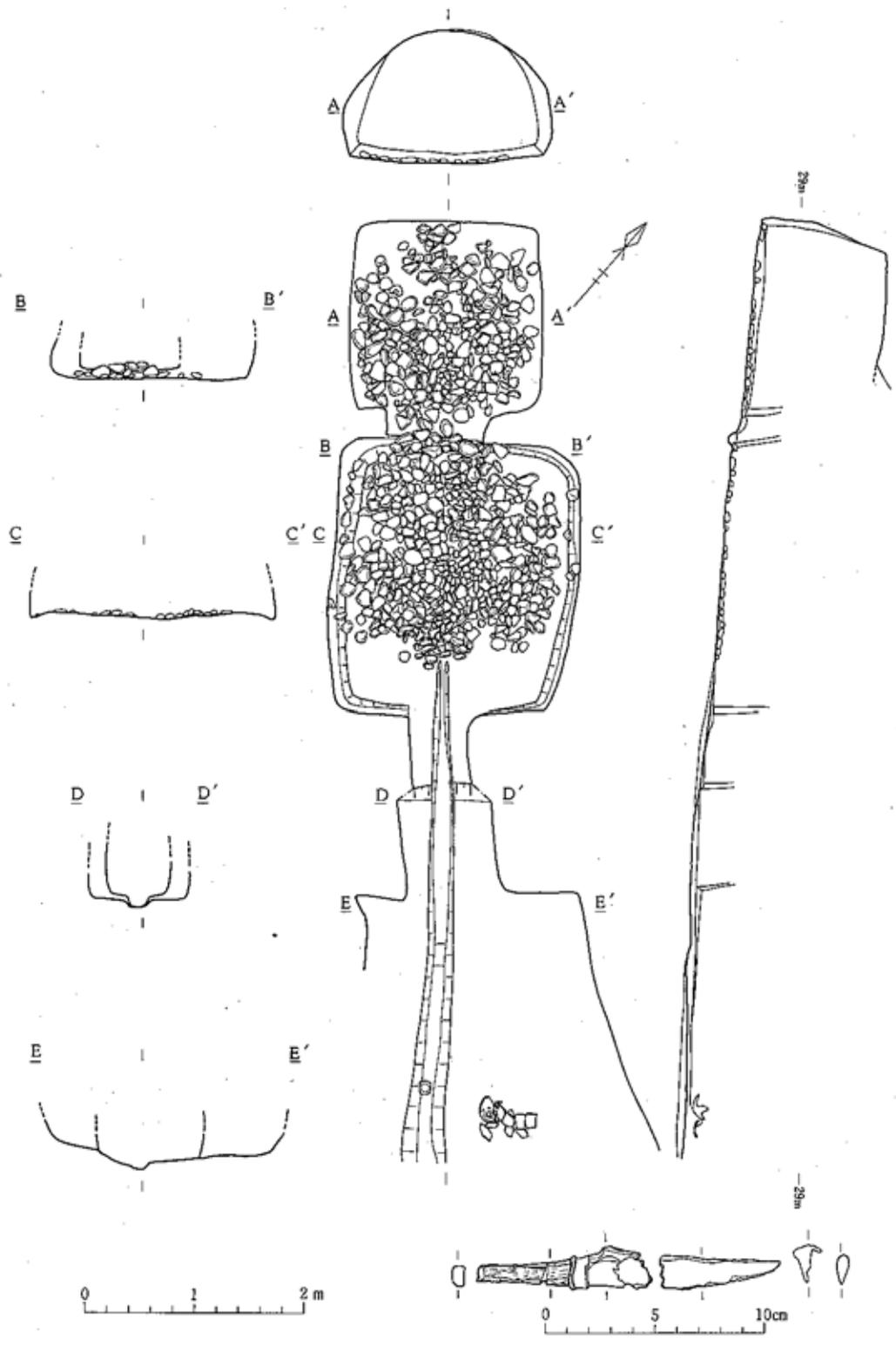
第9号墳 (第17図)

第8号墳から約5m離れた南隣りに位置している。全長約8.5mの規模をもつ比較的大型の横穴古墳である。複室構造の玄室をもつが、前室に比して後室は小規模である。

〔玄室 (後室)〕 後室の平面形はほぼ方形で、両側がわ



第16図 第8号墳出土遺物 (2)



第17図 第9号墳と出土遺物 (1)

ずかにふくらみをもつ。立面形はアーチ形で、天井部は奥壁から約1mが残存するが、その前方は玄門にかけて崩落している。床面には壁浴いを除き直径10cm前後の円礫が敷きつめられている。

〔後室玄門〕 後室前端のやや左寄り、前室に対しても左に片寄った位置にある。両側壁は床面から約40cm立ち上がるが、立面形は崩落のため不明である。床面にはやや疎であるが、円礫が敷かれている。玄門前端は前室をめぐる周溝となっている。

〔玄室(前室)〕 前室の平面形は各隅がやや丸味をおび、右側壁がややふくらむが、ほぼ方形である。立面形は崩落のため不明である。玄門部除く各壁ぎわには周溝が認められる。また、玄門後端から玄室内に40cm入った所から幅約10cm、深さ約10cmの排水溝が始まり、前庭部までのびている。床面には後室と同様の円礫がほぼ平坦に敷かれているが、排水溝の始まる前端部分にはない。

〔玄門〕 前室のほぼ中央に位置し、長さは約60cmと比較的長いが、幅は45cmと狭い。側壁は平行に立ち上がり、高さ約40cmまで残るが天井部が崩落してないために立面形は不明である。玄門前端には高さ約5cmの段がある。床面中央部を排水溝がのびている。

〔羨道〕 玄門と同様、右斜め方向に約90cmのびる。両側壁は高さ約30cmほど残っている。床面やや左寄りを走る排水溝は幅約20cmと広がっている。

〔羨門〕 段などの施設はみられないが、羨道前端から左に約40cm、右に約70cm屈曲している。壁の立ち上がりは約20cm残っている。

〔前庭〕 「八」の字状に開く、右側壁が約2.5m、左側壁が約80cmの長さで検出された。この前庭部は中心軸から右に片寄っている。床面には後室から続く排水溝が羨門から約2.4mの長さまで検出された。

〔出土遺物〕

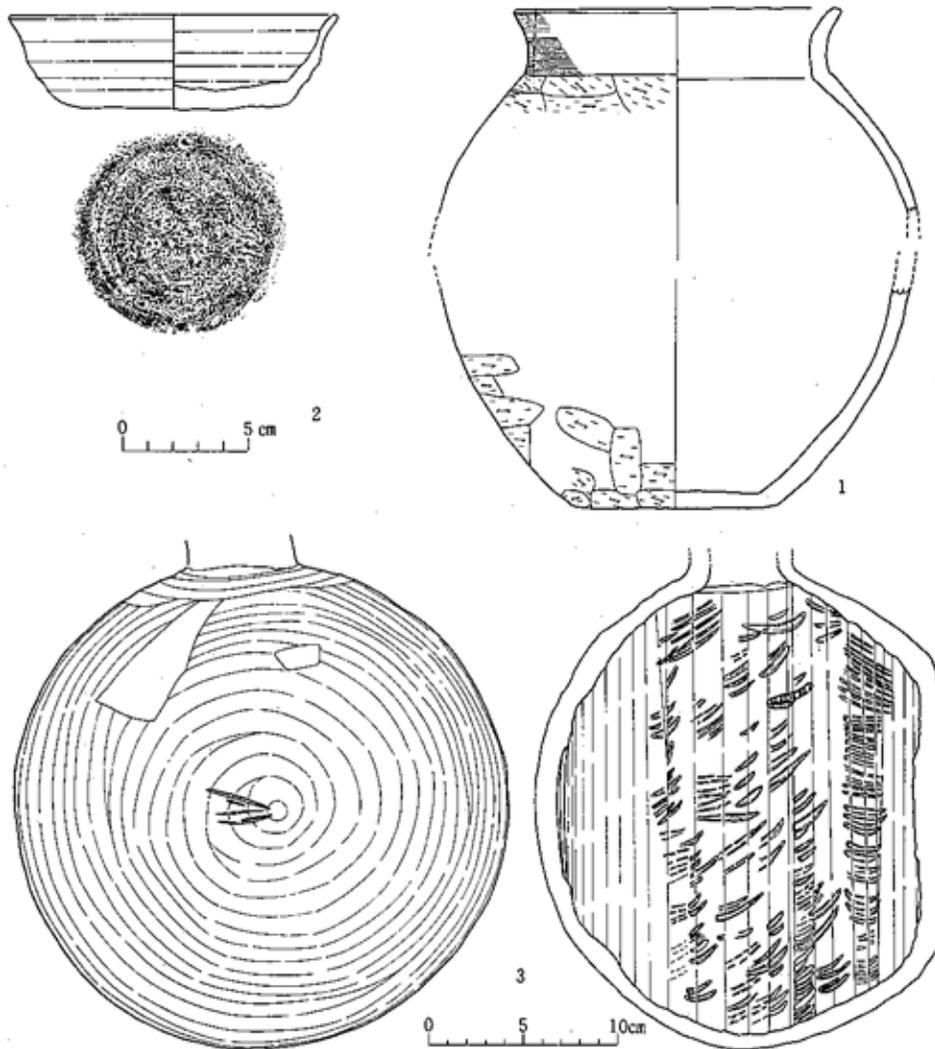
出土遺物には前室床面から出土した鉄製品(刀子)、前庭から出土した土師器(甕)、須恵器(坏、提瓶)がある。

土師器

甕(第18図1) 直接接合はしないが、同一個体の口縁部と底部と思われる。体部中央が大きくふくらむ器形で頸部にわずかな段をもち、口縁部はわずかに外反する。外面の調整は口縁部には横ナデが、体部と底部にはヘラケズリが施される。内面は器壁が荒れ調整不明であるが体部には部分的にナデ調整がみられる。

須恵器

坏(第18図2) 体部はやや丸味をもって外傾し、口縁部は外反する。底部は回転ヘラ切り技法で切り離され、再調整はない。



第18図 第9号墳出土遺物(2)

提瓶 (第18図3) 耳環をもたないが、体部の一方がふくらみ、一方が偏平となる提瓶で、口頸部を欠いている。体部外面は全体的にロクロ調整が施されるが、偏平部とその周辺のロクロ調整は回転ヘラケズリ後になされている。内面はタタキ後ロクロ調整されている。

鉄製品

刀子 (第17図1) 全体的に錆化が著しいが平造と思われる。関は棟関で、関には鉤が残っている。茎には木質部が付着している。

第10号墳 (第19図)

第9号墳のすぐ南に位置し、ほぼ同じ標高にある。全長約5.7mの規模をもつ。

〔玄室〕 平面形は各辺が、わずかに弧状となるが長方形である。立面形は天井部が全く崩落

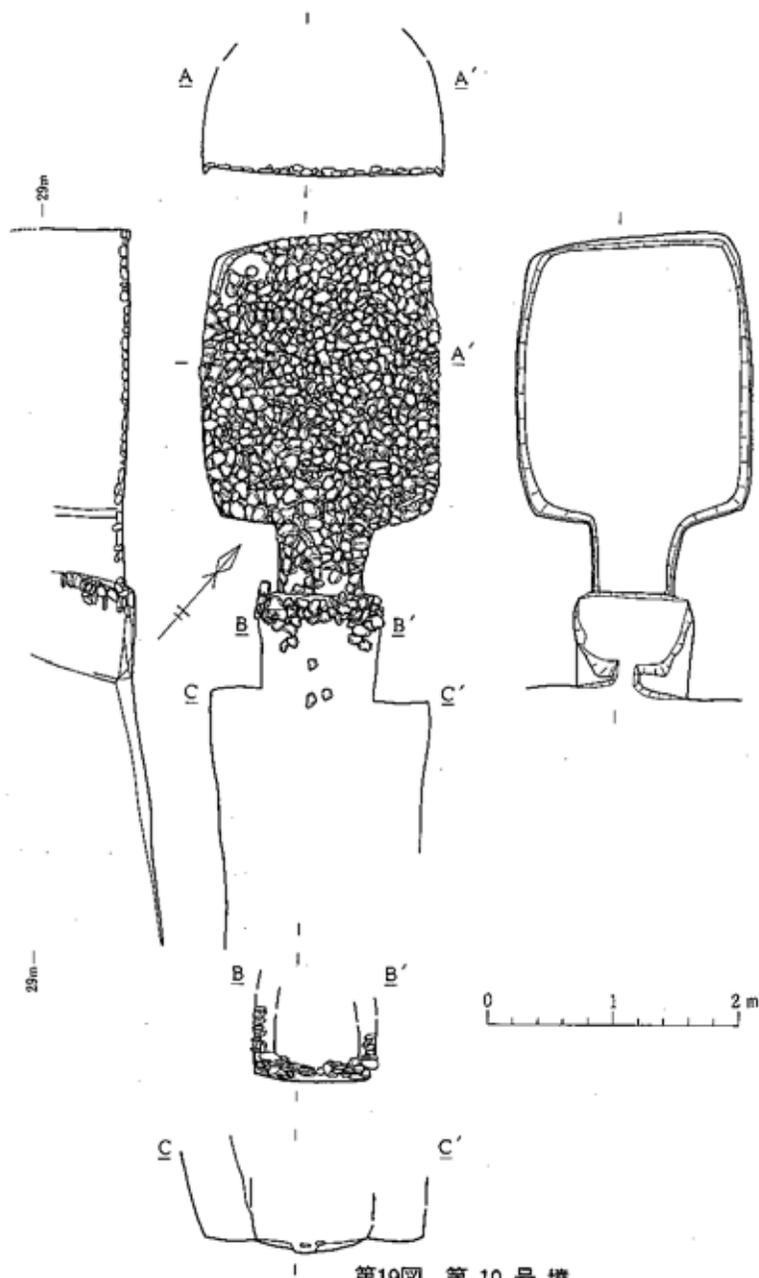
しているため不明である。左奥隅を除いた床面には玄門部まで9号墳同様な円礫がほぼ平坦にびっしりと敷かれている。床面の円礫をとりのぞくと各壁ぎわには周溝が巡っており、周溝は玄門の両側壁の前端までに達している。

〔玄門〕 玄室前端の中心に位置し、前端に向ってわずかに狭まる両側壁をもつ。玄門前端には高さ約10cmの段がある。

〔羨道〕 玄門より左右に10~15cm広くつくられ、羨門に向ってわずかに狭くなる。玄門近くの床面には、浅く大きな凹みがみられ、この凹みから前庭に向う長さ約20cm、幅約20m、深さ約5cmの排水溝がある。羨道奥の床面には玄門閉塞に用いられた円礫の積み上げが認められ左側壁ぎわで約50cm、右側壁ぎわで約35cmの高さが残存している。

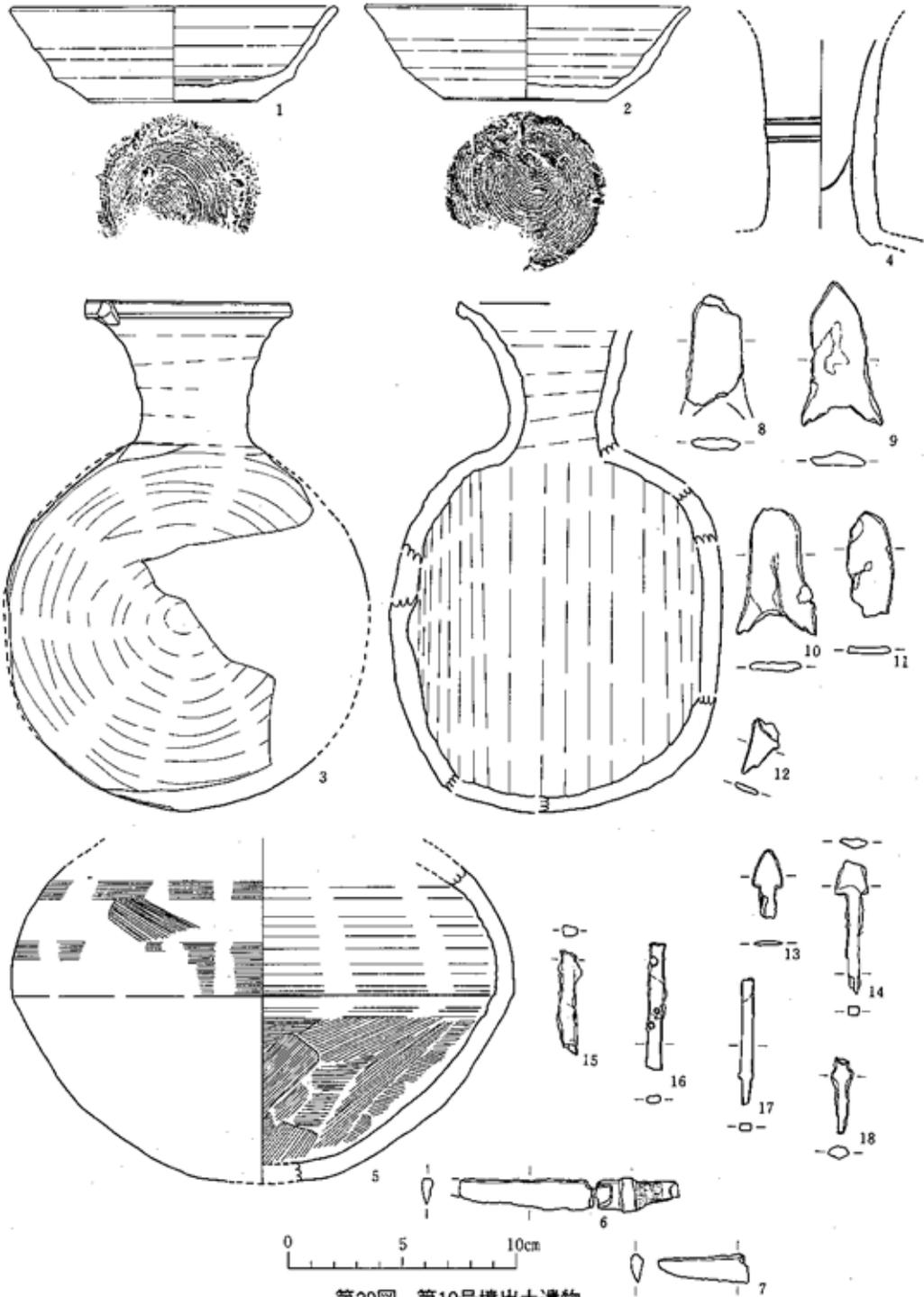
〔羨門〕 羨門前端には高さ約5cmの段があり、両壁は羨道前端から両側に約40cm開く。左壁の高さ70cm、右壁で高さ約20cmが残る。

〔前庭〕 右側壁が2m、左側壁が約1.2m残っている。両側壁はわずかに前方で狭ばまる。床面は前方に向ってゆるく傾斜している。



[出土遺物]

出土遺物には玄室床面で出土した多数の鉄製品や、前庭で出土した須恵器などがある。



第20図 第10号墳出土遺物

須恵器

坏 (第20図1・2) 2点ある。共に体部が内弯気味に外傾し、口縁部がわずかに外反する。どちらも底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はない。

提瓶 (第20図3) 一方が扁平で、一方がふくらむ体部をもつ提瓶で突手はない。頸部は外反気味に直立し口縁部は強く外反する。口縁端部は上下両方向に引き出され狭い口縁帯となっている。調整は全体的にロクロ調整が施されるが、体部外面の一部に平行タタキ目が、内面の頸部接合部には指痕跡が残っている。

壺 (第20図4、5) 4は長頸部で、5は体部中央から底部にかけての破片である。4の外面中央には2条の沈線が巡る。調整は内外共ロクロ調整で、自然釉が両面共、厚くかかっている。5はソロバン玉状の体部で、体部中央に稜線をもつ。調整は体部上半の内外面がロクロ調整で、体部下半は外面がタタキ後ナデ、内面はナデ調整が施されている。

鉄製品 刃子、鉄鏃などがある。

刃子 (第20図6、7) 6は銚と茎の約半分を欠くが、平造、平棟の刃子で、関は両関造である。関の部分には銅が、茎には木質部が残っている。7は身の先端部破片で、平造、平棟である。他に図示しなかったが、刃子の銚部分の破片が1点ある。

鉄鏃 (第20図8～18) 8～11は五角形の鏃身に逆刺を有する平根式の大型鏃で、12はその逆刺部分の破片である。この鏃が茎を有する有茎式のものか、無茎式のものかは不明である。13、14は長頸式鏃の先端部で鏃身は三角形である。17、18は長頸式鏃の篋被から茎部分の破片で、篋被と茎の境には棘状の突起がある。15、16も長頸式鏃の篋被部分と思われる。

第11号墳 (第21図)

第5号墳と第6号墳の間で、約1m上で検出された。長さ約80cmと小型の横穴古墳で、玄室だけが残存している。

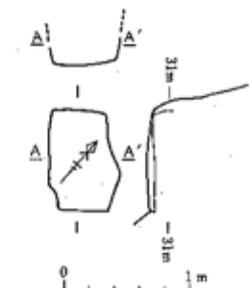
〔玄室〕 平面形は長方形であるが凹凸がみられる。立面形は天井部が崩落し不明である。奥壁、両側壁が床面から約20～40cmの高さまで残っている。玄門、前庭などの施設は検出されなかった。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

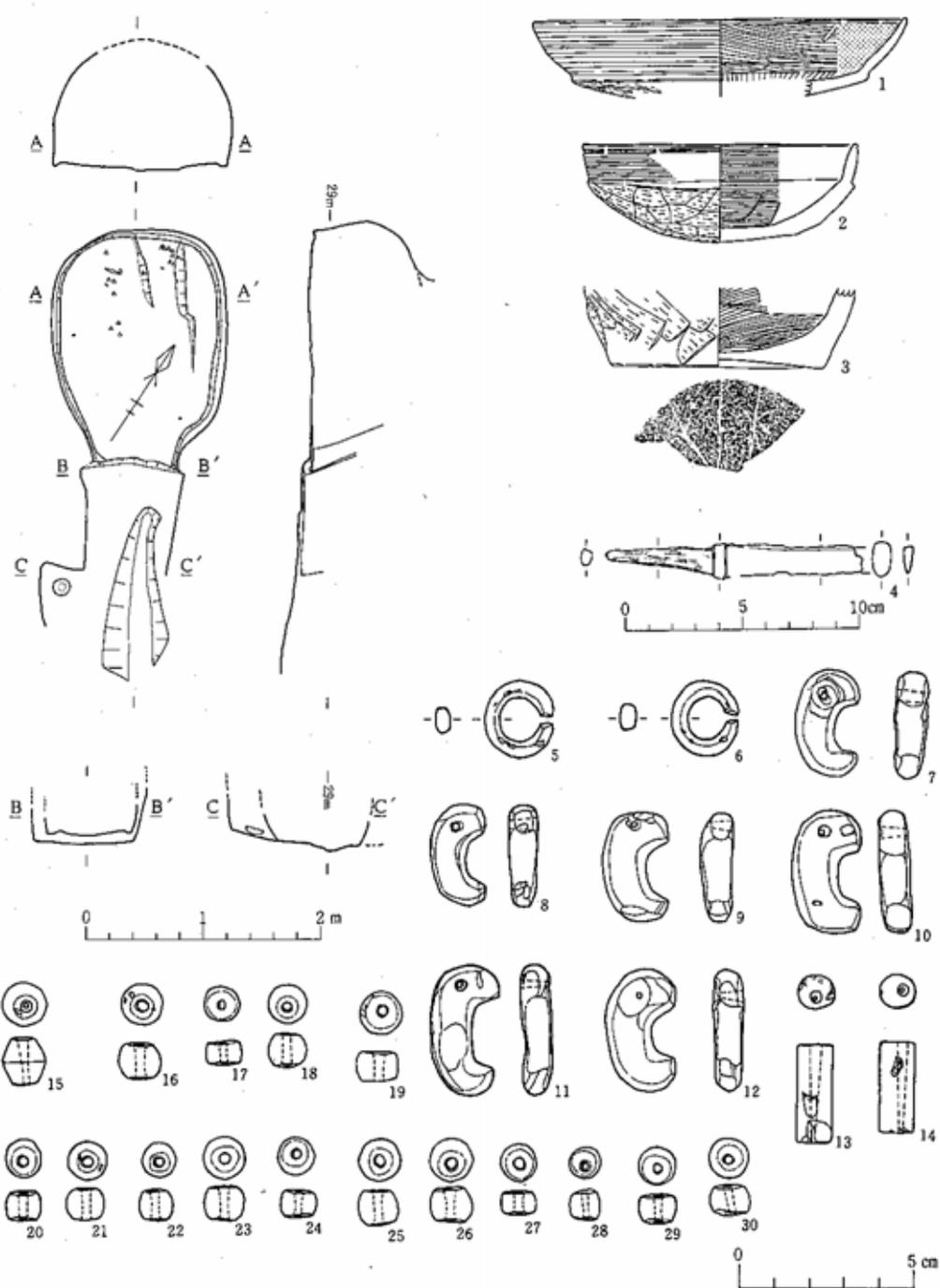
第12号墳 (第22図)

第10号墳の約4m西側のところにある。全長約3.4mと比較的小規模のものである。

〔玄室〕 平面形は右側壁が若干張るがほぼ楕円形で、立面形はドーム形である。床面はわずかに凹凸があり、壁にそって幅約10cm、深さ約5cmの周溝が巡っている周溝は玄門前端まで続いている。側壁面は風化が激しく、天井部の大半は崩落している。



第21図 第11号墳



第22図 第12号墳と出土遺物

〔玄門〕 右側壁では玄室から玄門にかけて変換線をもたずに移行するが、左側壁ではわずかに屈曲しており、それによると玄門は約20cmと短い。玄門前端には約8cmの段がある。

〔羨道〕 長さ約0.9mで前方に向かってわずかに壁が狭まっている。床面の玄門前端から約40cm離れた右寄りのところから、幅10～55cm、深さ約4cmの排水溝が前庭に向ってのびている。

〔羨門〕 右側は削平により不明であるが羨道前端から左壁が約40cm屈折して開く。床面には段などの閉塞用の施設はない。

〔前庭〕 左側壁が中心軸に沿って約50cm前方にのびるが詳細は不明である。床面には排水溝があり、約1mほどで消滅する。

〔出土遺物〕

土師器・装飾品などが出土している。玄室床面から各種の玉類と金環、銀環、鉄製品（刀子）と堆積土から土師器（坏・甕）が、羨門左隅の床面から土師器（坏）が出土している。

土師器

坏（第22図1、2） 1は玄室堆積土から出土したものである。体部外面に段をもち、段から上は、内弯気味に外傾し、底部は丸底となる。内面にもかるい段が認められる。調整は外面段から上が横ナデ、段から下はヘラケズリが施され、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。2は羨門左隅の床面から出土したものである。口径11.8cmと小型の坏で外面の口縁部と体部の境に段をもつ。口縁部は直立気味に外傾し、口縁部上端に浅い沈線が1条巡る。底部は丸底である。内面には段に対応して屈曲線をもつ。調整は外面の口縁部が横ナデ、体部から底部がヘラケズリが施される。内面は口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラナデが施される。色調はにぶい橙色である。

甕（第22図3） 底部破片である。体部外面は斜方向のヘラケズリ、体部から底部にかけて内面はヘラナデが施されている。底部外面には木葉痕がみられる。

鉄製品

刀子（第22図4） 平造、平棟で銚を欠いている。関は両関造りで、関の部分には銚が残っている。茎には木質部がみられる。

金環（第22図5） 銅環に金鍍金したものである。ほぼ円形で、最大外径が約2.1cmある。断面形はやや角張る楕円形で、長径7.5mm、短径5mmである。部分的に鍍金が剝落して地金が錆化している。

銀環（第22図6） 金環とほぼ同じ形態と大きさである。やはり銅地金に鍍銀したものである。金環に比して錆化が著しい。

玉類

勾玉（第22図7～12） 6点出土した。メノウ製が5点、ヒスイ製が1点ある。いずれも

「コ」の字形のもので、大きさは2.9cmから3.75cmまでである。穿孔は一方向からなされている。

管玉 (第22図13・14) 2点出土した。碧玉製で、直径1cm、長さは7が2.8cm、8が2.6cmである。穿孔は一方向からなされている。両者共、破損部などに磨耗痕がみられる。

切子玉 (第22図15) 1点出土している。水晶製で、長さ1.4cm、磨耗が著しい。穿孔は一方向からなされている。

丸玉 (第22図16～30) 16点出土した。安山岩や珪化した凝灰岩、石英安山岩質の凝灰岩製で大きさは直径9mm～12mm、長さ7mm～10.5mmとやや、ばらつきがある。

第13号墳 (第23図)

第4号墳と第5号墳の中間に位置し、それぞれと約6m離れている。この横穴古墳は玄門部から前方が路線敷外にのびているため、約5m調査しただけである。

〔玄室〕 玄室の平面形はほぼ方形であり、立面形はアーチ形である。床面には直径約2～15cmの円礫がびっしりと、ほぼ平坦に敷きつめられていた。円礫の敷かれるのは玄室前端までの範囲である。奥壁や両側壁から天井部には幅約10cmのノミ痕が整然と残っており、ていねいなつくりを感じさせる。

〔玄門〕 玄門は玄室のほぼ中心に位置し、立面形は残存部からすると変形アーチ形と考えられる。床面は玄門前端に向ってわずかに狭まる。天井部は前半が崩落している。玄門前端には約14cmの段が認められる。

〔羨道〕 羨道の長さは約60cmで、平面形は羨門に向って狭くなり、逆台形を呈する。立面形は崩落のため不明である。

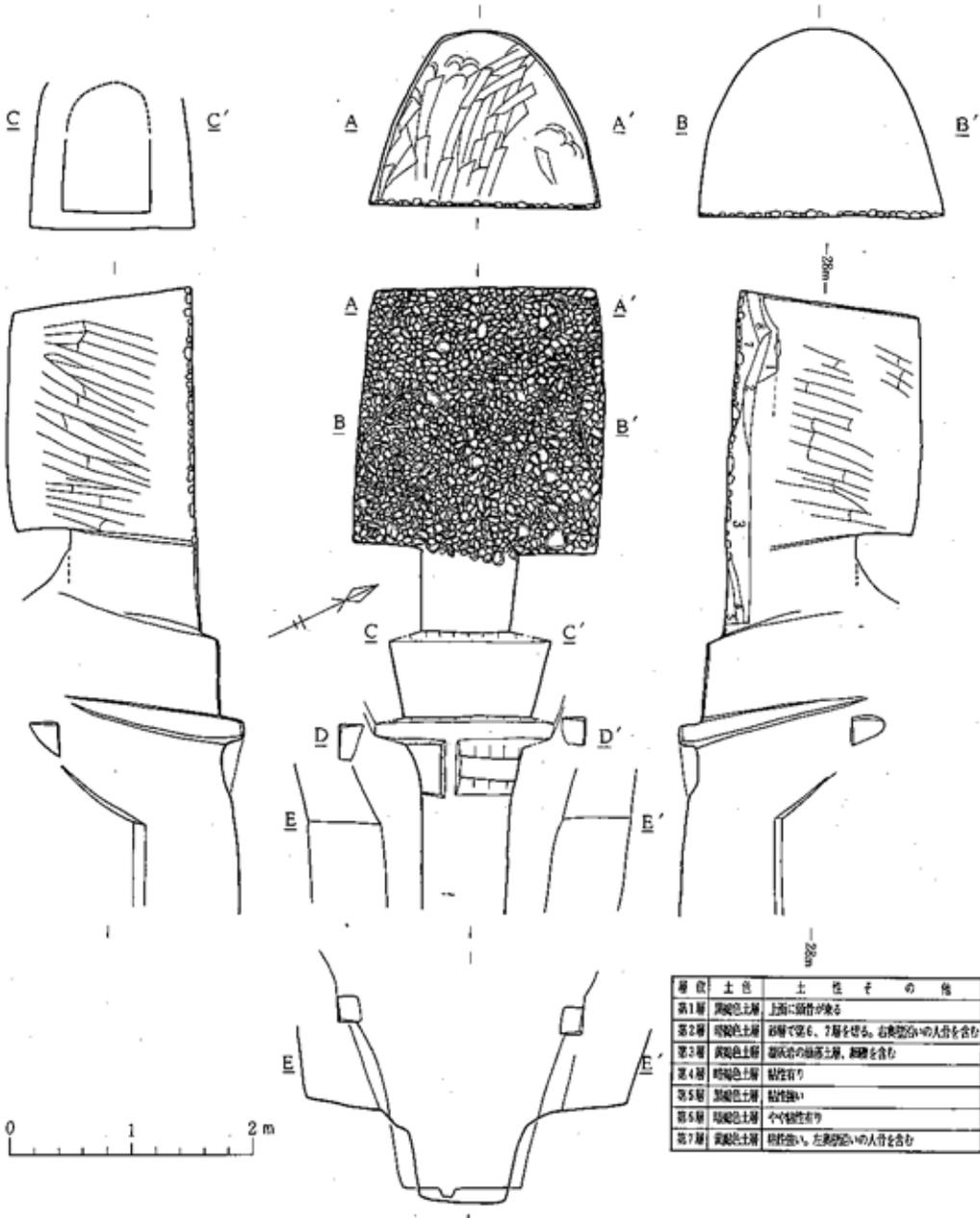
〔羨門〕 羨門前端の床面から左右側壁にかけて幅約20cm、深さ約20cmの閉塞用の溝がありこめ溝は両側壁では上にいくにしたがって幅を減じながら高さ約1.5mまで残っている。

〔前庭〕 羨門から約1.5m調査したが、さらに路線外にのびている。平面形は前方に向ってやや狭くなる。羨門に続く床面奥ぎわには上幅約20cm、高さ10cmほどの凸帯状の高まりが横たわり、その左壁寄りの所を切って羨門閉塞溝から中心軸に沿ってのびる幅約15cm、深さ約15cmで、長さ約50cmの排水溝が認められる。また、前庭奥ぎわの両側壁には床面から約1.3mの高さの所に20～30cm四方の平坦部が造り出されている。両側壁は上方に向ってやや開き気味となっているが、前庭奥から約70cmの所から、床からの高さ約70cmの所に幅約60cmの平坦面をもつようになる。平坦面の左右両端から、両側壁はさらに上方に向ってやや開き気味に続いている。この平坦面の奥端からは前述した小平坦部の前端に向って急激に立ち上がる壁が続いている。この両壁に認められる小平坦部は板材(木か岩)を架し、天井部を形成するための施設で、それに続く壁や平坦面はそれを強調するための施設と思われる。

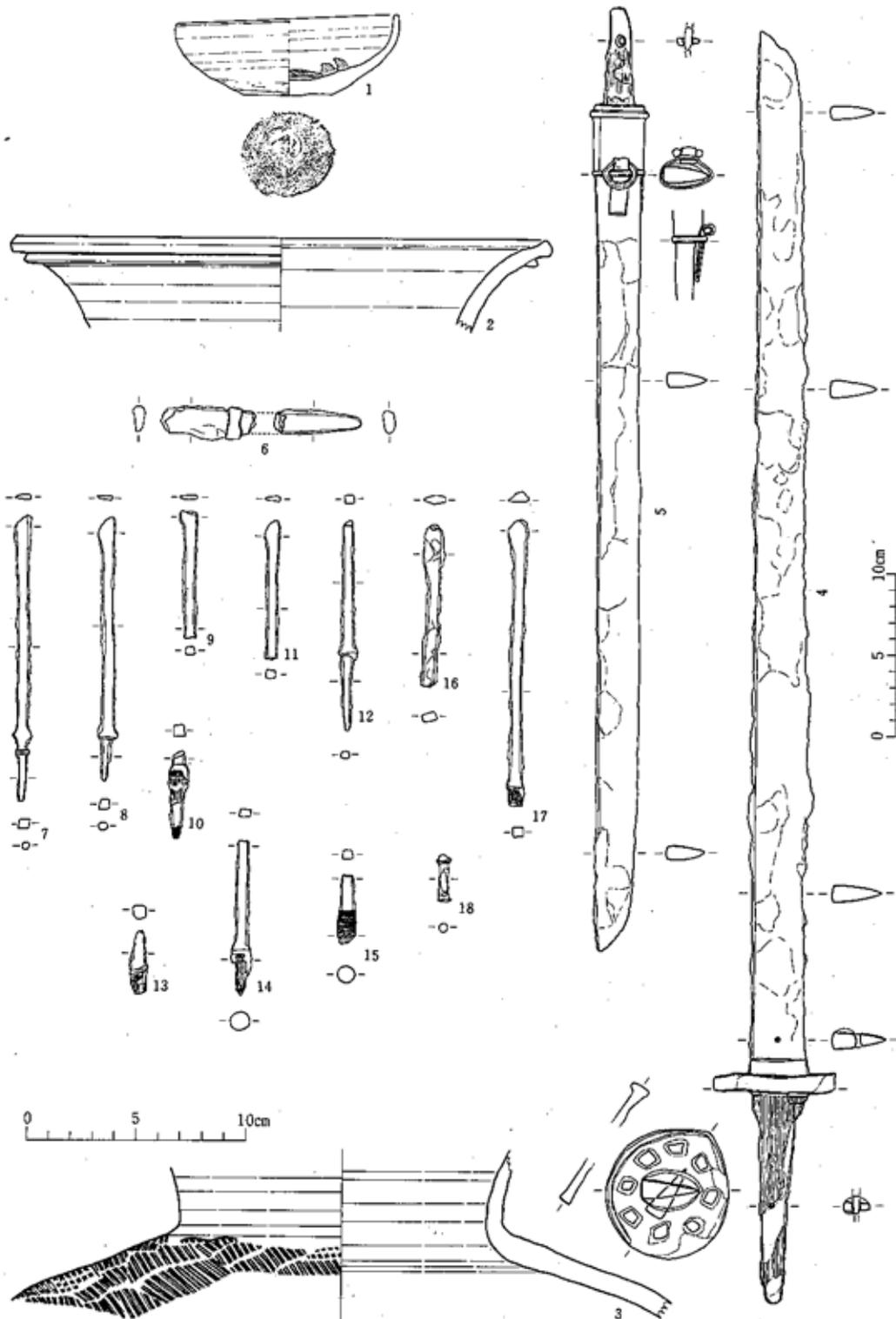
〔出土遺物〕

須恵器(坏・甕) 鉄製品(直刀、刀子、鉄鏃、両頭金具)、人骨が出土している。

須恵器坏は前庭部右平坦部分の堆積土中から出土した。須恵器甕は前庭部から玄室にかけての堆積土中から出土したものである。鉄製品では前庭部堆積土中や羨門閉塞溝中、羨道床面から鉄鏃が少量出土しているが、大部分は玄室床面から出土したものである。玄室中央の左右両側壁ぎわに直刀が各1点あり、右側壁ぎわの直刀付近と右奥壁ぎわに鉄鏃・刀子が数点かたまつ



第23図 第13号墳



第24图 第13号墳出土遺物

て出土した。人骨は玄室の左奥壁付近に集中して重なり合った状態で出土している。

須恵器

坏 (第24図11) 小さが底部をもつ小型の坏で、体部はやや内弯気味に外傾し、体部上半で強く内弯して口縁部は直立する。体部下端と底部には回転ヘラケズリの再調整が施され、底部の切り離し技法は不明である。内面底部付近にはナデ調整が施されている。

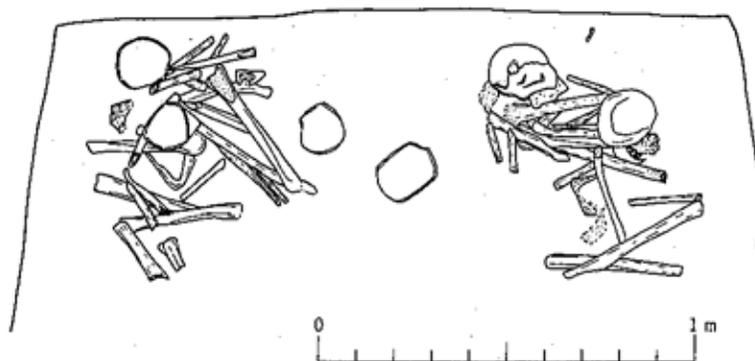
甕

2は口縁部の、3は頸部から体部上半にかけての破片である。2は外反する口縁部の端部に狭い口縁帯をもち、その下に鋭く突出する突帯が1条巡っている。3は肩部が強く張り出し、頸部は外傾気味に立ち上がっており、口縁部を欠いている。調整は頸部内外面がロクロ調整、体部上半は外面が平行タタキ、内面はナデ調整が施されている。

鉄製品

直刀

2点ある。4は玄室石壁ぎわの床面上から、5は左壁ぎわの床面上から出土したものである。4は平造、平棟で、鍵はややふくらむ。関の部分には鉤、鏝が残るが、両関造と思われる。茎のほぼ中央に目釘孔が1つあり、目釘が残っている。鉤の1.2cm前方の刀身中央に刃関孔が1つある。鉤と刀身の間や茎には木質部が残存している。鏝は本来の位置から、左に約55°、回転した状態で付着している。鉄製で倒卵形を呈し、縁部分が肥厚している。窓は明瞭な扇状で、8窓をもつ。5は4に対して短いもので、やはり平造、平棟で銚はふくらみをもつ。関は鞘口金具が残るため不明である。茎には茎先孔が1つあり、目釘が残っている。把には金銅製の把縁金具と鏝が付いている。鏝は鞘より大きいだけの喰出鏝である。鞘口金具は銅製と思われ、その後端に金銅製の責金具が嵌められている。責金具にはやはり金銅製の小環が鞘の内側の位置に挟み込まれている。



第25図 第13号墳人骨出土状況

第2表 出土人骨数量表

部位名	柱	年	不明	計	
頭蓋骨	6(+1)			7	
下顎骨	2			2	
上腕骨	2	2	4	8	
尺骨	1		1	2	
桡骨	1		1	2	
大腿骨	2	3	2	3	10
脛骨	1	2	2	5	
腓骨			3	3	

刀子 (第24図6) 玄室石壁の直刃付近の床面から出土した。刀子身の大部分を欠き、錆化が著しく形態など不明な点が多いが、平造りと思われる。関は鉤が残っているため明らかではないが刃関と思われる。茎には木質部が残っている。

鉄鏃 (第24図7～17) 7～13は玄室右壁ぎわの直刃付近に集中して、14・15は玄室奥壁ぎわで、16は羨門右側のいずれも床面から出土し、17は羨門閉塞構内から出土した。いずれも長頸式鉄鏃で、篋被と茎の境には棘状突起がみられる。鏃身刃部の形態がわかるものは、いずれも片刃状で、9には刃関もみられる。10、13～15には断面が丸い篋の先端が残在しており、糸もしくは樹皮状のものが巻かれている。

両頭金具 (第24図18) 一端がわずかに欠けるが、一端には明瞭な頭部をもち、両頭金具と思われる。

人骨 (第25図)

玄室奥壁ぎわ約1mの所と右前壁ぎわで人骨が出土している。右前壁ぎわで出土した人骨は部位不明の長管骨の骨幹部2点である。奥壁ぎわで出土した人骨には、頭骨をはじめとして各部位骨が認められ、積み重ねられたような状態で検出された。この奥壁ぎわから出土した人骨を実測図で示したのが第25図で、その際の部位骨の人骨所見を一覧表としたのが第2表である。頭骨は、完全な形で残存するものではなく、その数が直接個体数を示すものではないと思われるが、他の長管骨、特に大腿骨の数とも合わせて考えると最低でも2個体以上の複数の人骨が、この奥壁ぎわにある事が知られる。また、玄室内の堆積土の状況は第23図の縦断図に示してあるがこの堆積土と出土人骨の関係をみると、第1層上面には頭蓋骨が1つ乗っている。玄室右側の人骨は主に第2層を中心に出土しており、玄室左側の人骨は第7層を中心に出土している。このような出土状態は人骨が時間的な幅をもって玄室奥壁ぎわに集積した事を示すものと思われる。

第3表

		土 師 器										須 恵 器							金・銀・銅	五 類	人 骨										
		坏									高 坏	甕	坏			蓋	平 瓶	提 瓶				壺	甕	直 刀	刀 子	鉄 鍔					
		1-a	1-b	2-a	2-b	3-a	3-b	4-a	4-b	4-c			1	2-a	2-b												2-c	3			
第1号	前庭											1																			
第2号																															
第3号																															
第4号																															
第5号	前庭												1																		
	羨道																					1	2								
	閉塞溝																					1 付型						カスガイ			
第6号	玄室																										○				
第7号	前庭	1		1		1		1		2				1	1	1		4	4			2									
	羨道									1						1															
	前室									1																					
第8号	羨道	1			1	1	1														1 付型										
	前室			1									3										2	3	17						
	後室																										○				
第9号	前庭										1		1					1													
	前室																						1								
第10号	前庭												2					1	2												
	玄室																						2	6							
第11号																															
第12号	羨門							1																							
	玄室	1								1													1	2		25					
第13号	前庭										1												2	2		2					
	羨道																									2					
	玄室																						2	1	10	6	○	陶頭鉄器			
		2	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	3	3	1	1	3	1	3	1	1	2	8	6	6	9	41	2	25
											12																				
														9																	

第4表

No	軸方向	室				支				門				道				庭	
		奥行	幅	高さ	立面形	奥行	幅	高さ	立面形	閉塞施設	奥行	幅	高さ	立面形	柱	蓋	植	長さ	
1	N-3-E	190	165	184	100	7-字形	39	64-54	—	溝	125	60-65	—	—	—	—	130-1段	—	
2	N-17-W	190	95	118	88	◇	45	62	—	◇	—	67	—	—	—	—	—	—	
3	N-27-W	(185)	(50)	80	—	7-字形?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4	S-72.5-W	240	195	205	—	—	—	67	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
5	N-21-W	212	136	152	10*	7-字形	45	94-75	—	溝・切石	75?	85-?	—	—	—	—	—	—	
6	N-37-W	215	75	150	86-(58)	7-字形	30?	—	—	段・切石	—	—	—	—	—	—	—	—	
7	N-69-W	後室 240 側室 157	202 138	174 154	180 150	変形7-字形 7-字形	30 47	90 80	100 (120)	段 溝・門等?	185	105-80	—	—	—	—	190-110	320~	閉塞溝から排水溝
8	S-88-W	後室 197 側室 150	180 70	180 160	115 100	7-字形 ◇	40 —	70 115	65 —	段 溝	210~	110-1段	—	—	—	—	—	—	溝道階段に溝
9	N-41.5-W	後室 175 側室 250	160 190	160 185	120 —	7-字形 —	25 60	90 52	—	段 段	90	80	—	—	200-1段	—	—	—	前室-側溝 前後室-石敷 前室から排水溝
10	N-54-W	230	165	160	—	—	55	75-55	—	溝 ² 段 閉塞	70	90	—	—	段	173-158	220~	—	支室-支門-側溝・石敷、溝道・排水溝
11	N-45-W	80	40	42	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	N-40-W	195	115	120	90	下-字形	20	85-75	—	段	93	88-70	—	—	—	—	(140)	60~	支室-支門-側溝、溝道から排水溝
13	N-72-W	220	200	180	150	7-字形	65	80-70	105	段	60	132-105	—	—	閉塞溝	—	100-70	140~	支室石敷、側溝、溝道受け、化粧溝

V. 考 察

1. 出土遺物の年代

今回の調査によって各横穴古墳から土師器（坏・高坏・甕）、須恵器（坏・蓋・平瓶・提瓶・各種の壺・甕）、鉄製品（直刀・刀子・鉄鏃・両頭鉄器）、装飾品（金・銀環・玉類）などの多様な遺物が出土した。ここでは出土遺物のなかの土師器・須恵器について、数量的にややまとまりのある坏を中心としてその編年的な位置と年代について検討する。

土師器

坏 第7号墳から5点、第8号墳から5点、第12号墳から2点の計12点が出土している。それぞれの形態や調整技法などに違いが認められ、それは次の1～4にまとめられる。

1～3は内面調整にヘラミガキ・黒色処理が、4はナデやヘラナデが施されるものである。

1. 器外面に段・内面に段や稜をもち、段から上が内弯気味に外傾する器形で、底部が丸底となるものである。外面の段から下にはヘラケズリが施されるが、段から上に横ナデが施されるもの（a）とヘラミガキが施されるもの（b）とがある。

2. 器外面の底部との境に段や沈線が巡り、体部から口縁部が内弯気味に外傾し、底部が平底もしくは平底風になるものである。外面調整が、口縁部に横ナデ・体部と底部にヘラケズリが施された後、体部に一部ヘラミガキが施されるもの（a）と全体にヘラミガキが施されるもの（b）とがある。

3. 器外面に段や沈線をもたず、体部から口縁部が内弯気味に外傾し、底部が平底となるものである。外面調整が体部・底部ともヘラケズリのもの（a）とヘラミガキが施されるもの（b）とがある。

4. 器外面と内面に段や稜をもつ小形の丸底のものである。直立気味に外傾する比較的長い口縁部をもつもの（a）と短い口縁部が外反するもの（b）、同じく短い口縁部が外反し、内面に丹塗りが認められるもの（c）とがある。

高坏 第7号墳から3点出土したが、完形品はない（第11図2・8・9）。坏部の形態のわかるものは、体部外面に段をもち低平ではあるが坏1と同じ器形である。脚部は2点ある。どちらも上半が中実となる柱状部と急激に開く裾部からなり、柱状部には一對の孔を有している。

第5表 土師器坏の分類と出土地点

分類類	出土古墳と図版番号
1-a	8号墳前庭（第15図2）、12号墳玄室（第22図1）
1-b	7号墳前庭（第11図4）
2-a	8号墳前室（第15図1）
2-b	7号墳前庭（第11図5）、8号墳前庭（第15図3）
3-a	8号墳前庭（第15図4）
3-b	7号墳前庭（第11図6）、8号墳前庭（第15図5）
4-a	12号墳羨門（第22図2）
4-b	7号墳前庭（第11図7）
4-c	7号墳前室（第11図1）

甕 第1号墳から小形で完形のものが(第4図1)、第9号墳から体中央部を欠くものが(第18図2)、第12号墳から底部破片が(第22図3)、各1点ずつ出土している。前2者は器面調整として、口縁部の内外両面に横ナデが、体部から底部にかけての外面にヘラケズリが、内面にヘラナデが施されるもので、第12号墳の底部破片にも同様の調整がみられる。

土師器の坏について1～4にまとめ、高坏・甕についてはその特徴を述べた。これらの坏・高坏・甕について類例を求める。

1-aの坏、高坏は、高坏に僅かな器形的相違が認められるが田尻町日向前横穴古墳(早坂:1981)の羨道・前庭部流入土出土土器のなかに類似するものがある。1-a・bの坏はまた清水町観音沢遺跡で坏Ⅱ類とされたもの(加藤・阿部:1980)に類似しており、このなかには1-bの坏と同様の調整が施されるものが1点含まれている。

2-a・b、3-a・bの坏は田尻町天狗堂遺跡のロクロ不使用の坏(佐藤・手塚:1978)や志波姫町糠塚遺跡で第1群土器とされたもの(小井川・手塚:1978)に類似している。観音沢遺跡・天狗堂遺跡・糠塚遺跡の土器は国分寺下層式に比定されている。

4-a・b・cの坏・甕は近年、名取市清水遺跡(丹羽・小野寺・阿部:1981)、仙台市郡山遺跡(木村他:1981)、古川市名生館遺跡(宮城県多賀城研究所:1981)、田尻町日向前横穴古墳、志波姫町御駒堂遺跡(小井川・小川:1982)などから出土し、関東地方の鬼高式や真間式と強く関連する土器とされているものに類似点が多い。4-aの坏はそれらと器形的には若干異なっているが、埼玉県北西部の大里郡岡部町六反田遺跡第117号住居跡などから出土している鬼高式後葉の坏に(岡部町六反田遺跡調査会:1981)、4-b・cは前述の県内遺跡から出土し、鬼高式の終末期のものとされたものに類似している。甕については不明の点が多いが、器面調整の特徴は御駒堂遺跡第2群土器の真間式系とされた甕にみられるものに類似している。

第6表 須恵器坏分類表

分類	図版番号	口径	底径	器高	器径/口径	底部切離し・調整
1	第24図1	10.1	4.0	3.5	0.4	不明・回転ヘラケズリ
a	第8図1	12.5	7.0	3.1	0.56	回転ヘラ切り
b	第15図6	13.5	7.6	3.8	0.56	* ナデ
2 a	第15図8	14.1	7.9	4.3	0.56	* ナデ
*	第15図7	13.7	7.9	4.0	0.58	* 手持ケズリ
c	第18図2	13.0	8.4	3.7	0.65	* -----
a	第11図10	12.4	6.0	4.9	0.48	* -----
3 b	第20図1	14.4	7.2	6.2	0.5	回転ヘラ切り
*	第20図2	14.2	7.2	4.2	0.51	*

次に土師器の年代について考える。4類の坏は御駒堂遺跡において鬼高式終末期から真間式初期の土器を含む第1群土器が7世紀末～8世紀初頭に位置付けられていることから、4-aは7世紀後葉、4-b・cは7世紀末～8世紀初頭のものと考えられる。日向前横穴古墳では羨道・前庭部流入土器の年代は伴出した須恵器坏などの検討により多賀城以前のものとしてされており、また、御駒堂遺跡第2群土器は8世紀前半のものとしてされていることから坏1類・高坏・甕などは8世紀前半のものと考えられる。

国分寺下層式に比定された坏のうち観音沢遺跡のものは天狗堂遺跡・糠塚遺跡のものより先行するものとされ、奈良時代前半の年代が考えられており、日向前横穴古墳の見解とほぼ一致

している。天狗堂遺跡、糠塚遺跡の土器は御駒堂遺跡第4群土器の検討のなかで8世紀後半の年代が考えられている。しかし、その上限年代など現時点では明確でない点もあり、坪2・3類については8世紀後半を中心とする年代と考えておく。

須恵器

坏 第5号墳から1点、第7号墳から3点、第9号墳から1点、第10号墳から2点、第13号墳から1点の計9点が出土している。器形や底部切り離し技法、再調整などに違いが認められそれらをまとめると次のようになる。

1. 小さな平底の底部から体部が内弯気味に外傾しながら立ち上がり、体部上半で強く内弯して口縁部は直立する器形のものである。外面の体部下半と底部には回転ヘラケズリが施され、底部切り離し技法は不明である。

2. 口径に対する底径の割合が0.56~0.65と比較的大きなもので、器形は平底の底部から体部が丸味をもって立ち上がり、a-口縁部まで内弯気味に外傾するもの、B-口縁部まで直線的に外傾するもの、c-口縁部が外反するものとがある。底部切り離し技法はa、cが回転ヘラ切り、bは回転ヘラ切り後ナデ調整が施されるものと手持ちヘラケズリの再調整によって切り離し不明のものがある。

3. 口径に対する底径の割合が0.5前後のもので、体部から口縁部まで直線的に外傾する器高の高いもの(a)と口縁部が外反するもの(b)とがある。底部切り離し技法はaが回転ヘラ切り、bが回転糸切りである。

1は特殊な器形の小型品で、今のところ県内では類例を見出すことはできない。しかし、体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が施される坏は、観音沢遺跡や富谷町原前南遺跡(千葉:1982)、御駒堂遺跡第2群土器などにある。原前南遺跡や御駒堂遺跡では真間式類似の土師器と伴って出土しており、8世紀前半の年代が与えられている。

2のような器形的・技法的な特徴をもつ坏は田尻町天狗堂遺跡、糠塚遺跡第1群土器のなかにみられ、国分寺下層式の土師器と共伴している。

3-aは器高の高い坏で、類似する坏は宮崎町早風遺跡第9号住居跡で、ロクロ使用で回転ヘラケズリの再調整をもつ土師器坏に伴って出土している。3-bは天狗堂遺跡第12号住居跡で手持ちヘラケズリの再調整をもつ土師器坏に伴って出土している。ロクロ使用で再調整をもつ土師器坏は表杉ノ入式のなかでも古い段階のものと考えられることから、3-a、3-bの坏は年代的には9世紀のものと考えられる。一方、3-bの底部を回転糸切り技法で切り離す坏は、糠塚遺跡第1群土器の須恵器坏の組成のなかにも認められ、2類あるいは3-aにみられる回転ヘラ切り技法で底部を切り離す坏と共伴しており、これら3類の坏が2類と同年代の可能性もある。

2. 横穴古墳の構造と編年

今回調査された13基の横穴古墳はそれぞれの規模や構造などに違いが認められる。また、重複関係をもつ横穴古墳もあり、13基が同時期に造成され、使用されたとは考えにくい。このため、調査が部分的であったり、崩落のために全体の構造が明らかでないものも含まれるが、その構造上の特徴などを重複関係を含めて検討し、その変遷を考えてみる。

13基の横穴古墳は基本的には玄室部、羨道部、前庭部をもつと思われるが、前庭部、羨道部などの形態や構造などが明確でないものもある。そこで主に玄室部の構造をもとに各横穴古墳を分類すると第Ⅰ類－玄室が複室となるもの、第Ⅱ類－玄室が単室で、平面形が両袖形のもの第Ⅲ類－玄室が単室で、玄室平面形が無袖形のもの3類に大別することができ、各類はさらに細かな玄室平面形の違いや玄室内施設の有無などによって細分される。

第Ⅰ類 玄室が複室となるもの

- a. 玄室平面形が前・後室ともに方形のもの
 - イ玄室内に石敷を有するもの (9号墳)
 - ロ玄室内に石敷をもたないもの (7号墳)
- b. 玄室平面形が前室が方形、後室が逆台形のもの (8号墳)

第Ⅱ類 玄室が単室で、平面形が両袖形のもの

- a. 玄室平面形が方形のもの
 - イ玄室内に石敷を有するもの (4、10、13号墳)
 - ロ玄室内に石敷をもたないもの (1号墳)
- b. 玄室平面形が長方形のもの (2、5号墳)
- c. 玄室平面形が楕円形のもの (12号墳)

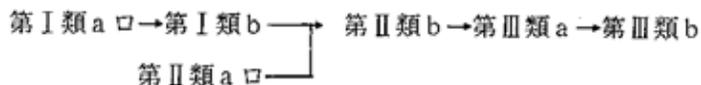
第Ⅲ類 玄室が単室で、平面形が無袖形のもの

- a. 玄室平面形が細長い逆台形のもの
 - イ玄室閉塞が段によるもの (6号墳)
 - ロ玄室閉塞が不明のもの (3号墳)
- b. 規模の小さい小穴 (11号墳)

各横穴古墳間の重複関係についてみると、1号墳と2号墳の間、および5～8、11号墳の間に重複関係が認められる。1、2号墳では1号墳前庭が2号墳に伴うと思われる溝(前庭?)によって切られており、1号墳→2号墳の関係が成り立つ。5～8・11号墳の間では、7号墳前庭部と8号墳羨道部に直接的な重複がみられ、7号墳の前庭がある程度埋まった段階で8号墳が造成されている。5、6、11号墳は7号墳前庭や羨道の右側壁の上に位置しており、7号墳床面とそれぞれの床面には1.3～2.3mの段差があることから、7号墳が埋まった状態で

ないと造成は不可能と思われる。そして、5、6、11号墳の順に検出位置が高くなり、その規模が小さくなることから7号墳→8号墳→5号墳→6号墳→11号墳の関係が成り立つものと思われる。

以上のような重複関係を整理し、分類に当てはめると次のようになる。



大筋で第Ⅰ類→第Ⅱ類→第Ⅲ類と変遷することが知られた。

次に上記の変遷に当てはまらない第Ⅰ類 a イ (9号墳)、第Ⅱ類 a イ (4、10、13号墳)、第Ⅱ類 c (12号墳) について検討する。

第Ⅰ類 a イ (9号墳) は第Ⅰ類 a 口 (7号墳) と同様に玄室平面形が前・後室ともに方形気味となるものである。7号墳では後室に比較して前室の規模が小さくなり、構造的にも前室が副室のような形態をとるのに対して9号墳では後室より前室の規模の方が大きくなっている。また、9号墳では前室の壁沿いにだけ周溝が巡り、後室には周溝はないことや後室が前室の中軸線に対して左寄りに位置していることから前・後室が一体となって造成されたのではない可能性も考えられる。しかし、前・後室ともに石敷がみられることから前・後室が複室として使用されたことは確実と思われる。周溝や石敷をもつ点にも他のⅠ類 (7、8号墳) との相違がみられるが複室構造をもつことや長い中軸線に沿う排水路をもつものが7、9号墳だけに限られる点などから、7号墳とあまり時期差をもたない横穴古墳と考えられる。

第Ⅱ類 a イ (4、10、13号墳) は方形の玄室平面形をもち、第Ⅱ類 a 口 (1号墳) とは玄室内に石敷があることで細分された。この第Ⅱ類 a (4、10、13、1号墳) の玄室は第Ⅰ類 a イ (9号墳) の前室、第Ⅰ類 a 口 (7号墳) と第Ⅰ類 b (8号墳) の後室とほぼ同じ形態と規模を有している。また石敷をもつ点では9号墳と共通しており、Ⅰ類との関連性は強いと思われる。

第Ⅱ類 c (12号墳) は玄室平面形が両袖形ではあるが、ほぼ楕円形を呈し、立面形がドーム形と他の横穴古墳とは異なる形態をもっている。この12号墳は立室と玄門の壁沿いに周溝を有しており、近接して横一線に並ぶ形で検出され、同じく周溝をもつ第Ⅰ類の9号墳、第Ⅱ類 b の10号墳と同一のグループを形成するものと思われる。しかし、その造成時期に前後関係があるかどうかは重複関係にないため不明である。

以上のようにⅠ類 a イはⅠ類 a 口とほぼ同時期と考えられた。Ⅰ類 a イは玄室内に敷石をもつ点でⅡ類 a イと共通し、Ⅱ類 a 全体は玄室平面形や規模の点でⅠ類全体と共通している。また、Ⅰ類 a イとⅡ類 a イの一部、Ⅱ類 c は周溝をもつ点で共通している。つまり、第Ⅰ類と第Ⅱ類 a および c は相互に共通関係をもつ。その新旧関係は重複しているものがないために知る

ことはできないが、第Ⅱ類b、第Ⅲ類より古い事は前述した重複関係から明らかであるので、これらを第1群として包括し、第Ⅱ類b、第Ⅲ類を第2群とする。

第1群 第Ⅰ類-7・8・9号墳、第Ⅱ類-1・4・10・12・13号墳

第2群 第Ⅱ類-2・5号墳、第Ⅲ類-3・6・11号墳

3. 横穴古墳の年代について

各横穴古墳の造成、使用年代を考える資料としては出土遺物がある。出土遺物のうち土師器・須恵器の主に坏について、その年代を検討したが、ここではそれをもとに各横穴の年代について考える。

各横穴古墳の出土遺物のなかで、その出土状態が埋葬時の状況を示していると思われるものには5号墳羨道、8号墳前室、9号墳前室、12号墳羨道、13号墳玄室の出土遺物などがある。しかし、その大部分は直刀・刀子・鉄鏃をどの鉄製品や金・銀環・玉類の装飾品で、土師器、須恵器が出土しているのは8号墳と12号墳だけである。8号墳前室床面から重なった状態の須恵器坏3点および土師器坏1点が出土し、いずれも8世紀後半を中心とする年代に位置付けられた。12号墳では羨道床面から土師器坏が1点出土し、この坏は7世紀後葉のものと考えられた。

次に各横穴の堆積土出土土器についてみると7号墳からは7世紀末～9世紀の、1・12・13号墳からは8世紀前半の、8・9号墳からは8世紀全般の、5号墳からは9世紀後半の、10号墳からは8世紀後半以降の土器が出土している。

各横穴古墳出土土器の年代について述べたが、7・8・9号墳では長期間にわたる遺物の出土が知られ、8・12号墳では埋葬時の状況を留めていると考えた遺物と堆積土出土遺物との間に時間的な差が認められた。これは7号墳玄門閉塞溝が2重になっていることや8号墳玄門が奥に移動していることなどに閉塞施設の改築が認められ、また、1・7号墳羨道部に閉塞に使用された円礫がならされた状態で検出されていることや13号墳玄室の人骨の出土状態に追葬の可能性が認められるなど、木横穴古墳群では横穴古墳造成後に度々追葬が行われ、その使用期間が長く続いていたことを示しているものと思われる。

上記のような理由から、出土遺物の年代は横穴古墳の直接的な造成年代を示すものではなく使用年代の上限を現わすものと考えられる。前節で検討した第1群と第2群の横穴古墳に当てはめてみると、第1群の第Ⅰ類では7号墳の7世紀末を、第Ⅱ類では12号墳の7世紀後葉を上限とする遺物が出土し、第2群では5号墳にしか出土遺物は発見されていないが、8世紀後半を上限とする遺物が出土している。これにより横穴古墳の造成年代は第1群が7世紀後葉以前に、第2群は8世紀後半以前に求められることが判明した。そして、第1群の横穴古墳は8世

紀代に盛んに使用され、7・10号墳などはその使用期間が平安時代（9世紀）まで及んでいた可能性があることが知られた。さらに、第2群の第Ⅲ類b（11号墳）は出土遺物はないが、同様の規模・形態をもつ田尻町日向前横穴古墳の第1小穴では赤焼土器環が副葬されており、その所属時期は平安時代後半と考えられていることから、11号墳も同時期のものと思われる。朽木橋横穴古墳群は7世紀末もしくは後半以前に造成が始まり、多様な構造の横穴古墳が造成されながら、その使用期間は平安時代後半まで及んでいたと思われる。

4．朽木橋横穴古墳群の特徴と問題点

今回調査した13基の横穴古墳について重複関係や構造などから2群に分け、主として出土遺物からその造営年代について前節で検討した。朽木橋横穴古墳群はこの13基の横穴古墳以外にも南西斜面や北斜面にのびて分布しており、この13基が群全体の傾向を示すものではないと思われるが、以下に述べるような特徴を有している。それらを検討し、問題点について述べる。

1. 構造上の特徴として13基の横穴古墳のなかに玄室立面形が家形のものや台床施設および台床を意図した排水溝などが全く認められない。

大崎平野を取り囲む形で多くの横穴古墳群が分布していることについてはすでに述べたが、これらのうち発掘調査されたものについて玄室立面形や台床の有無についてみると南縁の鹿島台町大迫横穴古墳群、松山町亀井園横穴古墳群、三本木町山畑横穴古墳群や東端の涌谷町追戸・中野横穴古墳群には家形の玄室や有縁台床をもつ横穴古墳が、山畑横穴古墳群に近接する三本木町青山・混内山横穴古墳群には台床を意図した溝をもつ横穴古墳が特徴的に認められる。北縁の横穴古墳群をみると発掘例が少ないこともあるが、玄室が家形を表わす例は整正系と呼ばれる軒回りを表現したものが岩出山町川北横穴古墳群6号墳に1例あるだけで、この6号墳は無縁の低い台床をもっている。有縁台床は本横穴古墳群の東方約2kmの所にある田尻町日向前横穴古墳に1例あるだけである。本横穴古墳群を含めて考えれば、北縁では玄室立面形が家形になるものや、台床施設をもつものは南、東縁ほどは顕著に認められない。このことは両者の間に年代的な差があるためとも考えられるが、現段階ではこれらが大崎平野北縁の横穴古墳群の一つの特徴で、その地域性を示しているものと考えておく。

2. 第1群とした8基の横穴古墳は、そのなかに3基の玄室が複室となる横穴古墳が含まれ、玄室床面に石敷が施されるものが4基認められるなど多様性をもっている。

玄室が複室となる横穴古墳の類例は県内では仙台市善応寺横穴古墳群17号墳（伊東・氏家：1968）と鹿島台町大岩横穴古墳10号墳（志間：1979）とがあるが、前者は前室天井部崩落後に後室が造成された可能性があるとしてされている。後者は前・後室とも立面形が家形となり、合わせて3つの高い有縁台床をもち、後室は奥台床が発達して独立したような形態を示していて、

明らかに本横穴古墳群のものとは異なっている。福島県では県南部のいわき市中田装飾横穴（渡辺他：1971）や東白河郡東村策内古墳群18号横穴古墳（佐藤・玉川：1979）などに類例がある。両者とも前・後室の平面形がほぼ方形である点などでは本横穴古墳群の7・9号墳と共通しているが、後室立面形がドーム形であることと後室閉塞用の溝をもつ点などでは異なっている。また、中田装飾横穴の報告書では全国10遺跡12例の複室横穴を集成しているが、それによる限りでは前・後室とも立面形がアーチ形となる本横穴古墳群のものとは類似する例はない。このように本横穴古墳群の玄室が複室となる3基の横穴古墳については現段階では他の横穴古墳にその類例を求めることはできないようであるが、福島県南にみられるものが変容して伝播した可能性もある。しかし、宮城県北の大崎平野の北縁にある本横穴古墳群に複室構造の横穴古墳が出現するのには全く別の理由がある可能性もあり、今後の類例の増加をまちたい。

玄室内床面に石敷が施される例も少ない。大崎平野周辺では西縁の宮崎町米泉館山横穴古墳群2・3号墳、南縁の三本木町坂本館山横穴古墳群6号墳、鹿島台町高岩横穴古墳群20号墳などがあるが、複数の横穴古墳にしかも密に石敷が施されるのは米泉館山横穴古墳群と本横穴古墳群だけである。米泉館山古墳群では石敷と共に玄門部や羨道部に梱石、あるいは間仕切り石と思われる列石が認められ構造的には当地域に多くみられる古墳時代後期の高塚群集墳の河原石使用の横穴式石室との共通性が指摘されている。本横穴古墳群の位置する部分は大崎平野北縁の高塚群集墳の分布範囲の東端部に当っており、本横穴古墳群の立地する丘陵頂部には高塚古墳が1基存在することから、本横穴古墳群の石敷も高塚古墳と関連する可能性は高い。

第1群8基のなかに玄室が複室になるものや玄室床面に石敷をもつなど多様な横穴古墳が含まれることは、複室をもつ7号墳と第8号墳に認められる重複関係にみられるように第1群がある時間差をもって造成された可能性が考えられる。一方、このような多様性は横穴古墳を造営した集団内における被葬者の問題とも関連するものと思われる。これらはまた、同一丘陵に高塚古墳と横穴古墳が営まれていることをも含めて今後の検討課題である。

3. 出土遺物に認められる特徴として遺物は第1群の横穴古墳を中心に出土し、第2群の横穴古墳では5基のうち遺物が出土したのは第5号墳だけである点や、出土遺物のなかに在地の土器に交じって関東地方の鬼高式後葉や真間式の土器に類似するものが少量含まれていること装飾品や鉄製品の出土状態に片寄りが認められることがある。

横穴古墳に副葬される遺物が一般に簡略化され退化した形態をもつ横穴古墳では少なくなることはすでに指摘されており（氏家：1974他）、本横穴古墳群第2群に遺物の出土が少ないのはこの傾向と一致するものと思われる。

関東系の土器は近年県内の官衙、集落跡等から発見される例が増えているが、横穴古墳でも田尻町日向前横穴古墳羨道部床面から一括状態で出土した土師器坏4個体が、検討の結果、鬼

高式終末期から真間式初期に位置付けられると報告され、そして、三本木町山畑横穴古墳群、青山横穴古墳群、岩出山町川北横穴古墳群などから出土し、従来、引田・住社系の土師器として報告されてきた土器が同じく関東系の土器である可能性が指摘されている（早坂：1981）。この見解に従えば、関東系の土器を出土する横穴古墳群はいずれも大崎平野周辺の横穴古墳群であり、その位置は本横穴古墳群を含めて考えると大崎平野を圍繞するように分布している。一方、関東系の土器の出土する横穴古墳は本横穴古墳群では13基のうち1、7、9、12号墳の4基だけである。これは他の横穴古墳群でも同様で、一つの群のなかでも関東系の土器の出土するものは一部に限られ、出土数量も日向前横穴古墳を除けば1、2個体と少ない傾向も認められる。また、今回の調査で金・銀環や玉類などの装飾品が出土したのは13基のうち、第12号墳1基だけである。そして、鉄製品では第8、13号墳のように直刀・刀子・鉄鏃が出土したもの、第5・10号墳のように刀子・鉄鏃が出土したもの、第9・12号墳のように刀子だけが出土したものがある。以上のような遺物の出土傾向は本横穴古墳群においても追葬の痕跡が多く横穴古墳に認められ、出土遺物が一次的に被葬者に副葬された遺物であるかどうかは不明ではあるが、横穴古墳を造営した集団や被葬者の性格などを反映しているものと思われる。しかし、今回はそれについて十分に検討することはできなかった。また、横穴古墳造営の背景となった社会的環境は集落跡などの発掘例が少なく明らかではないが、近年、古川市名生館遺跡の調査によってその一端が知られるようになってきた。名生館遺跡は玉造柵の有力な擬定地と考えられる古代官衙跡で、その遺構には1～5期の変遷があり、7世紀末から9世紀末まで存続していたとされている（高野・仲田：1983）。本横穴古墳が立地する古川市小野が古代の何郡に含まれるのかは不明であるが、このような性格をもつ名生館遺跡の存在から7世紀末の大崎地方には官衙が成立する社会的基盤が確立していたと考えられる。この名生館遺跡からは前述したように鬼高式後葉や真間式に位置付けられる土器が在地の土器と共伴して出土しており、大崎平野周辺の横穴古墳からも関東系の土器の出土することは、当時の大崎地方に関東地方と強い関連をもつ人々が存在し、社会的基盤の一翼を担っていたことが知られる。そしてこれらの人々がどのような性格を有し、またどのような位置を占めていたかは不明ではあるが、関東系の土器が横穴古墳に副葬されることはこれらの人々が横穴古墳を造営した集団やその被葬者と直接、間接的に係っていたことを意味すると思われる。しかし、その関連の度合いなどの検討については今後の問題点としたい。

引用・参考文献

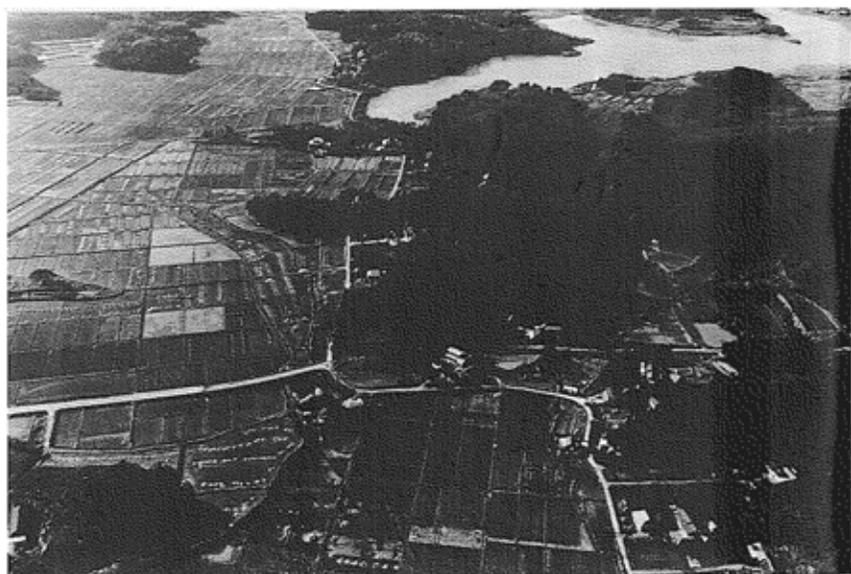
- 伊東・氏家 (1968. 3) : 『善応寺横穴古墳調査報告書』仙台市教育委員会
- 氏家和典 (1957. 3) : 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第8輯
- 〃 他 (1970. 6) : 「宮城県玉造郡岩出山町川北横穴群発掘調査報告書(第一次)」『岩出山町史・下巻』
- 〃 (1973. 3) : 「山畑装飾横穴古墳群発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第32集 宮城県教育委員会
- 〃 (1974) : 「東北横穴の問題」日本考古学、古代史論集
- 〃 (1980. 7) : 「亀井困横穴古墳群」『松山町史』
- 加藤・阿部 (1980. 9) : 「観音沢遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第72集、宮城県教育委員会
- 木村・青沼・長島 (1981. 3) : 「宮城県仙台市郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―」『仙台市文化財調査報告書』第29集、仙台市教育委員会
- 小井川和夫 (1978. 3) : 「白地横穴古墳群」『中田町文化財調査報告書』第1集
- 小井川・手塚 (1978. 3) : 「糠塚遺跡―宮城県文化財調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第53集
- 小井川・小川 (1982. 3) : 「御駒堂遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」『宮城県文化財調査報告書』第83集、宮城県教育委員会
- 埼玉県立歴史資料館考古資料室
- 岡部町六反田遺跡調査会 (1981. 3) : 『六反田遺跡』岡部町教育委員会
- 佐々木茂楨 (1971. 7) : 「三本木町坂本館山横穴古墳群調査報告書」『宮城県三本木町文化財調査報告』第1集 三本木町教育委員会
- 〃 (1972. 3) : 「米泉館山横穴群」『宮城県加美郡宮崎町文化財調査報告』第1集 宮崎町教育委員会
- 〃 (1972. 4) : 「坂本館山横穴群第二次調査報告書」『宮城県三本木町文化財調査報告』第2集 三本木町教育委員会
- 佐々木安彦 (1975. 3) : 「青山横穴古墳群」『宮城県三本木町文化財調査報告書』第3集 三本木町教育委員会
- 佐藤・手塚 (1978. 3) : 「天狗堂遺跡」『田尻町文化財調査報告書』第1集 田尻町教育委員会
- 佐藤・玉川 (1979. 3) : 「笹内古墳群―母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ」『福島県文化財調査報告書』第74集 福島県教育委員会
- 佐々木・氏家 (1973. 3) : 「追戸・中野横穴群」『宮城県遠田郡涌谷町文化財調査報告書』涌谷町教育委員会
- 志間泰治 (1977. 3) : 「大迫横穴群」『鹿島台町文化財報告書』第1集
- 仙台市教育委員会 (1983. 2) : 「郡山遺跡」第9回古代城柵官衙遺跡検討会資料
- 高野・仲田 (1983. 2) : 「宮城県名生館遺跡の調査」第9回古代城柵官衙遺跡検討会資料
- 千葉宗久 (1982. 3) : 「原前南遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」『宮城県文化財調査報告書』第83集 宮城県教育委員会
- 手塚 均 (1980. 3) : 「沼沼遺跡―東北新幹線遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第65集 宮城県教育委員会

- 丹羽 茂 (1981. 3) : 「青山横穴古墳群第二次調査報告書」 『宮城県三本木町文化財報告書』 第5集
三本木町教育委員会
- 丹羽・小野寺・阿部 (1991. 3) : 「清水遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書V」 『宮城県文化財調査報告書』 第77集 宮城県教育委員会
- 平沢・太田 (1981. 3) : 「青塚古墳」 『宮城県古川市文化財調査報告書』 第5集 古川市教育委員会
- 三宅宗義他 (1975. 3) : 「混内山横穴古墳群」 『宮城県三本木町文化財調査報告書』 第3集 三本木町教育委員会
- 宮城県多賀城研究所 (1981. 3) : 「名生館遺跡 I」 『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』 第6冊
- 森 貢喜 (1980. 3) : 「早風遺跡発掘調査報告書」 『宮城県加美郡宮崎町文化財調査報告書』 第3集
宮崎町教育委員会
- 渡辺一雄他 (1971. 3) : 「中田装飾横穴」 『いわき市史・別巻』 いわき市

写真図版

図版 1

遺跡遠景 (東上空より)



遺跡全景 (南東方向より)



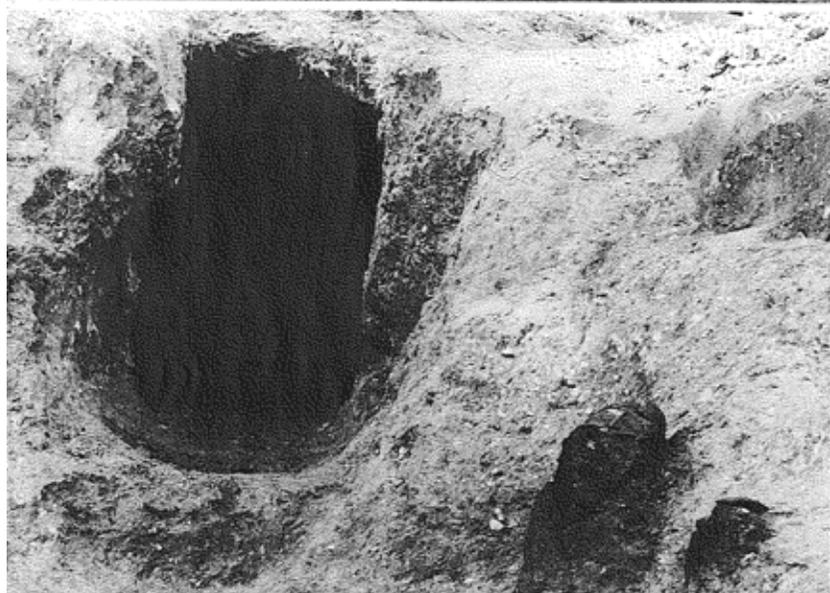
頂上部円墳



3・2・1号墳



1号墳玄門と遺物出土状況

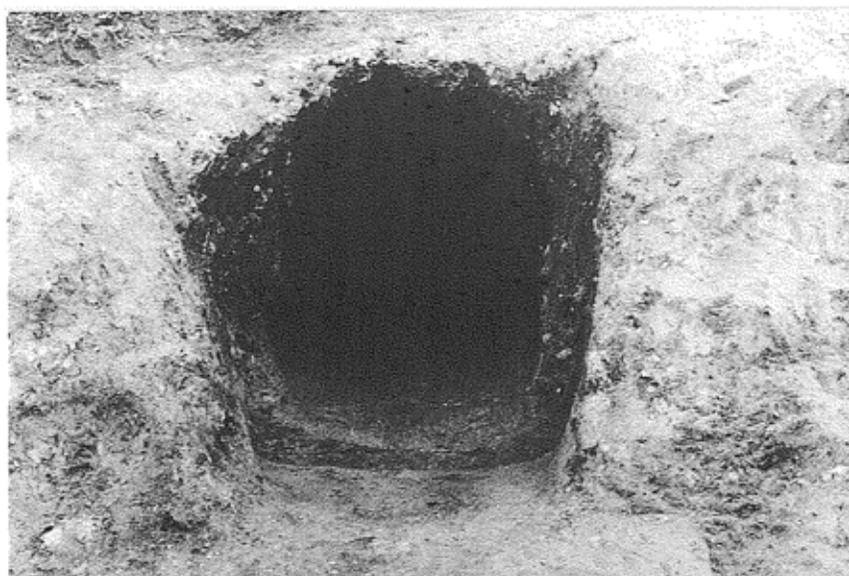


1号墳玄室奥壁

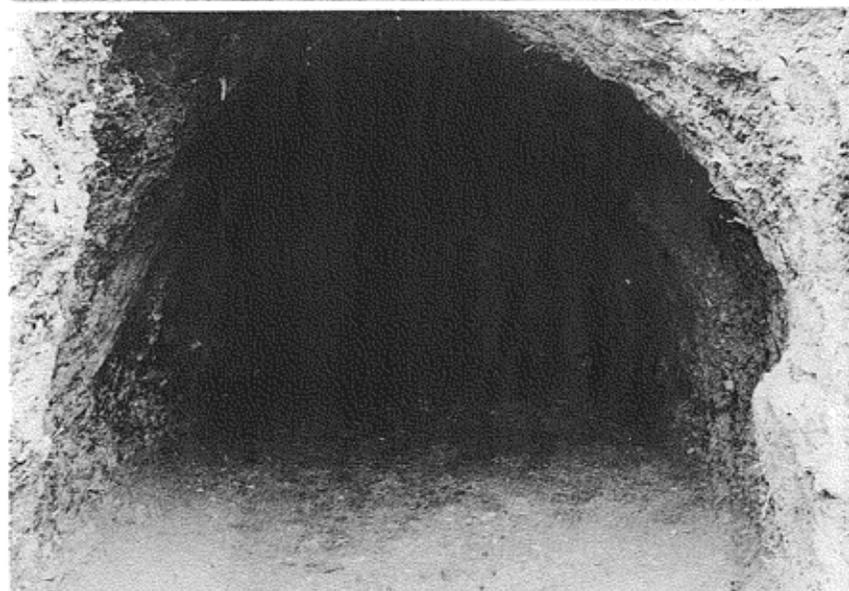


図版3

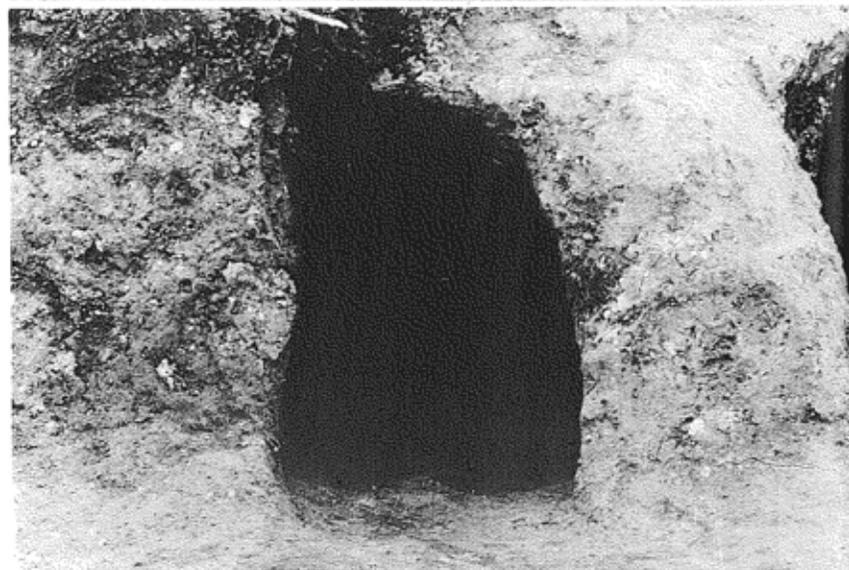
2号墳玄門



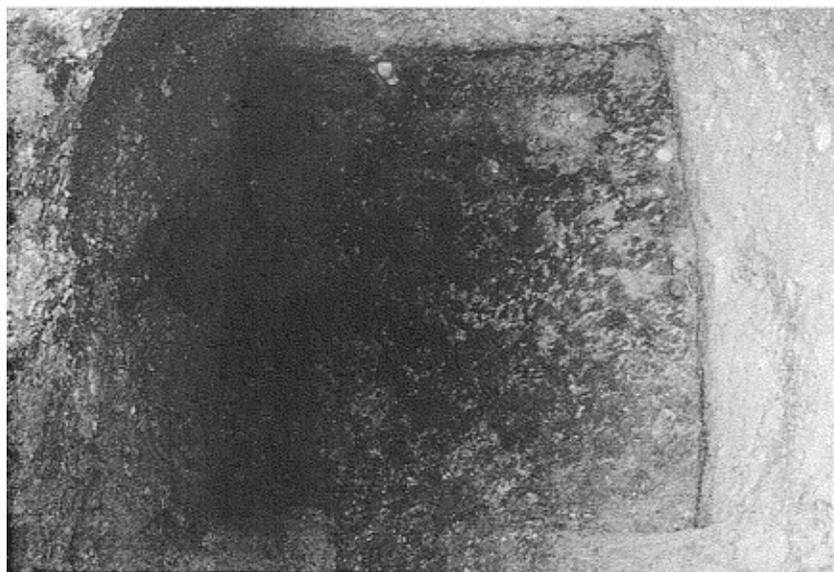
2号墳玄室



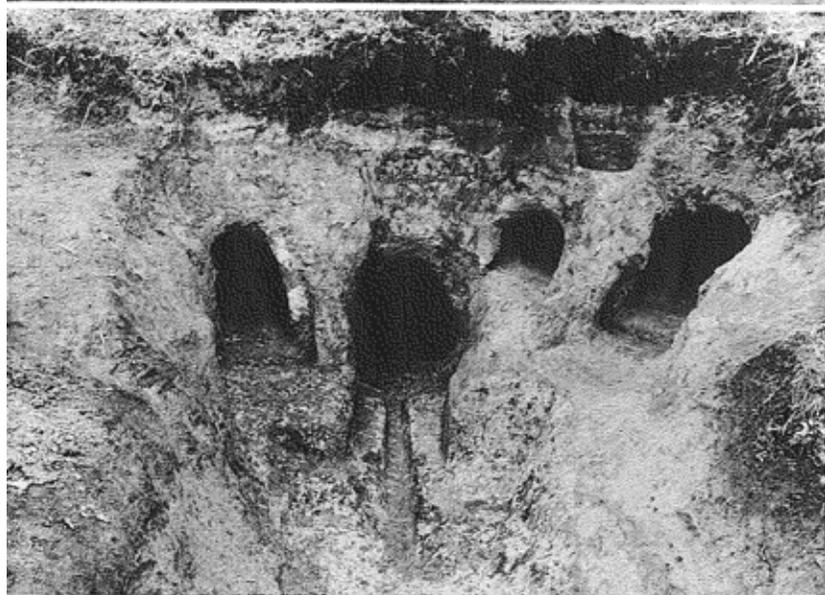
3号墳



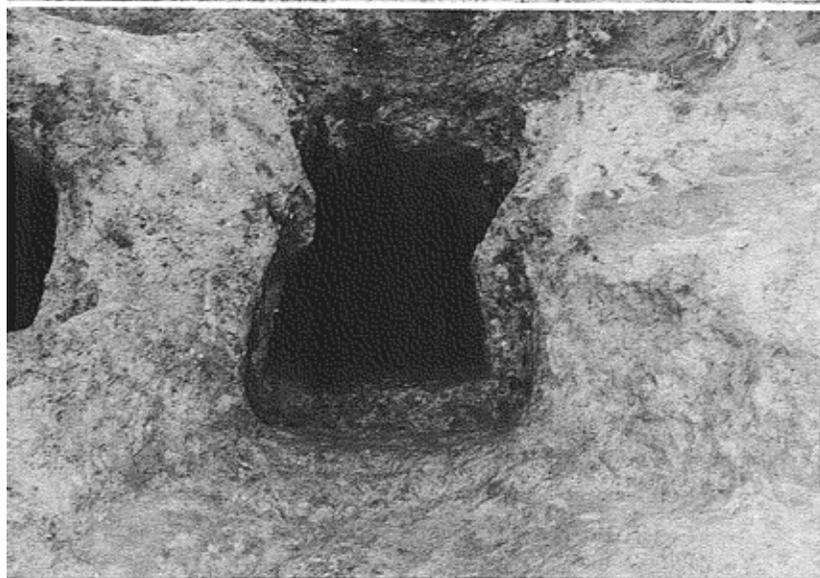
4号墳



8・7・6・11・5号墳

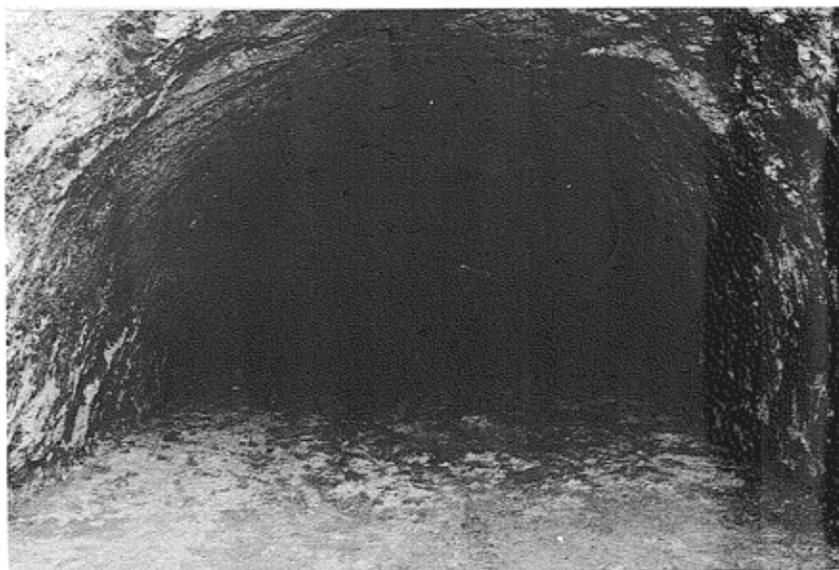


5号墳



図版5

5号墳玄室とノミ痕

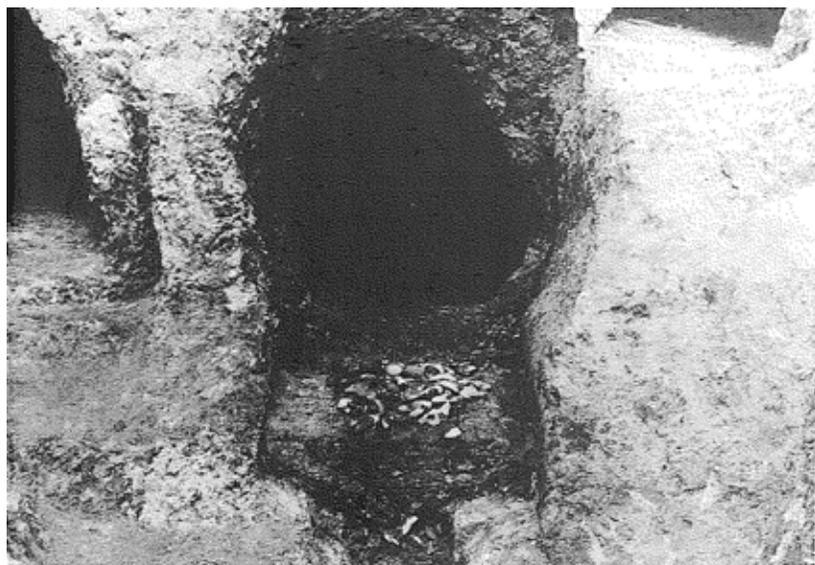


5号墳玄門閉塞と
出土遺物

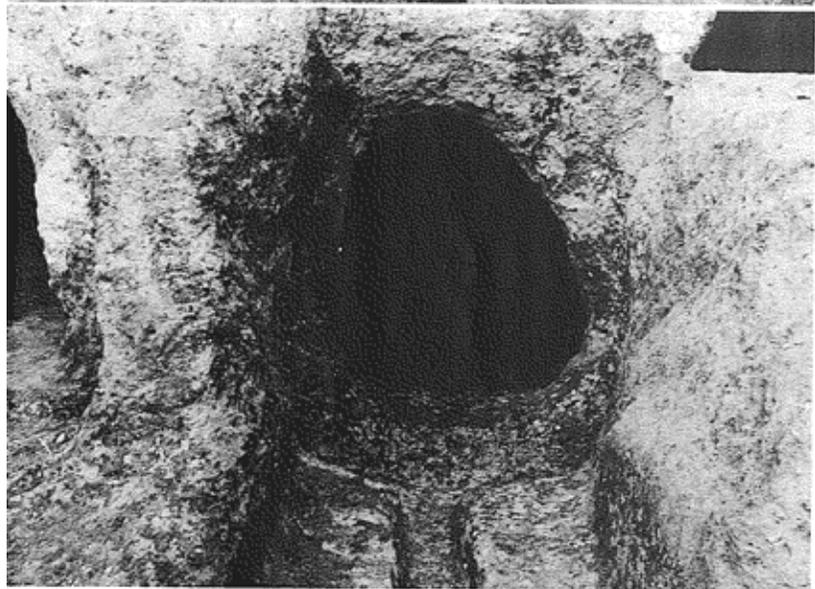


6号墳

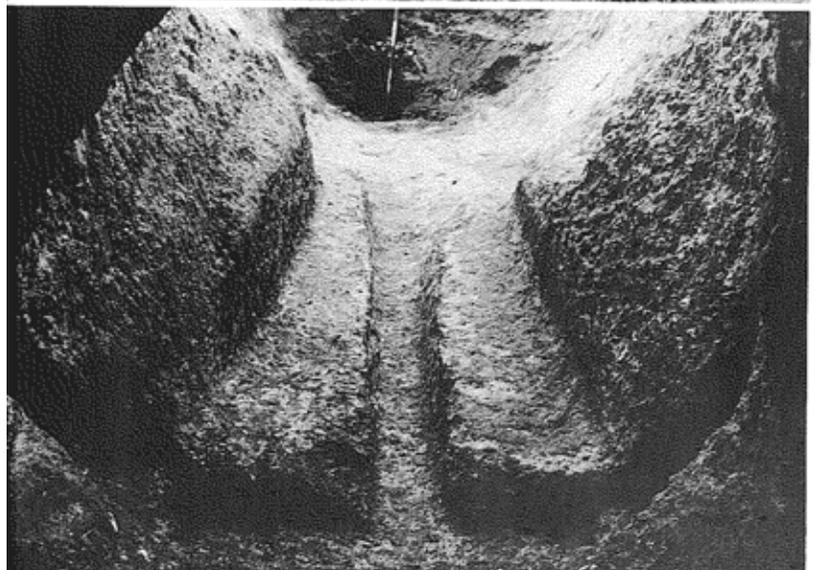




7号墳狭道部礎



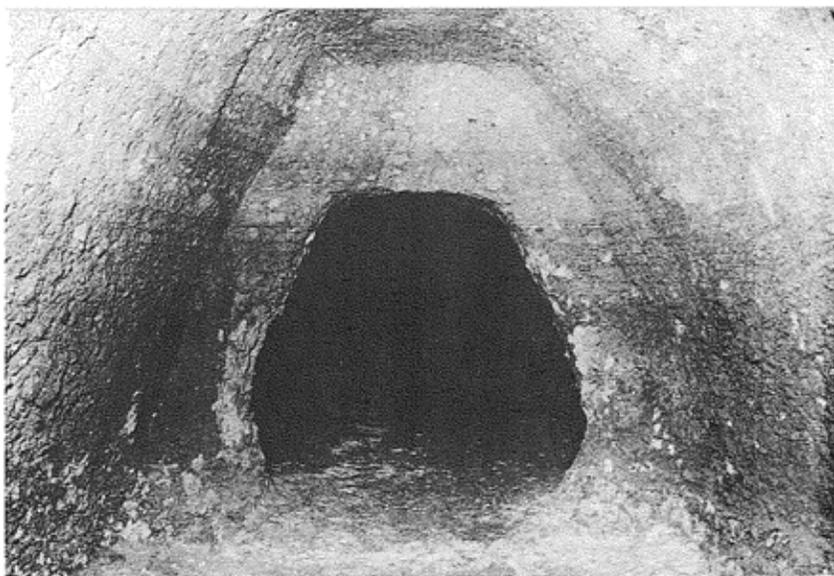
7号墳玄門



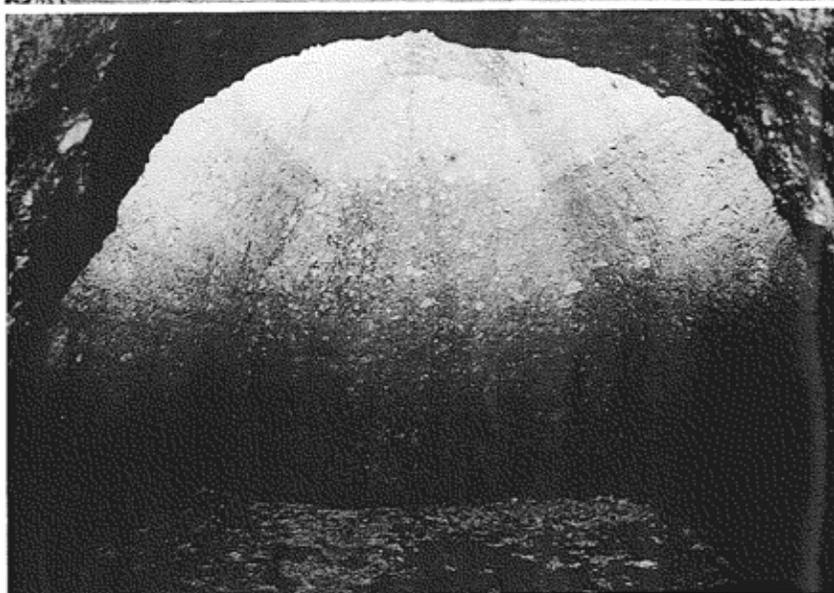
7号墳狭道

図版 7

7号墳後室玄門



後室奥壁



後室奥壁ノミ痕



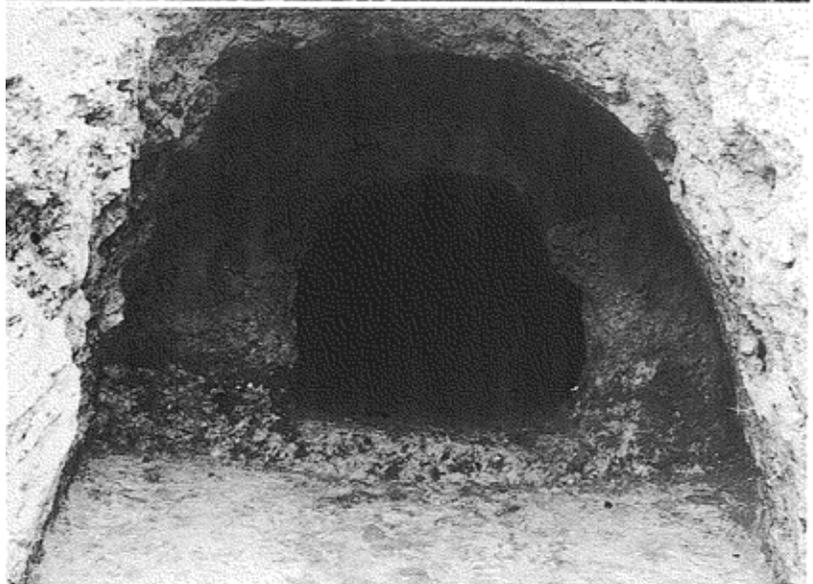
8号墳前室玄門



前室玄門塞溝

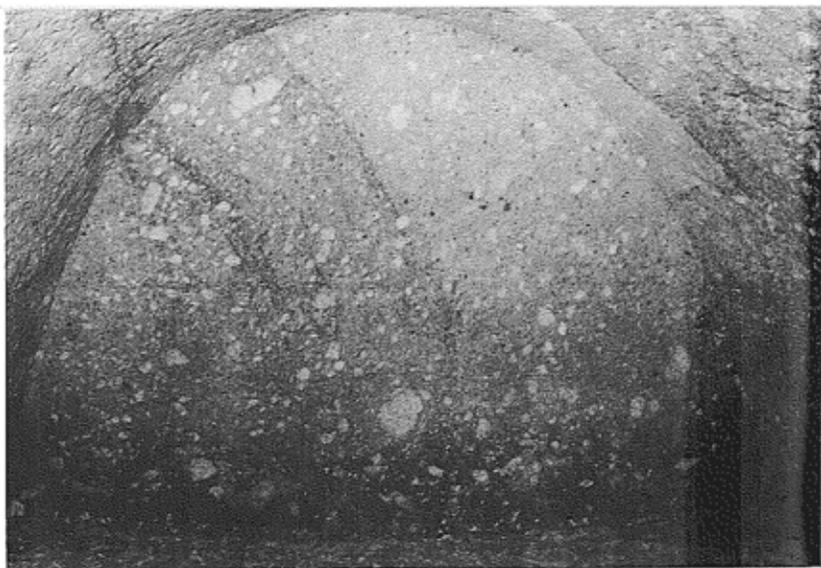


後室玄門

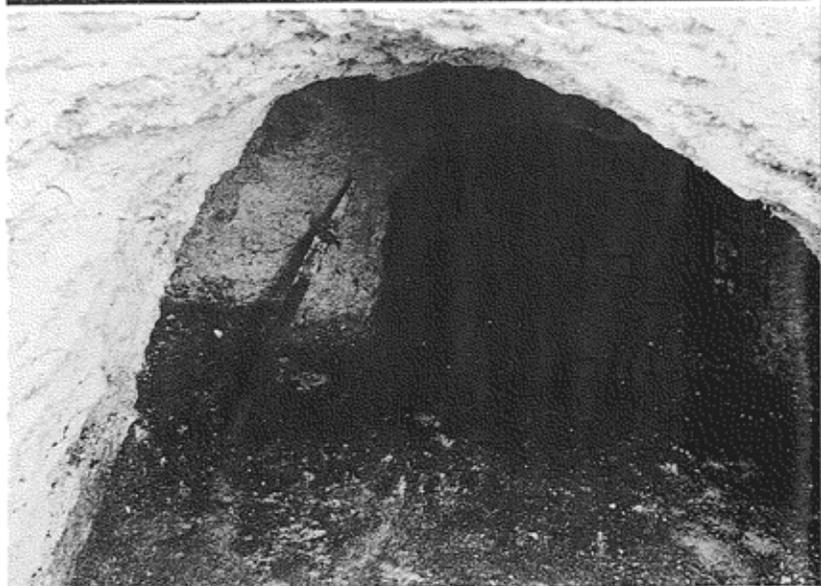


图版 9

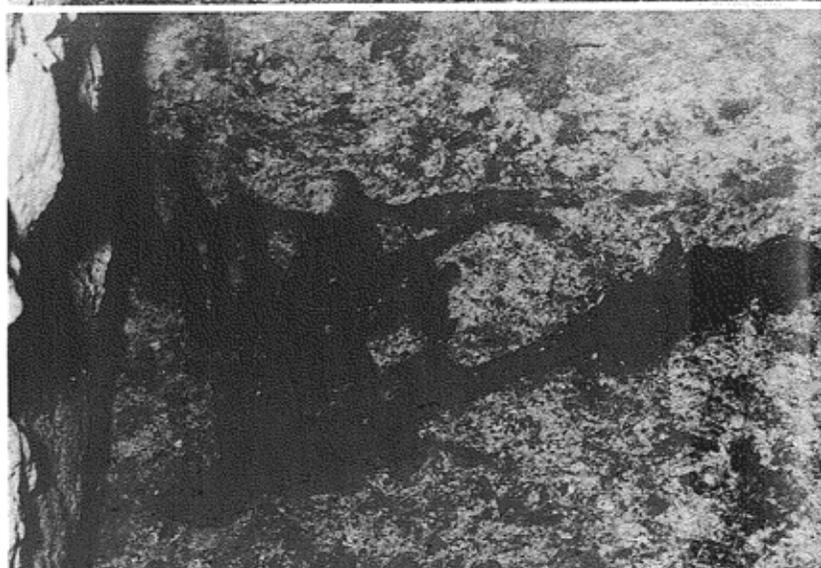
8号墳後室奥壁



前室左奥直刀出土状況



前室左奥鉄製品
出土状況



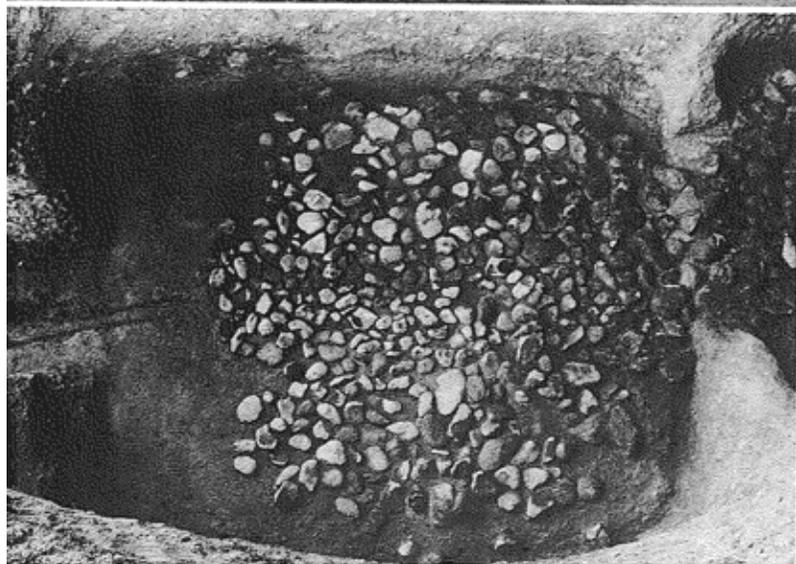
右より9・10・12号墳



9号墳

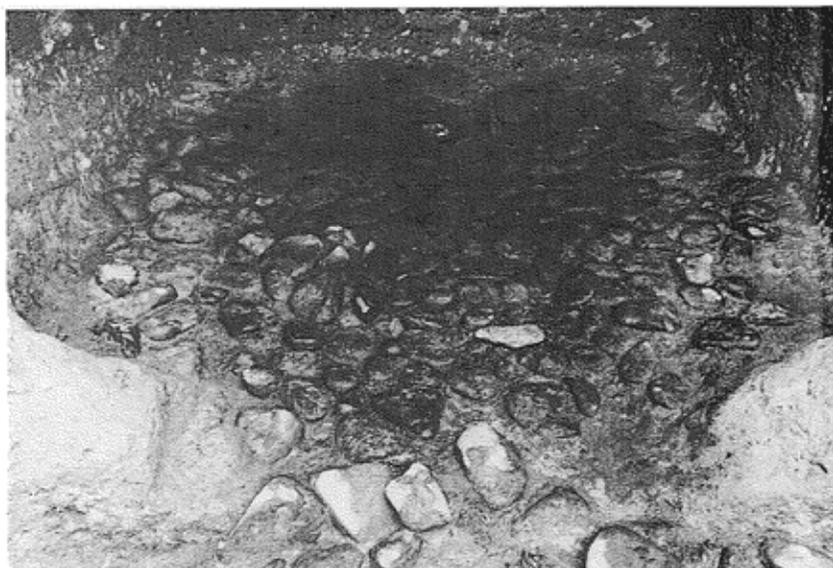


9号墳前室

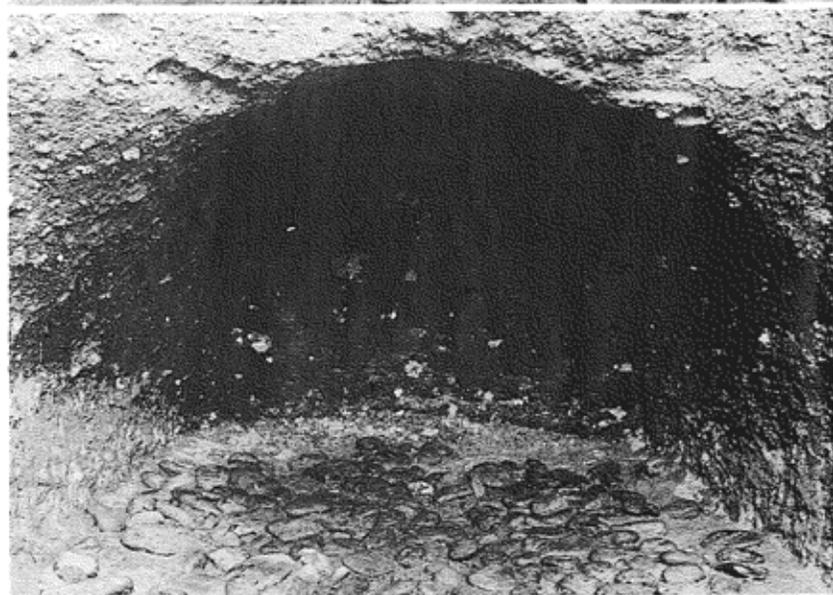


图版11

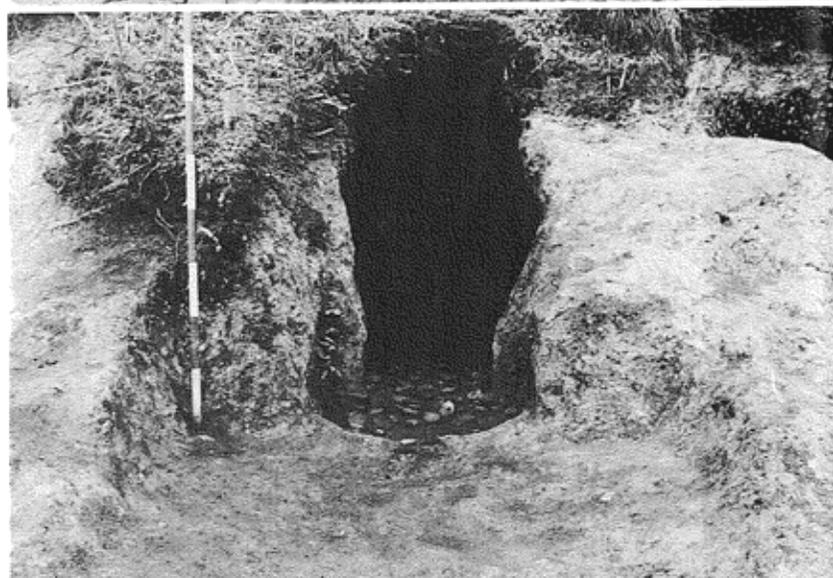
9号墳後室



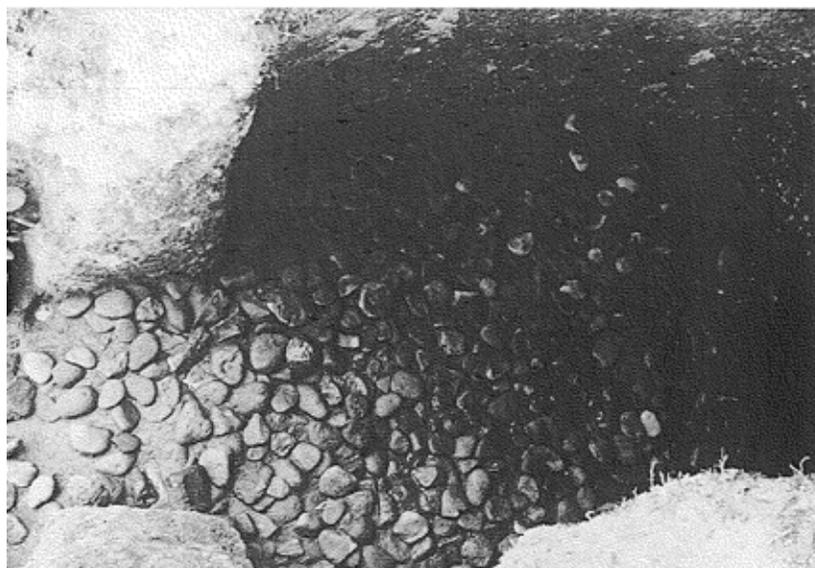
9号墳後室奥壁



10号墳



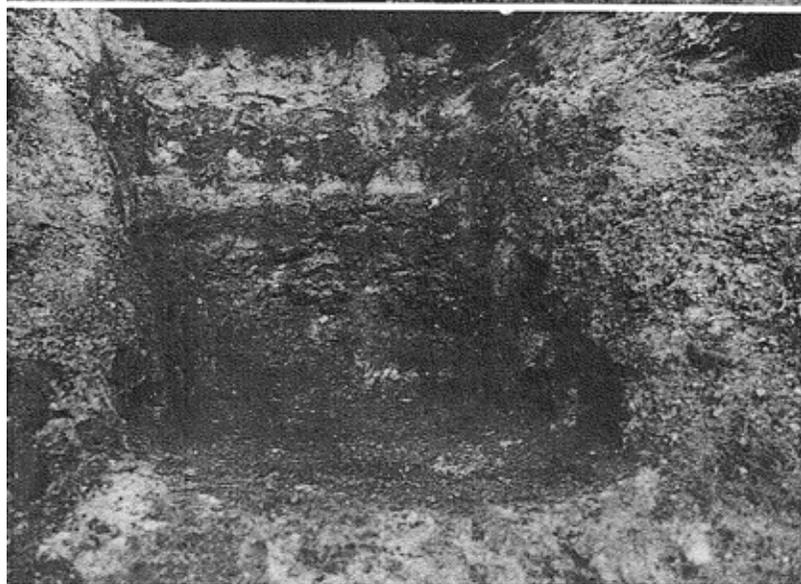
10号墳玄室



玄室と閉塞石



11号墳



图版13

12号墳



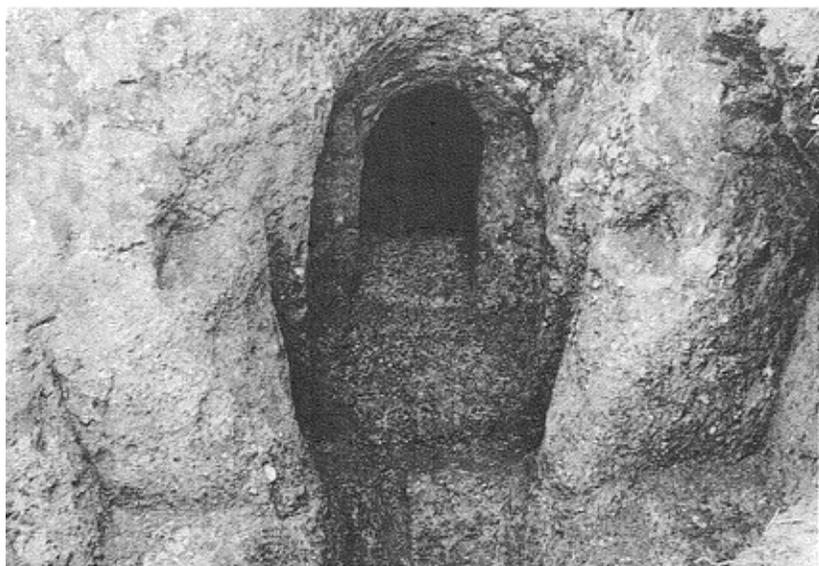
玄室



玉類出土状況



13号墳



玄室



玄室奥壁



図版15

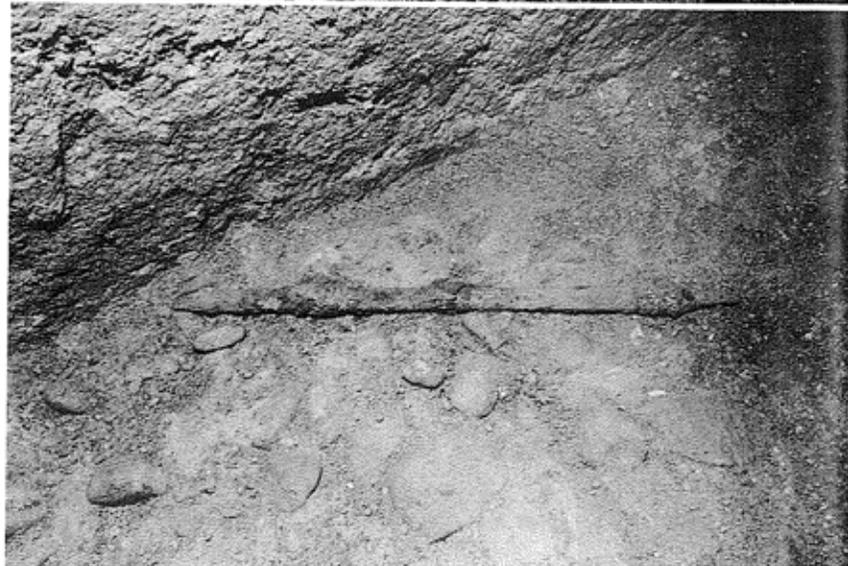
13号墳玄室右奥部人骨
出土状況

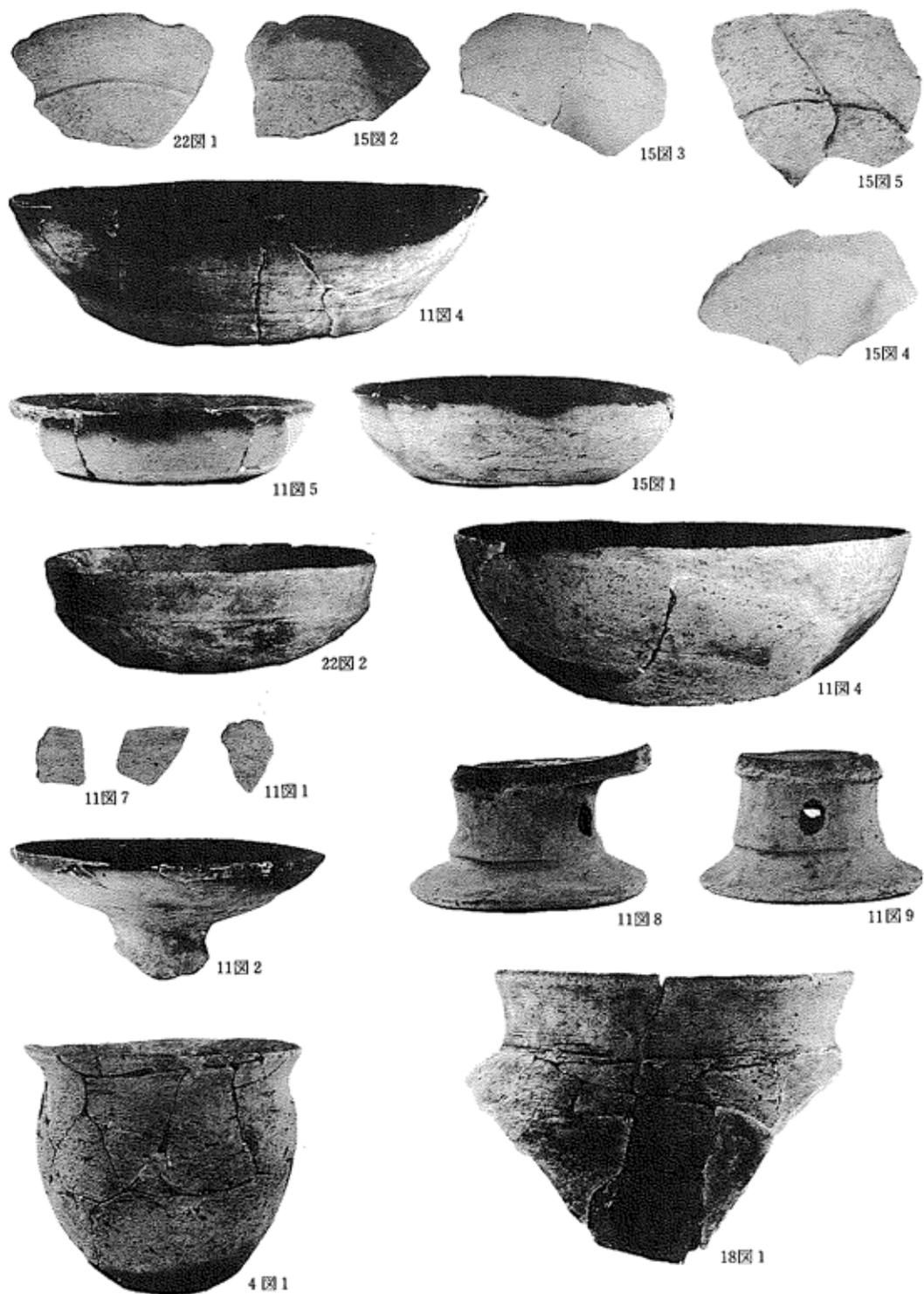


玄室左側壁ぎわ出土
直刀・鉄製品



玄室右側壁ぎわ直刀
出土状況





図版16 土師器



24图 1



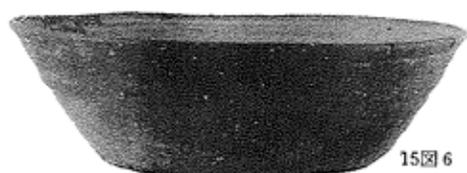
11图 11



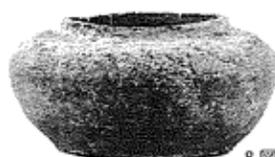
8图 1



11图 3



15图 6



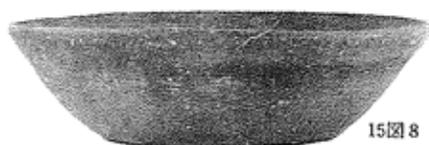
8图 2



15图 9



15图 7



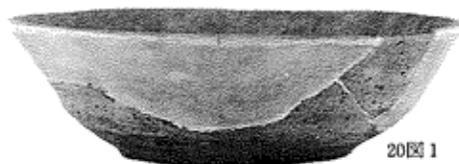
15图 8



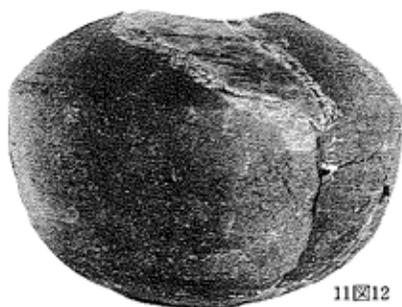
11图 13



18图 2



20图 1



11图 12



20图 2 图版17 須惠器



11图14



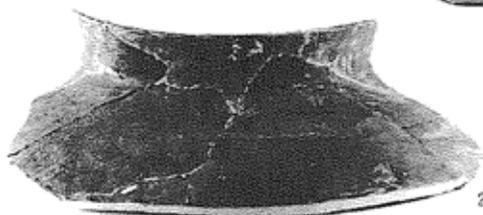
24图2



12图1



11图15



24图3



18图3



12图2



20图5



12图3



20图3



图版18 須惠器



13图





8号墳前室左床面



8号墳前室左



13号墳玄室右側壁



13号墳玄室左側壁



12号墳出土玉類・金銀環

図版20 鉄製品・装飾品

宮前遺跡

目 次

I 遺跡の位置と環境.....	71
II 遺構とその出土土器.....	73
III 遺物の検討.....	172
IV 遺跡の構成.....	209

調 査 要 項

1. 遺跡名：宮前遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号：13043 遺跡略号：D I）
2. 調査期日：昭和49年7月8日～昭和49年12月27日
3. 調査対象面積：約15,000m² 実発掘面積：約6,600m²
4. 調査主体者：宮城県教育委員会
5. 調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平沢英二郎、白鳥良一、恵美昌之、小井川和夫、宮崎敬典、丹羽 茂、高橋守克、真山 悟、柳田俊雄、田中則和、熊谷幹男、中島 直、阿部博志、佐藤好一、森 貢喜、手塚 均、青沼一民、清野俊太郎、後藤幸雄、林 和男

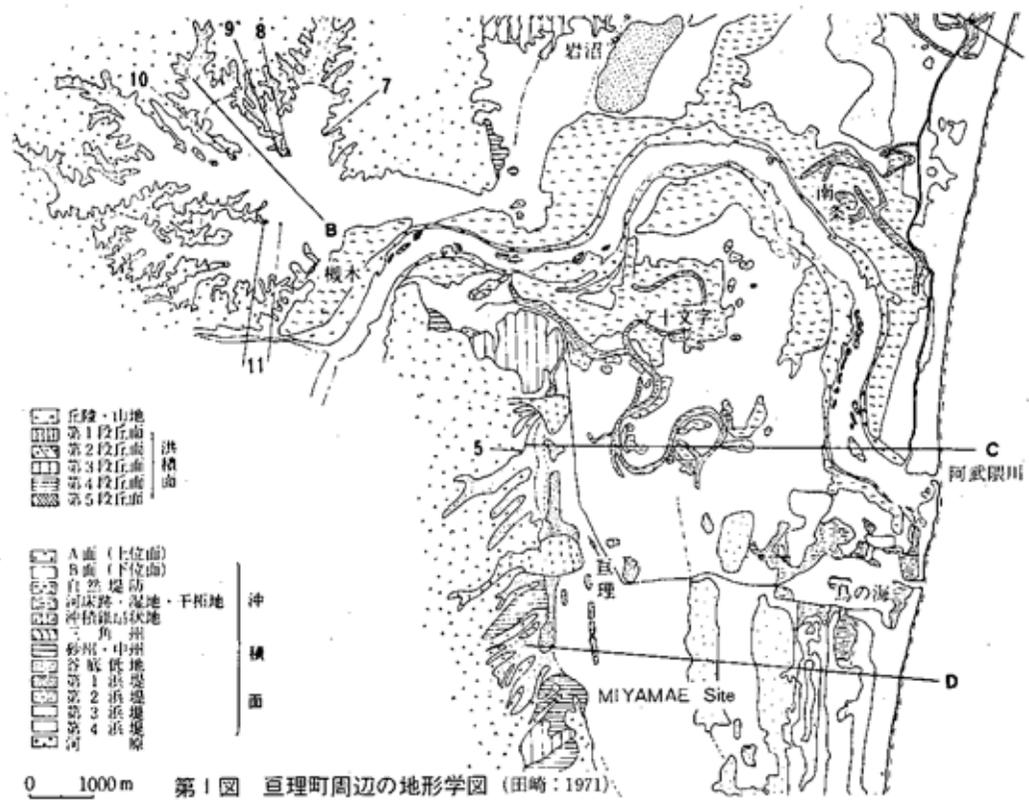
調査協力機関：亘理町教育委員会 亘理町立吉田小学校 宮城県亘理高等学校

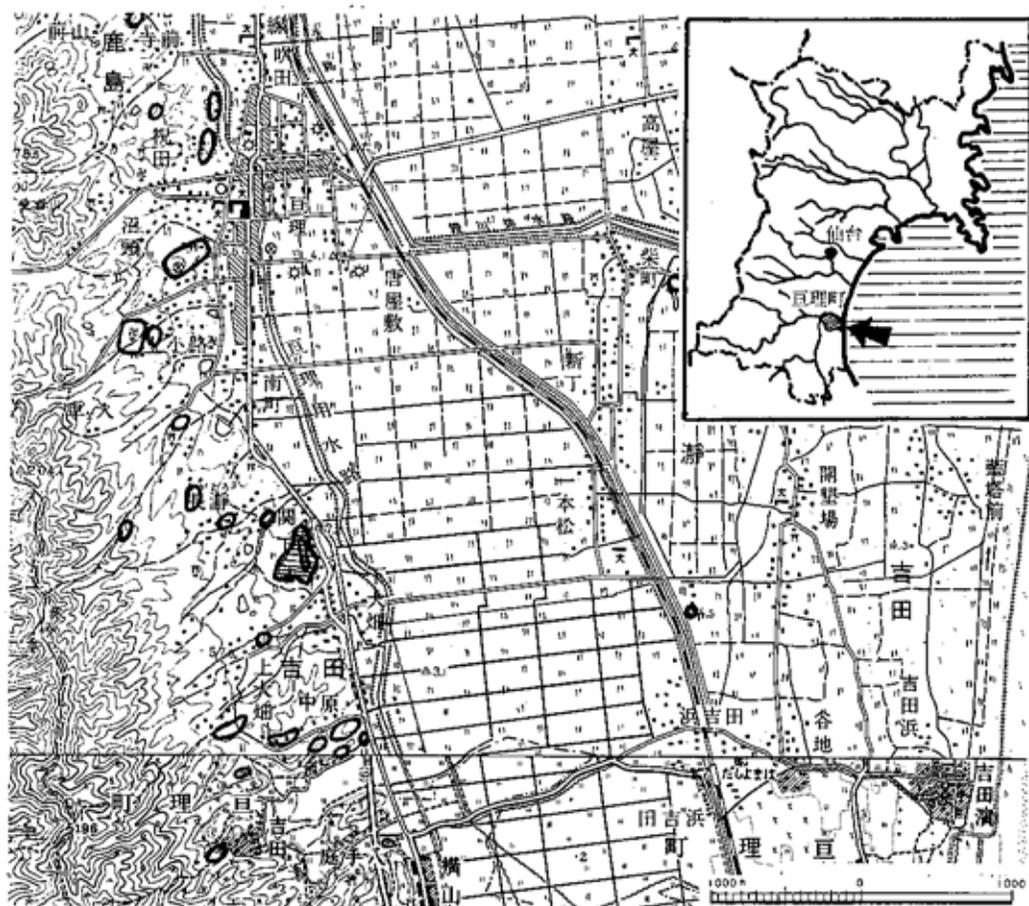
なお、遺跡・遺構等の写真とグリッド配置図・水糸配置図は宮前遺跡調査概報（宮城県文化財調査報告書第38集）に収録してあるので、そちらを参照していただきたい。

I 遺跡の位置と環境

宮前遺跡は亶理郡亶理町吉田字宮前に位置している。常磐線亶理駅の南方約2.8kmの地点である。福島県から続く阿武隈山地は宮城県に入ると二つに枝分れする。東側の支脈は海岸線に沿って北上し、北端が阿武隈川と接する。この支脈は標高200~300mの丘陵で、その縁辺には小河川によって開析された小丘陵（段丘）が分布している。小丘陵の東側には浜堤の発達が著しく海岸線に平行して約7列認められる（田崎：1971）。海岸線と小丘陵の間には沖積地が広がっている。この沖積地を流れる阿武隈川は岩沼付近で大きく弯曲しながら太平洋に注ぐ。阿武隈川の両岸には自然堤防が形成され、周辺には蛇行痕（旧河床の痕跡）がみられる。

宮前遺跡は阿武隈山地の縁辺に発達した小丘陵に立地している。この小丘陵は河川の浸蝕によって他の小丘陵群から切り離され独立した形になっている。その間には現在水田化されている谷底低地がある。遺跡が立地する独立丘陵の東側には沖積平野が広がり、遠く太平洋を望むことができる。この独立丘陵は南側に浅い谷があり、尾根状の丘陵平坦面にはゆるやかな起伏がある。この平坦面は標高約30mで、沖積面との比高は約27mである。





第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ 遺構とその出土土器

第1号住居跡

〔平面形・重複〕第1号住居跡は第2・3号住居跡と重複し、両者によって切られている。また、住居南西部分は、南北に走る小規模な沢（状の地形）によって削平を受けている。残存部分から住居平面形は隅丸方形と推定され、規模は南北軸5.4m・東西軸5.3mである。

〔壁〕検出された壁はすべて地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦である。床面下には部分的に地山ブロックを含む掘り方埋土が確認され、一部に貼り床がなされていたと考えられる。

〔柱穴〕柱穴は4個（ $P_A \cdot P_B \cdot P_C \cdot P_D$ ）検出された。これらの柱穴は掘り方と柱痕跡の識別ができた。また、いずれも住居平面形の対角線上に位置しており、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。なお、柱間は住居南北軸が2.7m・住居東西軸が2.9mである。

〔周溝〕北壁と南西隅の壁直下で周溝が確認されたが、第2号住居跡によって切られている西壁の大部分、沢によって削られている南壁の大部分については不明である。検出された周溝は断面「 \sqcap 」状で、幅10～25cm・深さ2～7cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居東辺と南辺の隅で確認された（ $P_{①}$ ）。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸57cm・東西軸65cm・深さ10cmである。底は丸底状で、壁は緩やかに立ちあがる。ピット底面には厚さ1～2cmの木炭層（第3層）があり、その上に土師器甕2個体（第3図1・2）と甕の口縁部破片1点がのっていた。1の破片は付近の床面上にも散乱していた。ピット内には、焼土や木炭を含む暗褐色土が堆積していた。

〔その他の施設〕住居残存部分では、炉等の施設は検出されなかった。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は他の遺構と重複しているため、壁周辺に残っていたに過ぎない。壁周辺の堆積土を検討すると、第1層（暗褐色土層）と第2層（褐色土層）にわかれる。第2層は壁に接して分布し、地山崩壊土をブロック状に含んでいる。第1層はその上位にある黒味の強い層である。両者の堆積状況は将棋倒し状をしている。

遺物は、前述の貯蔵穴状ピットとその周辺に集中しており、その他の部分・層ではほとんど出土していない。

第2号住居跡

〔平面形・重複〕第2号住居跡は第1・3号住居跡と重複し、第1号住居跡を切っているが、第3号住居跡によって上部が削平されている。また、住居南西部分は南北に走る沢（状の地形）による削平を受けている。住居平面形は隅丸方形で、規模は南北軸4.50m・東西軸4.65mであ

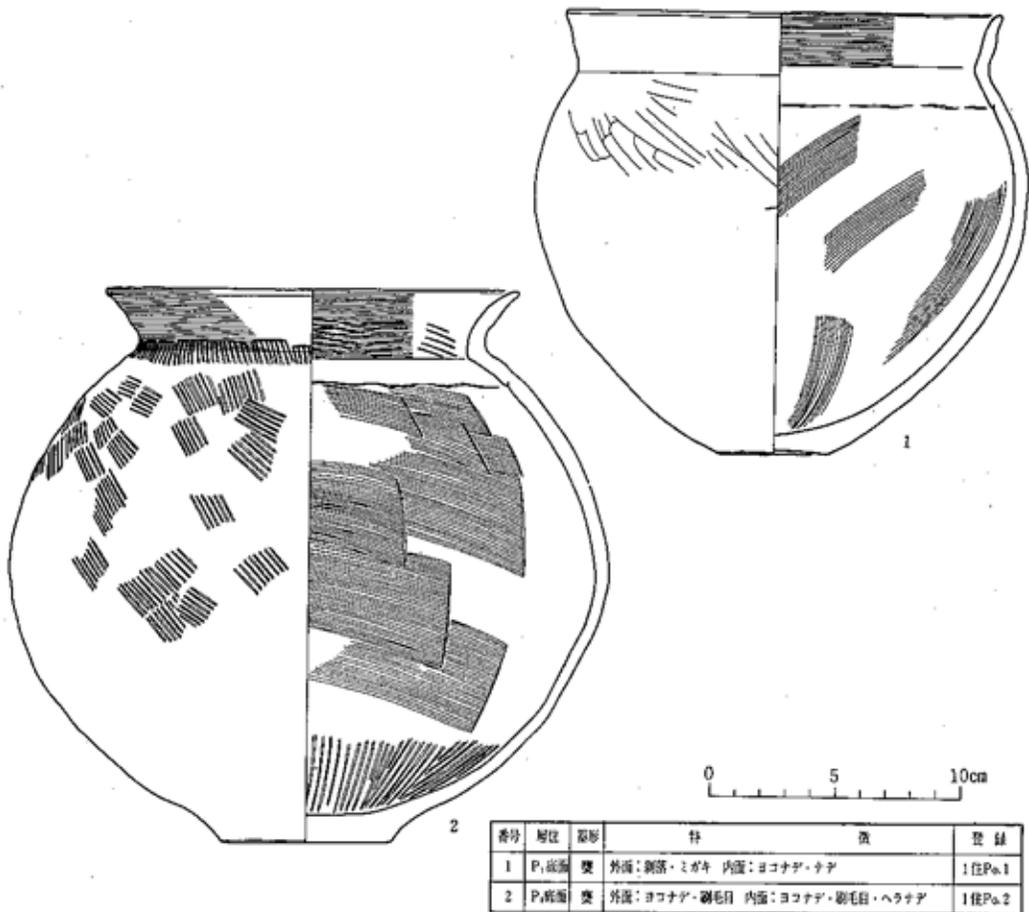
る。

〔壁〕 検出された壁は、第1号住居跡と重複している部分ではその堆積土、その他の部分では地山となっている。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 住居床面はほぼ平坦である。床面下には部分的に地山ブロックを含む掘り方埋土が確認され、一部に貼り床がなされていたものと考えられる。

〔柱穴〕 柱穴は4個（ $P_7 \cdot P_8 \cdot P_9 \cdot P_{10}$ ）検出された。これらの柱穴は、掘り方と柱痕跡の識別ができる。また、いずれも住居平面形の対角線上に位置しており、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。なお、柱間は南北軸2.25m・東西軸2.30mである。

〔周溝〕 西壁を除く北・東・南壁直下にめぐっている。周溝の断面は「 \sqcup 」状で、幅10~30cm・深さ2~9cmである。この他、南壁と西壁の内側1.2~1.3に、それぞれの壁と平行な溝が走っている。この溝（内側周溝）は断面が「 \sqcup 」状で、幅10~15cm・深さ3~4cmと壁直下の周溝より僅かに小規模である。また、内側周溝は壁直下の周溝と接続し、その囲む形は住居平



第3図 第1号住居跡出土土器

面形と東・北の二辺を共有する相似形となる。そして、この内側周溝は南西隅の部分から外側に90cm程さらに延びている。

このように、二重にみられる周溝は、二辺を共有することから住居の間仕切りなのか、それとも拡張に伴うものか二つの可能性が考えられる。しかし、調査の時点で、そのいずれか判断し得る痕跡を発見することはできなかった。

〔炉〕住居中央から僅かに北西に偏った部分の床が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は不整楕円形をしており、その範囲は55×50cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居南辺と西辺の隅にあたる部分で確認された（P₁₁）。平面形は円形で、底面は平坦である。規模は直径約55cm・深さ約60cmである。底面直上から甕の土製模造品（第6図4）が1点出土している。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色シルト層で、住居中央部を中心として広い範囲に堆積している。第2層は焼土・木炭を多量に含む暗褐色粘土質シルトで、住居東側の狭い範囲に堆積している。第3層は褐色の砂質粘土で、壁の崩壊土を含み壁際に堆積している。

〔遺物の出土状況〕遺物がまとまって出土しているのは床面と細部（周溝・貯蔵穴状ピット）である。すなわち、床面からは高坏2点・高坏脚部破片1点・壺1点・甕口縁部破片8点・甕底部破片1点・甕1点が出土している。周溝からは高坏脚部破片1点・甕1点、貯蔵穴状ピットから土製模造品（甕）1点が出土している。

堆積土からの出土は次の通りで、あまりまとまりはみられない。第1層：坏1点・甕口縁部破片1点、第2層：高坏脚部破片2点・壺1点・甕1点・甕口縁部破片1点、第3層：壺1点・甕底部破片1点、層不明：高坏脚部破片1点・甕4点・甕口縁部破片4点・甕底部破片1点

第3号住居跡

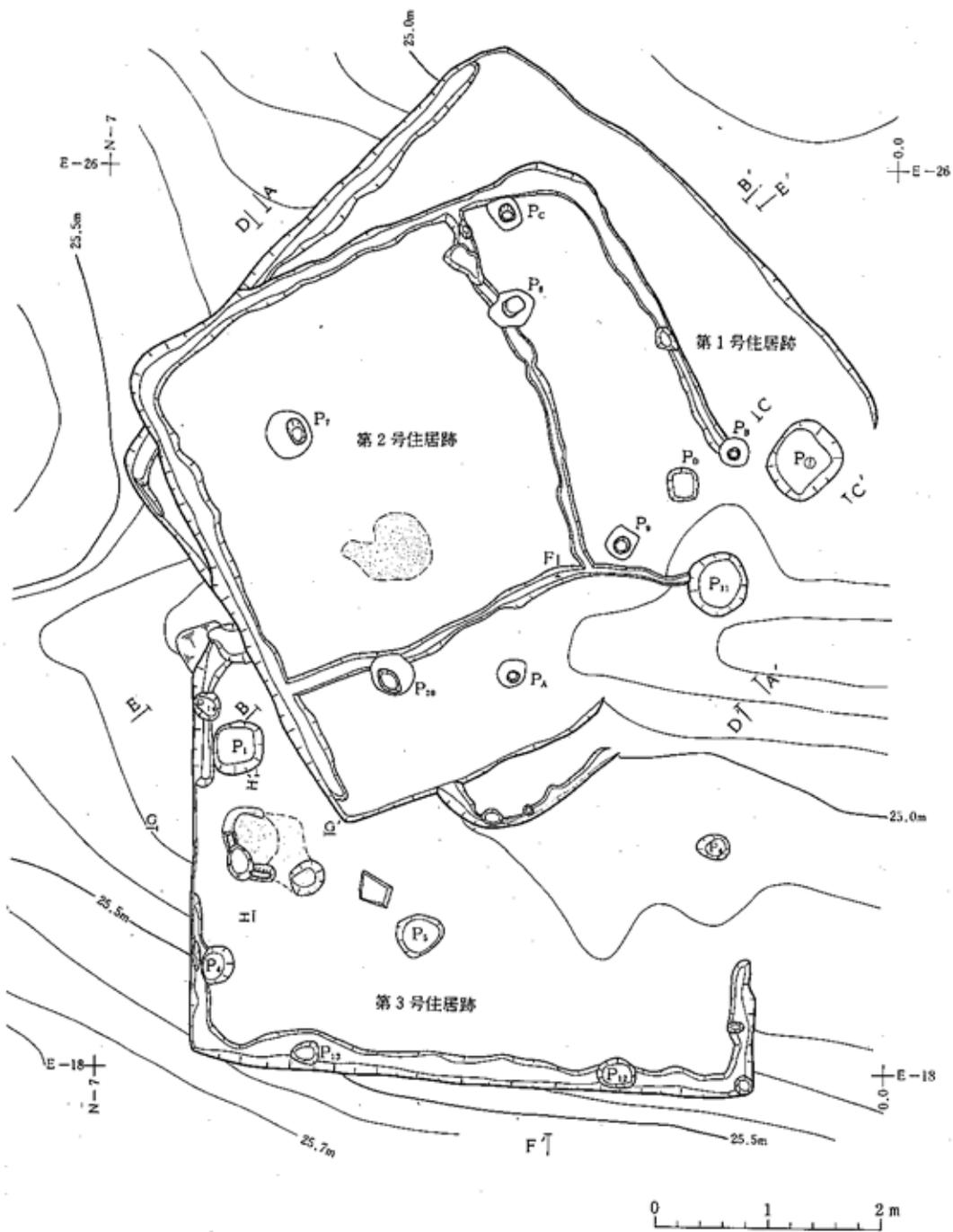
〔平面形・重複〕第3号住居跡は第1・2号住居跡と重複し、その両者を切っている。しかし南北に走る沢（状の地形）によって、住居の南東部分が削平されている。

住居平面形は長方形で、規模は南北軸4.90m・東西軸3.95mである。

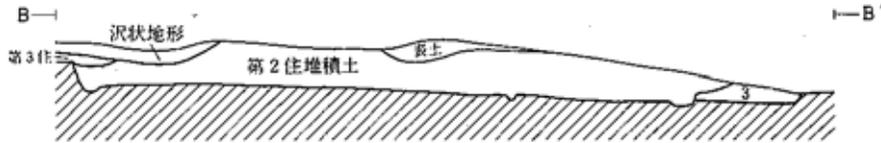
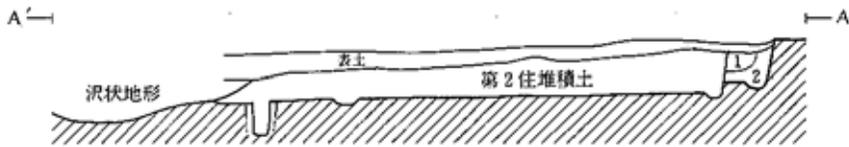
〔壁〕検出された壁は、第1・2号住居跡と重複している部分ではその堆積土、その他の部分では地山となっている。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦である。床面の大部分は地山であるが、第1・2号住居跡と重複している部分ではその堆積土となっている。

〔柱穴〕主柱穴は不明である。P₁₂・P₁₃・P₄・P₁₄は周溝中であるが、住居南北軸・東西軸に対して対称な位置にあることから、支柱穴の可能性が認められる。

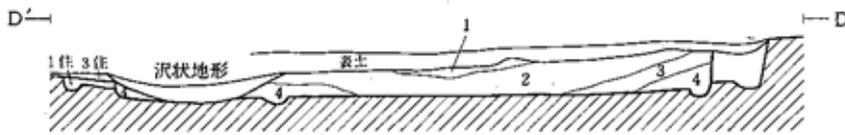
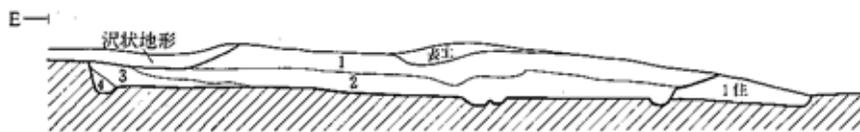


第4图 第1・2・3号住居跡平面图



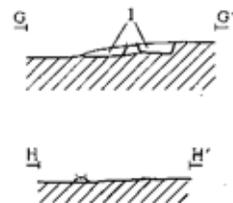
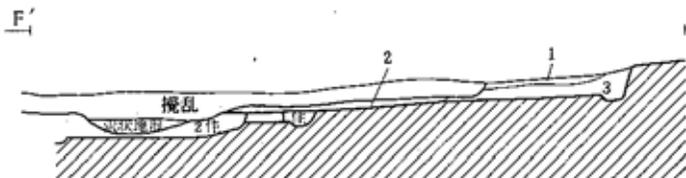
層位	層No	土色	土性	備考	
第1層	1	暗褐色(10 Y R 3)	砂質シルト	しまりがあり、固い。細砂を含む。	
	2	褐色(7.5 Y R 3)	シルト	しまりがあり、固い。明褐色(7.5 Y R 3) 砂質粘土のブロックを含む。	
第2層	3	褐色(7.5 Y R 3)	砂質シルト	黄褐色(10 Y R 3) 砂質粘土のブロックを斑状に含む。	
P ₁	第1層	4	暗褐色(7.5 Y R 3)	シルト	褐色(7.5 Y R 3) 粘土質シルトのブロックを斑状に、焼土・木炭ブロックを偶発に含む。
	第2層	5	極暗褐色(7.5 Y R 3)	粘土質シルト	木炭粒・木炭片を含む。
	第3層	6	木炭層		

第1号住居跡



層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(7.5 Y R 3)	シルト	
	2	暗褐色(10 Y R 3)	シルト	褐色(10 Y R 3) 粘土質シルトのブロックを斑状に含む。
第2層	3	暗褐色(10 Y R 3)	粘土質シルト	焼土・木炭を多量に含み、ねばりがある。
第3層	4	褐色(10 Y R 3)	砂質粘土	ザラザラした砂(中砂or細砂)を含み、ねばりが強い。

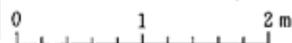
第2号住居跡

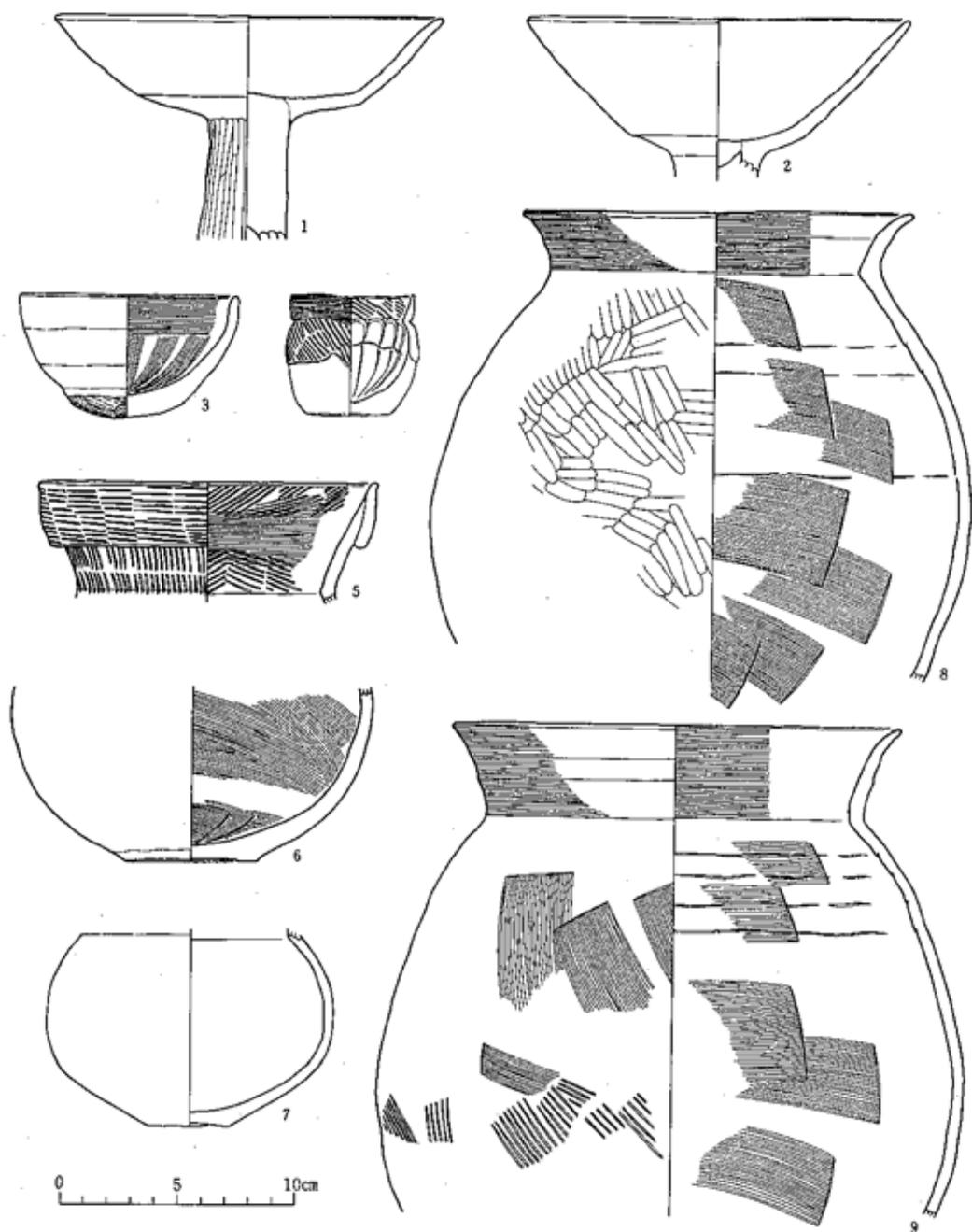


層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(7.5 Y R 3)	シルト	しまりがあり固い。
	2	暗褐色(7.5 Y R 3)	シルト	しまりがあり固い。
第2層	3	極暗褐色(7.5 Y R 3)	シルト	しまりがあり固い。
第3層	4	暗赤褐色(5 Y R 3)	砂質シルト	木炭・焼土ブロック含む。サラサラしている。

第3号住居跡

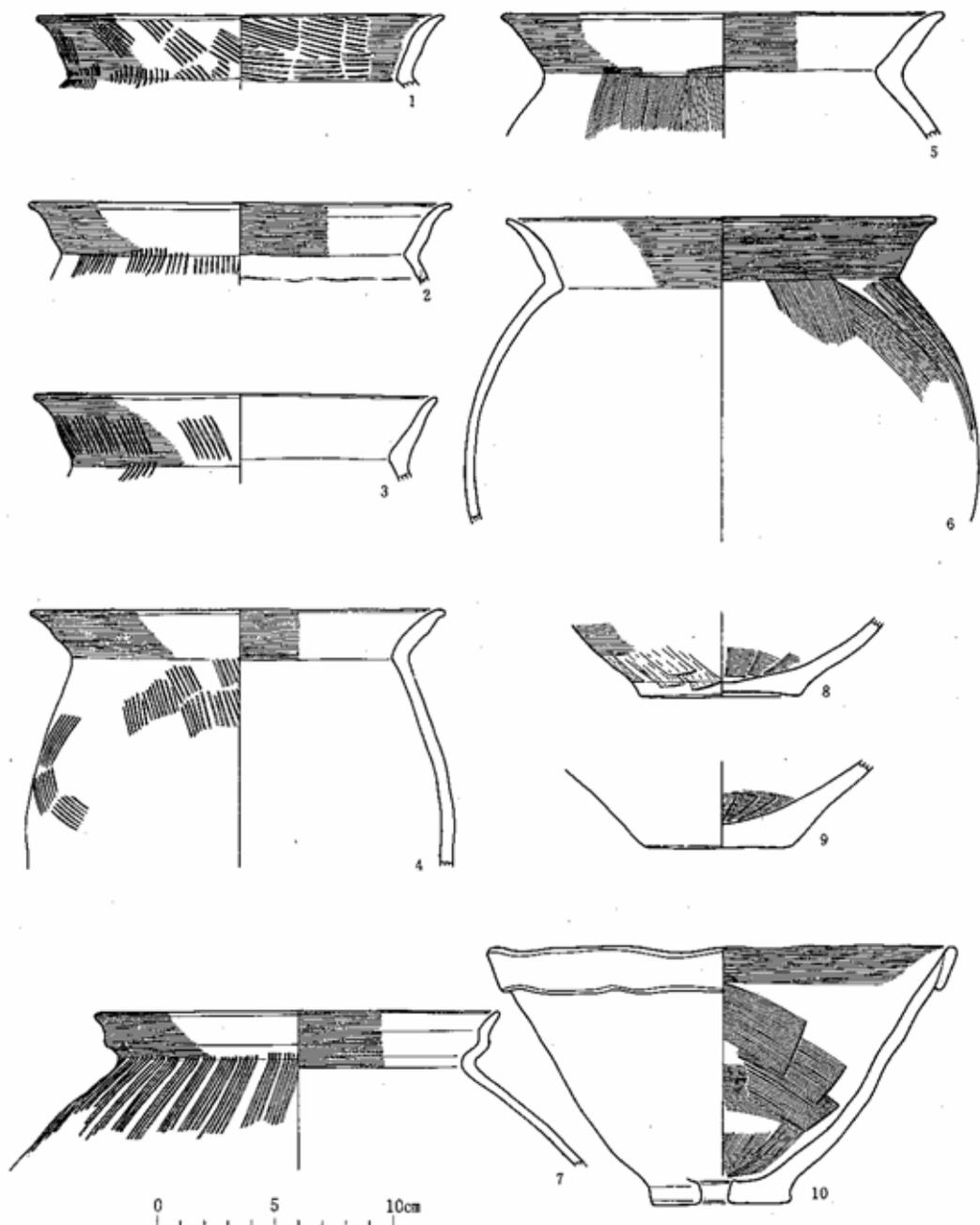
第5図 第1・2・3号住居跡断面図





番号	層位	器形	特徴	出所	登録	番号	層位	器形	特徴	出所	登録
1	床	高杯	外面：ミダキ 内面：刷毛		2住Pc.3	6	床	釜	外面：ミダキ 内面：ナダ・ヘラナダ		1住Pc.22
2	床	高杯	内・外面：ミダキ・丹塗・刷毛		2住Pc.4	7	第2層	釜	内外面：刷毛		2住Pc.7
3	1層	杯	外面：不明刷毛・クズリ 内面：ヨコナダ・ヘラナダ		2住Pc.5	8	床	釜	外面：ヨコナダ・ミダキ 内面：ヨコナダ・ヘラナダ		2住Pc.1
4	P ₁₀	鉢?	土製成器品 外面：ヨコナダ・刷毛目 内面：刷毛目・ナナアケ		2住Pc.8	9	床	釜	外面：ヨコナダ・ヘラナダ・刷毛目 内面：ヨコナダ・ヘラナダ		2住Pc.2
5	3層上面	変	外面：刷毛目 内面：刷毛目・ナダ		2住Pc.6						

第6図 第2号住居跡出土土器(1)

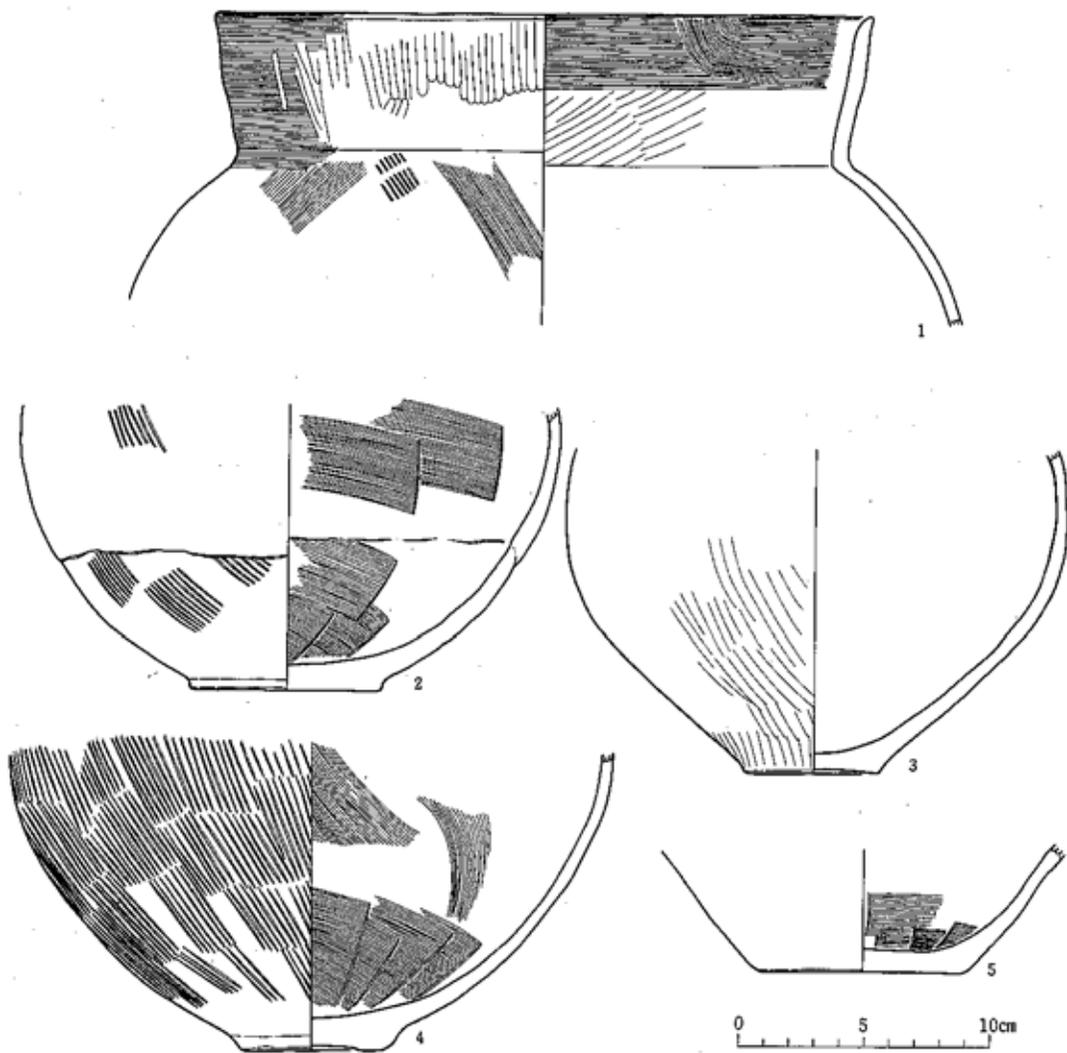


番号	部位	形状	特徴	登録	番号	部位	形状	特徴	登録
1	住居内	甕	外面:ヨコナデ・刷毛目 内面:刷毛目	2住Po.14	6	床	甕	外面:ヨコナデ・ヘラナデ 内面:ヨコナデ・不明調	2住Po.9
2	住居内	甕	外面:ヨコナデ・刷毛目 内面:ヨコナデ	2住Po.17	7	床	甕	「S」字刷毛目, 外面:ヨコナデ・刷毛目 内面:ヨコナデ・ヒキエ	2住Po.11
3	床	甕	外面:ヨコナデ・刷毛目 内面:ヨコナデ	2住Po.13	8	床	甕	外面:ナデ・ナズリ 内面:ヘラナデ	2住Po.20
4	周溝	甕	外面:ヨコナデ・刷毛目 内面:ヨコナデ・ナデ	2住Po.15	9	床	甕	外面:不明調 内面:ヘラナデ	2住Po.18
5	床	甕	外面:ヨコナデ・ヘラナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	2住Po.16	10	床	甕	外面:刷毛目 内面:ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	2住Po.23

第7図 第2号住居跡出土土器(2)

〔周溝〕 壁直下に断面「J」状の周溝がめぐっているが、カマドの部分では途切れている。周溝は幅30~40cm・深さ2~4cmである。

〔カマド〕 住居北辺中央部の壁から約30cm内側に位置している。底面は僅かながら凹んでおりそれを取り囲むように側壁（黄色粘土の積み上げによる）が「コ」字状にめぐっている。規模は主軸50cm・幅66cmである。焚き口部左手前には円形のピットがある。炉の底面・側壁内面は強く焼けて赤褐色をしている。また、カマドの周囲および焚き口手前のピットも焼けて淡い赤褐色をしている。カマドの内部・周囲には木炭・焼土ブロックを含む暗赤褐色土が堆積しており、



番号	層位	器形	特徴	登録	番号	層位	器形	特徴	登録
1	住居内	甕	外面：ミガキ・ヨコナデ・ナデ・刷毛目 内面：ミガキ・ヨコナデ	2住Po.11	4	住居内	甕	外面：刷毛目 内面：ヘラナデ・ナデ	2住Po.24
2	床	甕	外面：刷毛目 内面：ヘラナデ	2住Po.21	5	第2層	甕	外面：不明調整 内面：ヘラナデ	2住Po.19
3	床	甕	外面：ミガキ 内面：ミガキ	2住Po.10					

第8図 第2号住居跡出土土器 (3)

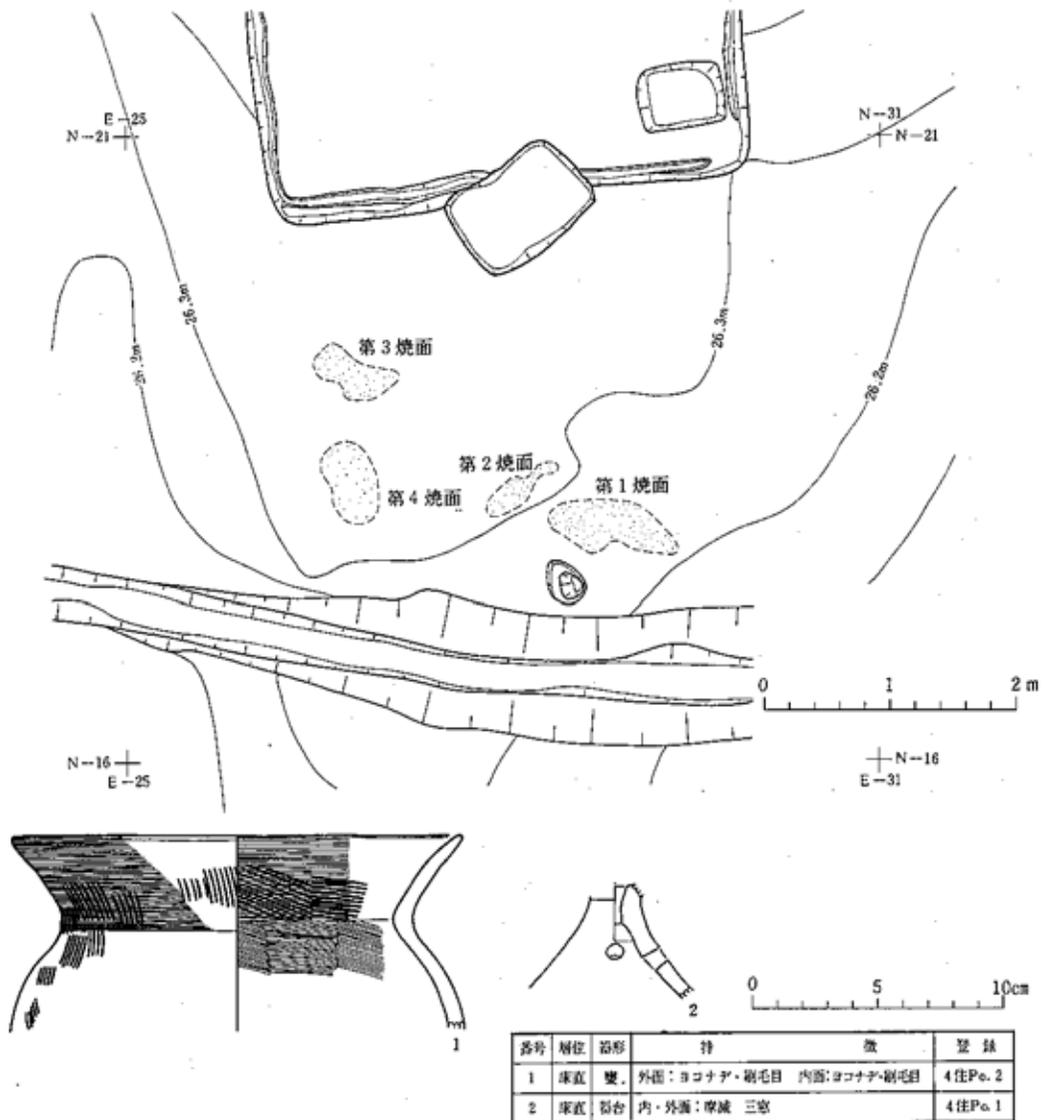
燃料残滓および側壁の崩壊したものと考えられる。

〔堆積土・遺物の出土状況〕 住居内堆積土は2層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色のシルトで、住居全体に分布しており2層に細別される。第2層は極暗褐色のシルトで、住居の壁付近に堆積している。

住居内からはほとんど遺物が出土していない。

第4号住居跡

〔概要〕 焼面が確認され、その周囲から土器は出土したが、住居の壁・周溝・柱穴等の施設は



第9図 第4号住居跡

検出できなかった。したがって、住居跡として扱ったが、疑問の余地を残している。

焼面は合計4ヶ所あり、いずれも楕円形ないしは不整楕円形をしている。それらの規模は次の通りである。第1焼面：45×100cm 第2焼面：20×70cm 第3焼面：30×60cm 第4焼面：40×70cm。
遺物としては、器台と甕が1点ずつ床面から出土している。

第5号住居跡

〔平面形・重複〕第5号住居跡は第38号住居跡と重複しているが、重複部分の堆積土が薄く、切り合い関係を確認することができなかった。また、住居南側は南北に走る沢（状の地形）によって削平されている。

住居平面形は隅丸方形で、規模は南北軸6.1m・東西軸5.65mである。

〔壁〕検出された壁はすべて地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。

〔柱穴〕柱穴は4個（ P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 ）検出され、 P_2 を除く3個のピットでは掘り方と柱痕跡の識別もできた。また、これらの柱穴は住居平面形の対角線上に位置しており、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。なお、柱間は住居南北軸が3～3.1m、住居東西軸が2.8～2.9mである。

〔周溝〕北壁とそれに接続する部分の東壁・西壁直下に周溝がめぐっている。周溝は断面「」状で、幅10～20cm・深さ4～7cmである。

〔炉〕住居中央から僅かに北西に偏った部分の床が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は不整長楕円形をしており、その範囲は35×85cmである。

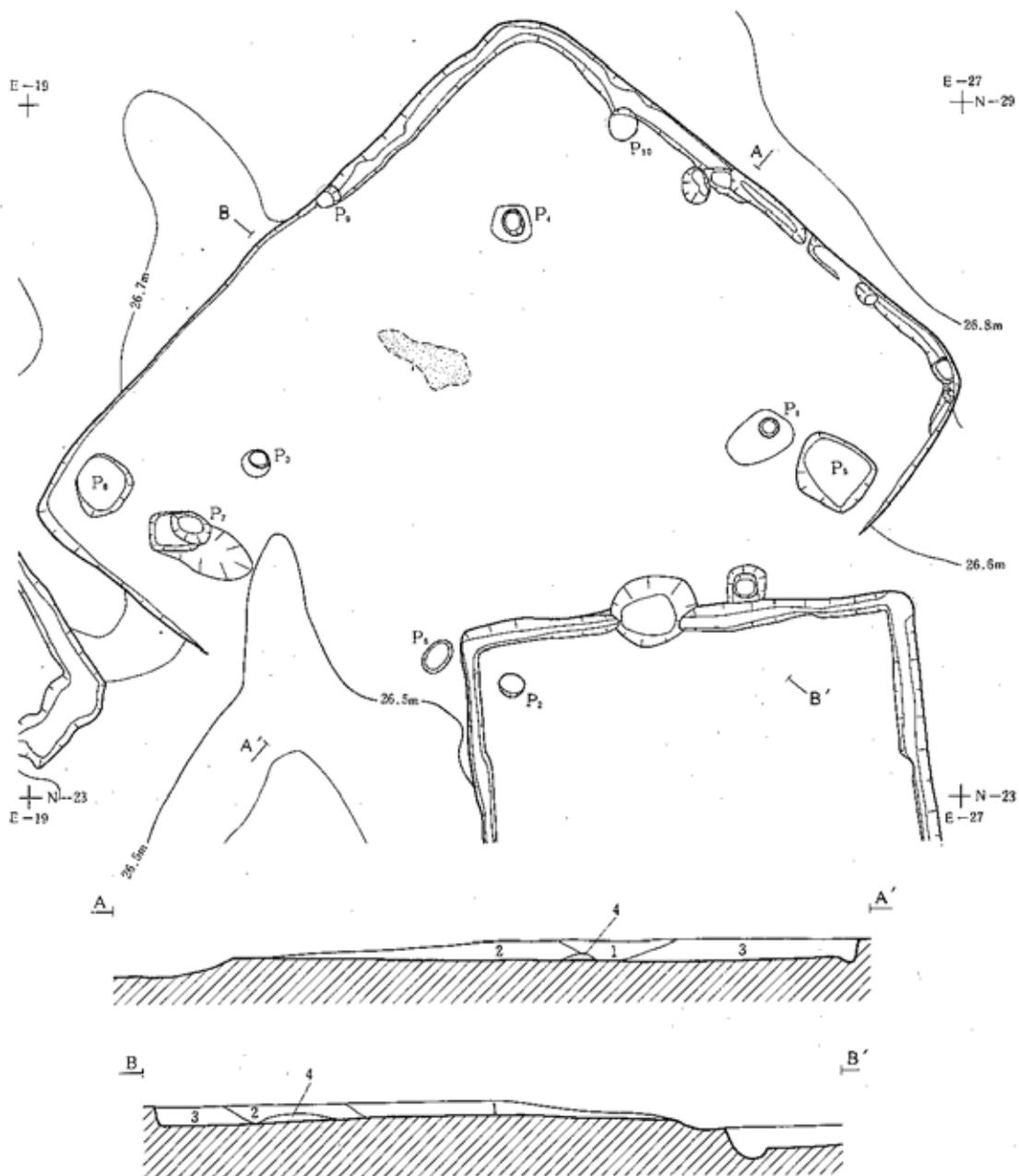
〔貯蔵穴状ピット〕住居東辺の北側で確認された（ P_5 ）。平面形は不整形で、底面は平坦である。壁の立ちあがりはやや緩やかであるが、その上方はほぼ垂直となる。規模は東西軸65cm・南北軸55cm・深さ35cmである。

〔堆積土〕住居内堆積土は、いずれも褐色のシルトないしは砂質シルトであるが、細かな色調・混入物などから3層に細別され、その堆積状況は将棋倒し状である。

〔遺物の出土状況〕遺物は第1・2層から出土しているが、出土状況に特にまとまりはみられない。各層における出土は次の通りである。第1層：器台1点・壺1点・甕3点・甕口縁部破片1点 第2層：甕1点 層不明：甕1点・甕口縁部破片1点

第6号住居跡

〔平面形・重複〕第6号住居跡は、第7号住居跡と南端部分で重複していたが、切り合い関係



貯蔵穴状ピット(P₉)堆積土

層位	順No	土色	土性	備考
第1層	1	褐色(10YR5/5)	砂質シルト	木炭片を少量含む
	2	褐色(10YR5/5)	砂質シルト	木炭片を少量含む
	3	にぶみ黄褐色(10YR5/5)	細砂質シルト	木炭若干含む
第2層	4	黄褐色(10YR5/5)	シルト質砂	
	5	明黄褐色(10YR5/5)	シルト質砂	

住居内堆積土

層位	順No	土色	土性	備考
第1層	1	褐色(7.5YR5/5)	シルト	木炭片を含む。非常に硬い。
	2	褐色(7.5YR5/5)	砂質シルト	地山ブロックを含む。
第2層	3	褐色(7.5YR5/5)	砂質シルト	木炭片を少量含む。
第3層	4	褐色(7.5YR5/5)	砂質シルト	木炭片を含む。

1 1 2 m

第10図 第5号住居跡

については確認することができなかった。また、住居東壁と北壁の大部分は、調査区外にのびているため、正確な平面形・規模は不明である。残存部分と柱穴配置から住居平面形を推定すると、隅丸正方形と考えられる。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面ないしは周溝から僅かに外傾しながら立ちあがる。

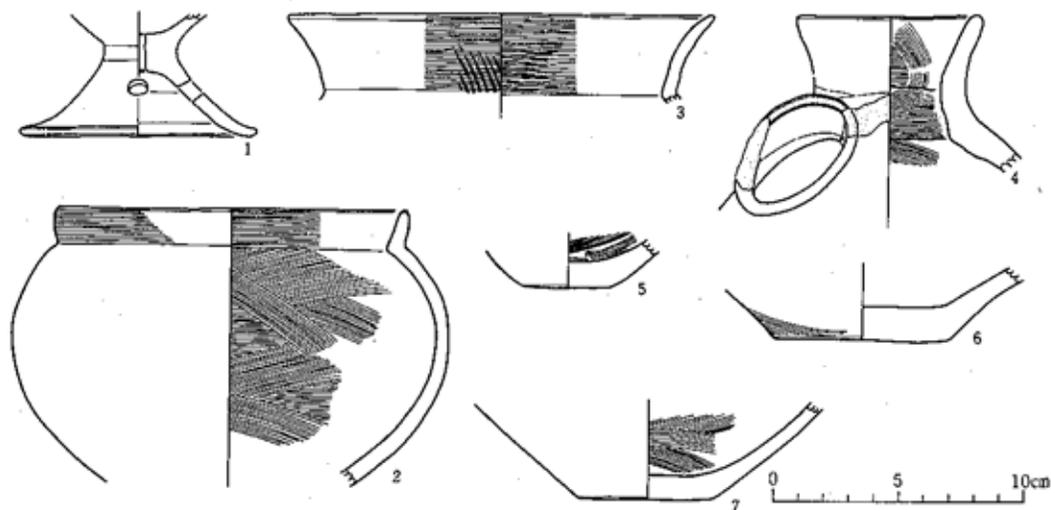
〔床面〕 住居床面はほぼ平坦であるが、南側床面には段状になっている部分がある。また、床面は住居掘り方底面（地山）とほぼ一致している。

〔柱穴〕 調査区内で柱穴は3個確認され（ $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ ）いずれも掘り方と柱痕跡の識別ができた。また、これらの柱穴を結んだ線は住居南辺・西辺と平行になる。これらと組みあうもう1個の柱穴は調査区外に存在するものと推定される。柱間は南北軸3.3m・東西軸3.5mである。

〔周溝〕 南壁および西壁中央部の直下で周溝が確認された。周溝は断面「J」状で、幅20～35cm・深さ3～9cmである。

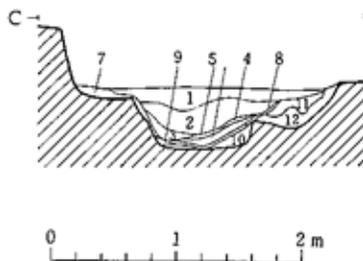
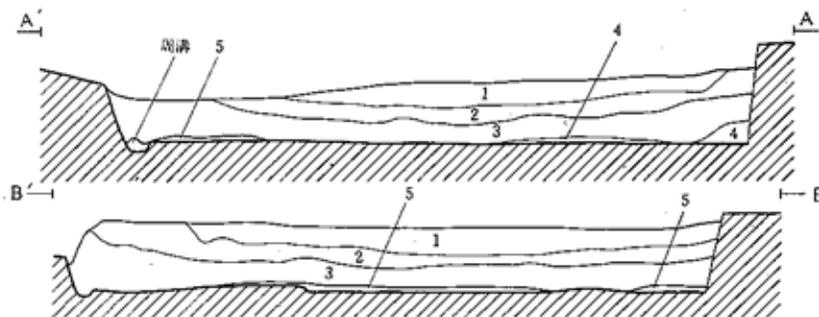
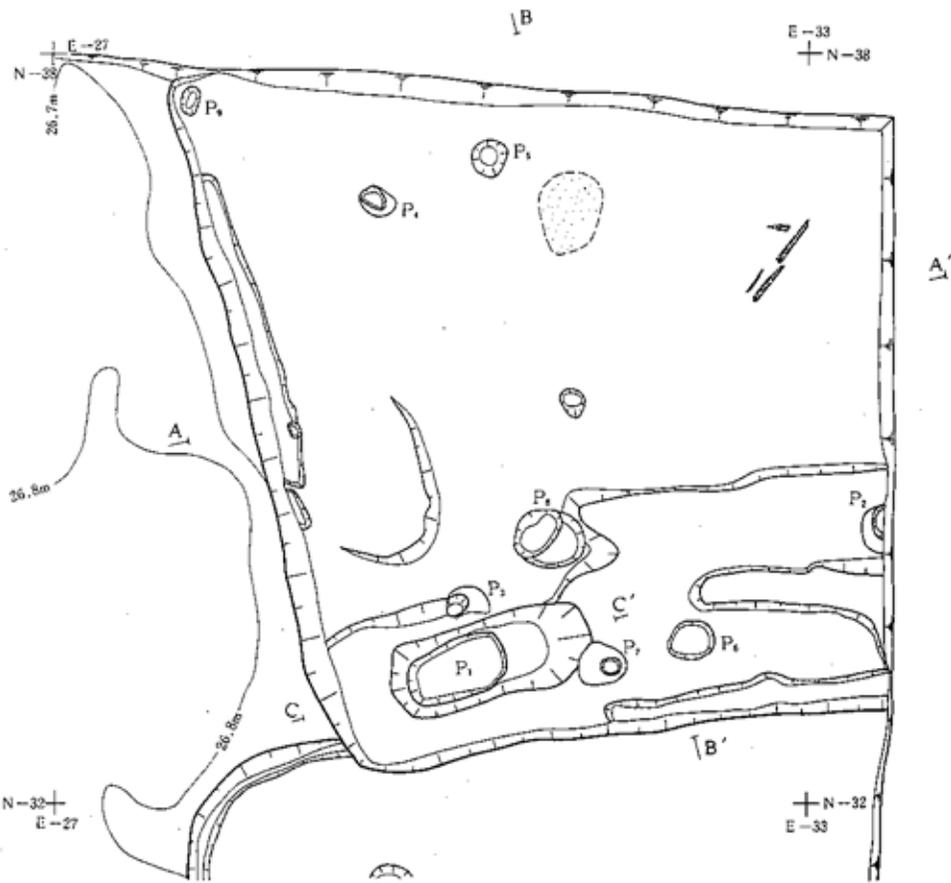
〔炉〕 住居中央から僅かに北に偏った部分の床面が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は楕円形で、その範囲は50×65cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居南西隅で確認された（ P_1 ）。 P_1 の平面形は隅丸長方形であるが、底面は、南側で一段深くなっている。この段は、ピットの形状そのままのものなのか、それとも二つのピットが重複しているためなのか、検討を加えたが明確にし得なかった。ピットの規模は上段が東西軸165cm・南北軸70cmで、下段が東西軸80cm・南北軸45cm、床面からの深さは上段が37cm・下段が50cmである。底面は、上・下段ともほぼ平坦である。



番号	層位	器形	特徴	登録番号	層位	器形	特徴	登録	
1	第1層	器台	三窓 内外面：摩滅	5住Po.1	5	第1層	壺	外面：摩滅 内面：ナデ	5住Po.6
2	第1層	壺	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	5住Po.2	6	第1層	壺	外面：ナデ・ケズリ 内面：ナデ	5住Po.4
3	第2層	壺	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ヨコナデ・刷毛目	5住Po.3	7	住居内	壺	外面：ミガキ？木炭痕 内面：ナデ	5住Po.5
4	第1層	有口壺	外面：ミガキ 内面：ナデ	5住Po.7					

第11図 第5号住居跡出土土器



住居内堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(10 Y R 3/5)	シルト	若干の炭化物含む
	2	暗褐色(10 Y R 3/5)	シルト	
第2層	3	褐色(7.5 Y R 5/5)	シルト	地山ブロック含む
第3層	4	褐色(7.5 Y R 5/5)	シルト	少量の炭化物混入
第3層	5	暗褐色(7.5 Y R 3/4)	シルト	炭化物と燧石を若干含む

土壌堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(7.5 Y R 3/4)	シルト	腐土・木炭含む、地山ブロック破砕に含む
	2	暗褐色(7.5 Y R 3/4)	シルト	
	3	暗褐色(7.5 Y R 3/4)	シルト	
第2層	4	暗褐色(10 Y R 3/5)	シルト	
	5	暗褐色(7.5 Y R 3/4)	シルト	
第3層	6	黄褐色(10 Y R 5/4)	砂質シルト	
第4層	7	暗褐色(10 Y R 3/5)	砂質シルト	灰黄色粘土質シルトブロック多く混入
	8	暗褐色(10 Y R 3/5)	砂質シルト	
第5層	9	黄褐色(10 Y R 5/4)	粘土質シルト	
第6層	10	黄褐色(10 Y R 5/4)	シルト質砂	
第7層	11	黄褐色(10 Y R 5/4)	シルト質砂	粘土層?
第8層	12	暗褐色(10 Y R 3/4)	砂質シルト	地山ブロック破砕に混入

第12図 第6号住居跡

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別され、第1・2層は将棋倒し状、第3層は床面を覆う堆積状況を示している。第1層は暗褐色ないしは黒褐色のシルト層、第2層は褐色のシルト層で、住居内全体に分布している。第3層は炭化材・炭化物・焼土を含む暗褐色土で、床面を直接覆っている。第3層に炭化材は少ないが、堆積状況などから、火災層の可能性もある。

〔遺物の出土状況〕遺物は各層から出土しており、出土状況に特にまとまりはみられない。遺物の出土は次の通りである。第1層：坏1点・甕1点・甕口縁部破片1点・甑2点・土製模造品（壺など）3点 第3層：坏2点 床面：器台1点・甕1点・土製模造品（壺など）2点 層不明：壺1点・甕口縁部破片1点

第7号住居跡

〔平面形・重複〕第7号住居跡は、第6号住居跡と北端部で重複しているが、切り合い関係については確認することができなかった。また、住居東側は、調査区外にのびているため、正確な規模・平面形は不明である。調査区内で検出された南・西・北壁から住居平面形を推定すると、隅丸方形と考えられる。

〔壁〕検出された壁は地山で、床面ないしは周溝から僅かに外傾しながら立ちあがる。

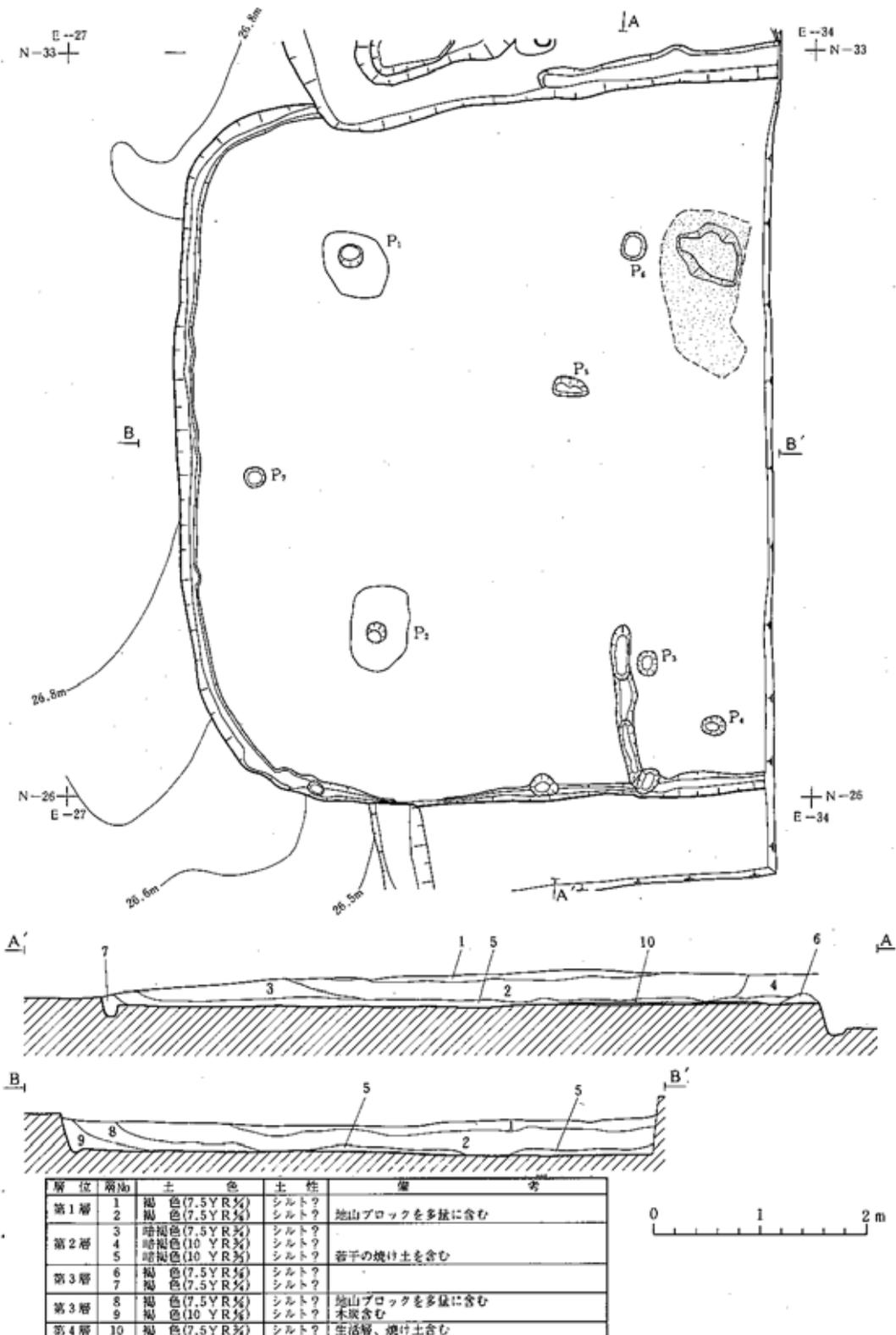
〔床面〕住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕床面から掘り方と柱痕跡の識別できる2個の柱穴（ P_1 ・ P_2 ）が検出された。二つのピットを結んだ線は西壁と平行である。これらと組み合うもう2個の柱穴は、調査区内では明確に検出することができなかった。 P_3 ・ P_6 は掘り方と柱痕跡の識別はできなかったが、 P_1 ・ P_2 と組みあわせると配置の上で一見規則性がみられる。すなわち、 P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 を結んだ線は南・西・北壁と平行な長方形となる。ただ、この柱穴配置が正しいとすると、住居平面形は南北に長い隅丸長方形となり、炉が東側柱穴と東壁の間に位置してしまうため、宮前遺跡における他の住居跡の諸例に較べ不自然である。 P_3 ・ P_6 が柱穴ではないとすると、正しい東側柱穴は調査外に存在するものと考えられる。柱間は南北軸3.6mであるが、東西軸は不明である。

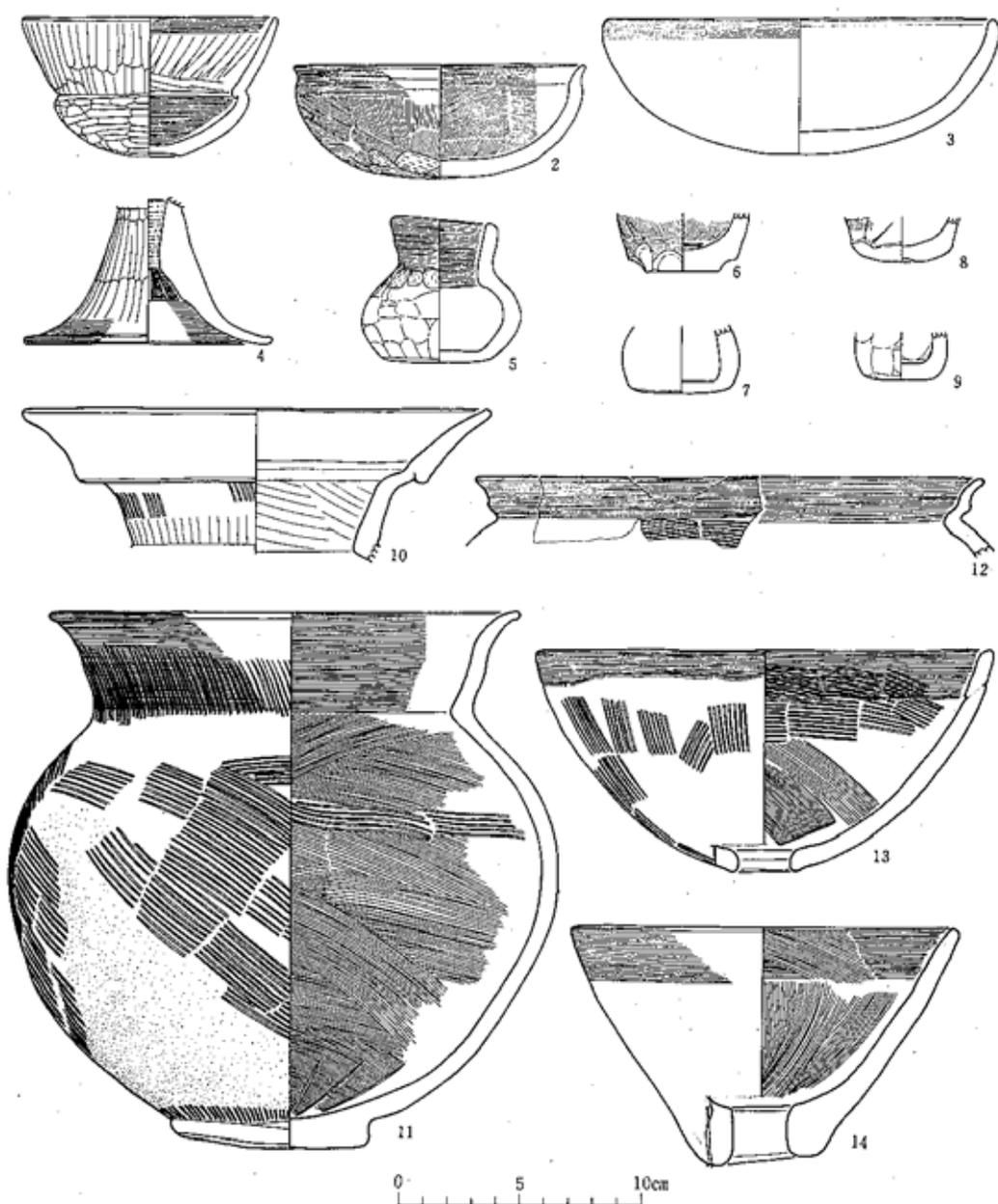
〔周溝〕南壁の一部で途切れている他、検出された壁直下の大部分に周溝がめぐっている。周溝の断面形は「┌」状で、幅5～20cm・深さ3～6cmである。また P_3 の西側約10cmの所に南北に走る溝があり、南壁直下の周溝と直交する形で接続している。この溝は長さ約1.5mで、断面形・幅・深さとも壁直下の周溝と共通している。

〔炉〕 P_6 の東側床面が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は不整形で、北側の部分が僅かに高い（約5cm）段状になっている。焼面の範囲は70×160cmである。

〔その他の施設〕調査区内では、貯蔵穴状ピットなどの施設は検出されなかった。



第13図 第7号住居跡

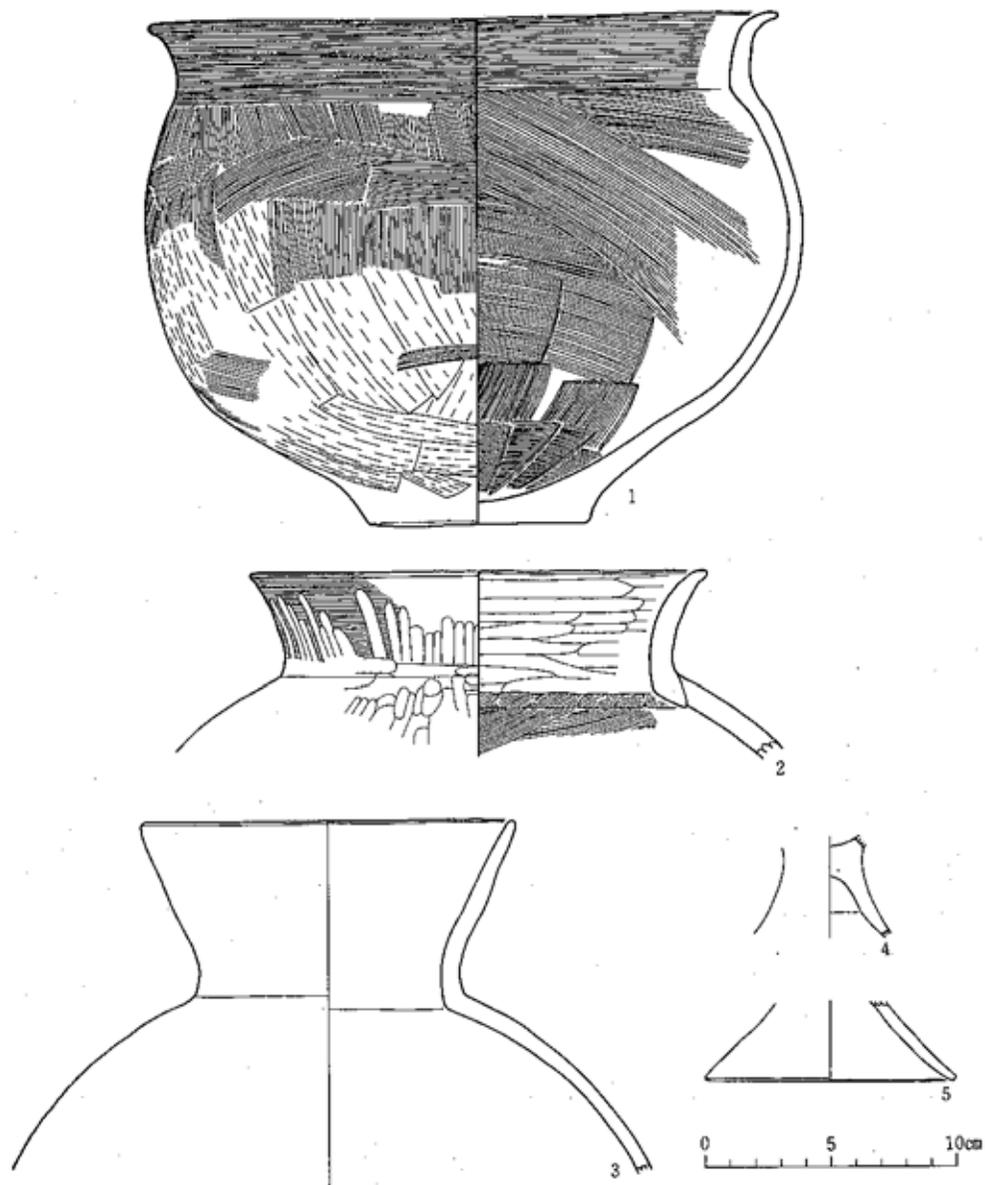


番号	層位	器形	特 徴	登録	番号	層位	器形	特 徴	登録
1	第3層	杯	外面：ミガキ 内面：ミガキ・ナデ	6住Pa.1	8	深 直	土製陶造品 外面：オサエ・ナデ・ケズリ 内面：不明模様	6住Pa.10	
2	第3層	杯	外面：ヨコナデ・ナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ	6住Pa.2	9	第1層	土製陶造品 内・外面：オサエ	6住Pa.12	
3	第1層	杯	外面：ヨコナデ・ミガキ・ケズリ 内面：ミガキ	6住Pa.14	10	住居内 壺	外面：ミガキ・刷毛目 内面：ミガキ	6住Pa.3	
4	深 直	器台	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ケズリ・ヘラナデ・ヨコナデ	6住Pa.7	11	床 壺	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ヨコナデ・刷毛目・ヘラナデ	6住Pa.4	
5	第1層	壺	土製陶造品 外面：ヨコナデ・オサエ 内面：ヨコナデ・不明模様	6住Pa.8	12	第1層	壺 外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ヨコナデ・オサエ	6住Pa.15	
6	第1層	土製陶造品	外面：ナデ・オサエ 内面：ナデ	6住Pa.9	13	第1層	瓶 外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：刷毛目・ヘラナデ	6住Pa.6	
7	深 直	土製陶造品	内・外面：厚底	6住Pa.11	14	第1層	瓶 外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	6住Pa.5	

第14図 第6号住居跡出土土器

〔堆積土〕 住居内堆積土は4層に大別され、第1～3層は将棋倒し状、第4層は床面に薄く張り付いた堆積状況を示している。第1層は褐色シルト層で住居中央部を中心として、第2層は暗褐色シルト層で壁に近い部分に、第3層は褐色シルト層で壁沿いに分布している。第4層は焼土を含む褐色シルト層で、床面に薄く張り付いていることから生活層と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 遺物は各層から出土しており、出土状況にまともはみられない。遺物の



番号	層位	部形	特 徴	登 録	番号	層位	部形	特 徴	登 録
1	第1層	鉢	外面：ヨコナデ・ナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ	6住Po.13	4	第3層	高 杯	内・外面：摩滅	7住Po.2
2	住居内	壺	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ミガキ・オサエ・ナデ	6住Po.2	5	住居内	高杯?	内・外面：ヨコナデ・摩滅	7住Po.1
3	住居内	壺	内・外面：摩滅	6住Po.1					

第15図 第6・7号住居跡出土土器

出土は次の通りである。第1層：甕口縁部破片2点・甕底部破片9点 第3層：高坏1点・甕口縁部破片2点 第4層：甕底部破片1点 床面：甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 層不明：高坏？1点

第8号住居跡

〔平面形〕 住居平面形は四隅の角張る正方形で、規模は南北軸3.64m・東西軸3.4mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴は2個（P₂・P₅）検出され、両者とも掘り方と柱痕跡が識別できた。また、P₂・P₅は住居南北軸線上のほぼ対称な位置にある。柱間は1.8mである。

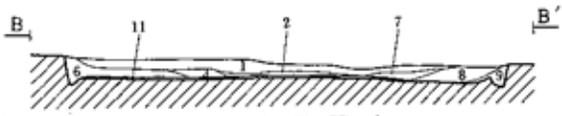
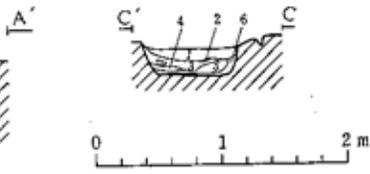
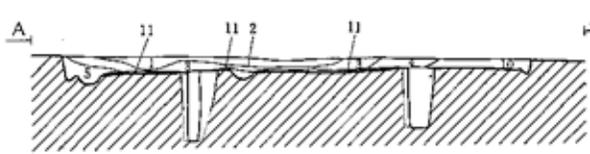
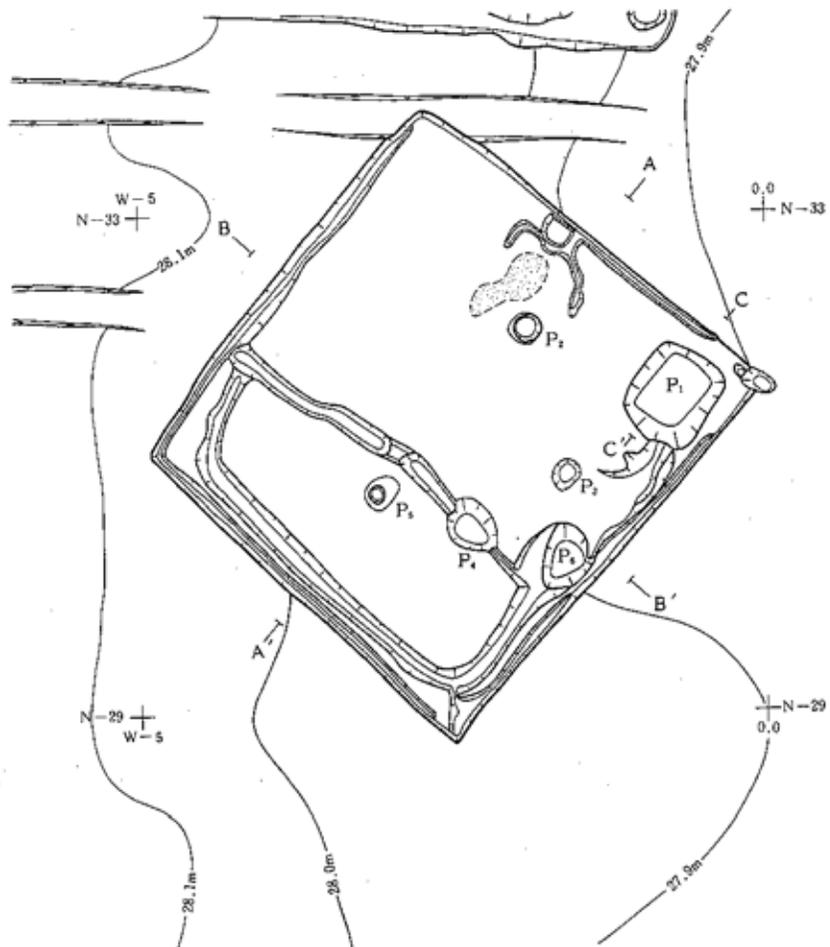
〔周溝〕 周溝は北辺西側と東隅を除いて、壁直下の大部分にめぐっている。周溝の断面は「┌」状で、幅5～15cm・深さ1～3cmである。この他、南壁から内側1.4mの所に南壁と平行な溝があり、東・西壁直下の周溝と直交する形で接続する。この東西溝の南側には、東・南・西壁の内側約20cmの所に各壁と平行に走る周溝がある。東西溝および内側周溝は断面「┐」状で、幅10～20cm・深さ5～10cmで、壁直下の周溝と断面の形状が異なる。

〔カマド〕 住居北辺中央部の壁から約20cm内側に位置している。不整楕円形をした焼面をとり囲むように「□」状の溝がめぐっている。焼面・「□」状溝とその周囲には黄褐色シルトブロック・焼土ブロック・焼土・木炭が多量にみられ、小規模ながら上部構造（黄褐色シルトを積みあげたもの）が存在したものと推定される。このカマドの規模は主軸90cm・幅80cmで、焼面を囲む溝は断面「┐」状・幅5～8cm・深さ4～5cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居東隅の部分にP₁がある。P₁は平面形が隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。壁は内湾気味に僅かに外傾しながら立ちあがる。規模は南北軸80cm・東西軸65cm・深さ28cmである。ピット内の堆積土は2層に大別される。第1層は暗褐色シルト、第2層は黄褐色を中心としたシルト・粘土・粘土質砂・砂質粘土で、下層程砂質や粘土質が強くなる。第2層中の細分された層の層理面（No.4層）上に完形の土師器・坏が1点のっていた。（第17図1）

この他、やや形は整っていないが東辺中央部にP₆がある。平面形は楕円形で、丸底状をしている。規模は南北軸55cm・東西軸35cm・深さ30cmである。ピットの壁に接しながら正位の状態で、土師器甕1個体が発見された（第17図4）。

〔堆積土〕 住居内堆積土は4層に大別され、第1～3層は将棋倒し状、第4層は床面に薄く張り付いた堆積状況を示している。第1層は褐色の砂質シルト層で住居中央部に、第2層は褐色ないし暗褐色のシルト層で、壁沿いと第4層上に分布している。第3層はカマドとその周辺に分布する堆積土で、その特徴は既に記した。第4層は木炭を含み粘性のある極暗褐色粘土質シ



住居内堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
埋藏層	1			
第1層	2	褐色色00 YR5/2	砂質シルト	
	3	暗褐色色00 YR5/2	砂質シルト	
	4	暗褐色色00 YR5/2	シルト	黄褐色(00YR5/2)シルトブロックを塊状に含む。
	5	暗褐色色00 YR5/2	シルト	黄褐色(00YR5/2)シルトブロックを塊状に含む。
	6	暗褐色色00 YR5/2	シルト	黄褐色(00YR5/2)シルトブロックを塊状に含む。
第2層	7	褐色色00 YR5/2	粘土質シルト	
	8	暗褐色色00 YR5/2	シルト	木炭屑が混入している。
	9	暗褐色色00 YR5/2	シルト	
第3層	10	暗褐色色00 YR5/2	シルト	黄褐色(00YR5/2)シルトブロック、赤褐色土層に混入。
第4層	11	黄褐色色0.5 YR5/2	粘土質シルト	粘性あり。木炭含む。

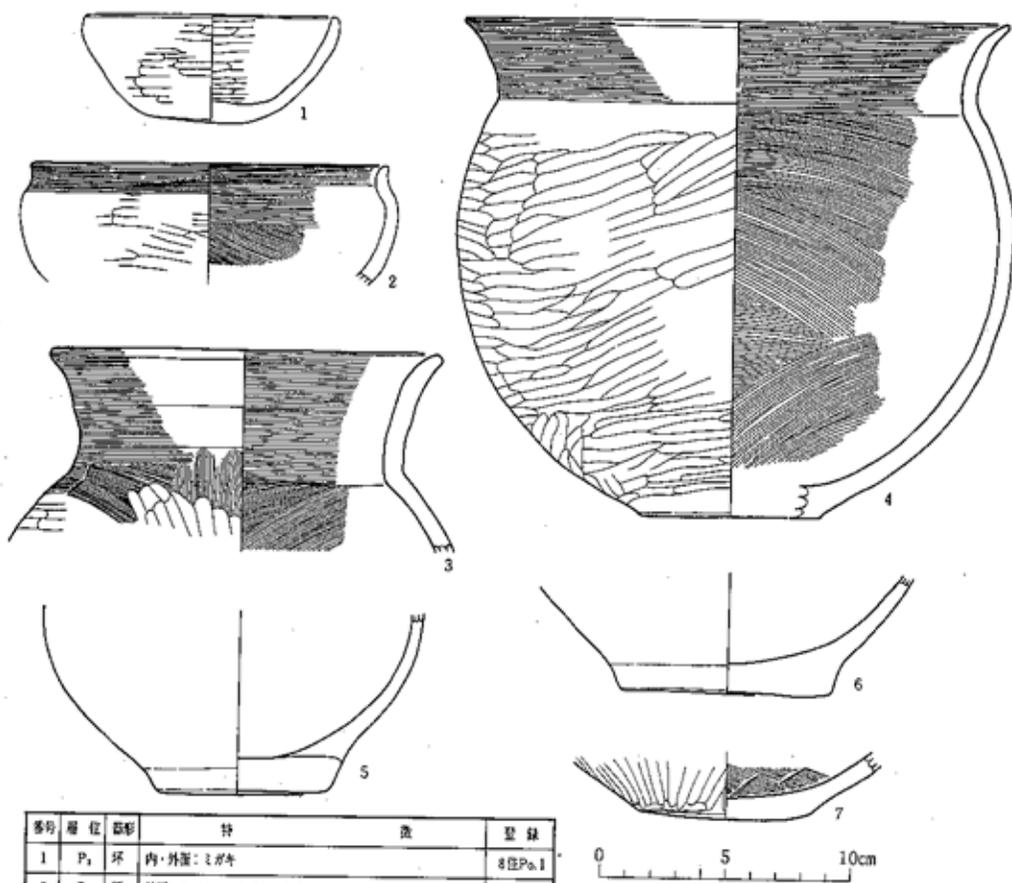
貯蔵穴状ピット(P₁)堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色色00 YR5/2	シルト	
	2	褐色色00 YR5/2	粘土質シルト	ブロック状の塊
	3	1.2m-黄褐色(00YR5/2)	シルト	塊中に細砂・中砂含む
第2層	4	淡黄色00 YR5/2	粘土	
	5	黄褐色色00 YR5/2	粘土質シルト	おぼろげなインゲラしている
	6	黄褐色色00 YR5/2	砂質粘土	中砂を含む

第16図 第8号住居跡

ルトで、床面に薄く張り付いていることから生活層と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 遺物はP₁を中心としてP₂やP₆・カマドなどからまとまって出土している。すなわち、P₁からは坏1点・壺? 2点・甕1点、P₂からは坏1点、P₆からは甕1点、カマドからは壺口縁部破片1点・甕口縁部破片2点が出土している。この他、第1層から甕底部破片1点、層は不明であるが甕1点が出土している。



番号	層位	器形	特徴	登録
1	P ₁	坏	内・外面：ミガキ	8住Po.1
2	P ₁	坏	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	8住Po.2
3	P ₁	壺?	外面：ヨコナデ・ヘラナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	8住Po.3
4	P ₆	甕	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	8住Po.4
5	P ₁	壺?	内・外面：割罫	8住Po.5
6	住居内	壺	外面：本腰割 内・外面 厚威	8住Po.6
7	P ₁	甕	外面：ミガキ・ケズリ 内面：ヘラナデ	8住Po.7

第17図 第8号住居跡出土土器

第10号住居跡

〔平面形〕 住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸5.5m・長軸5.67mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

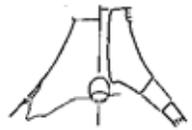
〔柱穴〕 柱穴は4個（P2・P3・P4・P5）検出され、P2・P5では掘り方と柱痕跡を識別することができた。また、4個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置し、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。柱間は南北軸3.1～3.3m・東西軸3.1～3.2mである。

〔周溝〕 周溝は壁直下にめぐっている。この周溝は壁の外側に幾分喰い込んだ状態をしておりその断面は「」状で、幅15～30cm・深さ3～10cmである。また、住居東側中央部には東壁直下の周溝と直交する溝が走っている。この溝は断面「」状で幅20cm・深さ10cm・長さは135cm程である。

〔炉〕 住居中央から僅か西に偏った部分の床が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は楕円形をしており、その範囲は35×30cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居東南隅の部分にP₁がある。P₁は上部が崩れているが、平面形は長方形で、底面は平坦である。規模は南北軸50cm・東西軸40cm・深さ43cmである。壁は外傾しているが、垂直に近い角度で立ちあがる。ピット内の堆積土は3層に大別され将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色粘土質シルト、第2層は黄褐色粘土質シルト、第3層は黒褐色シルト質粘土で、第3層を除き全体に地山土を含んでいる。

〔堆積土〕 住居内堆積土は削平を受け、壁周辺を除いて保存はあまり良くない。住居内の壁に近い部分には暗褐色粘土質シルト（第2層）、壁沿いには褐色粘土質シルト（第2層）が将棋倒し状の堆積をしている。



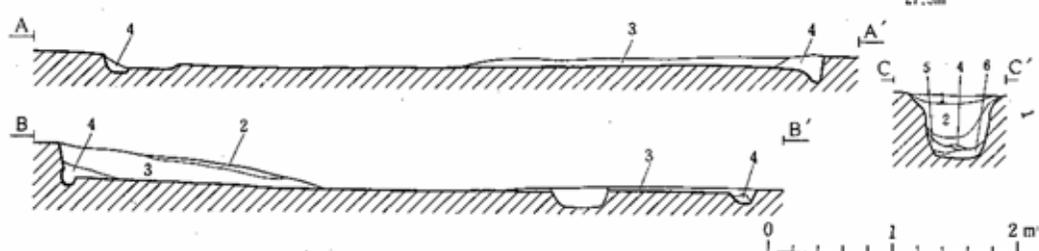
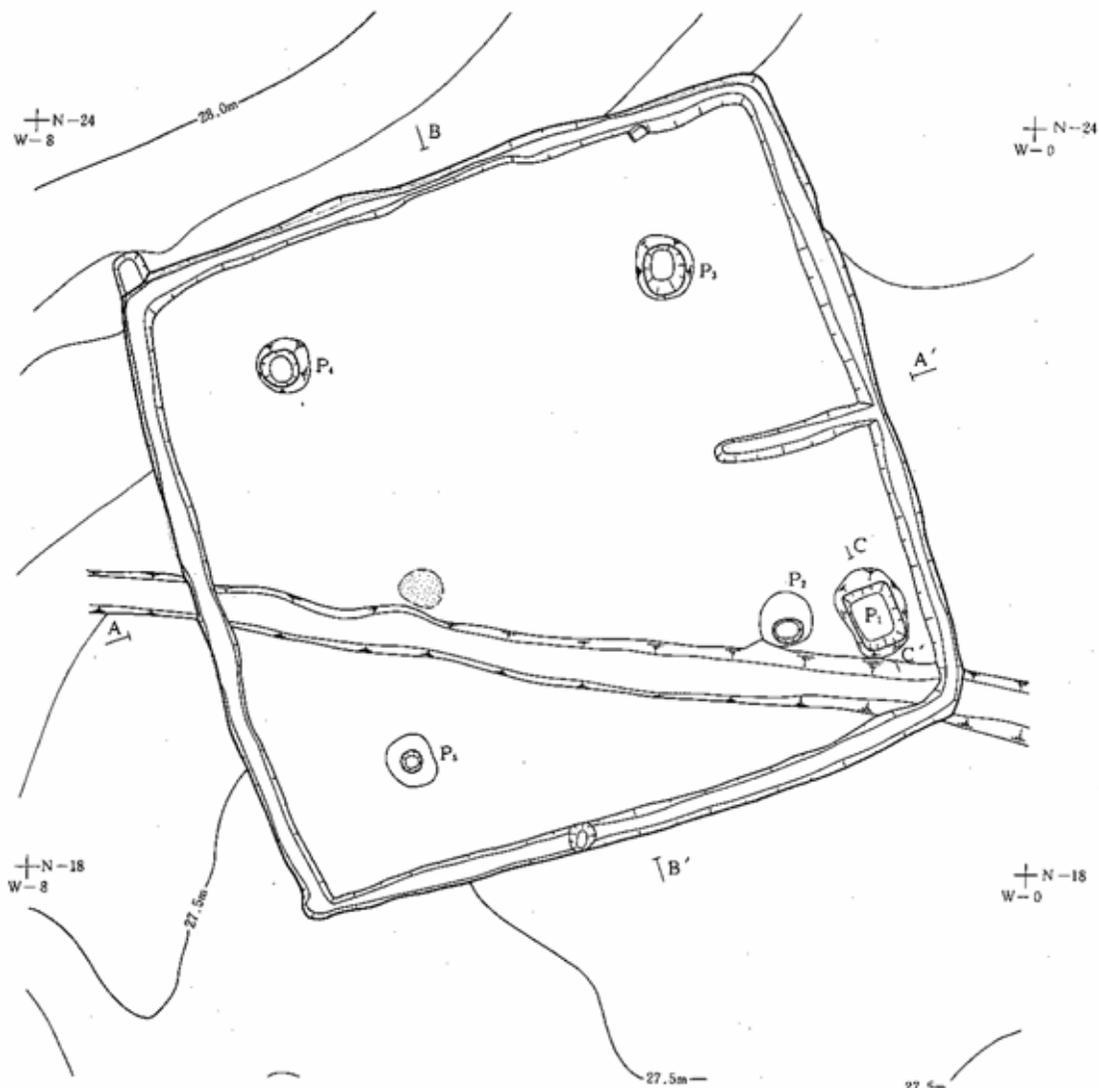
第18図 第10号住居跡出土土器

〔遺物の出土状況〕 遺物の出土は少なく、その出土状況にまとまりもみられない。第1層：器台1点 周溝：甕口縁部破片1点 層不明：甕口縁部破片1点

番号	層位	器形	特 徴	登 録
1	第1層	器台	内・外面：厚城	10住Po.1

第11号住居跡

〔概要〕 第11号住居跡は北西隅から中央部付近にかけて残存しているが、それ以外の部分は削平を受け失われている。残存部分から住居平面形は隅丸方形と推定されるが、規模等は不明である。壁は地山で大部分削平されているが、保存の良い所では床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。壁直下には周溝がある。周溝は壁の外に幾分喰い込み、断面「」状をしている。幅10～25cm・深さ2～9cmである。住居残存部分東端の床面が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は楕円形状をしているが南側が新しいピットによって壊されている。残存焼



堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
第10柱を切る溝	1	黒褐色 (10Y R 5/2)	粘土質シルト	
第1層	2	暗褐色 (10Y R 3/2)	粘土質シルト	地山の土を混入している。
	3	暗褐色 (10Y R 3/2)	粘土質シルト	
第2層	4	褐色 (10Y R 5/2)	粘土質シルト	

貯蔵穴状ビット堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	褐色 (10Y R 5/2)	粘土質シルト	地山の土を砲状に含む。炭化物を微量含む。
	2	褐色 (10Y R 5/2)	粘土質シルト	
	3	褐色 (10Y R 5/2)	粘土質シルト	
第2層	4	黄褐色 (10Y R 7/2)	粘土質シルト	地山の土を含む。
	5	灰黄褐色 (10Y R 7/2)	シルト質粘土	
第3層	6	暗褐色 (10Y R 3/2)	シルト質粘土	

第19図 第10号住居跡

面の範囲は30×25cmである。
 この他、柱穴・貯蔵穴状ピットなどの施設は検出されなかった。

〔堆積土・遺物の出土状況〕
 住居内堆積土は2層に細分されるが、両者とも褐色のシルトである。第1層が木炭等を含むのに対し、下層は地山土粒子を含むなど若干の相違がみられ、両者は将棋倒し状の堆積状況を示している。遺物としては第1層から甕底部が1点出土しているだけである。

第13号住居跡

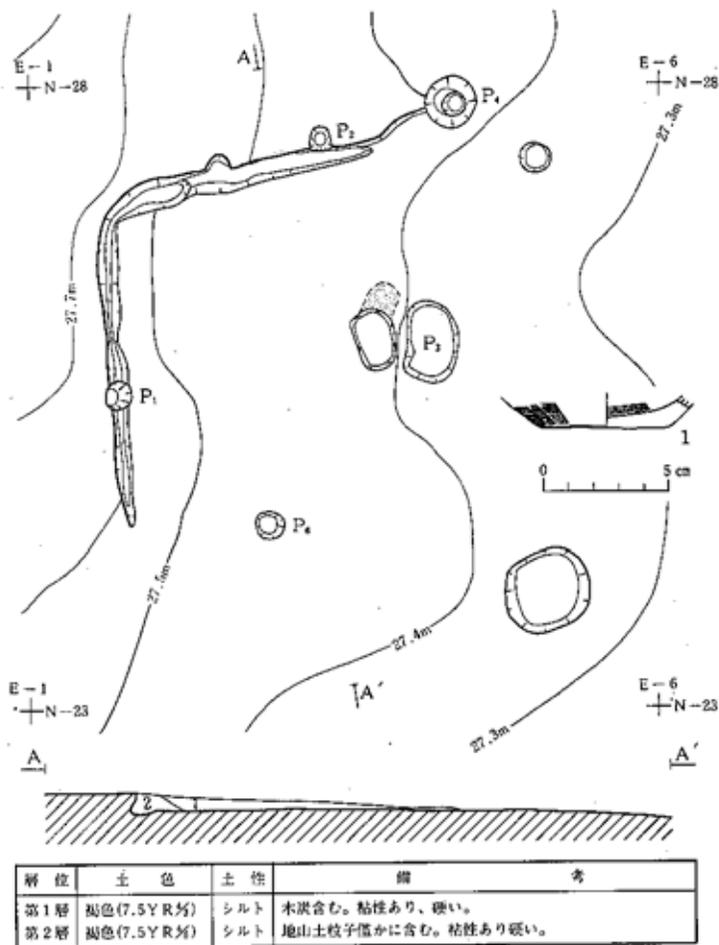
〔平面形・重複〕第13号住居跡はP₆～P₁₅からなる掘立柱建物跡と重複し、切られている。また、住居南西部分は削平によって失われている。住居平面形は正方形で、規模は南北軸6.2m・東西軸5.9mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で床面から僅かに外傾しながら立ちあがる。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P₁～P₄）検出され、P₂を除き掘り方と柱痕跡の識別ができた。これらの柱穴は住居平面形のほぼ対角線上に位置し、それぞれを結んだ線は住居平面形とほぼ相似形となる。柱間は南北軸3.8m・東西軸3.4mである。

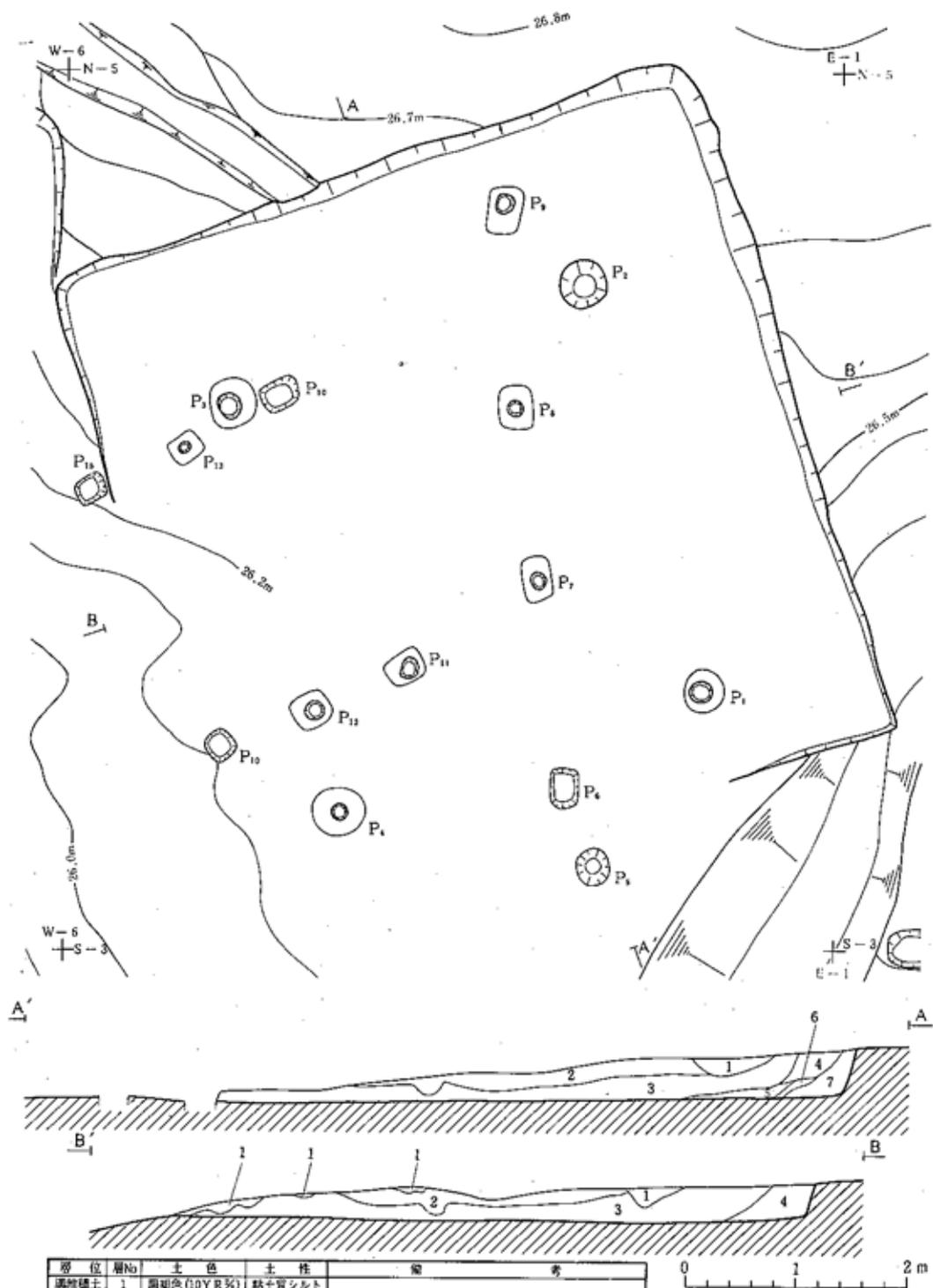
〔その他の施設〕 周溝・炉・貯蔵穴状ピットなどの施設は検出されなかった。

〔堆積土・遺物の出土状況〕 住居内堆積土は3層に大別され、一見将棋倒し状の堆積状況に似るが、混入物や第2・3層のあり方に検討の余地を残している。第1層は暗褐色粘土質シルトで最上部に、第2層は地山土を多量に含む黄褐色粘土質シルトで、住居内全体に厚く堆積している。第3層は褐色の粘土質シルトで数層に細分されつつ、壁際にだけ堆積している。第2



第20図 第11号住居跡 0 1 2 m

番号	層位	形状	特徴	登録
1	第1層	甕	外面：ヘラナダ・ケズリ 内面：ナダ	11住Po.1



層位	層No	土色	土性	備考
原始積土	1	黒褐色(10Y R 5)	粘土質シルト	
第1層	2	暗褐色(10Y R 4)	粘土質シルト	
第2層	3	黄褐色(10Y R 6)	粘土質シルト	地山の土が少量に混入。
第3層	4	褐色(10Y R 5)	粘土質シルト	
	5	褐色(10Y R 5)	粘土質シルト	
	6	褐色(10Y R 5)	粘土質シルト	
	7	褐色(10Y R 5)	粘土質シルト	黄土層かを含み、壁付近で地山の土がブロック状混入。

第21図 第13号住居跡

・3層の層相からみると、これらの層は短期間に地山の土が崩れて埋ったのか、それとも人為的に埋められた可能性がある。遺物は量も少なく、出土状況にまとまりがみられない。第1層：壺1点・甕口縁部破片1点 第2層：高坏脚部破片1点・甕1点・甕口縁部破片1点・甌1点 層不明：甕底部破片2点



第22図 第13号住居跡出土土器

第14号住居跡

〔平面形・重複〕第14号住居跡はカマドの煙道部が3列、壁直下と床面下から合計3列の周溝が検出された。これら複数のカマド煙道部・周溝は、相互の関係を復元できる程適切な調査を実施し得なかったが、少なくとも二度住居の改築が行なわれ、拡張とカマドのつくりかえがなされたことは明らかにし得た。そのため、ここでは最終段階の住居跡の特徴を述べ、それに補足する形で改築前の状況を説明することにする。なお、第14号住居跡は東壁が削平されている。

住居平面形は正方形で、規模は南北軸・東西軸とも5.2mである。改築前の住居平面形も、周溝から方形を基調とするものと推定される。

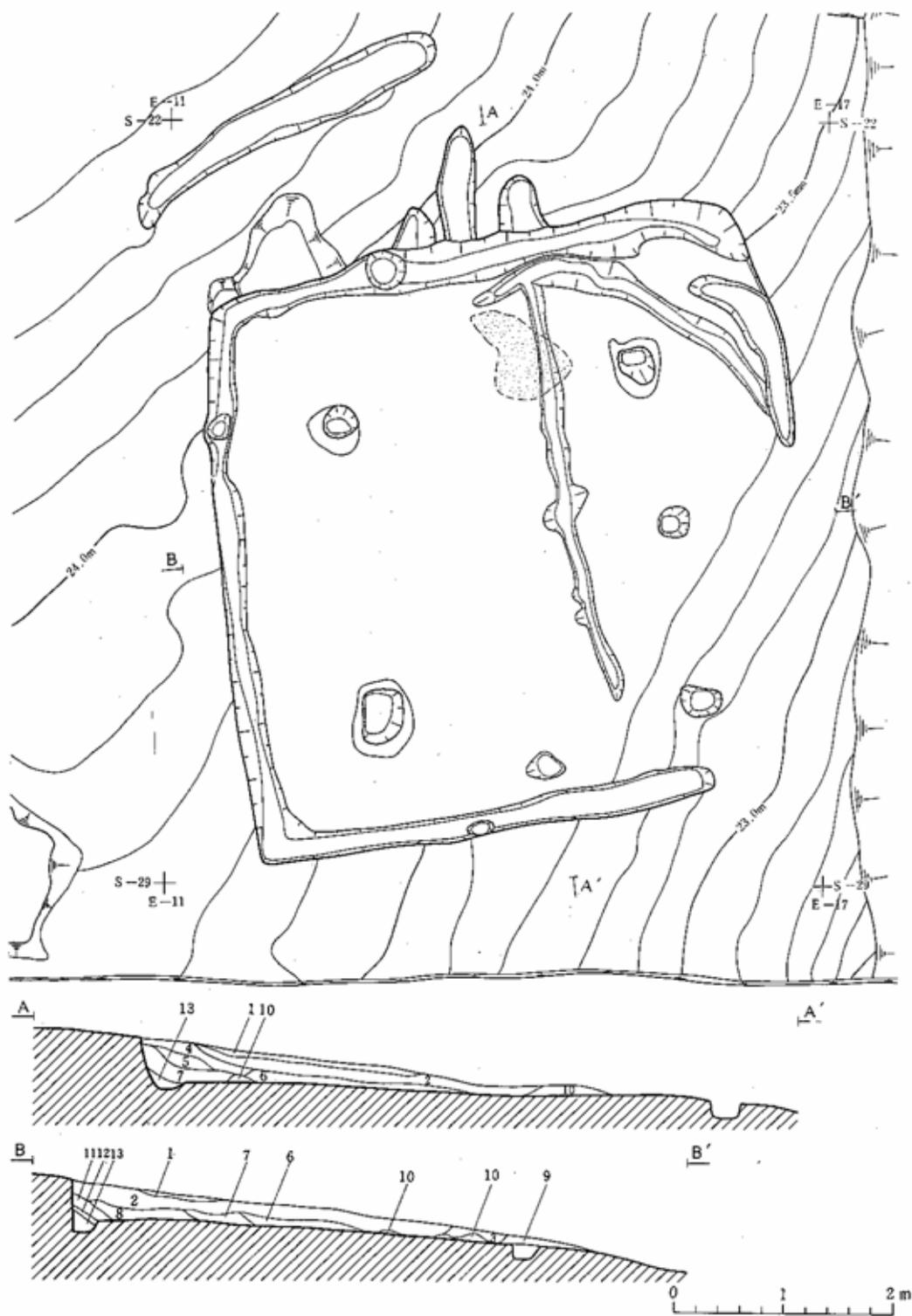
〔壁〕住居壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕住居床面は平坦である。最終床面下から改築前の周溝・ピット・住居掘り方などが検出された。しかし、改築前の床面は明確にし得なかった。

〔周溝〕住居壁直下に周溝がめぐっている。断面「J」状で、幅20～30cm・深さ5～10cmである。床面下の周溝は2列あり、断面の形状は共通している。幅は約20cmで、最終段階のものよりせまい。深さは5～10cmである。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₁～P₄）検出された。これらの柱穴は住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形である。床面下からもピットは検出されたが、改築前の柱穴配置を知るには至らなかった。

〔カマド〕カマドは住居壁の外側に掘り込まれた煙道が3列検出されたが、燃烧部はすべて崩壊して残っていなかった。中央と東側の煙道部手前の床面が焼けており、これが燃烧部底面ではないかと推定される。残存煙道部の規模は東側が幅40cm・長さ50cm、中央が幅30cm・長さ110cm、西側が幅35cm・長さ40cmである。



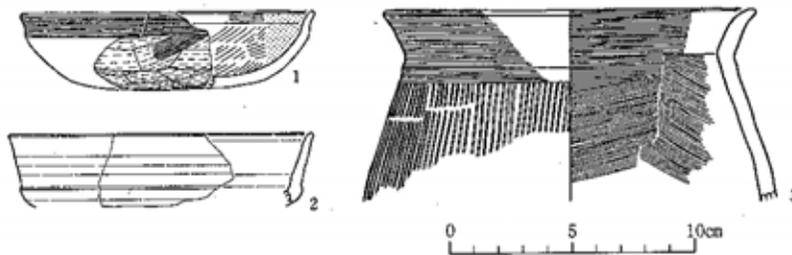
第23图 第14号住居跡

この他、貯蔵穴状ピットなどの施設は検出されなかった。

〔堆積土〕 住居内堆積土は5層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1～5層とも暗褐色ないしは褐色の砂質シルトであるが、第1～3層は上層にあつて住居中央部からその周囲のさらに広い範囲に分布している。第4層は床面、第5層は壁際を中心に分布している。

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層 (第1層)	1	暗褐色 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	シルト	微粒状の炭・焼土の混入。
第2層 (第2層)	2	褐色 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	微粒状の炭・焼土の混入。
(第2層)	3	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	粒状焼土・炭・黄褐色土の混入。
第3層 (第4層)	4	暗褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	微粒状の焼土・炭の混入。
	5	褐色 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	微粒状の焼土・炭の混入。
第4層	6	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	粘土質シルト	粒状の焼土・炭の混入。
	7	にぶい黄褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	粘土質シルト	粒状の焼土・炭・黄褐色土の混入。
第5層 (第3層)	8	褐色 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	微粒状の炭・焼土・黄褐色土の混入。
(第4層)	9	暗褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	微粒状の炭・焼土・黄褐色土の混入。
	10	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	粘土質シルト	粒状の焼土・炭・黄褐色土の混入。
	11	褐色 (7.5Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	微粒状の炭・焼土の混入。
	12	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	微粒状の焼土・炭の混入。
	13	褐色 (10Y R $\frac{3}{4}$)	砂質シルト	

〔遺物の出土状況〕 遺物の出土状況は次の通りで、特にまとまりはみられない。第1層：土師器坏口縁部破片3点・須恵器坏底部破片(回転ヘラ削り)1点 第2層：土師器坏口縁部破片2点 第3層：土師器坏1点 第4層：須恵器坏1点 第5層：土師器甕1点 P₉：土師器甕底部破片1点 周溝：土師器坏・甕底部破片各1点 層不明：土師器坏口縁部破片1点



番号	層位	器形	特徴	登録番号	層位	器形	特徴	登録番号
1	第3層	坏	外面：ナゲ・ケズリ 内面：ミガキ・凧	14住-Pa. 2	3	第5層	甕	外面：ヨコナゲ・刷毛目 内面：ヨコナゲ・ナゲ
2	第4層	坏	内外面：ロクロナゲ	14住-Pa. 1				※ 1・3：土師器 2：須恵器

第24図 第14号住居跡出土土器

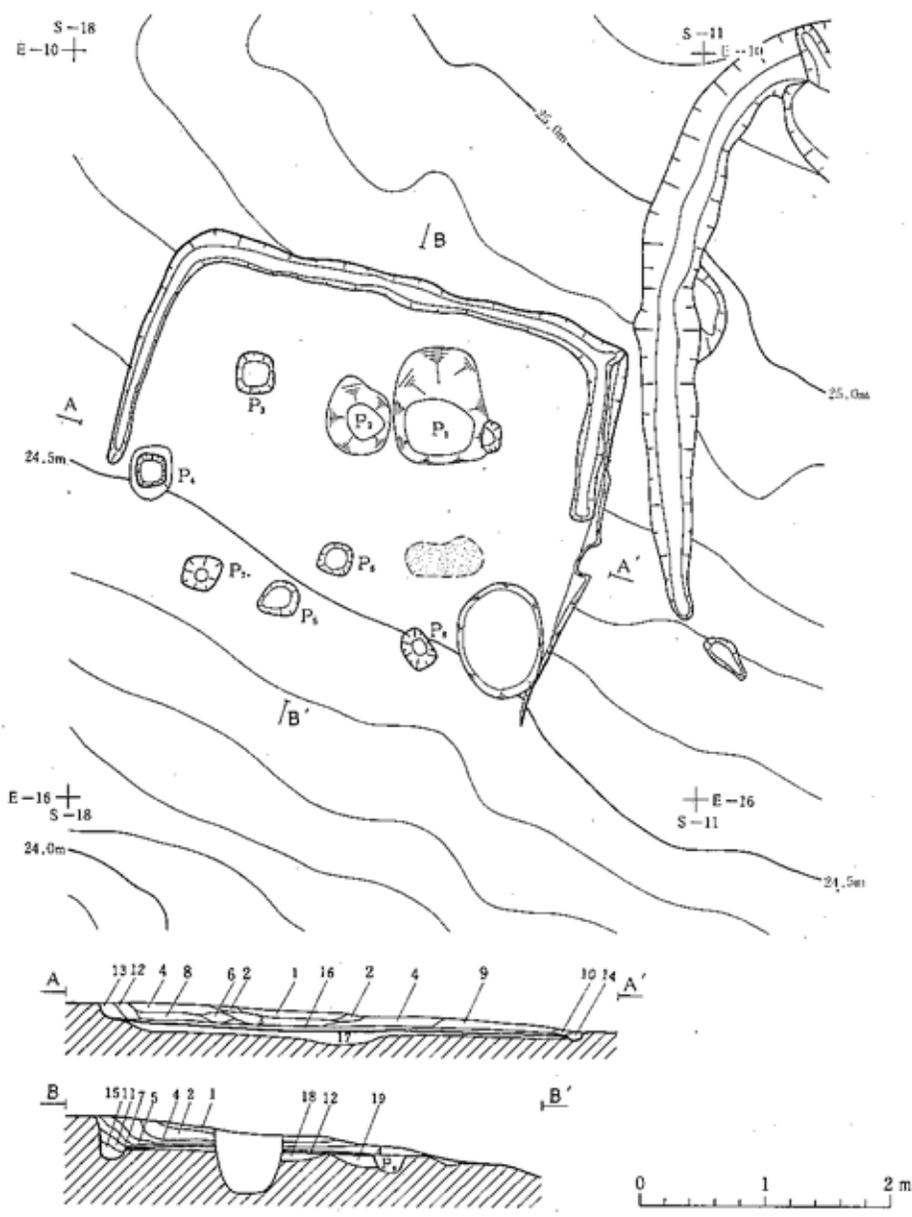
第15号住居跡

〔平面形〕 第15号住居跡は東側が削平されているが、残存部分から住居平面形は隅丸正方形と推定される。規模は南北軸3.8mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で床面から、周溝を経て垂直に立ちあがる部分が多い。ただ北壁では周溝上端と壁との間が幅4～5cmの段となっている。

〔床面〕 床面はほぼ平坦であるが、床面下には凹凸のある住居掘り方が検出された。

〔柱穴〕 柱穴は4個 (P₁・P₃・P₇・P₈) 検出された。これらの柱穴は推定住居対角線上に



層位	順	土色	土性	備考	層位	順	土色	土性	備考
第1層	1	褐色	砂質シルト	粘性・しまりなし。炭を粒状に少量含む。	第5層	11	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。地山土・砂っぽい土をブロック状に含む。
第2層	2	褐色	砂質シルト	粘性なし。丸小石よりしまりあり。炭を粒状に少量含む。	第5層	12	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。炭を粒状に地山土をしまり状に含む。
第3層	3	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。地山土炭を粒状に含む。	第5層	13	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。地山土・砂っぽい土をブロック状に含む。
第3層	4	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。炭を粒状に含む。砂を多く含む。	第6層	14	褐色	砂質シルト	粘性あり。炭を粒状に含む。
第4層	5	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。炭・地山土・地山土を少量含む。	第6層	15	にんげん色	砂質シルト	粘性あり。
第4層	6	褐色	砂質シルト	粘性なし。固くしまる。炭・地山土を少量含む。砂っぽい。	第7層	16	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。炭・地山土を多く含む。
第4層	7	褐色	砂質シルト	粘性なし。炭を粒状に少量含む。	掘り方	17	褐色	砂質シルト	
第4層	8	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。炭を粒状に含む。地山土をしまり状に含む。	掘り方	18	褐色	砂質シルト	
第4層	9	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。一部炭・地山土をブロック状に含む。	掘り方	19	褐色	砂質シルト	
第5層	10	褐色	砂質シルト	粘性・しまりあり。地山土を少量含む。					

第25図 第15号住居跡

あり、結んだ線は住居北・西・南壁と平行になる。柱間は東西軸・南北軸1.8mである。

〔周溝〕北・西・南壁直下に周溝がめぐっている。この周溝は断面「」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。

〔炉〕住居中央の北側に焼面があり、炉と考えられる。この焼面は不整楕円形で、その範囲は60×30cmである。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は7層に大別され、第1～6層は将棋倒し状、第7層は水平状の堆積状況を示している。第1・2層は暗褐色砂質シルトで住居中央部に分布している。第3・4層は褐色ないしは暗褐色砂質シルトで住居全体に分布している。第5層は褐色砂質シルトで壁際に分布している。第6層は褐色ないしはこぶい黄褐色砂質シルトで周溝内に分布している。第7層は炭・焼土を多く含む粘性のある暗褐色砂質シルトで、床面に薄く張りついた状態で分布し、生活層と考えられる。この他、床面下の住居掘り方埋土は褐色砂質シルトである。遺物はほとんど出土していない。

第16号住居跡

〔平面形・重複〕第16号住居跡は隅丸三角形の土壇と重複し、住居南東隅の部分が切られている。また、住居東壁も削平のため失なわれている。残存部分から住居平面形を推定すると、方形で、規模は南北軸5.3mである。

〔壁〕検出された壁は、上部が褐色土、下部が明褐色土の地山である。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で住居掘り方底面（地山）と一致している。

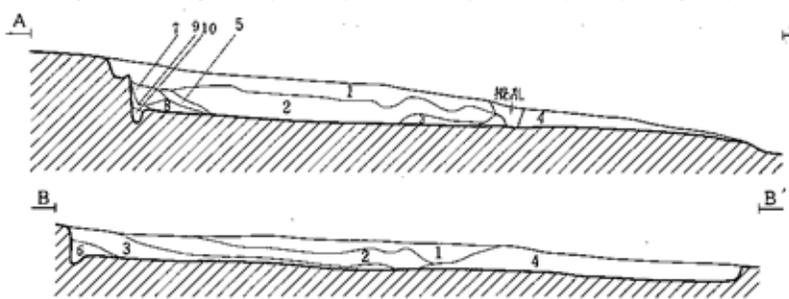
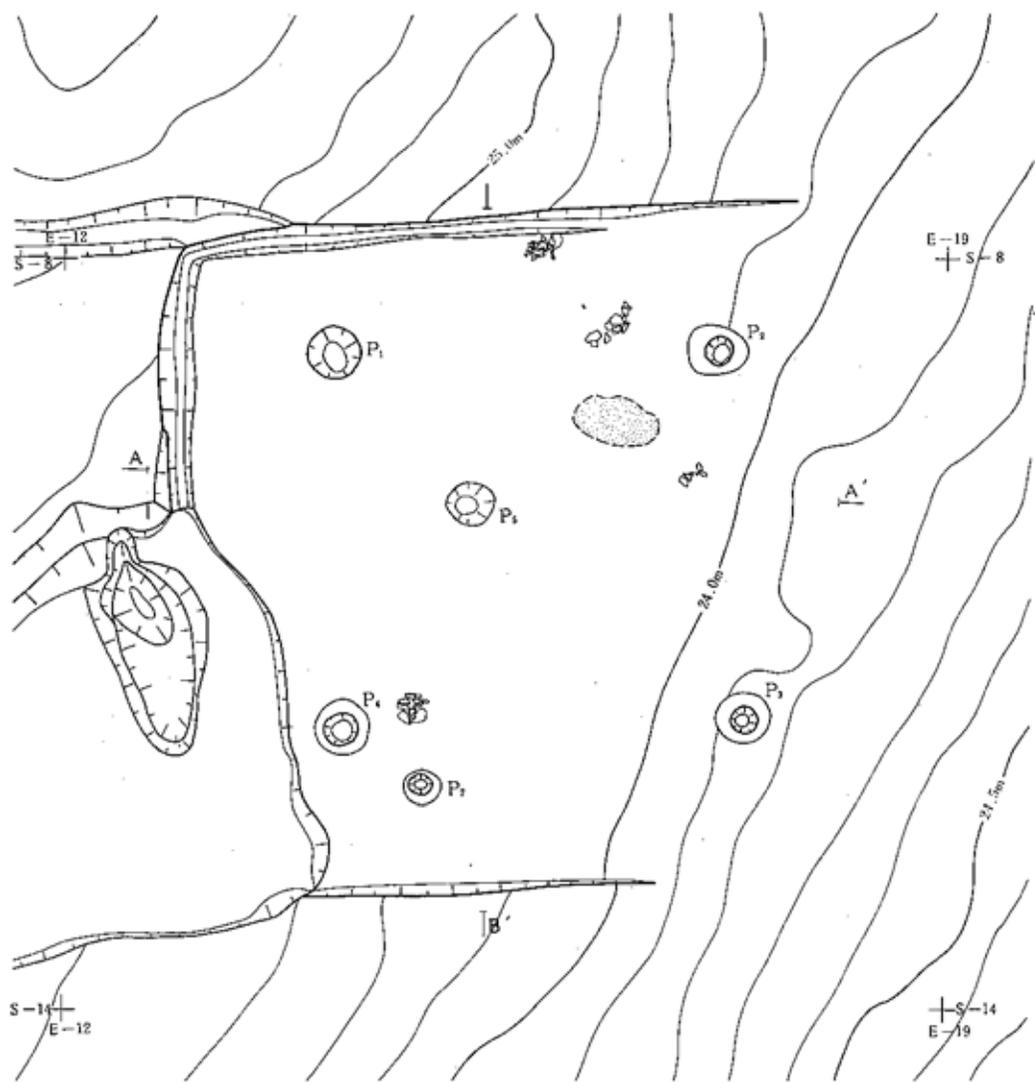
〔柱穴〕柱穴は4個（P₁～P₄）検出された。これらの柱穴は推定住居対角線上に位置し、結んだ線は北・南・西壁と平行である。柱間は南北軸が3m、東西軸3.1mである。

〔周溝〕周溝は北・西壁直下にめぐっている。断面「」状で、幅約20cm・深さ約10cmである。

〔炉〕住居中央から北東に偏った部分の床面が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は楕円形で、大きさが70×40cmである。この他、施設等は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色ないしは暗褐色の粘土質シルト層で、住居全体に分布している。第2層は明褐色ないしは明褐色粘土質シルトブロックを含む層で西壁周辺に分布している。

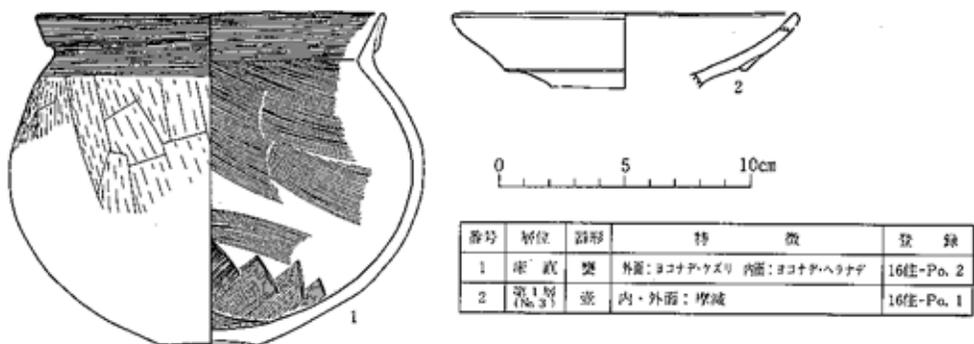
〔遺物の出土状況〕遺物の出土状況に、特に規則性はみられない。第1層：高坏脚部破片1点・壺1点・甕口縁部破片2点 第2層：壺口縁部破片1点・壺底部破片1点・甕口縁部破片2点・甕底部破片1点 周溝：甕底部破片1点 床面：高坏脚部破片1点・甕1点・甕底部破片1点 層不明：甕底部破片1点



層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1-4	褐色(7.5YR5/6)	粘土質シルト	No.3は伊の部分で多量に炭化物を含む。 木炭・焼土含む。 粘性あり。
	5	褐色(7.5YR5/6)	粘土質シルト	
	6	暗褐色(7.5YR3/6)	粘土質シルト	
第2層	7-10	明褐色(7.5YR5/6)	粘土質シルト	褐色土の場合、明褐色土をブロック状に含むか互層となる。



第26図 第16号住居跡



第27図 第16号住居跡出土土器

第18号住居跡

〔平面形〕 第18号住居跡は南東側が削平され失なわれているが、残存部から平面形は隅丸方形と推定される。規模は南北軸4.5mである。

〔壁〕 検出された壁は地山である。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 住居床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。

〔柱穴〕 柱穴は4個（ $P_1 \sim P_4$ ）検出された。柱穴は推定住居対角線上に位置し、結んだ線は北壁・西壁と平行になる。柱間は南北軸2.8m・東西軸2.4mである。

〔周溝〕 北壁西側から西壁・南壁西側の壁直下において周溝が検出された。この周溝は壁を掘り込んでおり、断面「J」状で、幅10~15cm・深さ約5cmである。

〔炉〕 住居中央のやや北側に偏った部分の床面が不整形円形に焼けており（焼面）、炉と考えられる。その大きさは70×40cmである。この他の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕 住居内堆積土は、いずれも褐色ないしは暗褐色シルト層であるが、層相の細かなちがいがから2層に大別され、それらはさらに細別される。これらの層は、将棋倒し状の堆積状況を示している。なお第1層は黄褐色土を斑状もしくはブロック状に含むのに対し、第2層は炭化物を含み、黒っぽく見える。

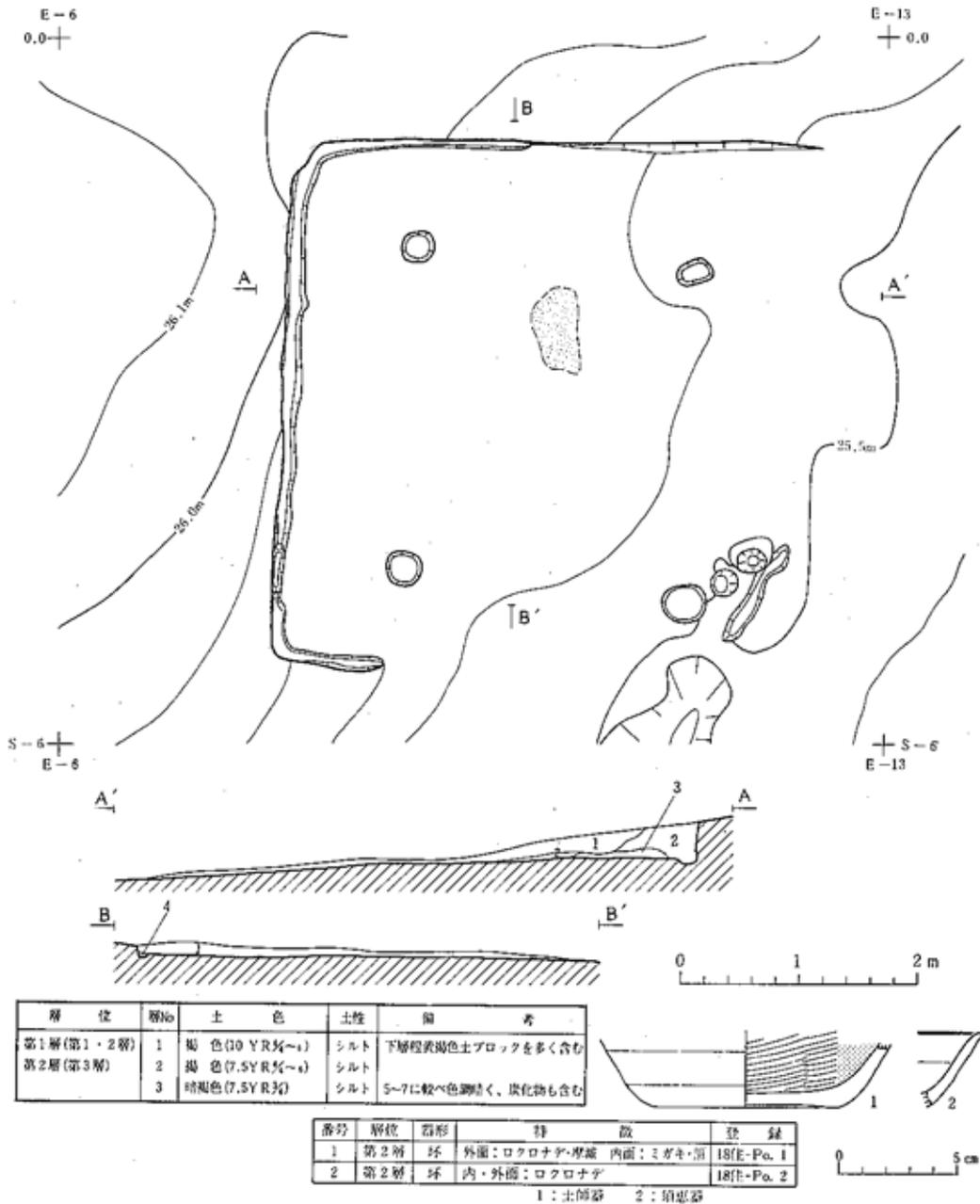
〔遺物の出土状況〕 遺物の出土状況は不規則で、次のようにロクロを使用しない土師器と、ロクロを使用した土師器・須恵器が混在している。第1層：甕底部破片1点 第2層：ロクロ土師器坏1点・同口縁部破片2点・同底部破片1点・甕口縁部破片1点・赤焼土器坏口縁部破片1点・須恵器坏1点・同口縁部破片2点・須恵器壺肩部破片1点

第20号住居跡

〔平面形・重複〕 第20号住居跡は、新・旧のカマドが2基、柱穴が3組、周溝が3列ある。このことから、二度改築によって拡張を行なったものと推定される。平面形は、第3期（最終段

階) のものが長方形である。第1・2期のものも柱穴配置と周溝から推定すると、長方形と考えられる。規模は、第3期が南北軸8.7m・東西軸6.2m、第2期が南北軸7.3m・東西軸6.2m、第1期が南北軸5.8mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩落が顕著である。



第28図 第18号住居跡

〔床面〕住居床面はほぼ平坦である。住居東側の床面は掘り方底面（地山）と一致しているが西側は整地して床面を構築している。

〔周溝〕東壁・南壁直下にめぐっているが、西壁部分は削平を受けているため不明である。周溝は断面「」状で、住居壁の外側に喰い込んでいる。規模は幅約20cm・深さ約10cmで、第1～3期のものにおいて共通している。

〔柱穴〕柱穴は第1期がP₂₅・P₁₉・P₂₄・P₃₂、第2期がP₂₆・P₄₁・P₄₀、第3期がP₂₅・P₁₉・P₁₂・P₁₅・P₂₄・P₃₂である。第2期は南東隅の柱穴を検出できなかったが、検出できた柱穴は住居対角線がその推定位置にあり、結んだ線は東・南・西・北壁と平行で、各期住居平面形と相似形になる。なお、第3期の柱穴は第1期のP₂₅・P₁₉・P₂₄・P₃₂を共有していると考えられる。各期の柱間は、第1期が南北軸3.1m・東西軸2.7m、第2期が南北軸3.5m・東西軸3.6m、第3期が南北軸5.2(3.1+2.1)m・東西軸2.7mである。この他、各期の周溝および壁際に小規模なピットがある。これらは壁柱穴ではないかと推定される。

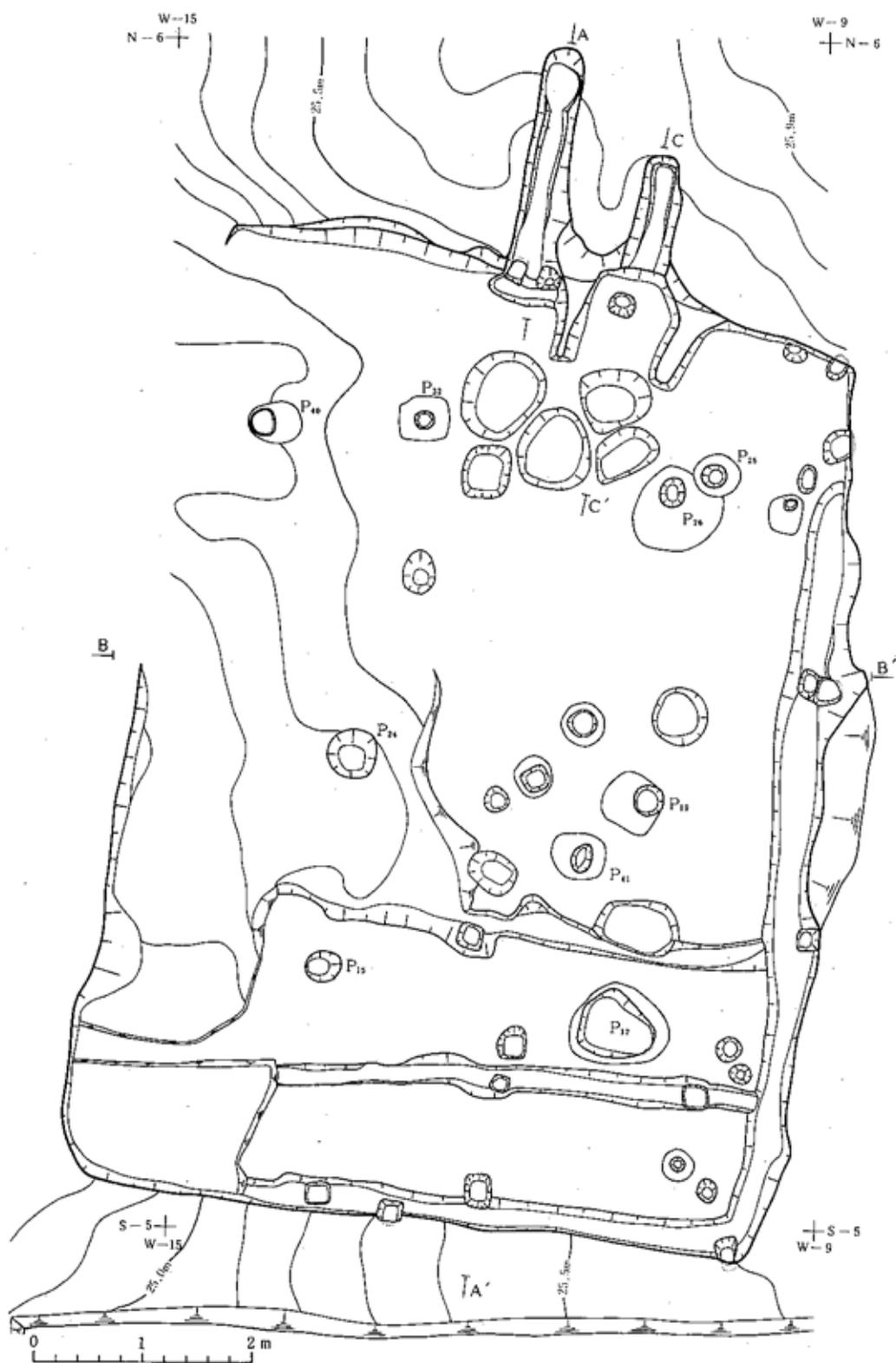
〔カマド〕カマドは新旧二時期のものが住居北壁のほぼ中央で発見され、住居の改築にともなうものと考えられる。新しいカマドは第3期に属するものである。燃焼部と煙道部からなり、全長2mである。燃焼部は底面を僅かに掘りくぼめ、側壁に粘土を積みあげて構築したもので奥壁は住居壁を約20cm掘り込んでいる。規模は奥行100cm・幅130cmである。底面中央の奥壁寄りの部分に直径20cm・深さ20cmのピットがあり、支脚の掘り方と考えられる。煙道は天井部が崩れているが、トンネル式のもので、長さ100cm・幅40cmである。

古いカマドは新しいカマドの西側1mにある。燃焼部は取りかたづけられ、煙道部のみが残っていた。煙道は天井部が崩れているが、トンネル式のもので、先端がピット状に丸くなっている（煙り出し）。規模は長さ200cm・幅50cmである。このカマドは、第1・2期のいずれに属するか明確でないが、第2期柱穴の対称軸上にあることから、第2期のものではないかと考えられる。

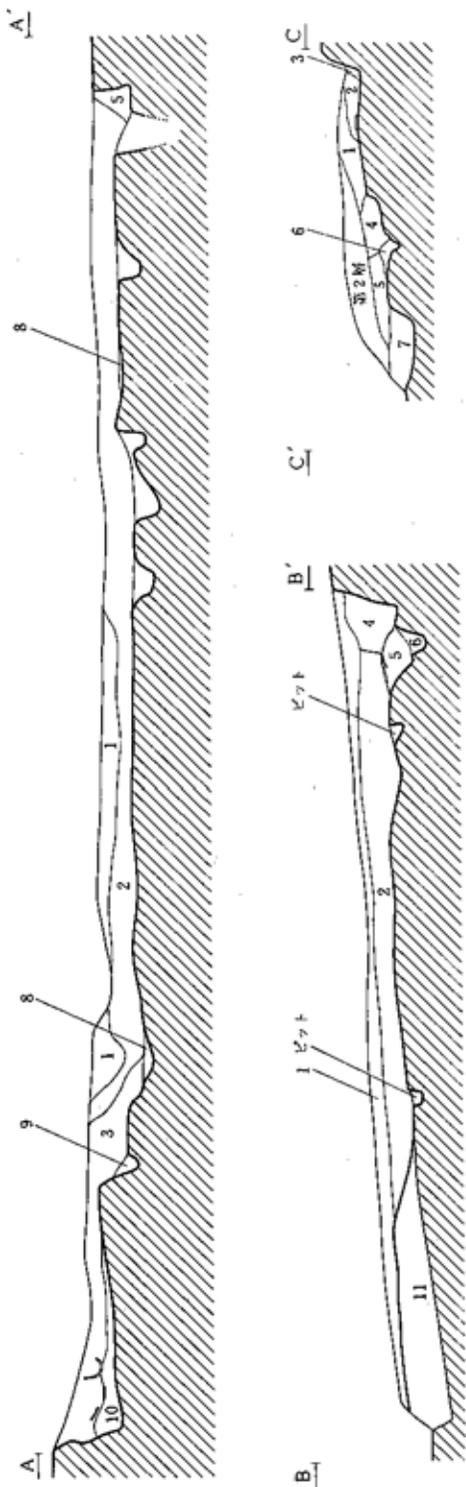
この他、カマド前面に皿状のピットが3個（直径約80cm・深さ約10cm）ある。これらのピットが、カマドに関連する施設であるとすれば、残存している2基のカマドの間に、第1期のカマドが存在した可能性もある。

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色シルト層で、住居中央部とその東西に分布している。第2層は褐色シルト層で、住居内全体に分布している。第3層は明褐色シルト質砂層で、東壁の崩壊土層である。第4層は褐色ないしは明褐色の砂質シルト層で、層相に多様性がみられ、周溝・ピットなどに堆積している。

〔遺物の出土状況〕遺物は住居床面・ピット・カマドと、床面を直接覆っている第2・3層から土師器・赤焼土器・須恵器がまとまって出土している。各層出土土器で実測図を作成したも



第29图 第20号住居跡平面图



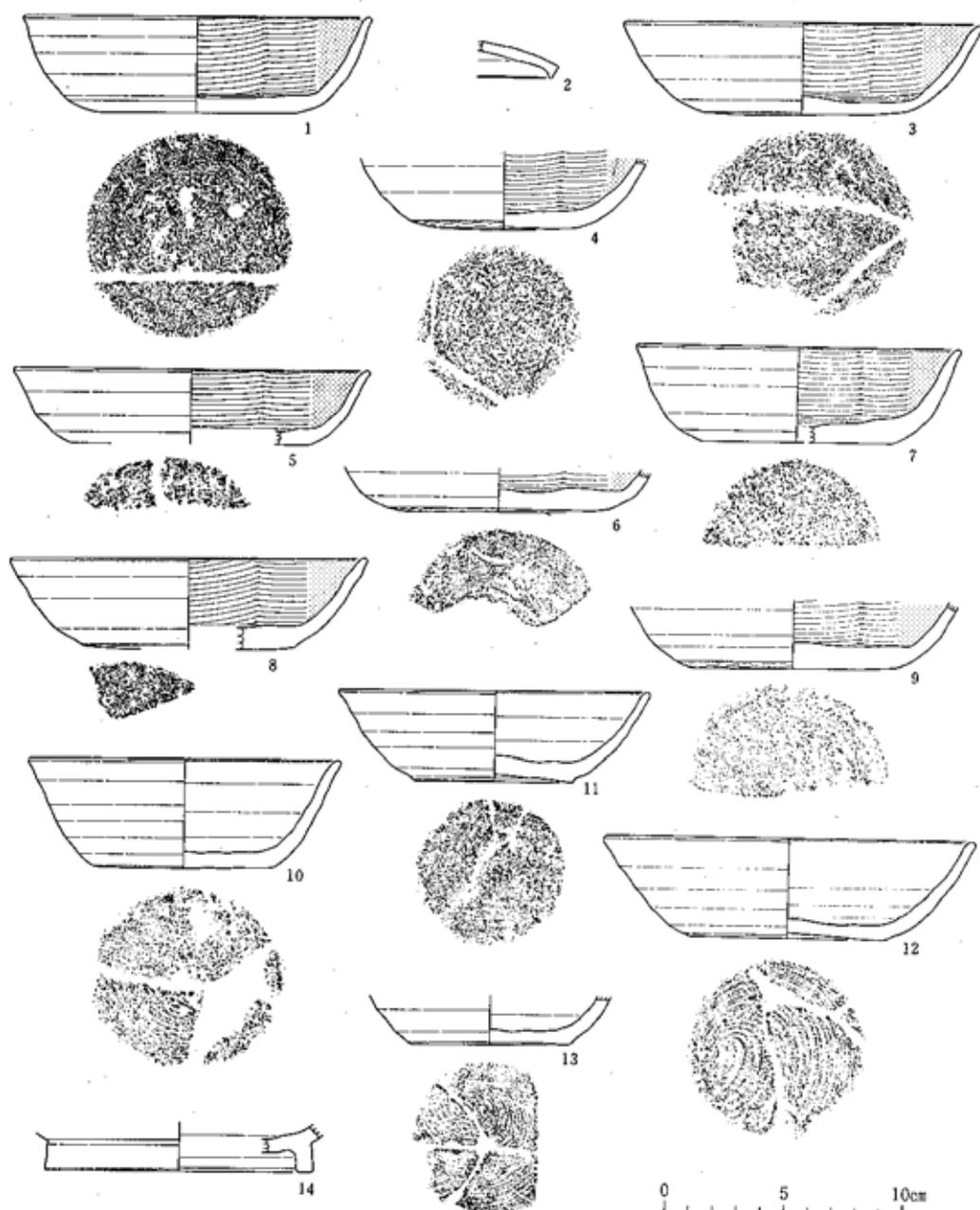
カマド堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
煙肉内堆積土	1	暗褐色(YR5.5/3)	粘土 粘土 粘土	炭化植物遺体を含む。
	2	暗褐色(YR5.5/3)		
煙肉外堆積土	3	暗褐色(YR5.5/3)		
	4	暗赤褐色(5YR5/3)		
ピット堆積土	5	暗赤褐色(5YR5/3)		
	6	暗赤褐色(5YR5/3)		
	7	暗赤褐色(5YR5/3)		

住居内堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(YR5/3)	シルト	
	2	暗褐色(YR5/3)	シルト	
第2層	3	暗褐色(YR5/3)	シルト	
	4	暗褐色(YR5/3)	シルト質砂	
第3層	5	暗褐色(YR5/3)	粘土質シルト	
	6	暗褐色(YR5/3)	砂質シルト	
第4層	7	暗褐色(YR5/3)	砂質シルト	
	8	暗褐色(YR5/3)	シルト	
旧ピット埋戻	9	暗褐色(YR5/3)	砂質シルト	
	10	暗褐色(YR5/3)	シルト	
築方土	11	暗褐色(YR5/3)	砂質シルト	

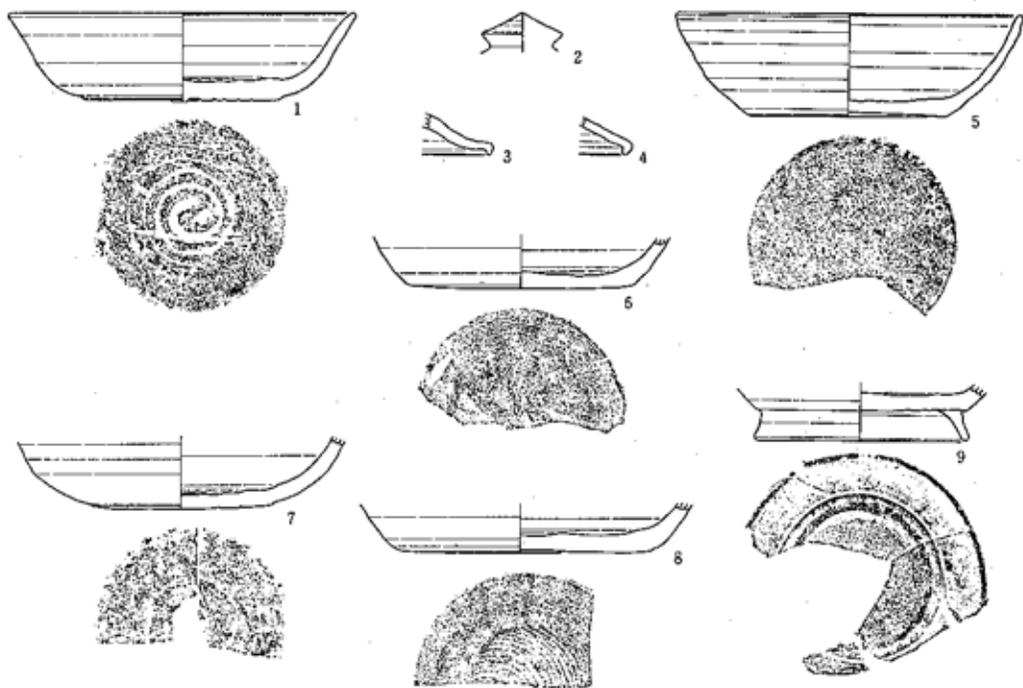
第30図 第20号住居跡断面図



番号	別位	器形	特 徴	登 録	番号	別位	器形	特 徴	登 録
1	住居内	杯	外面：ロクロナデ・同転ナズリ 内面：井筒状ミダナ型	20住-Po. 17	8	第2層	杯	外面：ロクロナデ・ヘラ切り? 内面：井筒状ミダナ型	20住-Po. 19
2	第2層	蓋	内・外面：ミダナ・型	20住-Po. 25	9	第2層	杯	外面：ロクロナデ・同転ナズリ 内面：井筒状ミダナ型	20住-Po. 22
3	第3層	杯	外面：ロクロナデ・同転ナズリ 内面：井筒状ミダナ型	20住-Po. 18	10	床 穴	杯	内・外面：ロクロナデ・厚減	20住-Po. 14
4	第2層	杯	外面：ロクロナデ・同転ナズリ 内面：井筒状ミダナ型	20住-Po. 23	11	第2層	杯	内・外面：ロクロナデ・ヘラ切り	20住-Po. 13
5	P.40	杯	外面：ロクロナデ・ヘラ切り? 内面：井筒状ミダナ型	20住-Po. 21	12	P.23	杯	内・外面：ロクロナデ・同転系切り	20住-Po. 12
6	第3層	杯	外面：ロクロナデ・同転ナズリ 内面：井筒状ミダナ型	20住-Po. 24	13	床 穴	杯	内・外面：ロクロナデ・同転系切り	20住-Po. 15
7	床	杯	外面：ロクロナデ・ヘラ切り? 内面：井筒状ミダナ型	20住-Po. 20	14	第2層	深鉢	内・外面：ロクロナデ	20住-Po. 16

※ 1～9：土師器 10～14：赤焼土器

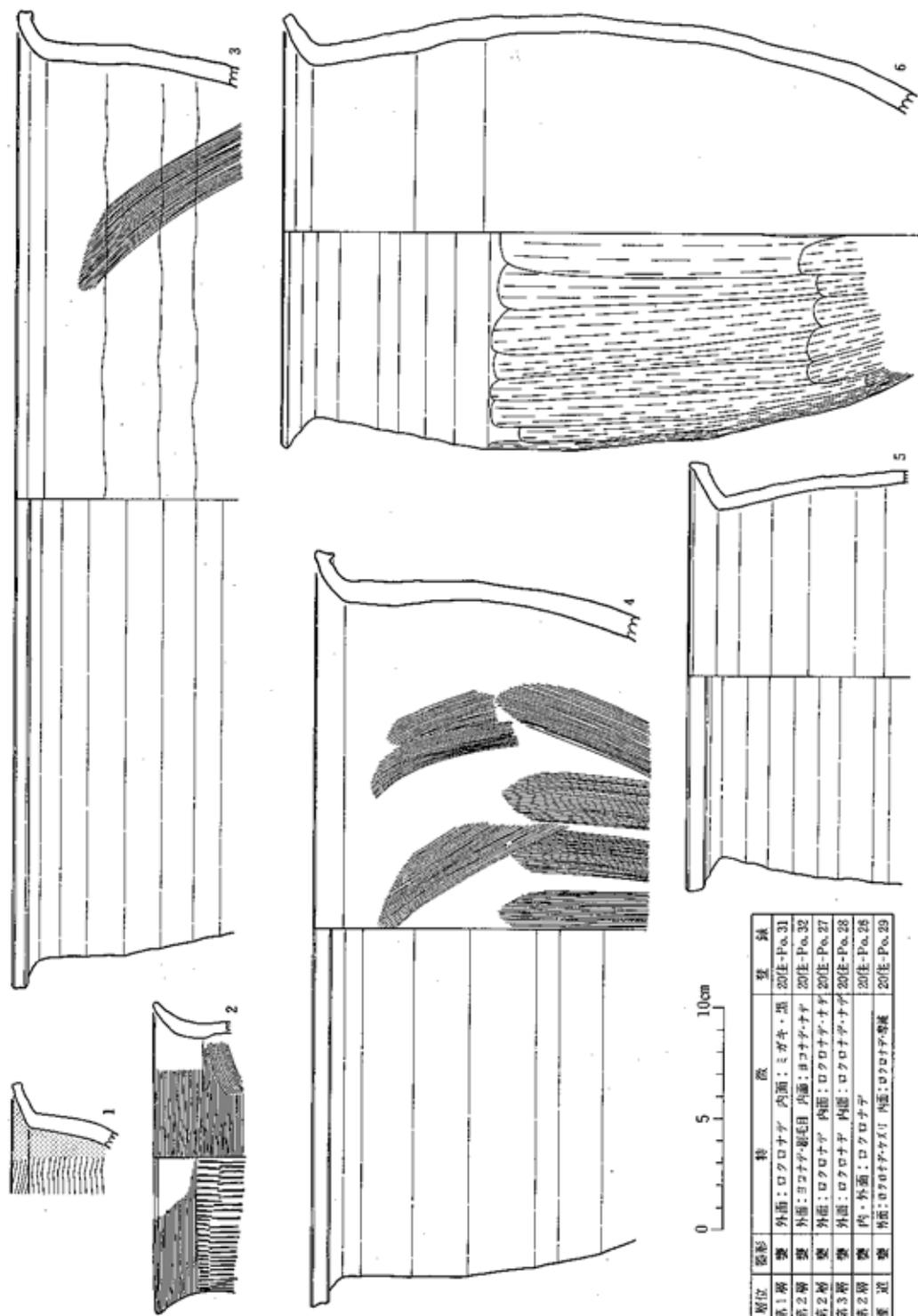
第31図 第20号住居跡出土土器 (1)



番号	層位	器形	特 徴	登録	番号	層位	器形	特 徴	登録
1	床	杯	内・外面：ロクロナデ・ヘラ切り	20住-Po. 2	6	床	杯	内・外面：ロクロナデ・回転ケズリ	20住-Po. 3
2	第2層	蓋	内・外面：ロクロナデ	20住-Po. 9	7	第2層	杯	内・外面：ロクロナデ・ヘラ切り	20住-Po. 5
3	第2層	蓋	内・外面：ロクロナデ	20住-Po. 7	8	床	杯	内・外面：ロクロナデ・回転ケズリ・回転ネ切り	20住-Po. 4
4	床	蓋	内・外面：ロクロナデ	20住-Po. 8	9	床	高脚杯	内・外面：ロクロナデ・回転ケズリ	20住-Po. 6
5	第2層	杯	内・外面：ロクロナデ・回転ケズリ・回転ネ切り	20住-Po. 1	10	第3層	壺	外面：ロクロナデ・ケズリ 内面：ロクロナデ・削	20住-Po. 30

※ 1～9：須恵器 10：土師器

第32図 第20号住居跡出土土器 (2)

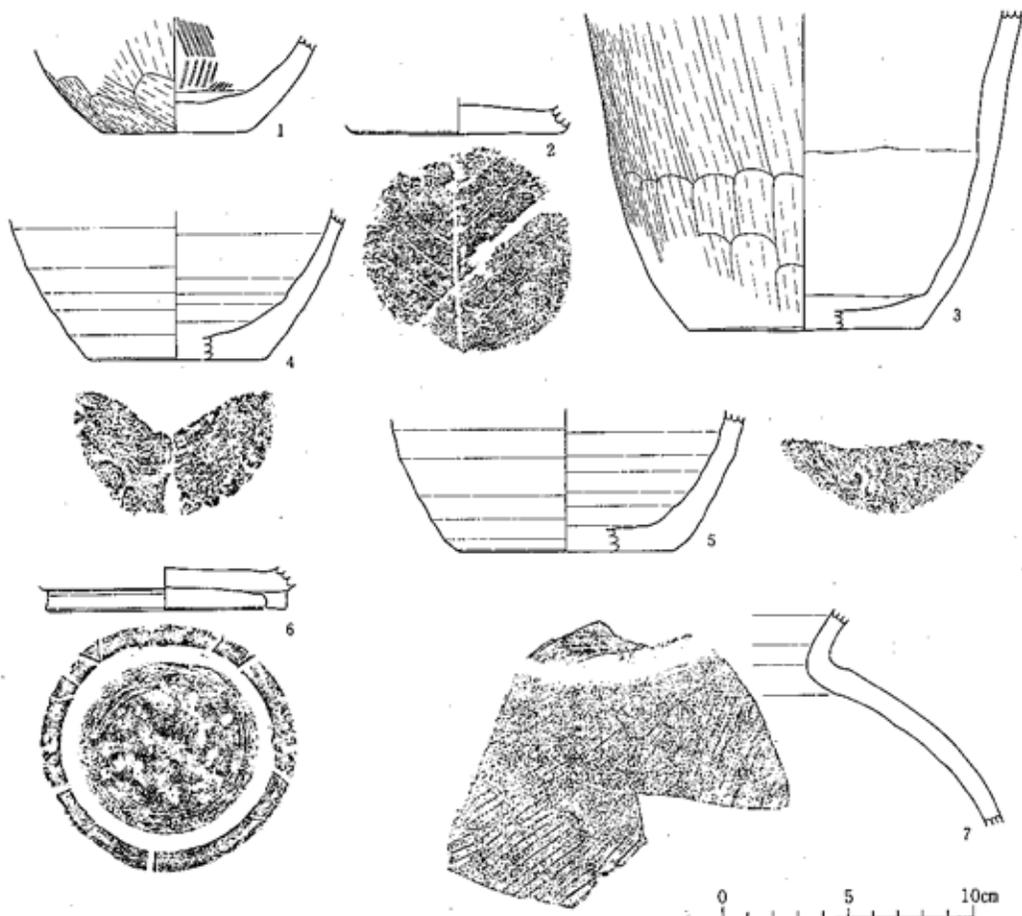


第33図 第20号住居跡出土土器 (3)

番号	層位	器形	特 徴	出 土 地 点	発 見 年
1	第1層	甕	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ・堀	20住-Po.31	
2	第2層	甕	外面：ヨコナデ・縦目 内面：ヨコナデナデ	20住-Po.32	
3	第2層	甕	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデナデ	20住-Po.27	
4	第2層	甕	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデナデ	20住-Po.28	
5	第2層	甕	内・外面：ロクロナデ	20住-Po.25	
6	第2層	甕	外面：ヨコナデ・縦目 内面：ヨコナデナデ	20住-Po.29	

第20号住居跡 破片資料

種類	土師器							須恵器				計	
	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部	底	口縁部	胴部		底
外面	ロナ ク ナ	ケ ズ リ	ヘ ラ 切 り	計									
内面	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	ナ ナ ナ	
第1層	1												13
第2層	14	3		3	9	3							96
第3層													3
P ₁	1												1
P ₂													3
P ₃													3
3層間溝	1												2
カマド	1												6
溝	1												9
溝	1												1
溝	2			1	1	1							13
計	20	3	1	6	9	6	1	18	7	1	4	2	144



番号	層位	器形	特徴	登録	番号	層位	器形	特徴	登録
1	第2層	甕	外面：ケズリ 内面：刷毛目・ナゲツク	20住-Pa.36	5	第2層	甕	内・外面：ロクロナデ 刷毛目切り	20住-Pa.35
2	第2層	甕	外面：木腐痕 内面：ナゲ	20住-Pa.37	6	第2層	甕	外面：ロクロナデ・ナゲ 内面：ロクロナデ	20住-Pa.10
3	第2層	甕	外面：ケズリ 内面：ナゲ・厚減	20住-Pa.33	7	第2層	甕	外面：ロクロナデ・刷毛目 内面：ロクロナデ・ナゲ	20住-Pa.11
4	カマド	甕	内・外面：ロクロナデ 刷毛目切り	20住-Pa.34	※ 1～5：土師器 6・7：須恵器				

第34図 第20号住居跡出土土器 (4)

のは次の通りである。第1層：土師器甕1点 第2層：土師器蓋1点・同坏3点・同甕7点・赤焼土器坏2点・須恵器蓋2点・同坏2点・壺1点・甕1点 第3層：土師器坏2点・同甕2点 P₂₃：赤焼土器坏1点 P₄₀：土師器坏1点 床面：土師器坏1点・赤焼土器坏2点・須恵器蓋1点・同坏3点・カマド：土師器甕2点 住居内：土師器坏1点

この他、破片については別表にまとめてある。

第21号住居跡

〔平面形・重複〕第21号住居跡は第22・23号住居跡と重複し、その両者を切っている。平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸4.0m・東西軸4.3mである。

〔壁〕壁は地山が大部分で（一部第22・23号住居跡堆積土）床面および周溝から緩かに立ちあがる。

〔床面〕床面は住居掘り方底面（地山）と一致し、中央部から南西側がやや凹んでいる。

〔柱穴〕住居内で5個のピットが検出されたが、明確に柱穴と言えるものはない。ただ、P₅・P₃・P₄が住居北東・南西・北西隅の部分にある。南東隅では検出できなかったが、これらが組みあえば柱穴の可能性はある。また、P₅はカマド焚き口左脇にあり、カマドに関する柱穴の可能性もある。

〔周溝〕住居北壁西側から西壁・南壁西側の壁直下に周溝がめぐっている。周溝は断面「」状で幅約20cm・深さ約5cmである。この他西壁周溝の内側約20cmの所に平行に走る溝がある。この溝は断面「」状で、幅約10cm・深さ約5cmである。

〔カマド〕住居北壁中央のやや東側にカマドがある。このカマドは北壁を掘り込んで構築している。全長140cmで、燃焼部は奥行80cm・幅90cm、煙道部は長さ60cm・幅30cmである。燃焼部と煙道部の境は約5cmの段となっている。燃焼部の底面・側壁は火熱を受けて焼けており、底面が特に著しい。また、底面には灰状の薄い層が堆積している。また、燃焼部内には、側壁・天井部が崩落した焼土ブロックを含む層が全体に堆積している。

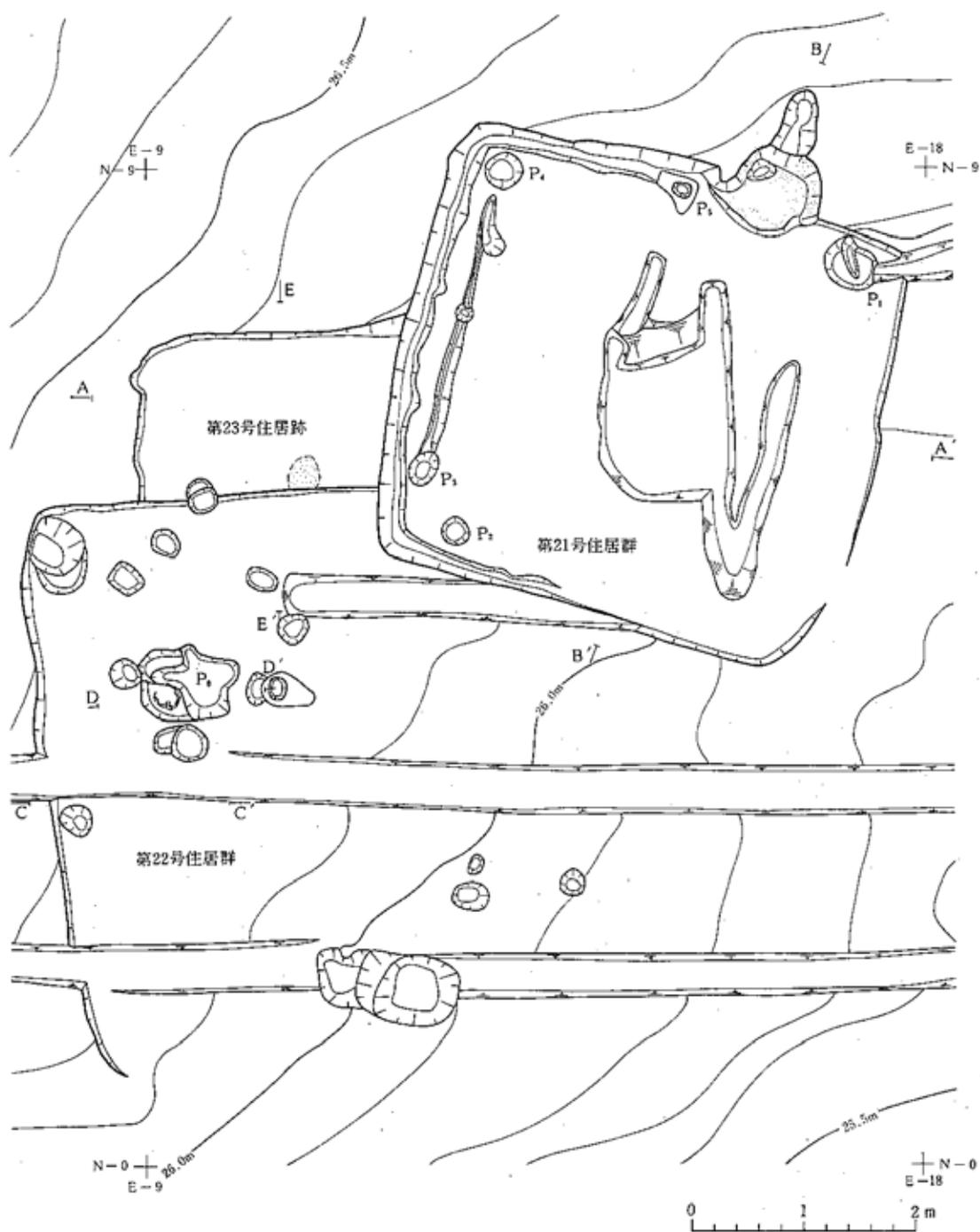
〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は褐色粘土質シルトで、堆積する場所によって部分的なちがいはあるが、基本的には一層である。遺物は量的に少なく、出土状況に規則性もみられない。住居内（第1層）：土師器内黒坏口縁部破片2点・同底部破片1点・土師器坏口縁部破片1点・土師器甕口縁部破片1点・須恵器坏1点

ピット：土師器甕底部破片1点 床面：土師器内黒坏口縁部破片1点



番号	層位	器形	特徴	登録
1	第1層	坏	須恵器 内・外面： ロクロナデ・回転車切り	21住-Po.1

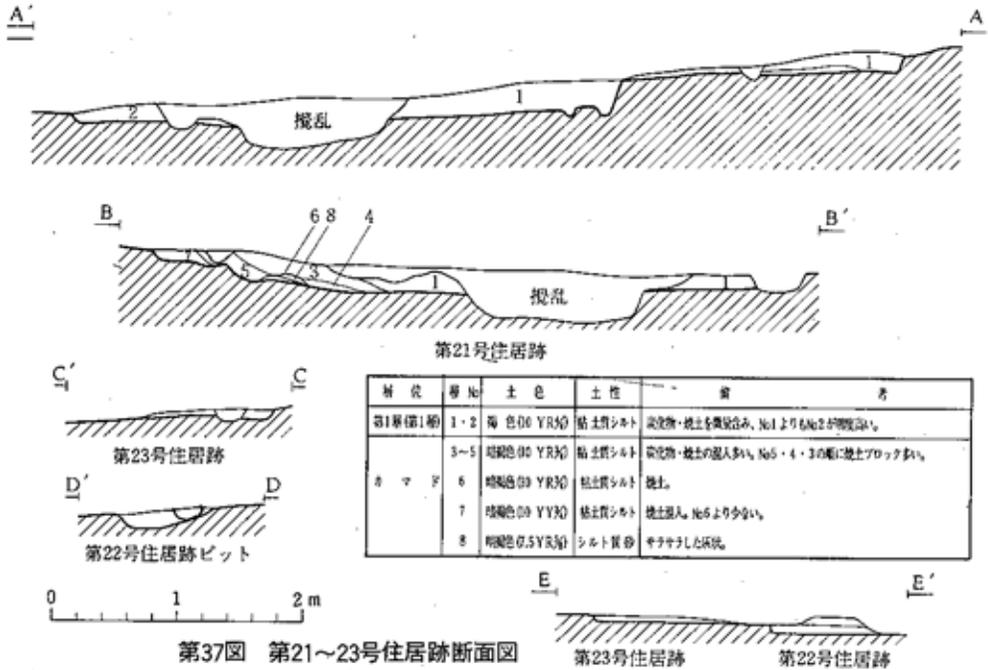
第35図 第21号住居跡出土土器



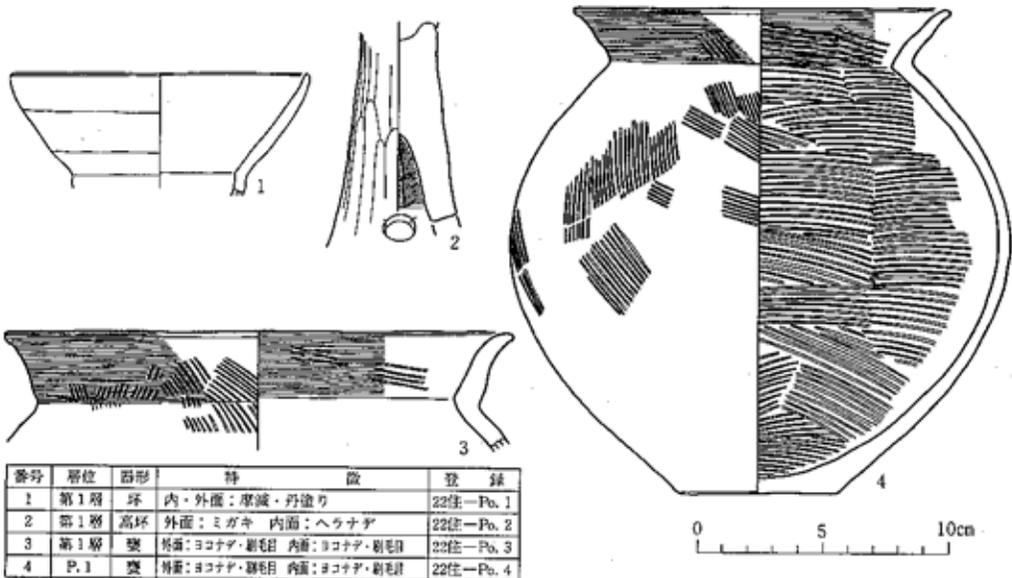
第36图 第21·22·23号住居跡平面图

第22号住居跡

〔平面形・重複〕第22号住居跡は第21・23号住居跡と重複し、第21号住居跡に切られているが第23号住居跡と新旧の切り合いは不明である。また、検出できたのは北壁西側から西壁・南西隅の部分で、その他は第21号住居跡と削平によって失われていた。残存部分から、平面形は隅丸方形と推定され、規模は南北軸5.1mである。



第37図 第21~23号住居跡断面図



第38図 第22号住居跡出土土器

〔施設等〕 検出された床面は地山である。壁は床面から垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦であるが南東側半分はほぼ削平されて失なわれている。住居内で、ピットは検出されたが、配置関係から柱穴と推定できるものはない。炉等は検出されなかった。P₈は隅丸長方形のピットで底面に接した状態で土師器甕がみられた。大きさは長さ80cm・幅65cm・深さ10cmである。この他の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕 住居内堆積土は暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトである。

〔遺物の出土状況〕 遺物は住居内堆積土、床面の残存範囲が小さいため、あまり多くないが、次のようなものがまとまりをもって出土している。住居内堆積土：坏1点・高坏1点・甕1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 P₈：甕1点

第23号住居跡

〔平面形・重複〕 第23号住居跡は第21・22号住居跡の項で記したように、第21号住居跡によって切られているが、第22号住居跡との新旧の切り合いは確認できなかった。検出・調査できたのは住居北西隅とその周辺だけで、この部分から住居平面形を推定すると隅丸方形と考えられる。残存部分が少ないため、規模等は不明である。

〔施設等〕 壁・床面は地山である。壁は床面からほぼ垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦である。第22号住居跡に切られている部分の床面に焼面があり炉と考えられる。一部失なわれているが、ほぼ楕円形で、幅30cmある。この他に施設は検出されなかった。

〔堆積土〕 住居内堆積土は2層あり、第1層は暗褐色（10YR3/4）粘土質シルトで、全体に分布している。第2層は褐色（10YR4/4）粘土質シルトで、床面上に部分的に分布している。遺物は出土していない。

第24号住居跡

〔平面形・重複〕 第29号住居跡と重複しているが、切り合い関係は明確にできなかった。また住居南側は調査を行なったが、北側は調査区外にのびている。調査を行なった部分から住居平面形を推定すると、隅丸方形である。規模は東西軸6.6mである。

〔壁〕 検出した壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面は掘り方底面と一致（地山）し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴は2個検出された（P_{1・2}）。2個の柱穴は対角線と推定される位置にあり、結んだ線は住居南辺と平行である。柱間は3.7mである。

〔周溝〕 周溝は一部途切れている部分もあるが、ほぼ全体の壁直下にめぐっている。断面「」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。また、同様な断面・規模をもつ溝が南壁の中央に直交し

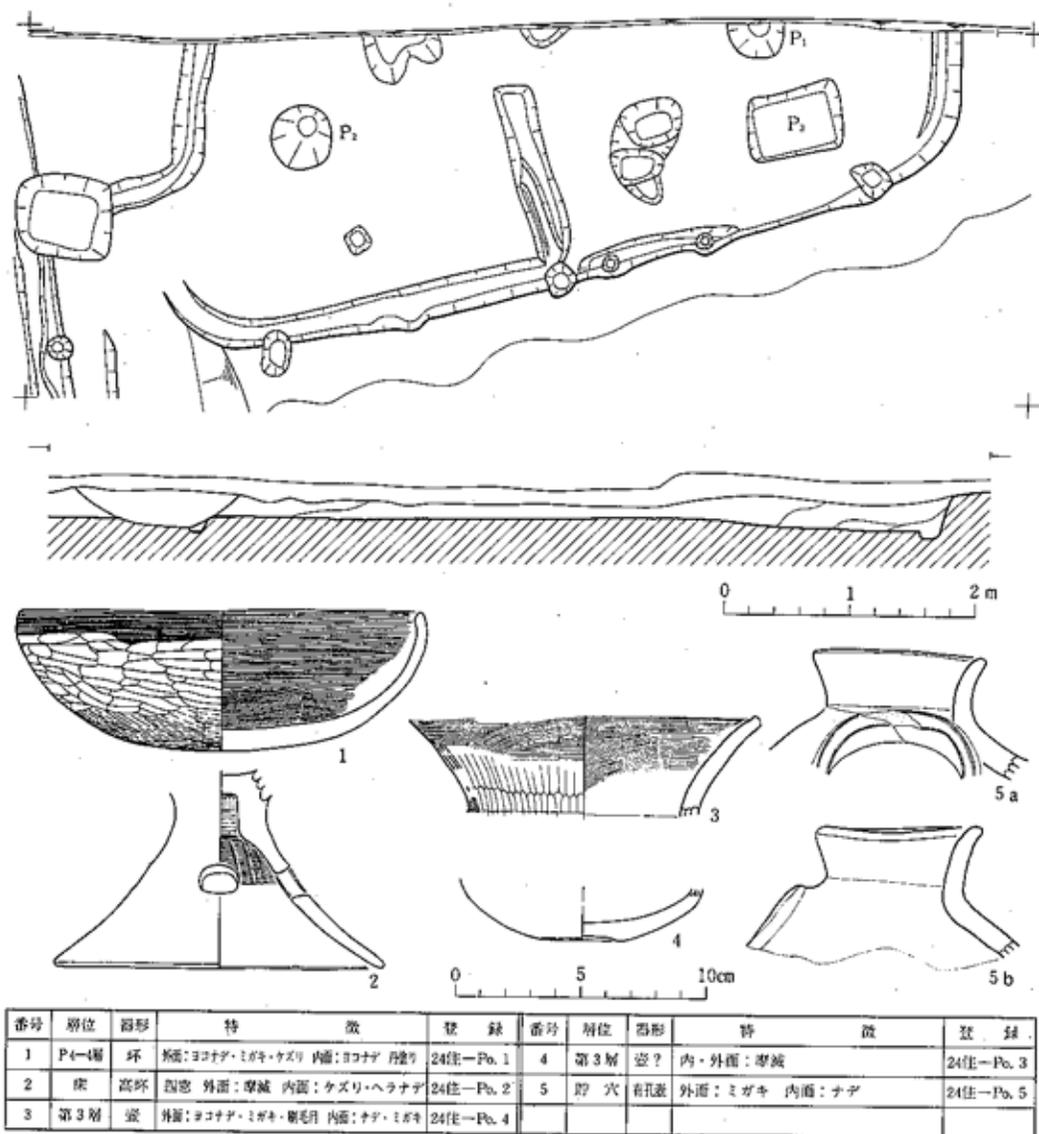
てみられ、その長さは160cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居内東隅と推定される部分に貯蔵穴状のピット（P₃）がある。P₃は長方形で長さ80cm・幅50cm・深さ50cmである。内部には4枚の層（褐色・暗褐色・黒褐色・にぶい黄褐色土）が水平状に堆積し、最下層には地山土のブロックが多量に含まれていた。

〔その他の施設〕炉などの施設は調査区内では検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は5層に細別され、将棋倒し状の堆積状況を示しているが、層相と層の大別については、注記を紛失したため不明である。

〔遺物の出土状況〕遺物は各層から出土しており、出土状況に特に規則性はみられない。第1



第39図 第24号住居跡

層：甕口縁部破片3点・同底部破片1点 第1～2層：甕口縁部破片2点 第3層：壺2点・甕底部破片1点 P₄：坏1点 P₃（貯蔵穴）：壺1点・坏1点 床面：高坏1点

第25号住居跡

〔平面形・重複〕第25号住居跡は第26・51号住居跡と重複し、その堆積土と床面を切って構築している。平面形は四隅の角張る正方形で、規模は南北軸5.7m・東西軸6.1mである。

〔壁〕住居壁は、第26・51号住居跡と重複している東辺と南辺はその堆積土、その他の部分は地山で、床面および周溝からはほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面に褐色粘土質シルトを敷いて貼り床したものである。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₄～P₇）検出された。これらの柱穴は、住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形になる。柱間は、南北軸・東西軸とも2.7mである。

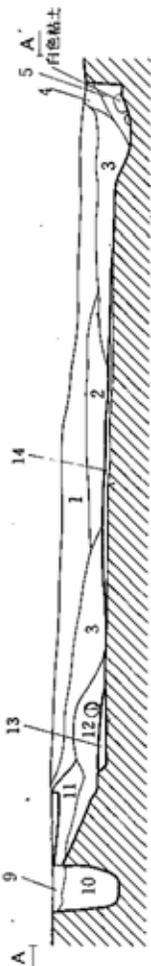
〔周溝〕周溝は住居北東部分を除き、ほぼ全体の壁直下にめぐっている。周溝の断面は「┌」状で、幅約10cm・深さ5～10cmである。

〔カマド〕住居北壁のほぼ中央にカマドが構築されている。金長2.2mで、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は側壁に粘土を積みあげて構築したもので、主軸1.2m・幅0.9mである。底面中央には土師器壺を逆位に置いて支脚としている。支脚の前面は赤褐色に焼けて硬くなっている。側壁も焼けている。しかし、天井部は崩壊して残っていない。煙道部はトンネル式で住居外にのびている。煙道部底面は燃焼部底面より僅かに高くなっている。煙道部先端の煙り出しはピット状になっている。煙道部の主軸は0.6m・幅0.2mで、煙り出しの直径は0.4m・深さは0.5mである。

燃焼部底面をさらに掘り下げた所、焼け面と段が検出された。段は奥壁（住居壁に一致）の内側20cmの所にあり、その前面に焼け面がある。この段と焼け面は古い段階のカマド残存部で、段は燃焼部奥壁と推定される。したがって、カマドは改築を受けたものと考えられる。

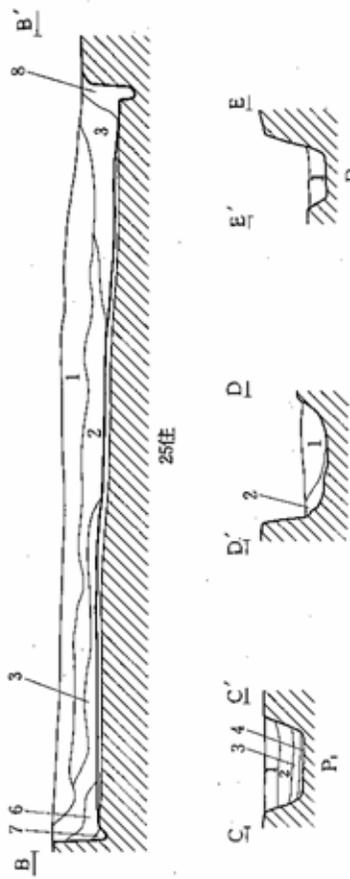
〔その他の施設〕住居の壁際には、比較的大きいピットが4個（P₁・P₂・P₃・P₈）ある。P₂は南壁の中央、P₁・P₃はその両端、P₈はカマドの右脇にある。いずれも、楕円形ないしは隅丸方形をしている。P₂は楕円形をしたピットが2個横につなげられた形をしている。また、P₂とP₃の間には、住居南壁と直交する段と溝が平行に走り、P₂の底と周囲には白色粘土の塊がみられた。このように、住居南壁付近は何らかの作業場的なものであったと推定される。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別され、それらの層は将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色粘土質シルトで、住居全体に分布している。第2層は赤褐色土粒の混入する暗褐色粘土質シルトで、住居中央部の床面上に分布している。第3層は、褐色ないしは暗褐色の



第25住 堆積土

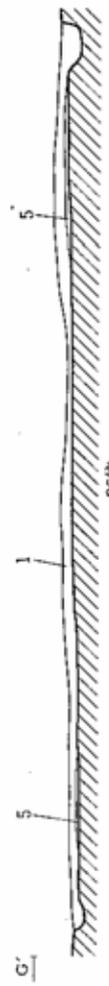
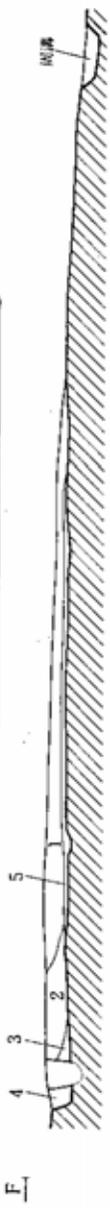
層位	層No	土色	土性	備考
第1層(深1層)	1	褐色	粘土質シルト	粘性・しまりの強い。
第2層(深2層)	2	色0(YR3/3)	粘土質シルト	粘性・しまりのあり。黄褐色土質混入。
第3層(深3層)	3	褐色	粘土質シルト	黄褐色土質混入 (60%程度より若干多い)。
埋り出し基礎土	4	にぶい黄褐色0(YR3/5)	粘土質シルト	黄褐色土質混入。
	5	褐色	粘土質シルト	
	7	褐色	粘土質シルト	
	8	褐色	粘土質シルト	
	9	褐色	粘土質シルト	
	10	褐色	粘土質シルト	
	11	褐色	粘土質シルト	
	12	褐色	粘土質シルト	
カマド内埋積土	13	にぶい黄褐色0(YR3/5)	粘土質シルト	粘性の混入が極めて多い。
	14	褐色	粘土質シルト	



第26・51住 堆積土

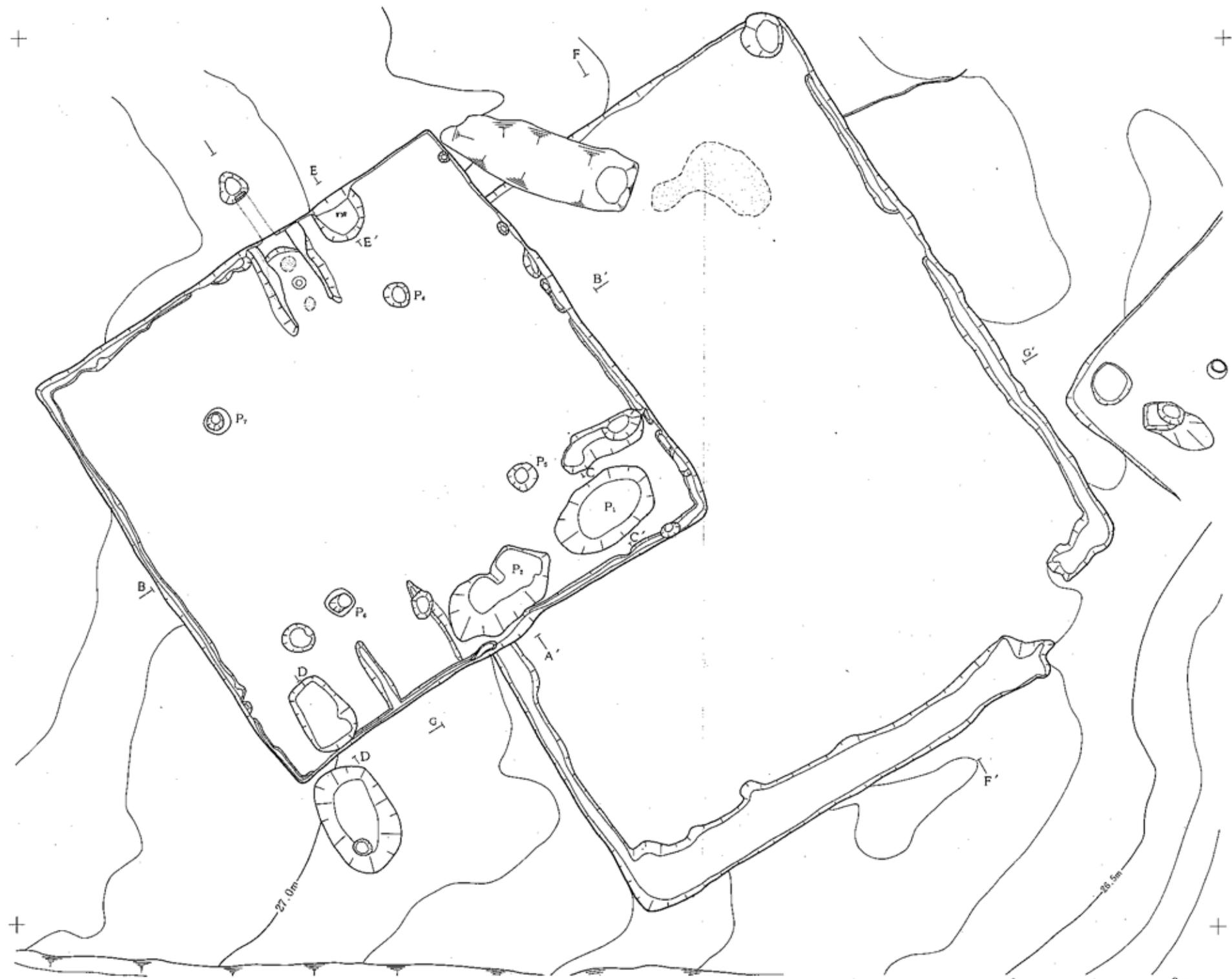
層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	色0(YR3/4)	シルト	厚く、しまりあり。
第2層	2	褐色	シルト	粘性・黄褐色を含む。やや強い。
第3層	3	褐色	シルト	粘性・黄褐色を含む。
埋り出し基礎土	4	褐色	シルト	粘性・黄褐色を含む。やや強い。
	5	にぶい黄褐色0(YR3/5)	シルト	粘性・黄褐色を含む。やや強い。

層位	層No	土色	土性	備考
P ₁	1	褐色	粘土質シルト	水浸・黄褐色粘土ブロックを含む。 No.1層と意味的に同じだが、粘性あり。 埋積床(5.8尺)の粘土ブロック多量を含む。 埋積床(5.8尺)の粘土ブロックを含む。
	2	褐色	粘土質シルト	
	3	褐色	粘土質シルト	
	4	黄褐色	砂質粘土	
P ₂	1	褐色	粘土質シルト	埋積床(5.8尺)の粘土ブロックを含む。
	2	褐色	粘土質シルト	
P ₃	1	褐色	粘土質シルト	埋積床(5.8尺)の粘土ブロックを含む。
	2	褐色	粘土質シルト	

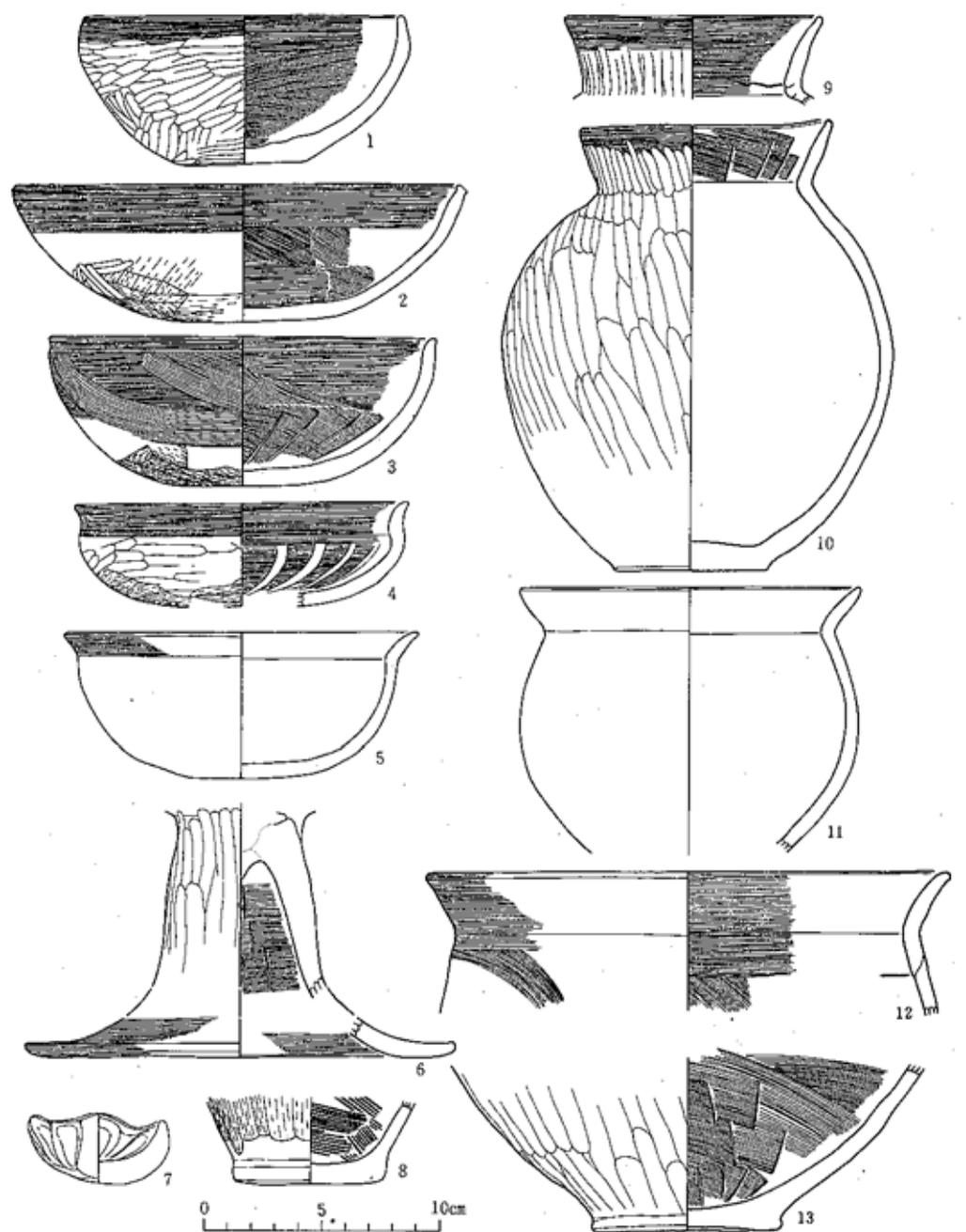


第40図 第25・26号住居跡断面図





第41圖 第25・26号住居跡



番号	部位	器形	特 徴	登 録	番号	部位	器形	特 徴	登 録
1	床	鉢	外面:ヨコナデ・ミガキ・水雲紋 内面:ナデ	25住-Po.2	8	床	鉢	外面:ケズリ 内面:刷毛目	25住-Po.12
2	床	鉢	外面:ヨコナデ・ミガキ・ケズリ 内面:ヨコナデナデ	25住-Po.3	9	床	鉢	外面:ヨコナデ・ミガキ 内面:ヨコナデ	25住-Po.6
3	P.4	鉢	外面:ヨコナデ・ナデ・ケズリ 内面:ヨコナデ・ヘラナデ	25住-Po.8	10	カマド脚	臺	外面:ヨコナデ・ミガキ・ケズリ 内面:ヘラナデ	25住-Po.5
4	第2層	鉢	外面:ヨコナデ・ミガキ・ケズリ 内面:ヨコナデナデ・ミガキ	25住-Po.4	11	第2層	鉢	内・外面:摩滅	25住-Po.7
5	第1層	鉢	外面:ヨコナデ・摩滅 内面:摩滅	25住-Po.1	12	床	鉢	内・外面:ヨコナデ・ナデ	25住-Po.11
6	カマド	高鉢	外面:ミガキ・ヨコナデ 内面:ヘラナデ・ヨコナデ	25住-Po.9	13	P.50面	鉢	外面:ミガキ・ナデ 内面:ヘラナデ	25住-Po.13
7	カマド	鉢	土製模造品 内・外面:オサエ	25住-Po.10					

第42図 第25号住居跡出土土器

粘土質シルトであるが、黄褐色・黒色をした部分もある。住居の壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は床面・カマド・ピットを中心にまとまりをもって出土している。また、住居内堆積土からも出土している。第1層：坏1点・坏口縁部破片2点・甕口縁部破片4点・甕底部破片5点 第2層：坏1点・甕底部破片1点 第3層：高坏坏部破片1点 P₄：坏1点 P₅：甕1点 カマド：高坏1点・坏1点・壺（支脚）1点・甕底部破片2点 床面：坏2点・壺1点・甕2点・甕底部破片2点 層不明：甕底部破片1点

第26号住居跡

〔平面形・重複〕 第26号住居跡は、第25・51号住居跡と重複し、第51号住居跡の壁と堆積土を切って構築しているが、第25号住居跡によって住居北西部分が切られている。住居平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸8.6m・東西軸7.2mである。

〔壁〕 検出された壁はすべて地山で、床面・周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で掘り方底面と一致している。したがって、第51号住居跡と重複している部分はその堆積土、他の部分は地山である。

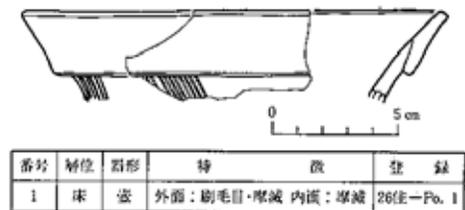
〔周溝〕 周溝は北壁を除き、他の部分の壁直下にめぐっている。版面「~」状で、幅約20cm・深さ約5cmの部分が多いが、南壁では幅が40~50cmとなっている。南壁の周溝は、他の部分の周溝と著しく相違する。このため、南壁の周溝は住居掘り方が南壁付近で周溝状になったものと考えられる。

〔その他の施設〕 住居中央から北東側に偏した部分の床面が焼けており（焼面） 炉と考えられる。この焼面は不整楕円形をしており、その大きさは140×70cmである。この他、柱穴等の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別され、第1・2

層は将棋倒し状、第3層は水平状の堆積状況を示している。第1層は褐色シルト層で住居全体に広く分布している。第2層は褐色ないしは暗赤褐色のシルト層で、北壁周辺に分布している。第3層は木炭・粘土を含むにぶい赤褐色のシルト層で床面に薄く貼りついた状態で堆積しており、生活層の可能性がある。

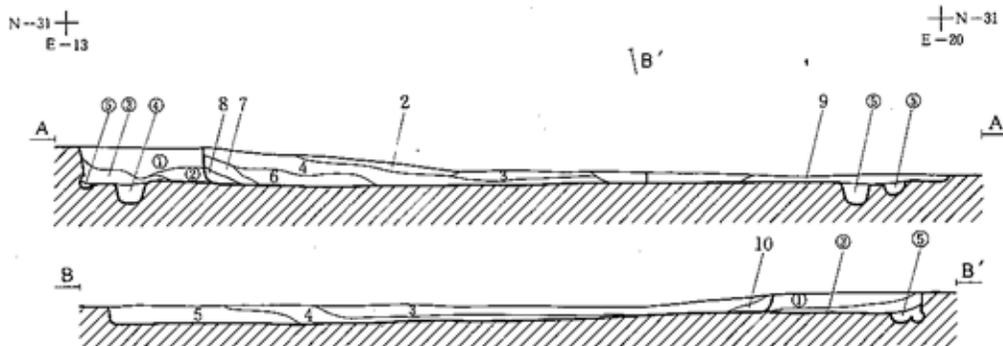
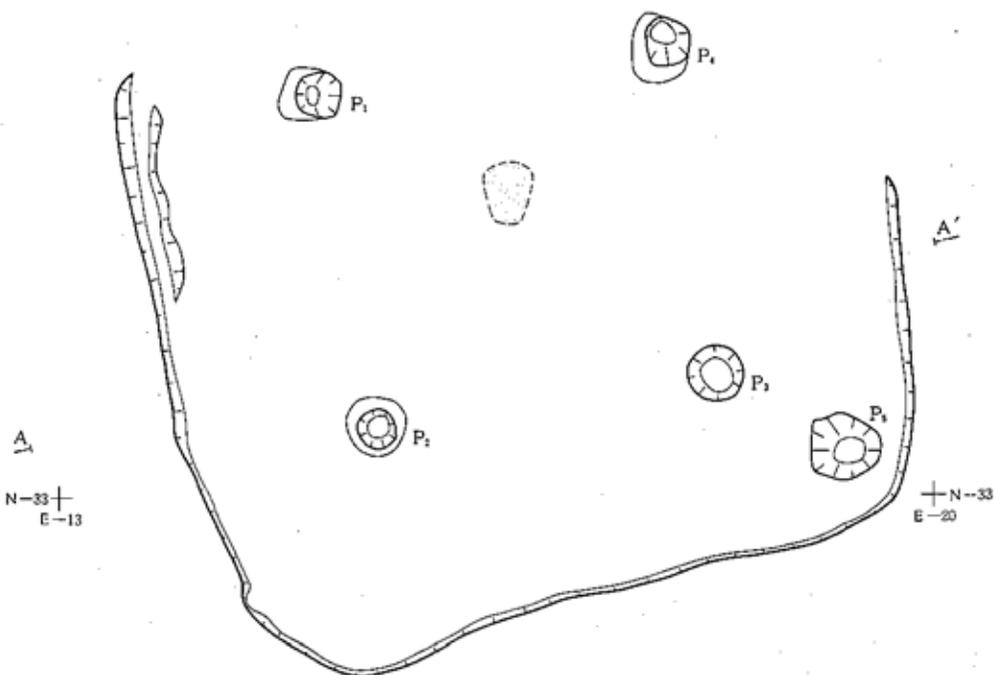
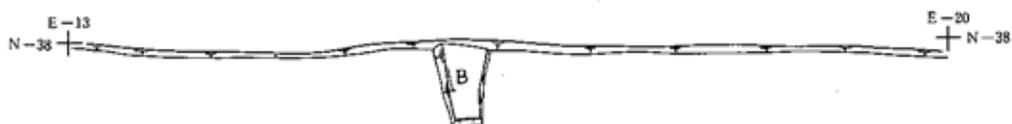
〔遺物の出土状況〕 遺物の出土は少なく、次の通りである。床面：壺1点 住居内：高坏坏部破片1点・甕口縁部破片4点



第43図 第26号住居跡出土土器

第27号住居跡

〔平面形・重複〕 第27号住居跡は第28・29・52・53号住居跡と重複し、それらの堆積土を切っ

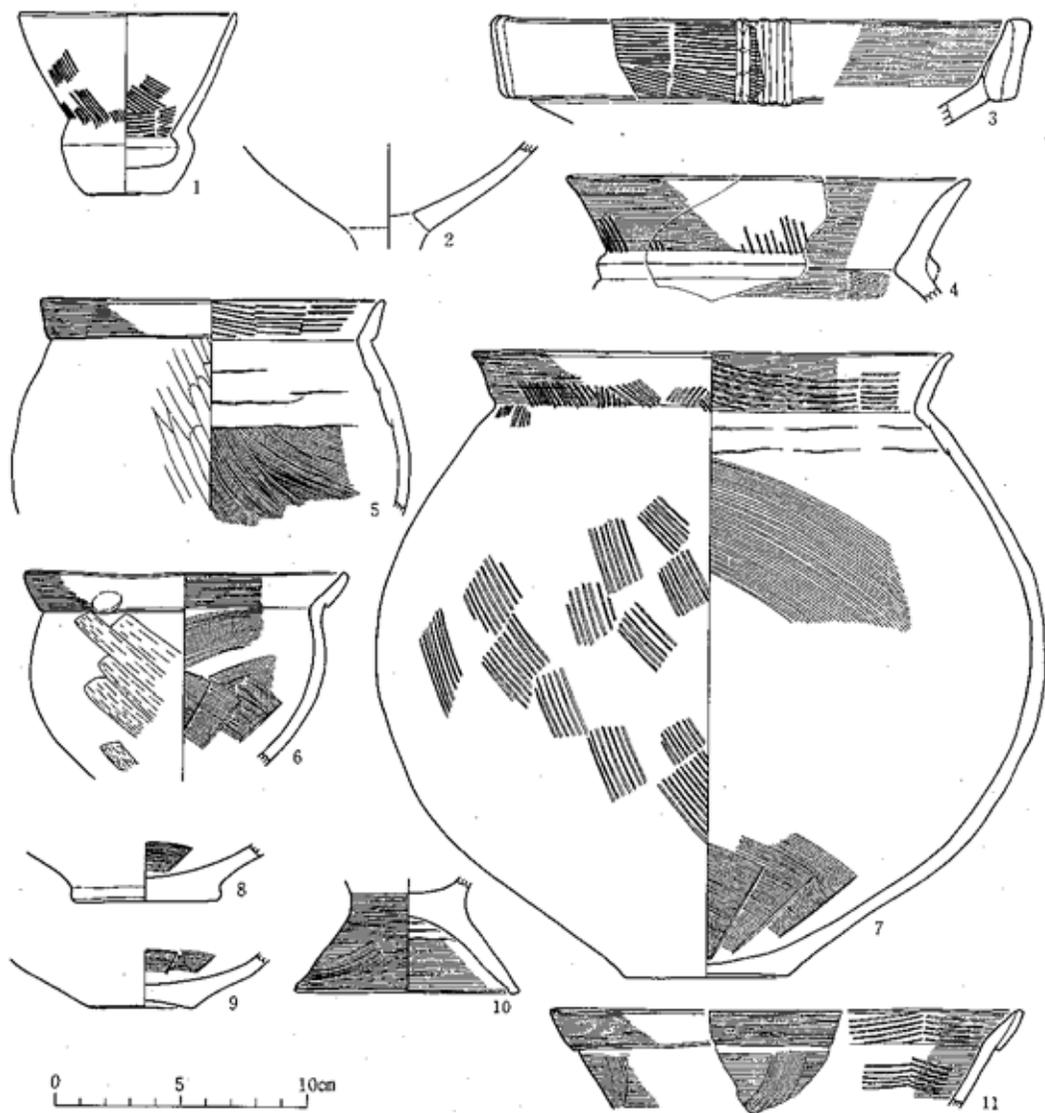


層位	層No	土色	土性	備考
遺 瓦 層	1			
第27号住居跡	2	黄褐色00YR5/3	粘土質シルト	木炭粒少量混入。
	3	暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	木炭・焼土・焼土層中に混入。
	4	暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	木炭少量混入。
	5	暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	木炭少量混入。
	6	にぶい黄褐色00YR5/3	粘土質シルト	黄褐色土がブロック状に入る。
	7	暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	
	8	暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土がブロック状に入る。
	9	暗褐色00YR3/3	シルト	白色砂粒混入。
	10	暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土がブロック状に入る。
	第28号住居跡	①	暗褐色00YR3/3	粘土質シルト
②		暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	木炭・焼土混入。
③		暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土がブロック状に入る。木炭混入。
④		暗褐色00YR3/3	粘土質シルト	木炭多量に混入。
⑤		にぶい黄褐色00YR5/3	粘土質シルト	

第44図 第27号住居跡

て構築している。ただ、北壁の大部分と東壁北側は削り過ぎてしまい、確認することができなかった。検出した東・南・西壁から、平面形は隅丸正方形と推定され、規模は南北軸5.2m・東西軸5.8mである。

〔壁〕 検出された壁は第28・29・52・53号住居跡の堆積土と地山で、床面からほぼ垂直に立ち



番号	層位	器形	特 徴	登録	番号	層位	器形	特 徴	登録
1	P.9	杯	外面：刷毛目・ケズリ 内面：刷毛目・ナデ	27住-Po.1	7	P.9	甕	外面：ヨコナデ刷毛目 内面：ヨコナデ刷毛目・ナゲヘナデ	27住-Po.9
2	第2層	高杯	内・外面：ミガキ・摩滅	27住-Po.2	8	床	甕	外面：ミガキ・摩滅 内面：ヘラナデ	27住-Po.11
3	同 講	甕	外面：刷毛目・刷毛目 内面：ヨコナデ 片塗リ	27住-Po.7	9	P.11	甕	外面：ミガキ 内面：ヘラナデ	27住-Po.10
4	第1-3層	甕	外面：凸条・刷毛目・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	27住-Po.3	10	第2層	土付甕	内・外面：ナデ	27住-Po.8
5	第4層	甕	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：刷毛目・ナゲ・ナデ	27住-Po.5	11	第2層	甕	外面：ヨコナデ・ナゲ 内面：刷毛目・ナデ	27住-Po.6
6	第2層	甕	外面：ヨコナデ・ミガキ・ケズリ 内面：ナゲ・ヘラナデ	27住-Po.4					

第45図 第27号住居跡出土土器

あがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で掘り方底面と一致している。したがって、第29・52・53号住居跡と重複している部分はその堆積土、その他は地山である。

〔柱穴〕柱穴は4個（ $P_1 \sim P_4$ ）検出された。これらの柱穴は、ほぼ住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形となる。

〔周溝〕住居西壁北側直下に周溝状の溝がある。この溝は断面「」状・幅30cm・深さ2～3cmであるが、その続き具合を明確にとらえることができなかった。

〔灰〕住居中央のやや北側に焼面がある。焼面は楕円形で、その大きさは50×40cmである。

〔その他の施設〕住居南東隅に不整楕円形の貯蔵穴状ピットがある。大きさは55×50cmで、深さ50cmである。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は黒褐色粘土質シルトで、住居中央部に分布している。第2層は暗褐色粘土質シルトで住居全体に広く分布している。第3層は暗褐色・褐色・にぶい黄褐色など土色に様々な種類があるが、いずれも層厚・分布など小規模なもので、住居壁を構成する土のブロックを混入する粘土質シルト層である場合が多い。そして、これらの層は住居の壁際を中心として分布している。

〔遺物の出土状況〕遺物は各層・床面・細部（ピット・周溝）から出土しており、特に集中する部分はない。第1層：壺口縁部破片1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 第2層：高坏1点・壺底部破片1点・甕1点・台付甕1点・甕口縁部破片2点・甕底部破片1点・甕1点 第1～3層：壺1点 第4層：甕1点 P_2 ：甕底部破片1点 P_8 ：甕口縁部破片1点 P_9 ：坏1点・甕1点 P_{11} ：甕1点 周溝：壺1点・甕口縁部破片1点 床面：甕1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 層不明：甕口縁部破片1点

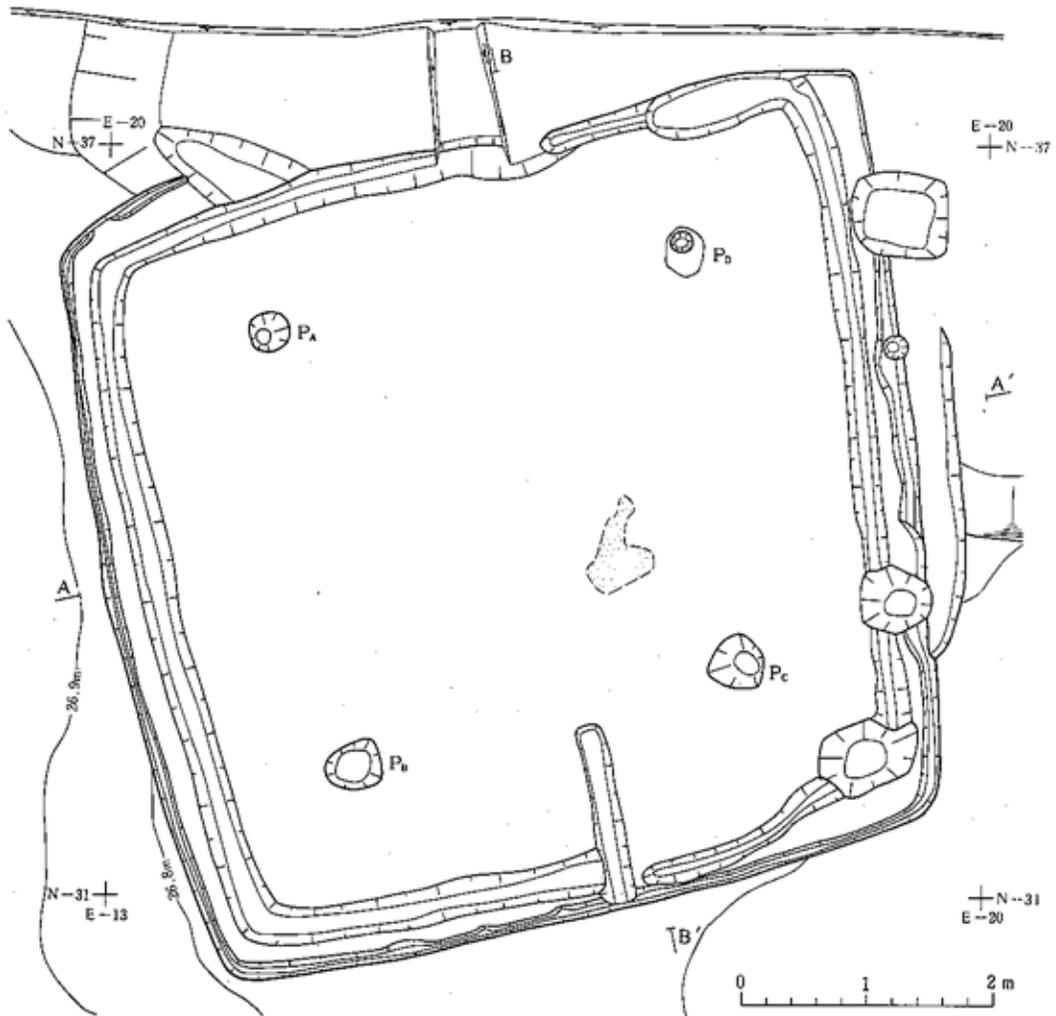
第28号住居跡

〔平面形・重複〕第28号住居跡は第27・29・52・53号住居跡と重複し、第29・52・53号住居跡の堆積土を切って構築しているが、第27号住居跡によって切られている。平面形は隅丸正方形で規模は南北軸6.5m・東西軸6.5mである。

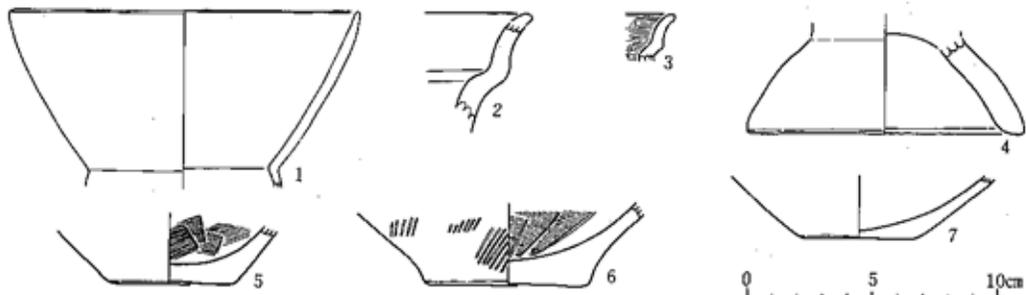
〔壁〕検出した壁は大部分が地山で、第29・52・53号住居跡と重複している部分ではその堆積土である。周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で掘り方底面と一致している。したがって、第29・52・53号住居跡と重複している部分ではその堆積土、その他は地山である。

〔柱穴〕柱穴は4個（ $P_A \sim P_D$ ）検出された。これらの柱穴は住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形になる。



第46図 第28号住居跡



番号	層位	器形	特徴	登録	番号	層位	器形	特徴	登録
1	床	坏	内・外面：ミガキ・丹塗リ	28住-Po. 2	5	床	甃	外面：厚紙 内面：ヘラナデ	28住-Po. 6
2	周溝	釜	外面：ヨコナデ 内面：剥落	28住-Po. 3	6	住居内	甃	外面：刷毛目・ケズリ 内面：ヘラナデ	28住-Po. 7
3	住居内	甃	内・外面：ヨコナデ	28住-Po. 4	7	床	甃	内・外面：厚紙	28住-Po. 8
4	第1層	古瓦	内・外面：厚紙	28住-Po. 5					

第47図 第28号住居跡出土土器

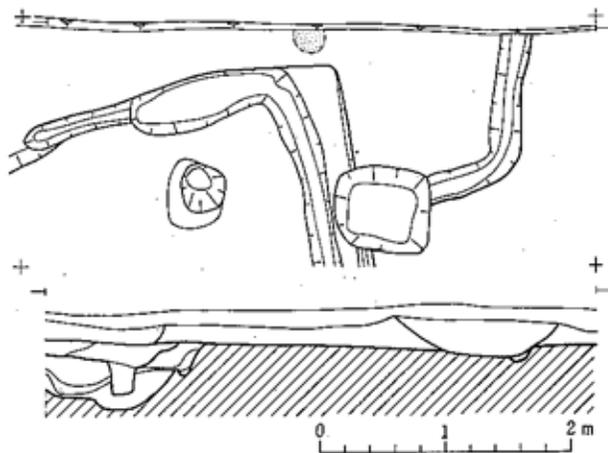
〔周溝〕周溝は壁に沿って二重にめぐっている。壁直下の周溝は全周しており断面「」状で住居壁に幾分喰い込んでいる。内側の周溝は断面「」状をしており、ほぼ全周しているが南辺中央で約30cm程途切れている。内側周溝の途切れた部分には住居壁と直交する溝が入っている。この溝の断面形は内側周溝と同じである。また、内側の周溝は南東隅の部分で貯蔵穴状ピットに接続している。壁直下の周溝は幅約10cm・深さ約5cm、内側の周溝と直交する溝は幅20～30cm・深さ10～15cmで、壁に直交する溝の長さは約80cmである。

〔炉〕住居中央からやや南東に偏った部分の床面が焼けている（焼面）。この焼面は不整形で、大きさは80×50cmである。

〔その他の施設〕住居南東隅の部分に貯蔵穴状ピットがある。やや歪んだ隅丸長方形で、大きさは80×50cm・深さ65cmである。このピットは前述のように内側の周溝と接続している。

〔堆積土〕住居内堆積土は第27号住居跡と重複している部分にはなく、南壁と西壁付近に残っているだけである。堆積土は2層残っており、第1層は褐色シルト、第2層は焼土木炭を含む赤褐色シルトである。第2層は木炭・焼土を含み床面上に堆積していることから火災によるものとも考えられるが、残存部分が少ないためはっきりしない。

〔遺物の出土状況〕遺物はあまり多くないが、比較的床面や周溝から出土している。第1層：台付甕1点 周溝：壺1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 床面：坏1点・甕2点 層不明：壺？1点・器台受部破片1点・甕1点



第48図 第29号住居跡

第29号住居跡

〔概要〕第29号住居跡は第28・52号住

居跡と重複し、第52号住居跡の堆積土を切っているが、第28号住居跡によって切られている。また、住居跡の大部分は調査区外にのびているため、実際に調査を行なうことができたのは、東南隅の部分である。調査を行なった部分には断面「」状幅約20cm・深さ5～8cmの周溝が検出され、その内側180cmの所に炉と推定される焼面（調査区外にのびる）があった。住居内堆積土は1層であったが、その特徴・層相については注記を紛失したため不明である。また遺物は出土していない。

第30号住居跡

〔平面形・重複〕 第30号住居跡は周溝が三重にめぐり、柱穴の切り合いもある。そして、炉と考えられる焼面も上・下二面ある。したがって、この第30号住居跡は改築による拡張を行なっているものと推定される。また、住居東側は削平を受け失なわれているが、残存部分から隅丸方形と推定される。規模は南北軸6.5mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で、掘り方底面との間に褐色粘土質シルトを敷きつめて貼り床としている。また、この床面の上に一部貼り床を行なっている部分がある。この部分的貼り床下からも後述する焼面が検出された。

〔柱穴〕 住居内から数個のピットが検出されたが、配置関係から柱穴と推定されるのは西側に位置する $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_5$ の4個である。これらの柱穴には切り合い ($P_4 \rightarrow P_2$) が認められ、新旧二時期の存在が知られる。しかし、これら西側の柱穴と組みあうべき東側の柱穴は検出することができなかった。なお、西側柱穴における柱間は、 $P_4 \cdot P_5$ が2.6m、 $P_2 \cdot P_3$ が3.6mである。

〔周溝〕 三重にめぐる周溝の中で外側のものは西辺、中央のものは北・西・南辺、内側のものは西辺南側から南辺に沿ってみられる。また、周溝および南辺に直溝する形で南北の溝が長さ140cmにわたってみられる。これらの周溝・直交溝は断面「」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。

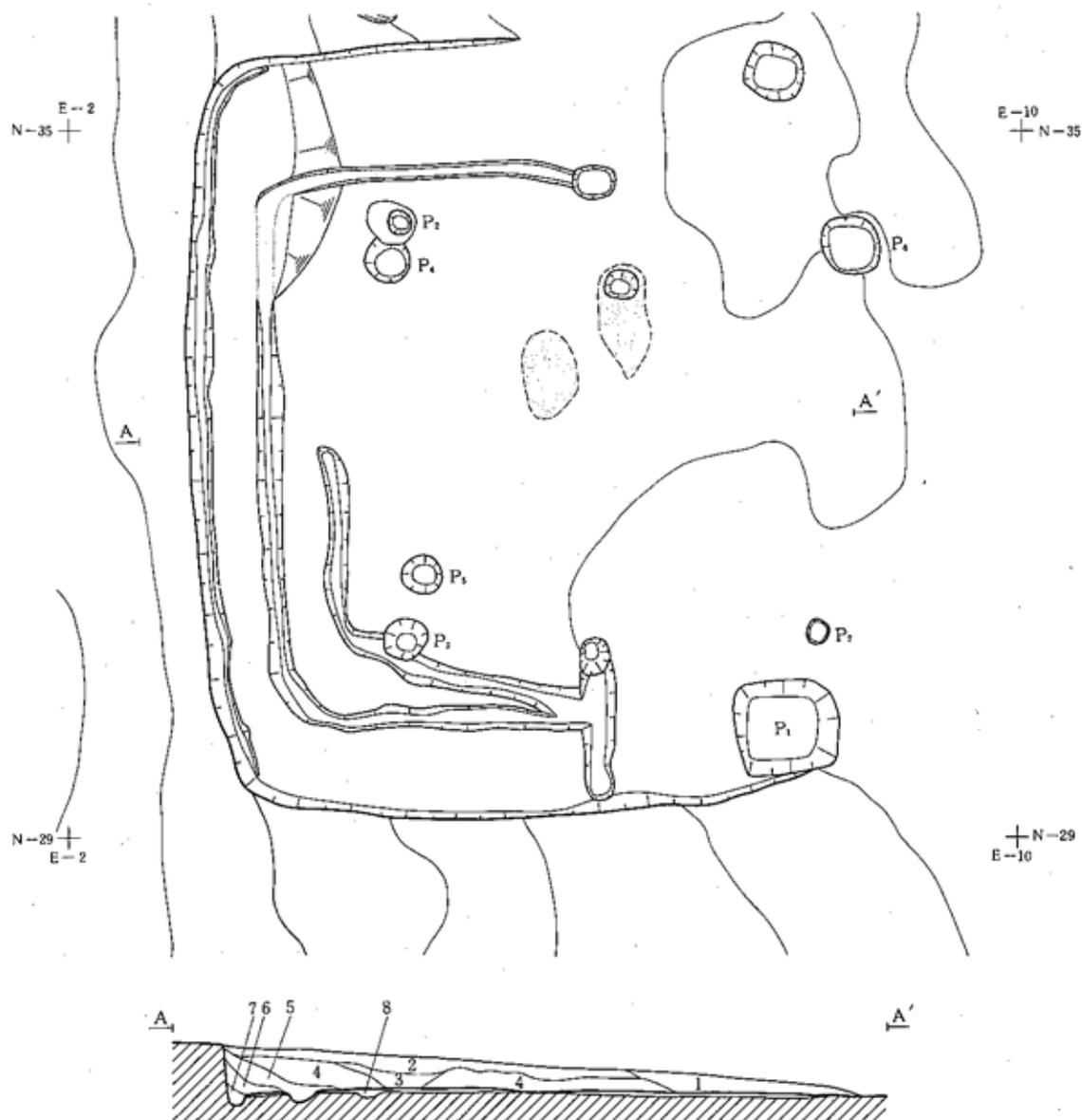
〔炉〕 炉は二ヶ所にある。いずれも住居中央からやや北東に偏った部分である。西側の焼面は楕円形で大きさは70×50cm、東側に位置し、貼り床下から検出された焼面は不整楕円形で大きさは100×40cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居東南隅と推定される部分に正方形の貯蔵穴状ピット (P_1) がある。規模は南北軸80cm・東西軸85cm・深さ35cmである。 P_1 は外側の南壁に接する位置にあることから、拡張後の住居に伴う施設と推定される。内部には僅かに炭化物を含む褐色 (7.5YR4/4) 粘土質シルトが堆積していた。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色粘土質シルト層で、最上層として住居全体に分布している。第2層は暗褐色粘土質シルト層で、住居中央部に分布している。第3層は褐色粘土質シルト層で、住居の壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は床面・細部 (貯蔵穴状ピット・柱穴) に量は多くないがまとまってみられる。

第1層：器台受部破片1点・甕1点・甕口縁部破片 第2層：坏 (土製模造品) 1点 第3層：甕口縁部破片1点 P_1 ：甕or壺1点 P_2 ：壺2点 P_7 ：坏1点 床面：高坏脚部破片1点・坏口縁部破片1点・壺 (土製模造品) 1点・甕1点・甕口縁部破片1点・甕底部破



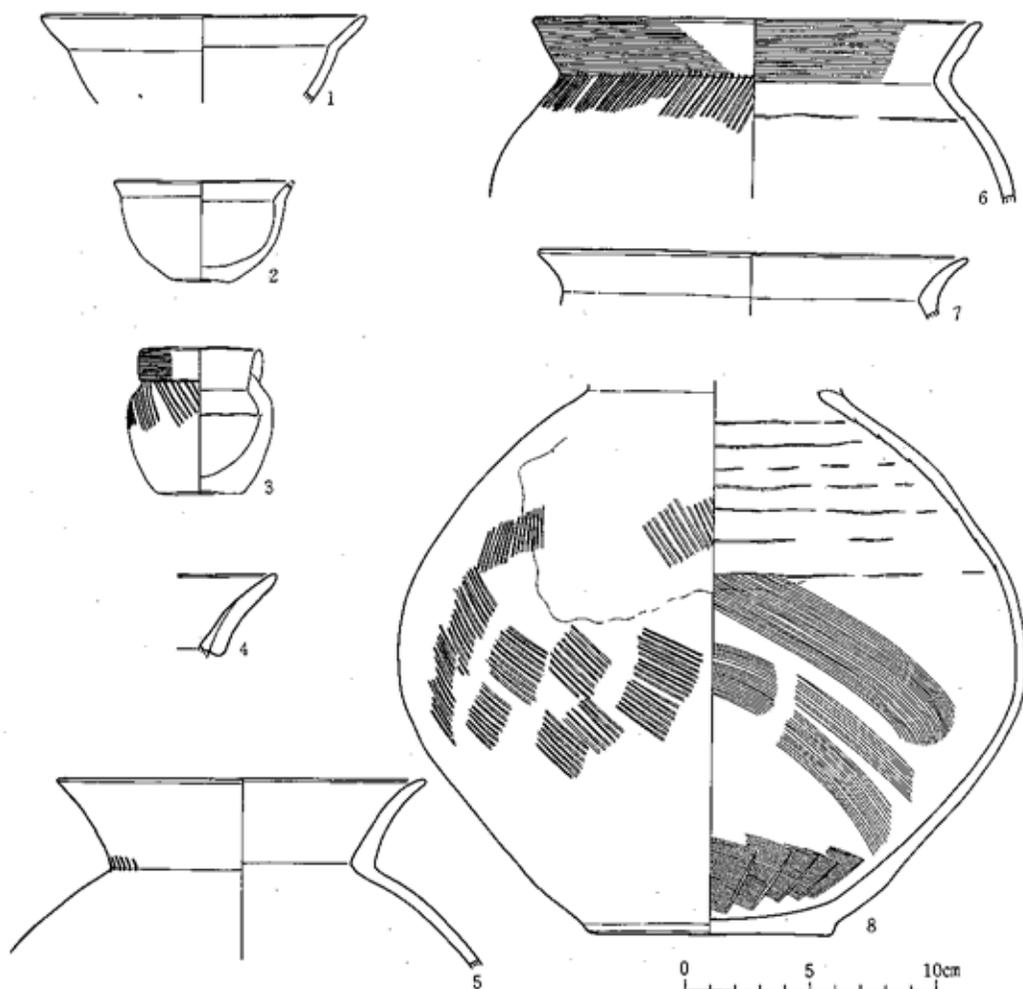
層位	層No	土色	土性	備考
第1層(第1層)	1	褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	地山の黄褐色(10YR5/6)粘土を含む。
	2	褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	
第2層(第2層)	3	暗褐色(10YR3/6)	粘土質シルト	
	4	暗褐色(10YR3/6)	粘土質シルト	
第3層(第2層)	5	褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	炭灰物を微量含む。
	6	褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	
第4層(第2層)	7	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	しまりがある。
	8	褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	

第49図 第30号住居跡

片1点 住居内：甕底部破片1点

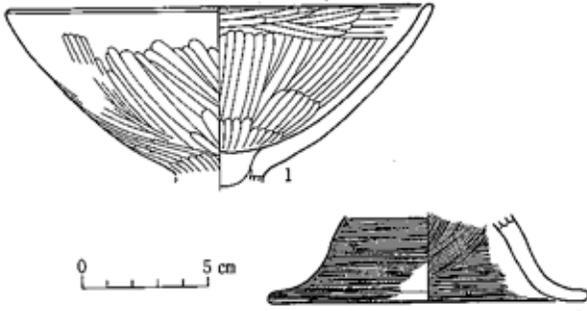
第31号住居跡

〔概要〕第31号住居跡は西壁から南壁西側部分を確認したが、その他の部分は調査区外にのびるか削平によって失われていた。検出された部分から、平面形は方形と推定されるが、規模等は不明である。検出された壁は地山で床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。周溝は断面「」状で、幅約15cm・深さ約3cmである。残存部分の床面はほぼ平坦である。この他の施設については確認できなかった。



番号	層位	器形	特徴	登録	番号	層位	器形	特徴	登録
1	P ₁	环	外面：ミガキ 内面：摩滅	30住-Po. 7	5	P ₁	甕	外面：刷毛目・摩滅 内面：摩滅	30住-Po. 2
2	第2層	环	土製模造品？ 内・外面：摩滅	30住-Po. 6	6	床底	甕	外面：ヨコナゲ・刷毛目 内面：ヨコナゲ	30住-Po. 1
3	床底	甕	土製模造品 外面：ヨコナゲ・刷毛目 内面：不明剥離	30住-Po. 5	7	第1層	甕	内・外面：摩滅	30住-Po. 8
4	P ₁	甕	内・外面：摩滅	30住-Po. 9	8	P ₁	甕or甕	外面：刷毛目・ミガキナズリ 内面：ナゲヘラナゲ	30住-Po. 3

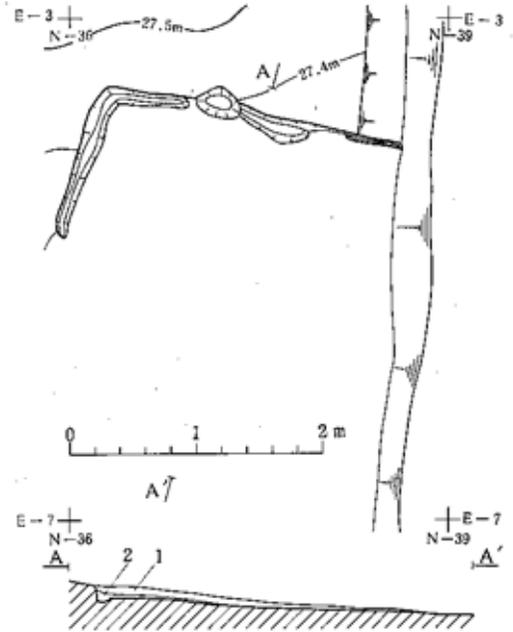
第50図 第30号住居跡出土土器



番号	層位	器形	特 徴	登 録
1	床	高 坏	外面：ヨコナダ・ミガキ 内面：ミガキ	31住-Po. 2
2	床	高坏?	内・外面：ヨコナダ・ナダ 丹塗り	31住-Po. 1

〔堆積土〕住居内堆積土は2層あり、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色粘土質シルト層で、住居残存部分のほぼ全体に分布している。第2層は褐色粘土質シルト層で、壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕遺物は床面から高坏2点、住居内から中型壺口縁部破片1点が出土している。



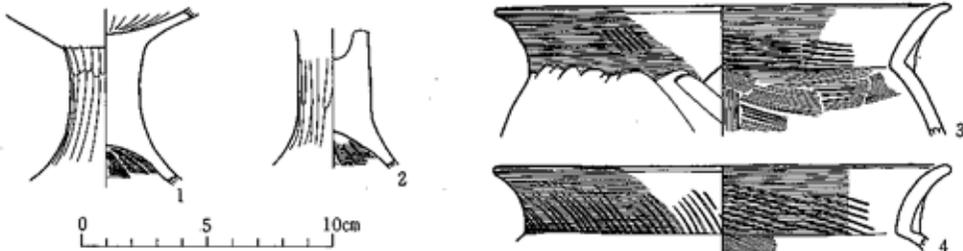
層位	番号	土 色	土 性
第1層	1	暗褐色(00YR4)	粘土質シルト
第2層	2	褐色(10YR4)	粘土質シルト

第51図 第31号住居跡

第32号住居跡

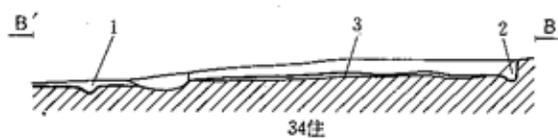
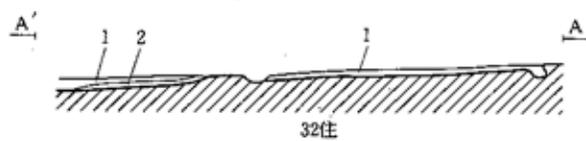
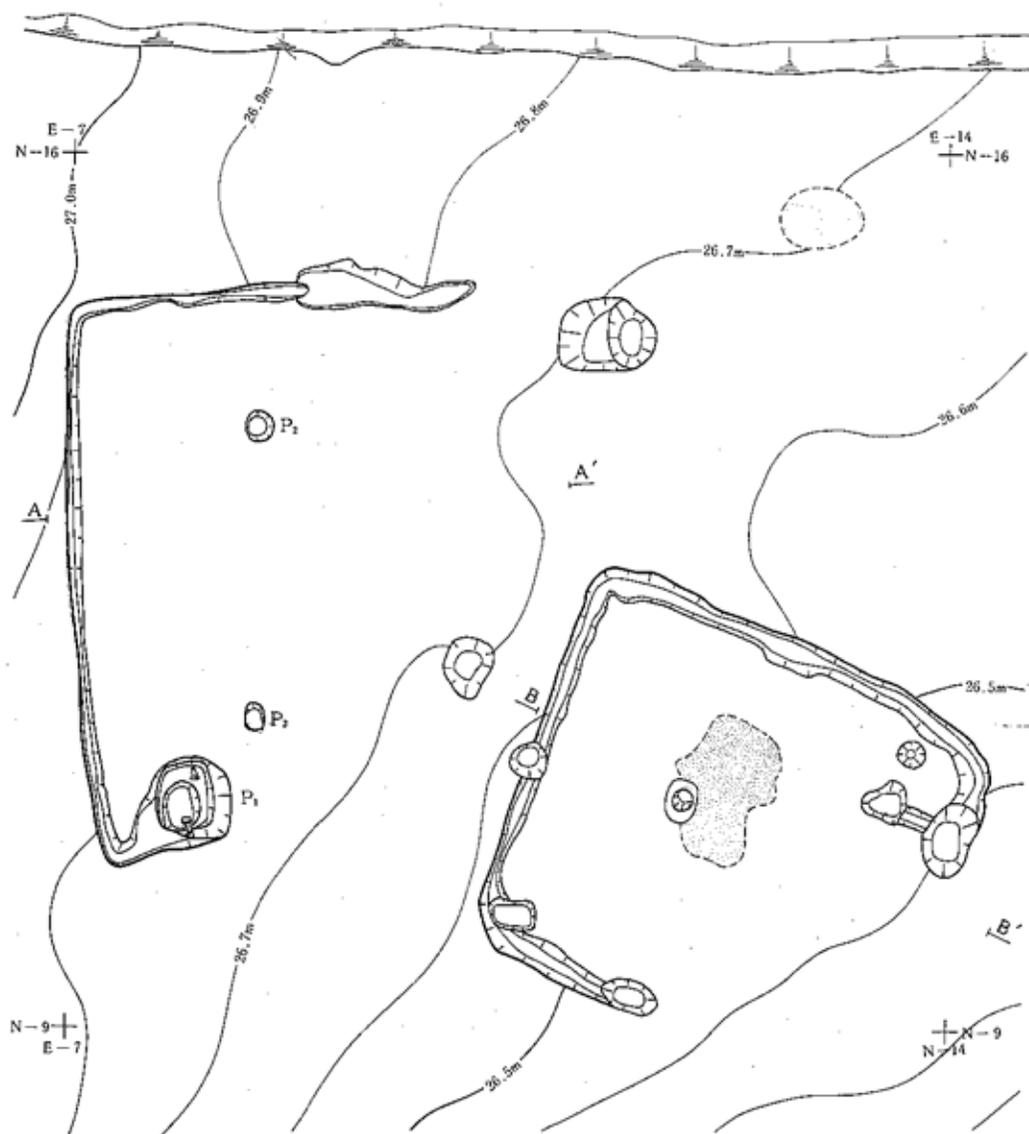
〔平面形・重複〕第32号住居跡は第34号住居跡と重複しているが、重複部分の堆積土が薄く、切り合いは不明確であった。また、住居西側は残っていたが、東側は削平されていた。残存部分から住居平面形を推定すると方形である。規模は南北軸4.4mである。

〔施設等〕床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。周溝は壁直下にめぐり、断面は「S」状で、幅約10cm・深さ3～5cmである。壁は地山である。住居推定範囲内から数個のピットが検出されているが、配置関係から確実に柱穴と推定できるものはない。しいてあげ



番号	層位	器形	特 徴	登 録	番号	層位	器形	特 徴	登 録
1	貯 穴	高坏	外面：ミガキ 内面：ミガキ・ヘラナダ	32住-Po. 1	3	床	甍	外面：ヨコナダ・ヘラナダ? 内面：ヨコナダ・研団	32住-Po. 3
2	貯 穴	高坏	外面：ミガキ 内面：ヘラナダ	32住-Po. 2	4	床	甍	内・外面：ヨコナダ・刷毛目	32住-Po. 4

第52図 第32号住居跡出土土器



第53图 第32・34号住居跡

ればP₂・P₃であるが、結んだ線は住居西辺にやや斜行する。住居南西隅に貯蔵穴状ピット（P₁）がある。隅丸長方形で、底面は軽い段を持つが丸底である。大きさは長さ70cm・幅60cm・深さ25cmである。内部には焼土・木炭を含む暗褐色粘土質シルトが堆積している。上段底面には土師器高坏が2個体ついていた。この他、炉等の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内に残っていた堆積土は薄く、堆積状況を知るには至らなかった。堆積土は上層が暗褐色粘土質シルト、下層が黒褐色粘土質シルトである。

〔遺物の出土状況〕遺物は量的に多くないが、床面・貯蔵穴状ピットなどからまとまりをもって出土している。P₁：高坏2点 P₄：甕口縁部破片1点 床面：高坏脚部破片1点・甕2点・甕底部破片1点

第34号住居跡

〔平面形〕住居東側から南東隅の部分は削平されているが、その他の部分は残っている。平面形は隅丸正方形で、南北軸3.2m・東西軸3.5mである。

〔壁〕検出された壁は地山で、周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

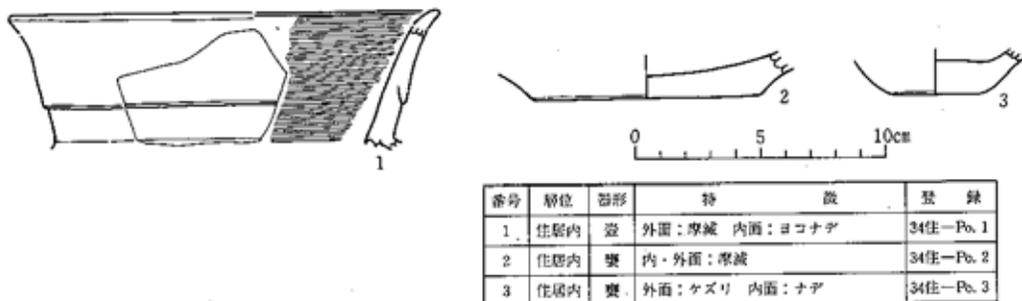
〔床面〕床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔周溝〕周溝は住居壁直下にめぐっている。断面は「」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。

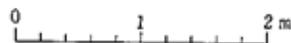
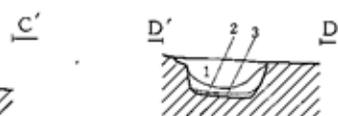
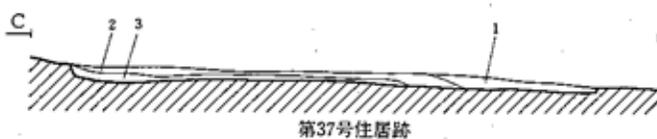
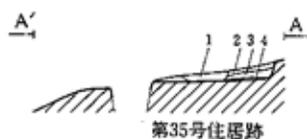
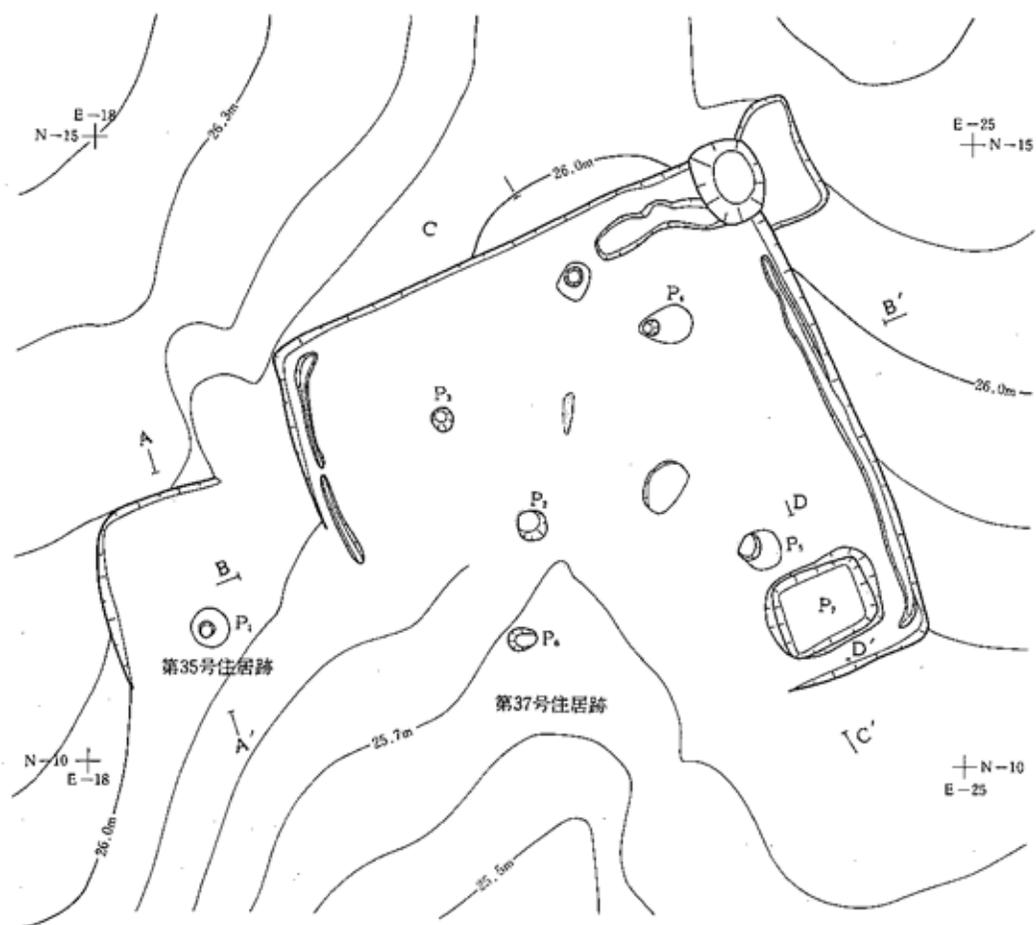
〔炉・その他の施設〕住居床面のほぼ中央に焼面があり炉と考えられる。この焼面は不整楕円形をしており、大きさは長さ110cm・幅70cmである。その他・柱穴等の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層にわかれ、第1・2層は将棋倒し状の堆積状況を示し、第3層は床面に薄く貼りついた堆積状況を示している。第1層は暗褐色粘土質シルトで住居全体に分布している。第2層は黒褐色粘土質シルトで、壁沿に狭い分布をしている。第3層は焼土・木炭を若干混入する暗褐色粘土質シルトで、床面上に分布し、生活層の可能性はある。

〔遺物の出土状況〕遺物の出土は、量的に少なく、また出土状況に規則性もみられない。床面：甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 層不明：壺1点・甕2点



第54図 第34号住居跡出土土器



層位	層No	土色	土性	備考
第1層(第1層)	1	褐色(7.5YR3)	砂質シルト	固くしまり、粘性なし。
第2層(第1層)	2	褐色(7.5YR3)	砂質シルト	固くしまり、木炭・粘土含む。
第3層(第2層)	3	褐色(7.5YR3)	砂質シルト	固くしまり、粘性なし。木炭・粘土を極少量含む。
P ₁	第1層	暗褐色(7.5YR3)	シルト	木炭含む。地山上下部程多く含む。
	第2層	暗褐色(7.5YR3)	シルト	焼土・木炭含む。
	第3層	褐色(7.5YR3)	シルト	

第55図 第35・37号住居跡

第35号住居跡

〔概要〕 第35号住居跡は第37号住居跡と重複しているが、堆積土が薄く、新旧の切り合いを確認することはできなかった。また、この住居跡で残存していたのは北東隅の部分と北側柱穴2個（ $P_1 \cdot P_2$ ）で、その他は削平されて失なわれていた。残存していた北西隅部分と2個の柱穴から、住居平面形は隅丸方形と推定される。柱穴（ $P_1 \cdot P_2$ ）を結んだ線は住居北辺と平行で、その柱間は2.7mである。その他、炉・周溝等の施設は検出されなかった。

〔堆積土・遺物の出土状況〕 住居内堆積土が残っていたのは住居北西隅の一部に限られるが、2層の堆積がみられた。これらの堆積土は第1層が暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト（No.2）、第2層が黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト（No.3・4）で将棋倒し状の堆積状況をしている。遺物はピットから甕口縁部破片が1点出土しているだけである。

第37号住居跡

〔平面形・重複〕 第37号住居跡は、第35号住居跡の項で述べたように、重複しているが、新旧の切り合いについては確認できなかった。なお、住居南西隅は削平されて失なわれている。残存部分から住居平面形は正方形と推定され、規模は南北軸4.2m・東西軸4.1mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩壊している部分が多い。

〔床面〕 床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴は4個（ $P_3 \sim P_6$ ）検出された。これらの柱穴はほぼ住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形とほぼ相似形である。柱間は南北軸2.0m・東西軸1.8mである。

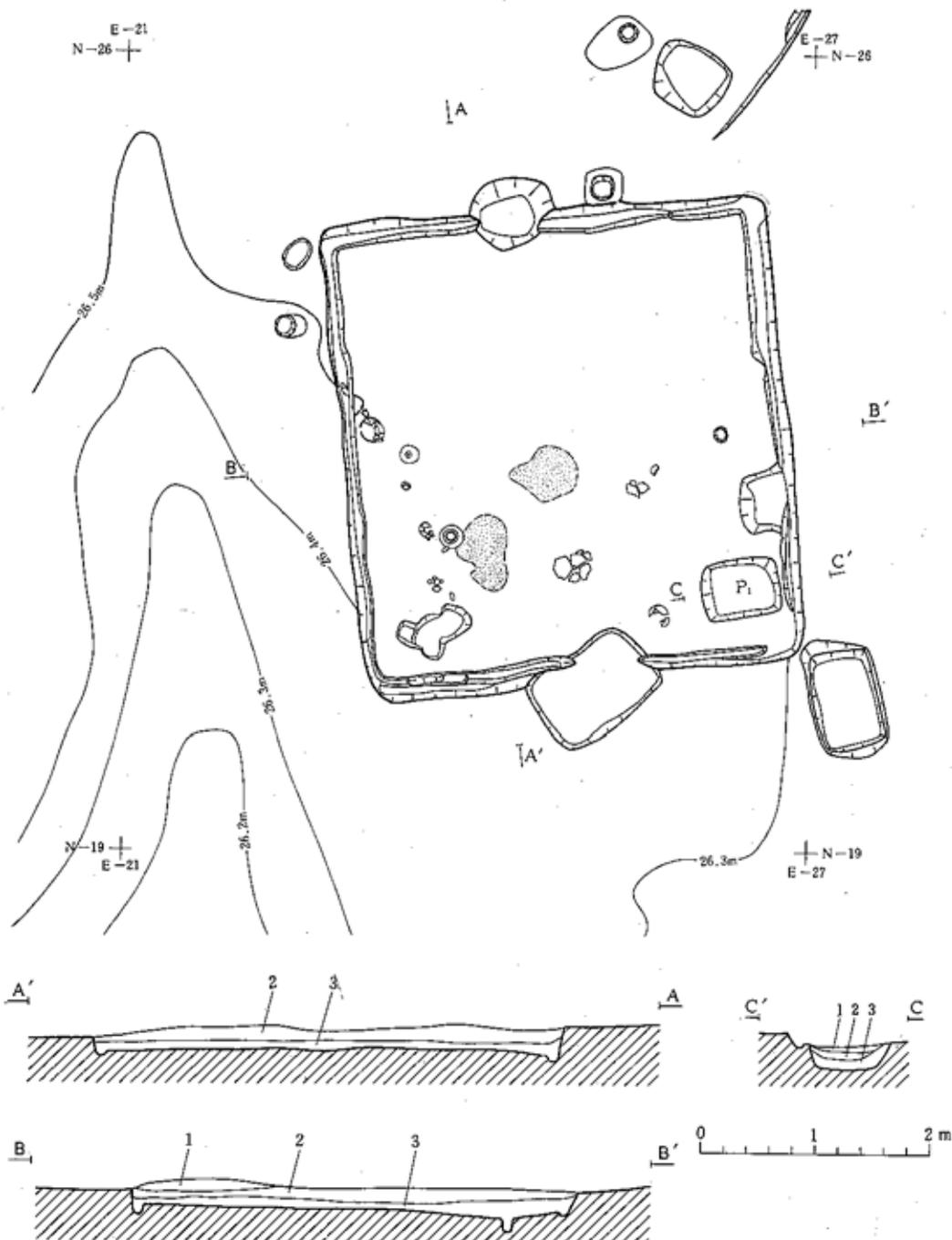
〔周溝〕 東壁直下と西壁直下付近で周溝が検出された。断面「」状で幅15～20cm・深さ約5cmである。

〔炉〕 住居中央からやや北に偏った部分に炉と考えられる焼面が検出された。東側が谷状地形によって削平され、正確な形・大きさは不明である。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居南東隅の部分から貯蔵穴状ピット（ P_7 ）が検出された。 P_7 は上端が幾分崩れているが隅丸長方形で、大きさは、長さ80cm・幅60cm・深さ30cmである。内部の堆積土は暗褐色ないしは褐色シルトで3層に細別され、水平状に近い堆積状況をしている。住居北東隅の楕円形のピットは、住居に伴う施設か否か不明である。

〔堆積土〕 住居内堆積土はいずれも褐色シルトないしは砂質シルトで、3層に細別され、その堆積状況は将棋倒し状である。第1層は住居東側に、第2層は中央部から西側に、第3層は床面中央部から西壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は少量で、第1層から高坏脚部破片1点・坏底部破片1点・甕口縁部



住居内堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(10 YR 3/4)	砂質	
第2層	2	褐色(7.5 YR 3/4)	砂質	若干の焼土・木炭がまじる。
	3	褐色(7.5 YR 3/4)	砂質	焼土・木炭を含む

貯蔵穴状ビット

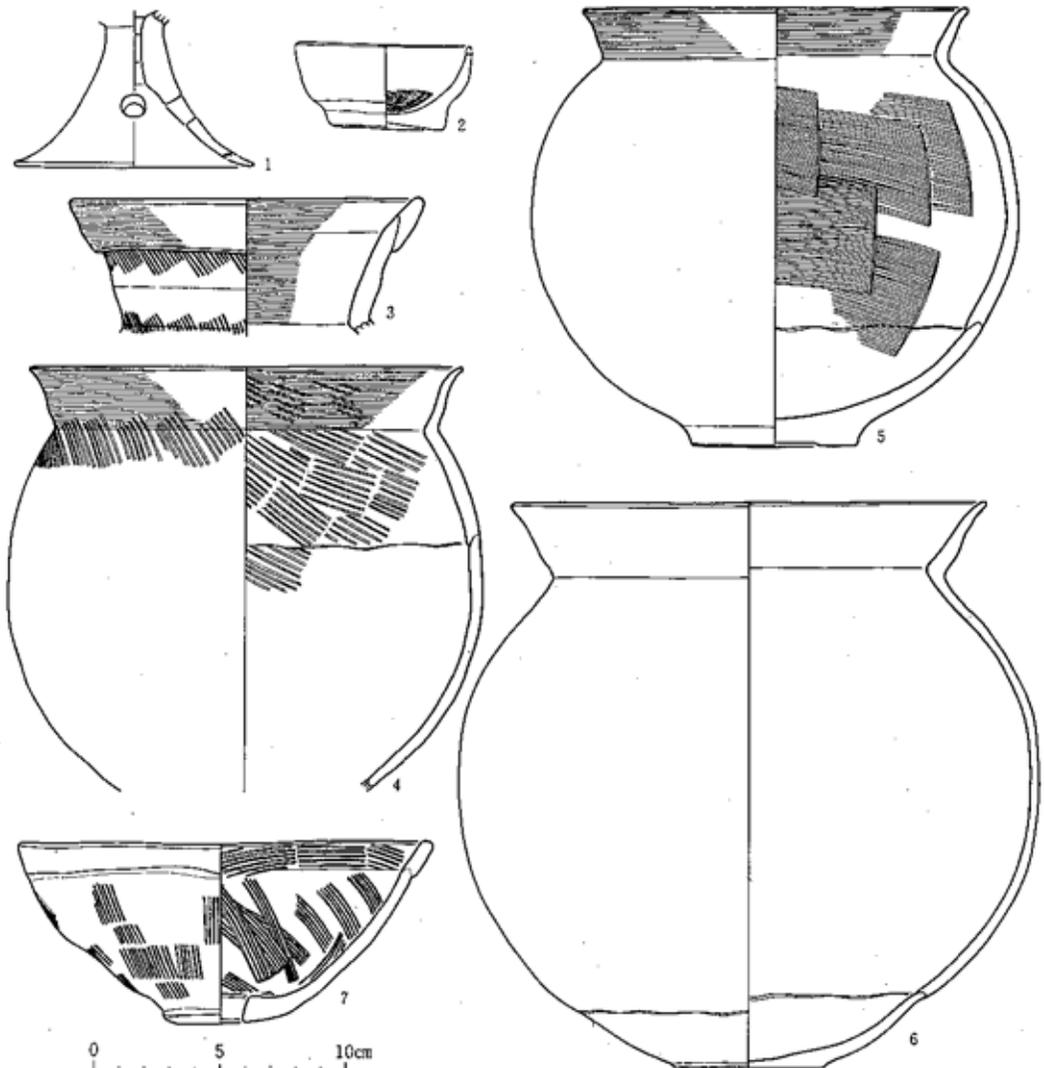
層位	層No	土色	土性
第1層	1	褐色(7.5 YR 3/4)	シルト?
	2	褐色(7.5 YR 3/4)	
第2層	3	暗褐色(5 YR 3/4)	シルト?

第56図 第38号住居跡

破片1点・甕底部破片1点が出土しているだけである。

第38号住居跡

〔平面形・重複〕 第38号住居跡は第4・5号住居跡・第1焼土遺構と重複し、第1焼土遺構によって切られている。しかし、第4・5号住居跡とは重複部分の堆積土が薄く、切り合いは確認することができなかった。住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸3.9m・東西軸3.8mである。



番号	種別	器形	特徴	登録	番号	種別	器形	特徴	登録
1	住居内	器台	内・外面：厚絨	38住-Po. 4	5	床	壁	外面：厚絨 内面：ヨコナデ・ヘラナデ	38住-Po. 7
2	床	坪	外面：オサエ 内面：ヘラナデ	38住-Po. 3	6	床	壁	内・外面：厚絨	38住-Po. 5
3	住居内	壺	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ヨコナデ	38住-Po. 2	7	床	壁	外面：オサエ・刷毛目・ケズリ 内面：刷毛目	38住-Po. 1
4	床	壁	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ヨコナデ・刷毛目	38住-Po. 6					

第57図 第38号住居跡出土土器

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴は検出されなかった。

〔周溝〕 住居南東隅の部分を除いて壁直下のほぼ全域に周溝がめぐっている。周溝の断面は「」状で、幅10～25cm・深さ2～8cmである。

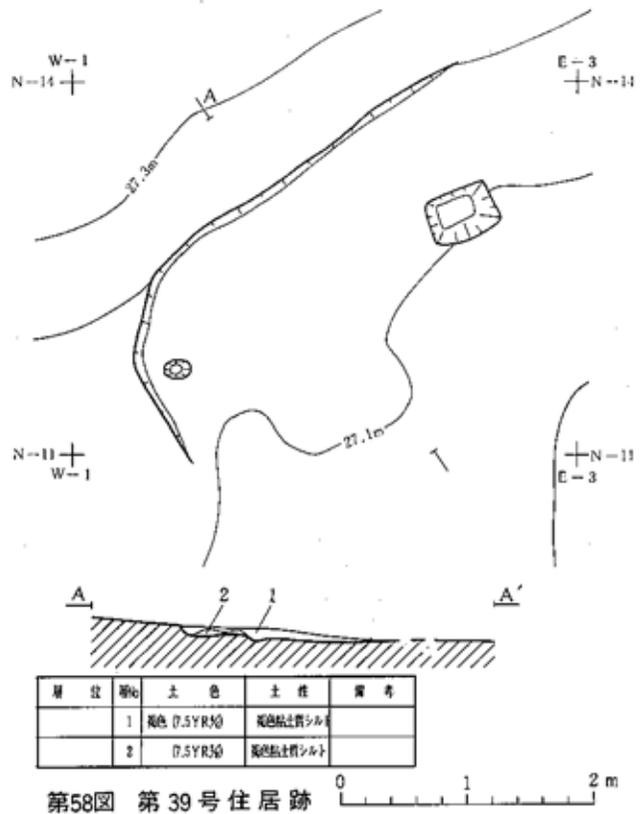
〔炉〕 住居中央部と、南西に偏った部分の床面が2ヶ所焼けており（焼面）、炉と考えられる。焼け面は2ヶ所とも不整形で、その大きさは中央部のものが60×50cm、南西側のものが70×40cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居南東隅の部分に貯蔵穴状のピット（P₁）がある。平面形は長方形で、底面は平坦、壁は緩やかに立ちあがる。規模は長軸70cm・幅52cm・深さ22cmである。

〔堆積土〕 住居内堆積土は2層に大別され、その堆積状況は将棋倒し状というよりは水

平状に近い。第1層は暗褐色の砂質土で、上部に部分的に分布している。第2層は褐色の砂質土で、焼土・木炭を含み、住居内全体に堆積している。床面に近い部分では、焼土・木炭の量が多い。

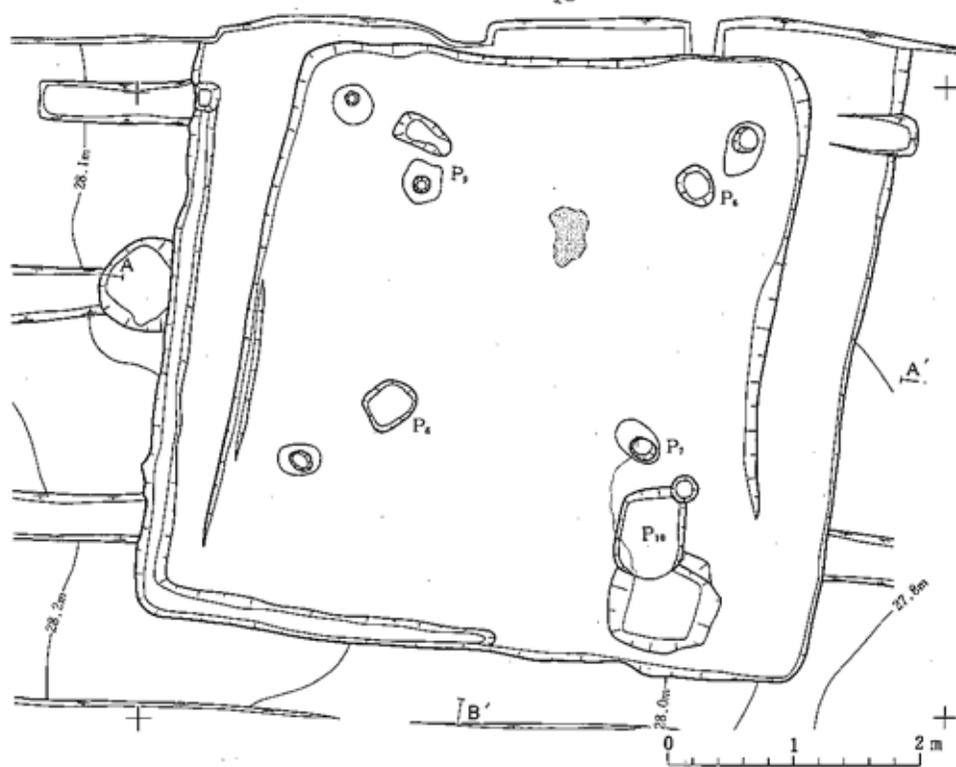
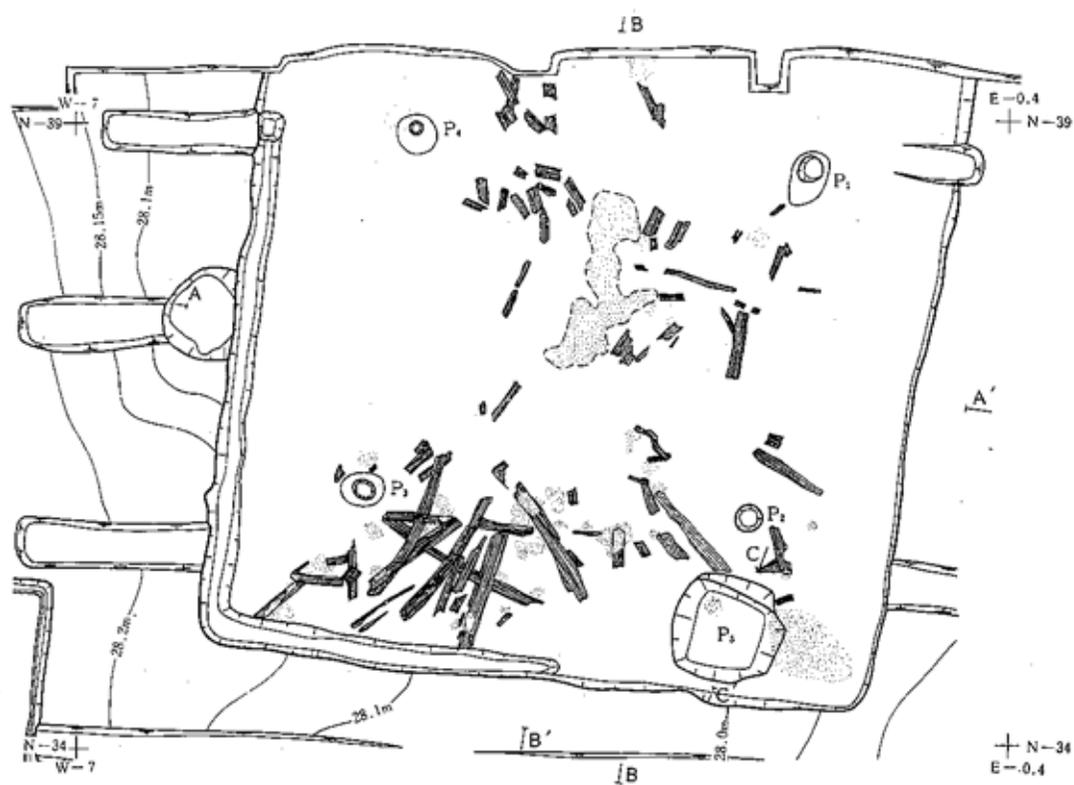
〔遺物の出土状況〕 遺物は床面からまとまって出土している。第2層・層不明としたものも、床面に近い位置から出土している。第2層：高坏脚部破片1点 P₁：甕底部破片1点 床面：坏1点・甕3点・甑1点 層不明：器台1点・壺1点・甕口縁部破片2点・甕底部破片1点



第58図 第39号住居跡

第39号住居跡

〔概要〕 第39号住居跡は大部分が削平を受け、北壁と北西隅の部分だけが残っていた。残存部分から住居平面形は隅丸方形と推定されるが、規模等は不明である。検出された壁は地山で、緩やかに立ちあがる。床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。周溝・柱穴等の施設は検出されなかった。住居東側のピットは平面形が長方形で長さ55cm・幅40cm・深さ40cm



第59图 第40・41号住居跡

で、貯蔵穴状をしているが、さだかでない。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は褐色粘土質シルトで、場所によって幾分色調が異なる。遺物は出土しなかった。

第40・41号住居跡

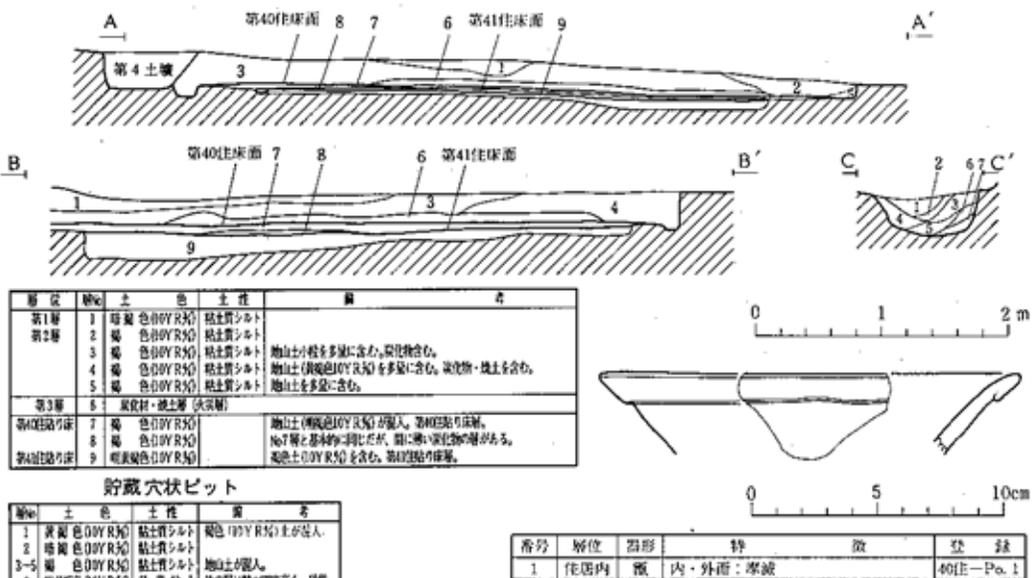
〔平面形・重複〕第40・41号住居跡は重複しているが、両者とも平面形がほぼ相似形で、対角線も共通していることから、改築による拡張が行なわれたもの(第41号住→第40号住)と推定される。平面形は、隅丸正方形で、規模は第40号住居跡が南北軸5.6m(北壁が調査区外のため柱穴配置などから推定)・東西軸5.4m、第41号住居跡が南北軸4.2m・東西軸3.9mである。

〔壁〕第40号住居跡の壁は地は住居掘り方に土を埋め、貼り床したものである。第41号住居跡の壁は改築の際に取り壊され、住居掘り方と床面が残っていた。

〔床面〕第41号住居跡の床面は住居掘り方に土を埋め、貼り床したものである。第40号住居跡の床面は、さらにその上に貼床をしたものである。

〔柱穴〕第40号住居跡の柱穴は4個(P₁~P₄)ある。これらの柱穴は住居平面形の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形である。柱間は、東西軸・南北軸とも3mである。第41号住居跡の柱穴も4個(P₆~P₉)あり、第40号住居跡の柱穴と同様住居平面形の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形である。柱間は、東西軸・南北軸とも2mである。

〔周溝〕第40号住居跡の西壁と南壁(西側)直下に、断面「」状の周溝がある。周溝の幅は約20cmで、深さは約5cmである。第41号住居跡では明確な周溝は検出されなかった。



第60図 第40・41号住居跡

〔炉〕住居中央部から東側に偏った部分の床面が焼けている。焼面の形は不整形で、長さ150cm・幅60cmである。この範囲の中で2ヶ所が特に強く焼けている（北端40×30cm・南端40×20cm）。第41号住居跡の床面もほぼ同じ場所が焼けている。焼面の形は不整形で、長さ50cm・幅30cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕第40・41号住居跡とも貯蔵穴状ピットは住居南東隅の部分にある。第40号住居跡の貯蔵穴状ピット（P₅）は隅丸長方形で、南北軸70cm・東西軸90cm・深さ40cmである。内部には地山の土を混入した褐色ないしは黄褐色土が堆積していた。第41号住居跡の貯蔵穴状ピット（P₁₀）は、隅丸長方形で南北軸80cm・東西軸55cm・深さ12cmである。

〔堆積土〕第40号住居跡の堆積土は3層に大別される。第1層は暗褐色粘土質シルトで、住居中央部を中心として分布している。第2層は褐色粘土質シルト層で、住居全体に広く・厚く分布している。地山土の混入の割合によって4層に細分され、壁際程その混入量が多い傾向にある。第3層は、焼土・木炭層で、床面を覆う形で堆積している。また、炭化材も多く、住居中央に向って放斜状にならんでいる。これらは火災によって上部構造が焼け落ちたものと推定される。

〔遺物の1出土状況〕遺物はいずれも小破片で、出土状況に規則性はみられない。第40号住居跡第1層：甕1点 床面：甕底部破片1点 層不明：甕底部破片2点 第41号住居跡：甕口縁部破片1点・甕底部破片1点

第42号住居跡

〔平面形・重複〕住居平面形は四隅の角張る正方形で、他の遺構との重複はない。規模は、南北軸6.00m・東西軸5.90mである。

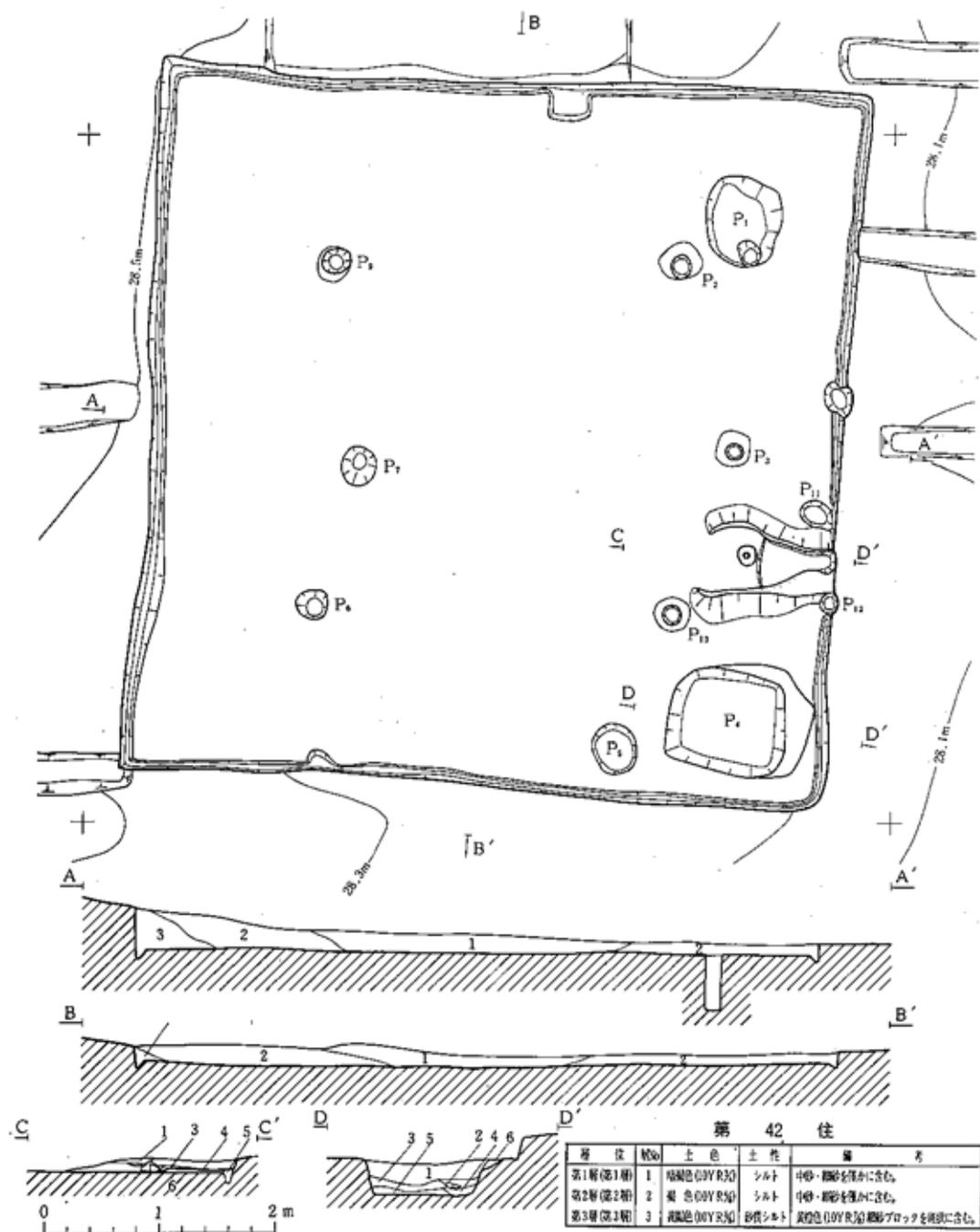
〔壁〕検出された壁は地山で、周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₂・P₆・P₉・P₁₃）ある。P₂・P₉・P₁₃は掘り方と柱痕跡の識別ができた。4個の柱穴は住居平面形の対角線上にあり、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形である。柱間は南北軸・東西軸とも3.00mである。この他柱穴状のピットが4個（P₃・P₇・P₁₁・P₁₂）ある。P₁₁・P₁₂はカマド煙道部先端の両側に対になって配置されている。P₃・P₇については配置に規則性を見い出せない。

〔周溝〕壁の直下にはカマド部分を除いて、周溝がめぐっている。周溝は断面が「┌」状で、幅約10cm・深さ約5cmである。

〔カマド〕住居東辺の中央南側寄りの部分にカマドが構築されている。規模は長さ125cm・幅110cmである。燃焼部と煙道部の側壁は粘土を積みあげて構築している。燃焼部は幅が広く、煙道



カマド

層位	No.	土色	土性	備考
埋積土	1	黄褐色(OYR)30	粘土質シルト	内部の埋積土第2層と同じ。
カマド跡土	2	暗褐色(OYR)30	粘土質シルト	焼土・木炭の断片を多数に含む。
	3	暗赤褐色(5YR)30	粘土質シルト	水浸・黄褐色(OYR)30 粘土質シルトを含む焼土。
掘り方埋土	4	にじみ黄褐色(OYR)30	砂質シルト	僅かに粘土あり。埋積土跡と同じ。
	5	暗褐色(OYR)30	シルト	暗赤褐色(5YR)30 シルトブロック含む。
池上土	6	暗黄褐色(OYR)30	シルト質砂	

Pit

層位	No.	土色	土性	備考
第1層	1	黄褐色(OYR)30	粘土質シルト	焼土・木炭を部分的に含む。
第2層	2	にじみ黄褐色(OYR)30	粘土質細砂	
	3	灰黄褐色(OYR)30	シルト質粘土	
	4	にじみ黄褐色(OYR)30	シルト質粘土	
	5	黄褐色(OYR)30	粘土質シルト	僅かに中砂含む。
	6	黄褐色(OYR)30	シルト	中砂含む。

第61図 第42号住居跡

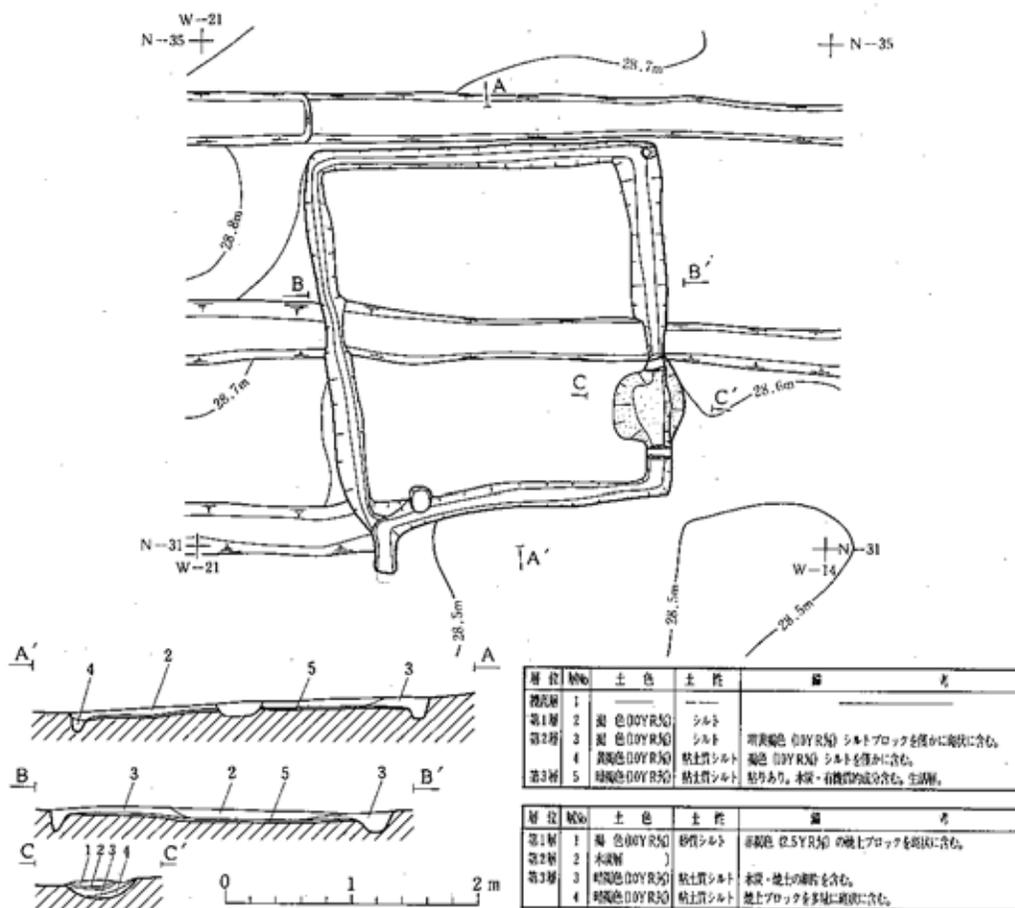
第43号住居跡

〔平面形・重複〕住居平面形は正方形である。規模は南北軸2.80m・東西軸2.60mである。他の遺構との重複はみられない。

〔壁・床面・柱穴・周溝〕壁および床面は地山である。壁は周溝からほぼ垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦である。周溝は断面「〜」状で、幅20〜30cm、深さ約10cmである。この周溝は住居南西隅の部分で住居外に約40cmのび、溝の先端はトンネル状になっている。柱穴は検出されなかった。

〔カマド〕住居東辺南側にある。住居東壁から床面を掘りくぼめ（幅63cm・奥行60cm・深さ10cm）、側壁に粘土を積みあげたものである。側壁上部は崩壊し、下部が10〜20cmの高さで残っていた。カマド底面・奥壁は赤褐色に焼けており、奥壁が特に著しい。カマド内には側壁・天井部の崩壊と推定される焼土ブロックが堆積していた。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別される。第1・2層は将棋倒し状の堆積状況を示し、第3層は床面に薄く張り付いている。第1層は褐色シルトで住居全体に、第2層は褐色ないしは



第63図 第43号住居跡

黄褐色シルトで壁沿いに分布している。第3層は木炭・有機質成分を含む褐色シルトで、堆積状況から生活層と考えられる。

遺物は、第1層から甕口縁部破片が3点出土している。

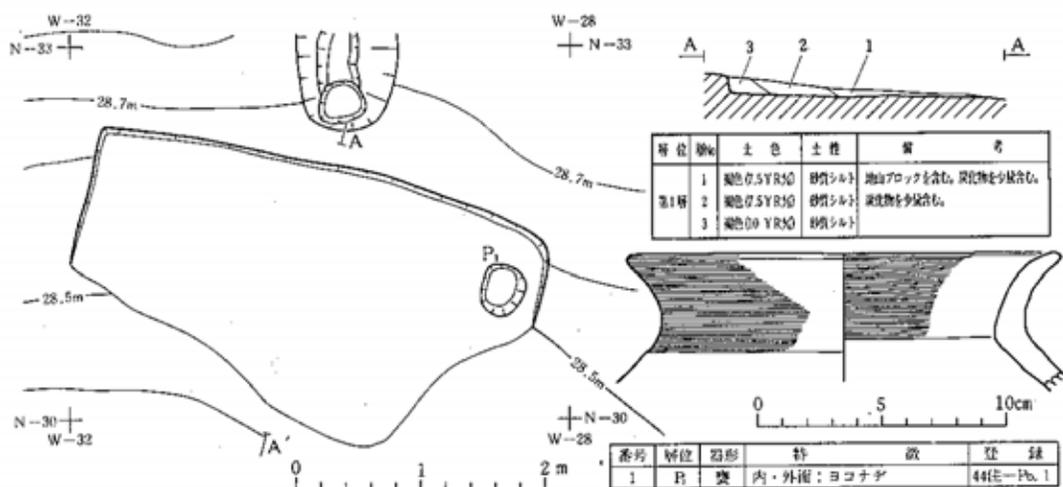
第44号住居跡

〔平面形・重複〕住居北側は残っているが、南側は削平されている。残存部分から住居平面形は方形と推定される。規模は、東西軸が3.65mであるが、南北軸は不明である。他の遺構との重複はみられない。

〔壁・床面・施設〕検出された壁は地山で、床面からはほぼ垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面と一致している。床面の北東隅の部分に楕円形のピット（40×35×40cm）がある。この他の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は、いずれも褐色砂質シルトであるが、細かな色調・混入物などによって3層に細別される。その堆積状況は将棋倒し状である。

〔遺物の出土状況〕遺物は貯蔵穴状ピット（P₁）から、甕1点・甕口縁部破片2点が出土している。



第64図 第44号住居跡

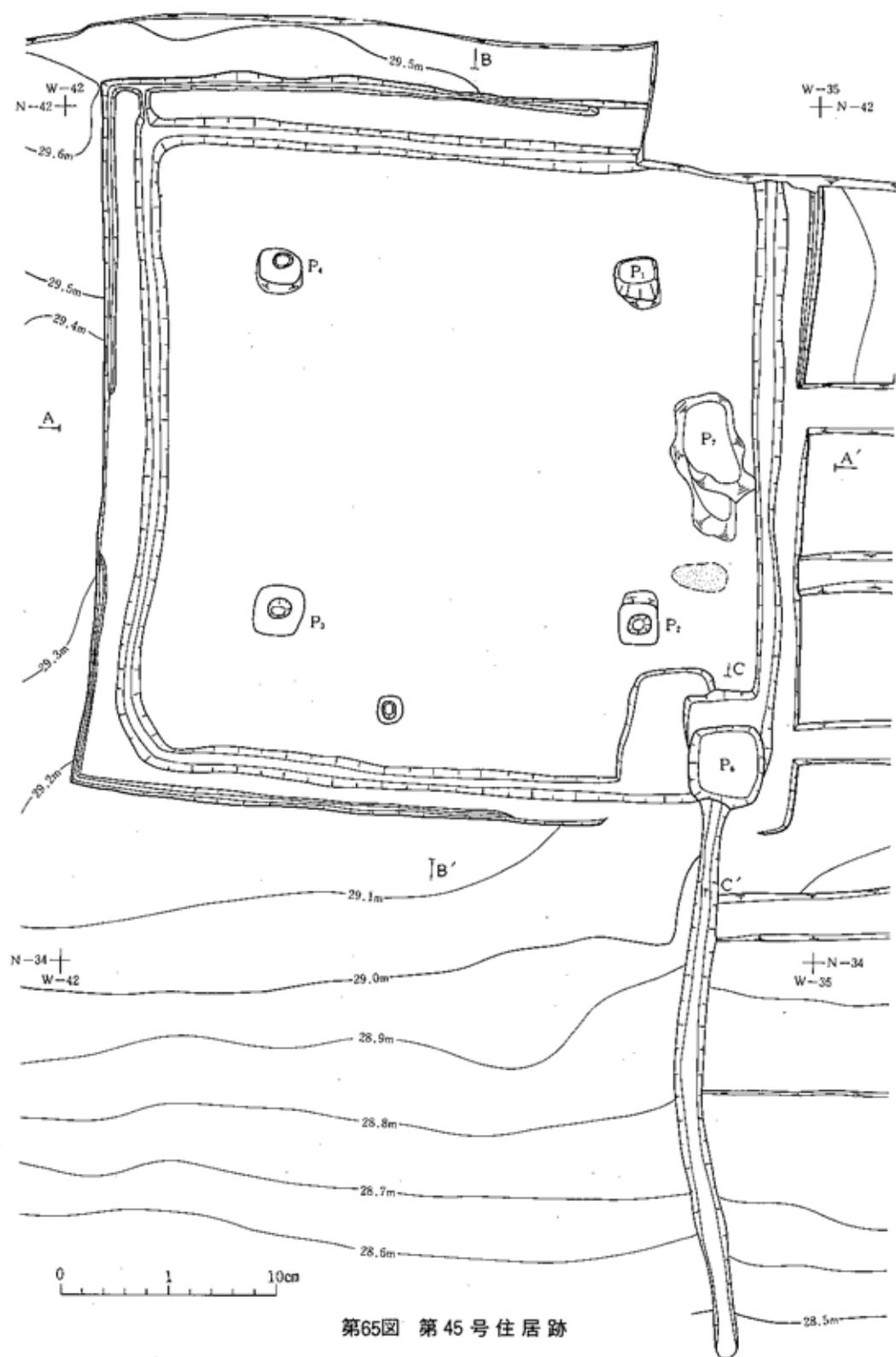
第45号住居跡

〔平面形・重複〕住居平面形は、四隅の張る正方形である。規模は、南北軸6.70m東西軸6.45mである。第2号土壇と重複しているが、切り合いは不明である。

〔壁〕検出された壁はすべて地山で、床面および周溝底面からはほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₁～P₄）検出された。このうち、P₂～P₄は掘り方と柱痕跡の識別がで



第65图 第45号住居跡

きた。また、 $P_1 \sim P_4$ は住居平面形の対角線上にあり、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形である。柱間はいずれも、3.30mである。

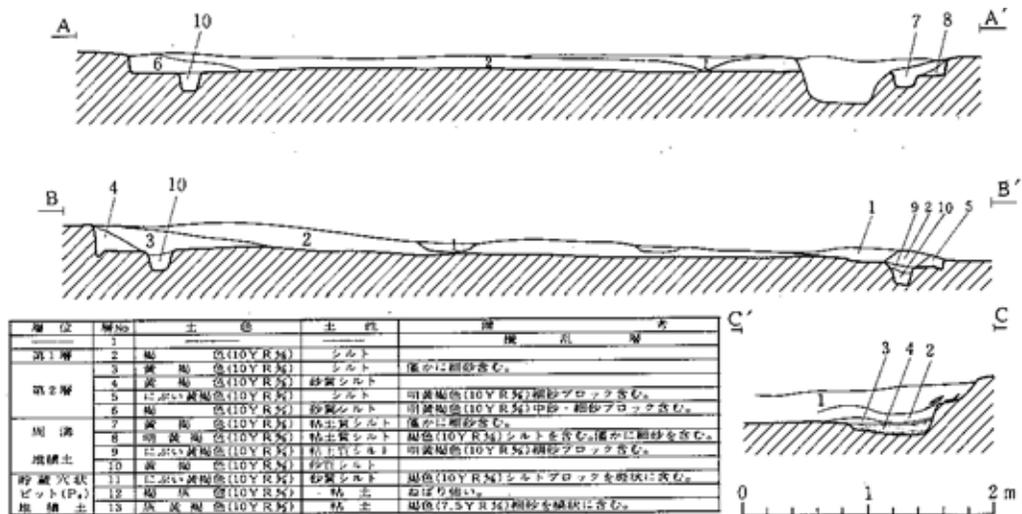
〔周溝〕周溝は壁に沿って二重にめぐっている。壁直下の周溝は、断面「 \perp 」状で、幅が狭く（5～10cm）、浅い（約5cm）。また、この周溝は部分的に途切れ、全周しない。内側の周溝は断面「 \sim 」状で、幅が広く（20～30cm）、深い（10～15cm）。この周溝は壁に沿って全周し、住居南東隅において、貯蔵穴状ピット（ P_6 ）に接続する。また、貯蔵穴状ピットから住居外に溝がのびている。この溝の規模・形状は内側周溝と共通するもので、住居南辺に直交し、斜面の傾斜に沿って南側に5m続いている。

〔カマド〕住居東辺中央の南寄り部分の床面が、楕円形（25×50cm）に焼けている。焼面に伴う上部構造および、その痕跡は検出されなかった。

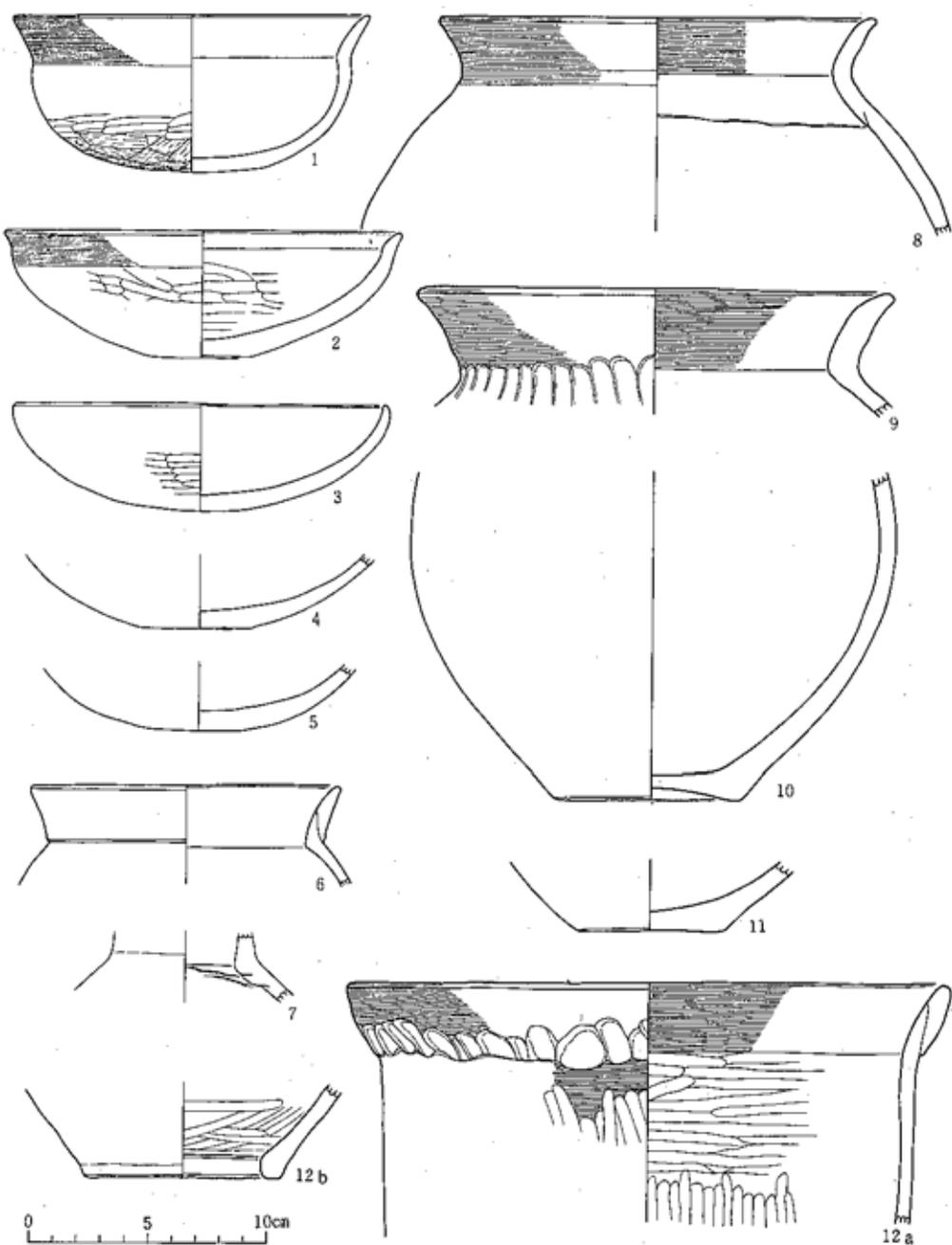
〔貯蔵穴状ピット〕住居東南隅に隅丸正方形のピット（ P_6 ）がある。規模は70×70cmで、深さが40cmである。ピットの北側と西側には段状の遺構（2段）がある。この段は方形状のもので比高は5～10cmである。ピットの埋り方をみると、最下層に細砂を縞状に含む灰黄褐色の粘土層があり、その上を褐灰色の薄い粘土層が覆っている。この粘土層は、住居外にのびる溝の底面にもおよんでおり、 P_6 と住居外にのびる溝がほぼ同じ頃に埋りはじめたことを示している。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層に大別される。第1層は褐色シルト層で、中央部を中心として住居内の広い範囲に堆積している。第2層は黄褐色シルト・砂質シルトもしくは黄褐色中・細砂ブロックを含む褐色砂質シルトで、住居の壁沿に堆積している。

〔遺物の出土状況〕遺物は、床面・細部（周溝・貯蔵穴状ピット）からまとまって出土している。第1層：坏1点 周溝：坏2点 P_6 第2層上面：甕5点 P_6 第2層：壺1点 床面：坏1点・甌1点



第66図 第45号住居跡断面図



番号	層位	器形	特徴	登録	番号	層位	器形	特徴	登録
1	床	環	外面:ヨコナデ・ミガキ・ケズリ 内面:摩滅	45住-Po.1	7	R	甕	外面:摩滅 内面:オサエ	45住-Po.7
2	周溝	環	外面:ヨコナデ・ミガキ 内面:ミガキ	45住-Po.2	8	R2層上	甕	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	45住-Po.9
3	床	環	外面:ミガキ 内面:摩滅	45住-Po.3	9	R2層上	甕	外面:ヨコナデ・ナゲツケ 内面:ヨコナデ	45住-Po.8
4	第1層	環	外面:摩滅 内面:ミガキ	45住-Po.5	10	R2層上	甕	内・外面:摩滅	45住-Po.12
5	周溝	環	外面:ミガキ 内面:摩滅	45住-Po.4	11	R2層上	甕	内・外面:摩滅	45住-Po.11
6	R2層上	甕	内・外面:摩滅	48住-Po.6	12	床	甕	外面:ヨコナデ・オキム・ミガキ 内面:ヨコナデ・ミガキ	45住-Po.10

第67図 第45号住居跡出土土器

第46号住居跡

〔平面形・重複〕第46号住居跡は第47号住居跡と重複しているが、重複部分の堆積土が薄く切り合いは明確にできなかった。住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸5.3m・東西軸4.8mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面から周溝を経て僅かに傾斜しながら立ちあがる。

〔床面〕 住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P₁～P₄）検出され、P₁～P₃では掘り方と柱痕跡を識別することができた。また、4個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形となる。柱間は南北軸2.7m・東西軸2.4mである。

〔周溝〕 周溝は二重にめぐっている。外周溝は壁直下、内周溝は外周溝内側約20cmの所にあり両者とも断面「」状である。外周溝は幅約20cm・深さ約10cm、内周溝は幅20～30cm・深さ約10cmである。この他、南辺中央に周溝と直交する溝が走っている。断面「」状で長さは100cm・幅20cm・深さ10cmである。

また、住居南西隅から住居外に溝が約2mのび、右折して約1m続いている。この溝は断面「」状で、幅約50cm・深さ約25cmで、先端にはピットがある。先端のピットは直径25cm・深さ60cmである。

〔炉〕 住居中央から僅かに北西に偏った部分の床が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は不整楕円形をしており、その範囲は80×50cmである。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色土層で住居中央の上部に、第2層は暗褐色土層で、住居中央部の床面上に、第3層は褐色ないしは黄褐色土で、壁沿いや周溝内に堆積している。

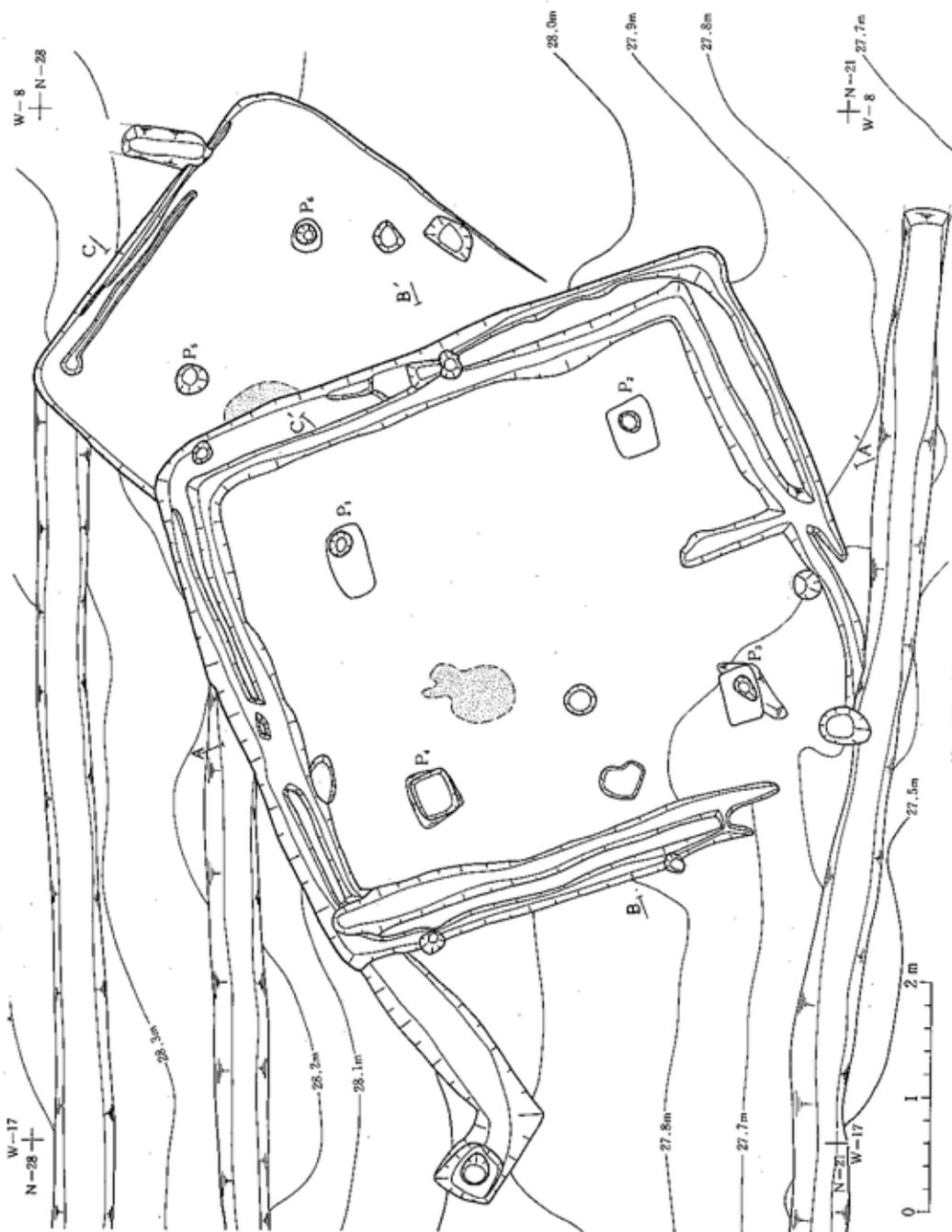
〔遺物の出土状況〕 遺物は各層から出土しており、出土状況に特にまとまりはみられない。

第1層：高坏脚部破片1点・器台1点・坏口縁部破片1点・壺1点・甕口縁部破片3点・甕底部破片6点
第2層：甕底部破片1点・床面：高坏脚部破片2点・甕底部破片2点・甕口縁部破片1点
層不明：壺？1点・甕底部破片2点

第47号住居跡

〔平面形・重複〕 第47号住居跡は第46号住居跡と重複しているが、重複部分の堆積土が薄く、切り合いは明確にできなかった。また、第46号住居跡と重複している住居南側は壁・床面を検出することができなかった。検出部分から、住居平面形は隅丸方形と推定される。規模は東西軸3.4mである。

〔壁〕 検出した壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

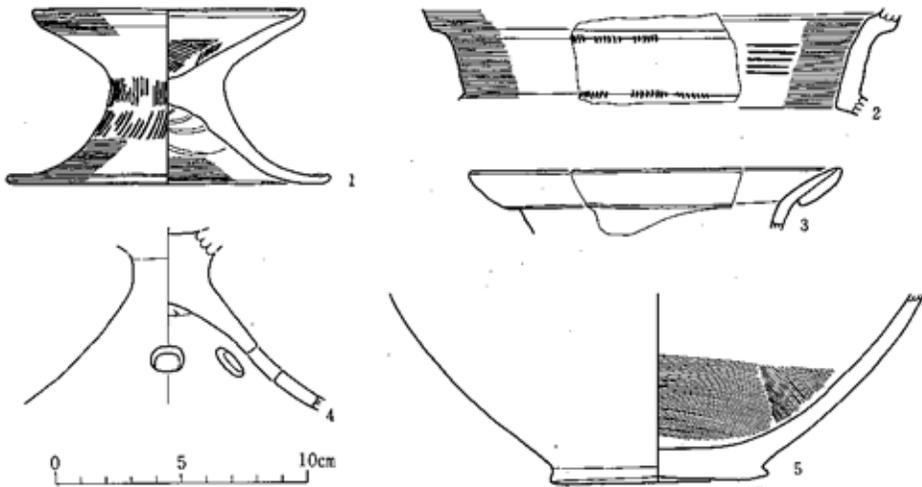
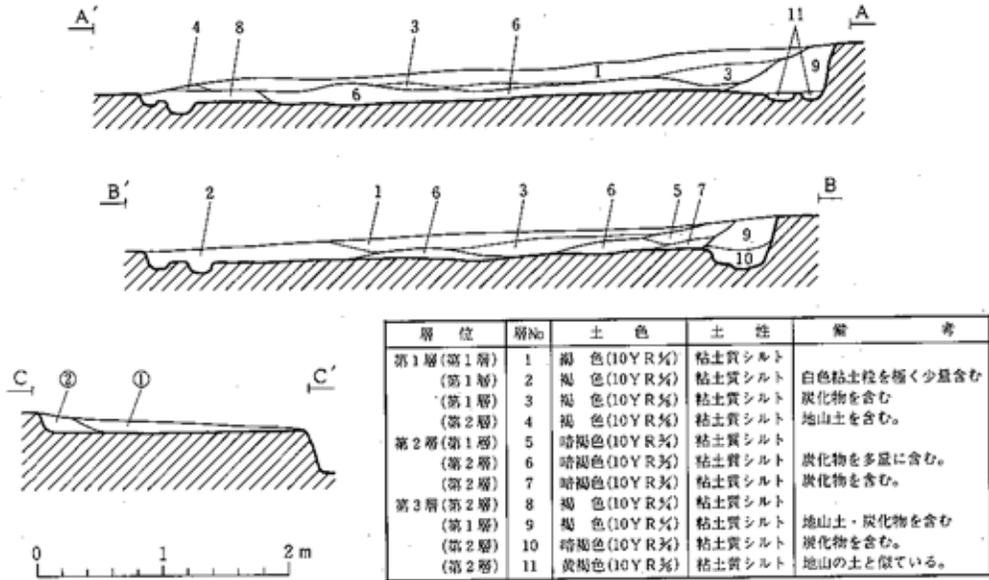


第68图 第46・47号住居跡

〔床面〕 住居床面はほぼ平坦で、第46号住居跡と重複していない部分では掘り方底面（地山）と一致している。

〔周溝〕 北壁下に二本の溝が走っている。両者とも断面「」状で幅約10cm・深さ約5cmである。

〔柱穴〕 柱穴は2個（P₅・P₆）検出され、P₆は掘り方と柱痕跡の識別ができた。P₅・P₆は推定住居対角線上に位置し、結んだ線は住居北壁と平行になる。P₅・P₆と対になる2個の柱穴は第46号住居跡と重複している部分に存在するものと推定される。



番号	層位	器形	特徴	登録	番号	層位	器形	特徴	登録	
第46住	1	器台	外面: コナナギ 刺毛目 内面: 刺毛目 ナナナツケ コナナ	46住-Po. 3	第47住	4	床	高坪 三室 内・外面: 厚減	47住-Po. 1	
	2	壺	外面: コナナギ 刺毛目 内面: 刺毛目・コナナ	46住-Po. 2		5	第1層	壺	外面: 厚減 内面: ナナ	47住-Po. 2
	3	住居内	壺?	内・外面: 厚減		46住-Po. 1				

第69図 第46・47号住居跡

〔炉〕 P₅南側の床面が楕円形に焼けており（焼面）、炉と考えられる。その範囲は、第46号住居跡と重複している部分では確認できなかったが、南北軸70cmである。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層に細分されるが、両者とも褐色（10YR4/4）粘土質シルトで基本的には同じである。No.1層は明度が高く住居中央部に、No.2層は炭化物を含み住居壁際に分布するという程度のちがいである。

〔遺物の出土状況〕遺物は少量で、出土状況にまとまりもみられない。第1層：甕1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 床面：高坏1点

第48号住居跡

〔平面形・重複〕第48号住居跡は新旧二時期の住居が重複している。重複している住居跡は、平面形が相似形で、対角線もほぼ共通していることから、改築によって拡張が行なわれたものと推定される。両者とも住居南壁は削平されているが、残存する壁・柱穴・周溝のあり方から平面形は方形と推定される。規模は、第1期が東西軸4.6m、第2期が東西軸5.3mである。

〔壁〕第1・2期の残存壁は、両者とも地山である。第1期の壁は北西隅から西壁北半部が高さ約10cm程残っているが、その他は第2期の周溝と削平によって失なわれている。第2期の壁は削平を受けた南壁を除き残っている。北壁は高さ50cmあり、最も保存がよい。

しかし、この北壁は、下部がほぼ垂直で保存は良いが、上部は崩落が顕著で斜めになっている。

〔床面〕床面は第1・2期とも平坦で、厚さ10～20cmの黄褐色砂質粘土による貼り床がなされている。

〔周溝〕第1・2期とも、壁から20～60cm内側に断面「」状の周溝がめぐっている。周溝の幅は20～40cm・深さ10～30cmである。この他、第2期の北壁直下には断面「」状で幅10cm・深さ4cm・長さ150cmの溝がある。

〔カマド?〕第2期住居の東辺中央南側の床面が焼けている。この焼面は楕円形で、35×15cmの大きさをしているが、側壁などの上部構造は検出されなかった。

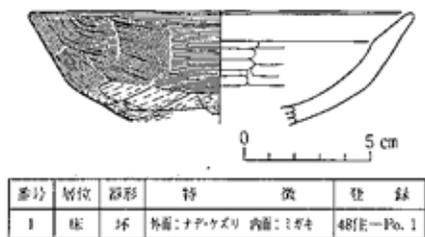
〔柱穴〕柱穴は第1期の床面で4個（P₇～P₁₀）、第2期の床面で4個（P₁～P₄）検出された。それぞれを結んだ線は長方形で、両者ともほぼ同じ対角線上に位置している。柱間は第1期が南北軸1.9m・東西軸2.2m・第2期は南北軸2.5m・東西軸2.8mである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居南東隅と推定される位置に隅丸長方形の貯蔵穴状ピット（P₅・P₆）がある。第1期のP₆は南北軸80cm・東西軸50cm・深さ40cm、第2期のP₅は南北軸50cm・東西軸60cm・深さ60cmである。P₅がP₆を切っている。

〔堆積土〕第1期の住居跡堆積土は、第2期住居跡の貼り床層である。第2期住居跡堆積土は3層あり、将棋倒しの堆積状況を示している。第1層は褐色シルト層で住居全体に分布して

いる。第3層は黄褐色砂質粘土と黒褐色シルトが斑状になった層で壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は第2期住居の各層から出土しており、出土状況にまともはみられない。第1層：甕口縁部破片4点 第2層：甕口縁部破片2点 第3層：甕底部破片1点 床面：坏1点・甕口縁部破片1点



第71図 第48号住居跡出土土器

第49号住居跡

〔平面形・重複〕 住居平面形は隅丸正方形である。規模は南北軸4.2m・東西軸4.2mである。第50号住居跡と重複し、その堆積土・床面を切っている。なお、住居東南隅の部分は後世の溝（桑植栽）によって破壊されている。

〔壁〕 検出された壁は上部が、第50号住居跡の堆積土、下部が地山である。壁は周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

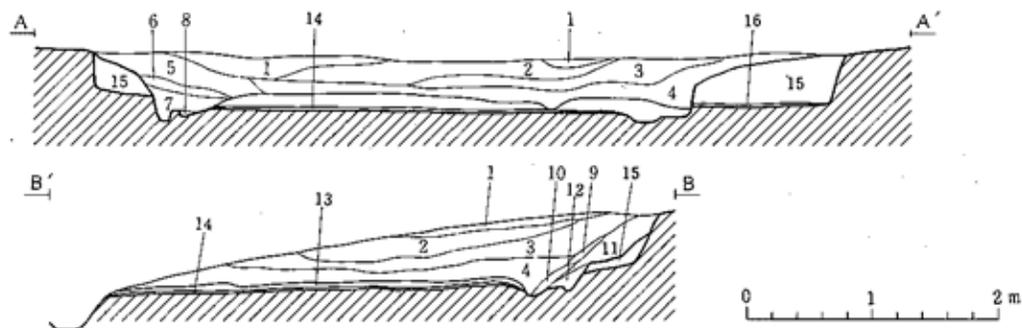
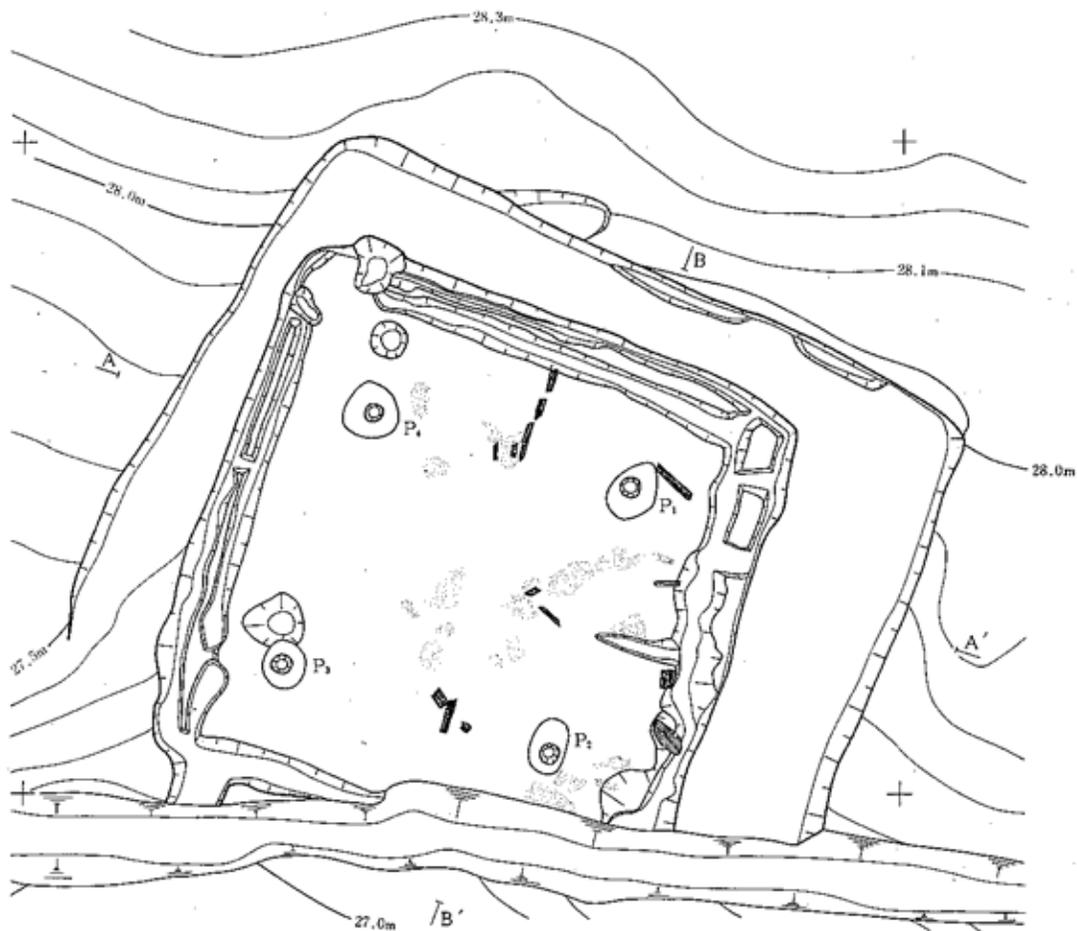
〔床面〕 床面はほぼ平坦で、部分的に薄い貼り床がなされている。床面上には暗褐色をした有機質層が薄く貼りついており、生活層と推定される。また、その上には焼土・灰が10～20cmの厚さで堆積し、炭化材が散乱していた。火災によって上部構造が崩落したものと推定される。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P₁～P₄）検出され、いずれも掘り方と柱痕跡の識別ができた。柱間は東西軸・南北軸とも2.1mである。

〔周溝〕 周溝は壁に沿って二重にめぐっている。壁直下の周溝は東壁の北側から北壁・西壁にめぐっており断面「ㄟ」状で、幅10～20cm・深さ約5cmである。内側の周溝は東・北・西壁にめぐり断面「ㄟ」状で、幅20～30cm・深さ5～10cmである。南壁では壁直下と内側の周溝が一体となっている。断面は「ㄟ」状で、幅30cm・深さ15cmである。また、住居南西隅の部分では内側と外側の周溝が一体となり、さらに住居外にのびている。この溝は断面「ㄟ」状で、幅40cm・深さ5cmである。

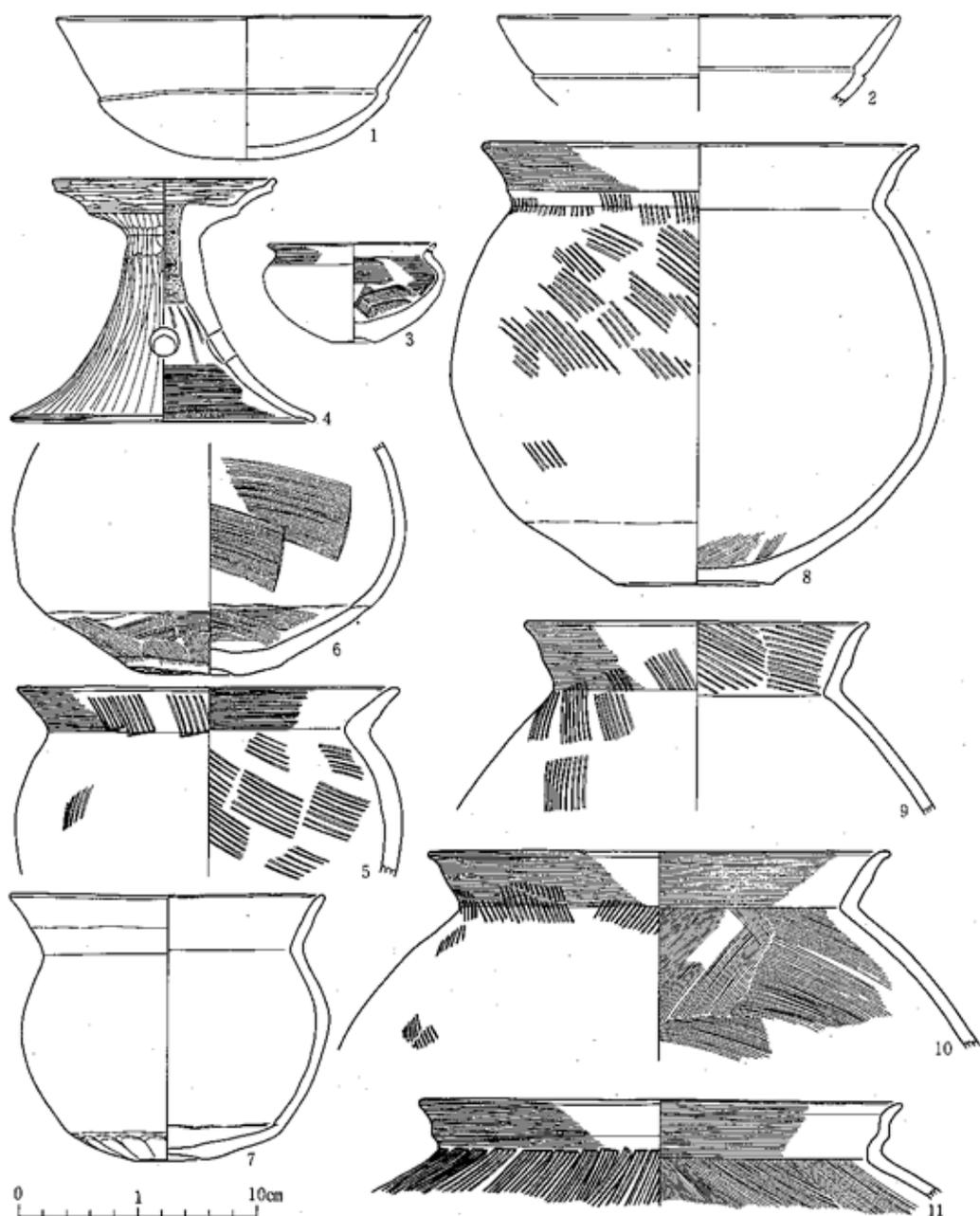
〔その他の施設〕 炉・貯蔵穴状ピットなどの施設は不明確で、検出できなかった。

〔堆積土〕 住居内堆積土は6層に大別される。第1～4層は将棋倒し状、第5・6層は水平状の堆積状況を示している。第1層は褐色シルト層で、住居中央の上部に小規模な分布をしている。第2層は黒褐色シルト層で、第1層下にやや広く分布している。第3層は暗褐色シルト層で第2層下にあつて、住居中央から東側に広い分布を示す。第4層は色相が多様なシルト層で住居全体に分布し、壁際に向うに従って層厚を増す。第5層は火災層、第6層は生活層と推定されるものである。



層位	層No	土色	土性	備	層位	層No	土色	土性	備
第1層(第1層)	1	褐色00YR3/0	シルト		第5層(第5層)	9	褐色00YR3/0	シルト	明褐色0.5YR3/0粘土質シルトブロックを含む。
第2層(第2層)	2	暗褐色00YR3/0	シルト	焼土・木炭粒を多量に含む。	第6層(第6層)	10	暗褐色00YR3/0	シルト	木炭粒を多量に含む。
第3層(第3層)	3	暗褐色00YR3/0	シルト	焼土・木炭粒を多量に含む。	第7層(第7層)	11	にじみ黄褐色00YR3/0	シルト	
第4層(第4層)	4	暗褐色00YR3/0	シルト	明褐色0.5YR3/0粘土質シルトブロックを多量に含む。	第8層(第8層)	12	褐色00YR3/0	シルト	明褐色0.5YR3/0粘土質シルト細粒をまばらに含む。
	5	暗褐色00YR3/0	シルト	明褐色0.5YR3/0粘土質シルト細粒をまばらに含む。	第9層(第9層)	13	暗褐色00YR3/0	シルト	木炭・焼土ブロックを多量に含む。火災層。
	6	明褐色00YR3/0	シルト		第10層(第10層)	14	暗褐色00YR3/0	粘土質シルト	有機質に富み、焼りがあふ。生活層。
	7	褐色00YR3/0	シルト	明褐色0.5YR3/0粘土質シルト細粒を多量に含む。	第11層(第11層)	15	明褐色0.5YR3/0	粘土質シルト	褐色0.5YR3/0シルトが前面に混入。
	8	暗褐色00YR3/0	シルト		第12層(第12層)	16	暗褐色00YR3/0	粘土質シルト	有機質に富み、焼りがあふ。

第72図 第49・50号住居跡



番号	層位	器形	特 徴	登 録	番号	層位	器形	特 徴	登 録
1	第5層上	環	内・外面：摩滅	Po. 1	7	第5層	甕	内・外面：摩滅	Po. 5
2	床	環	外面：摩滅 内面：ミガキ	Po. 2	8	第5層	甕	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ナデ・摩滅	Po. 12
3	床	鉢？	外面：ヨコナデ・摩滅 内面：ナデ・ヘラナデ	Po. 11	9	第5層	甕	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：刷毛目	Po. 4
4	第5層	器台	三窓 外面：ミナ・ヨコナデ 内面：ミナ・ズリ・ナデ・ナデ	Po. 3	10	第5層	甕	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ヨコナデ・ナデ	Po. 6
5	第1~5層	甕	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ヨコナデ・刷毛目	Po. 8	11	第5層	甕	外面：ヨコナデ・刷毛目 内面：ヨコナデ・ナデ	Po. 7
6	床	甕？	外面：ナデ・ズリ 内面：ヘラナデ・ナデ	Po. 9					10

第73図 第49号住居跡出土土器

〔遺物の出土状況〕 遺物は床面と第5層（火災層）からまとまって出土している。第1層：甕口縁部破片4点 第2層：甕口縁部破片2点 第3層：甕底部破片1点 第5層：坏1点・器台1点・甕5点 床面：坏1点・坏口縁部破片1点・鉢1点・壺1点・壺口縁部破片1点 層不明：脚台1点

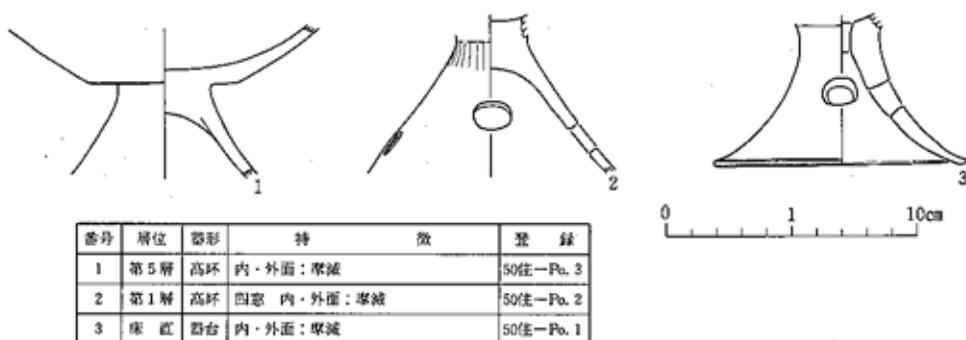
第50号住居跡

〔概要〕 第50号住居跡は、東・北・西壁は残っていたが、南壁は削平のため失なわれている。また、第49号住居跡と重複し、その堆積土・床面が壊されているため、床面は壁に近い部分だけが残っていた。残存部分から、その判明する事についてその概要を記す。

平面形は隅丸方形で、規模は南北軸4.7×2・東西軸5.8mである。検出された壁は地山で床面からほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩落が著しい。床面は地山で、その上に生活層と推定される有機質に富む暗褐色粘土質シルト層が薄く貼りついている。周溝は北壁直下に一部みられる。断面「┌」状で、幅約10cm・深さ約5cmである。この他柱穴や炉・貯蔵穴状ピットなどの施設については不明である。

〔堆積土〕 住居内堆積土は保存のよい所で層厚が40cmあり、いずれも褐色シルトを斑状に含む明褐色粘土質シルトである。すなわち、地山の土を斑状に含んだ層が一様に堆積していた。このような層相は、壁崩壊土が、人為的に埋められた場合の土に見うけられるものである。この点、第50号住居跡は壁周辺だけが残っていたので、そのいずれか決め難い。ただ、住居東側は幅120cmにわたって残っており、その間で将棋倒し状堆積を示すような複数の層の堆積がみられず、一様な層相を示すことから人為的に埋められた可能性のほうが強いと考えられる。

〔遺物の出土状況〕 遺物は堆積土から高坏1点、床面から高坏・器台が1点ずつ出土しただけである。



第74図 第50号住居跡出土土器

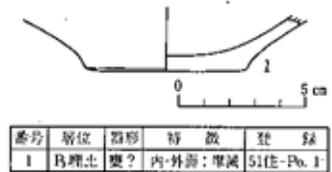
第51号住居跡

〔平面形・重複〕第51号住居跡は第25・26号住居跡と重複し、北西部分が両者に切られている。平面形は隅丸方形で、南北軸4.9m・東西軸5.2mである。

〔施設の概要〕壁は地山で、床面からゆるやかに立ちあがる。床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。柱穴は4個（ $P_1 \sim P_4$ ）検出された。柱穴は住居対角線上に位置し、それを結んだ線は住居平面形と相似形になる。柱間は南北軸2.8m・東西軸2.7mである。

東壁と北壁の下に周溝状の溝が検出された。しかし、これらの溝は、東壁下が40cm・北壁下が80cmと一般的周溝に比べ幅が広すぎる。むしろ、住居掘り方が、壁付近で深くなり、周溝状になったものと考えられる。住居中央北側の床面が焼けており（焼面）炉と考えられる。この焼面は楕円形をしており、その範囲は90×30cmである。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は2層あり、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色シルト層で全体に分布し、第2層は極暗褐色シルト層で住居西側から南側の壁際に分布している。遺物は P_3 から甕が1点出土している。



第75図 第51号住居跡出土土器

第52号住居跡

〔概要〕第52号住居跡は第53号住居跡を調査中に検出したが、第53号住居跡の堆積土を掘り込んで、その内部に構築されていたため、平面形を明確にとらえることができなかった。

床面には火熱を受け暗褐色に焼けている部分があり、その直上に多量の木炭・焼土を含む層が5～10cmの厚さで堆積している（第4層）。これらは火災によるものと考えられる。その上の堆積土は3層あり、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色シルト、第2層は暗褐色シルト、第3層は褐色シルトである。遺物は出土していない。

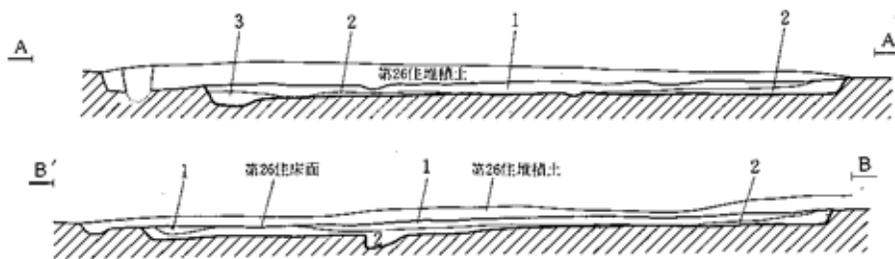
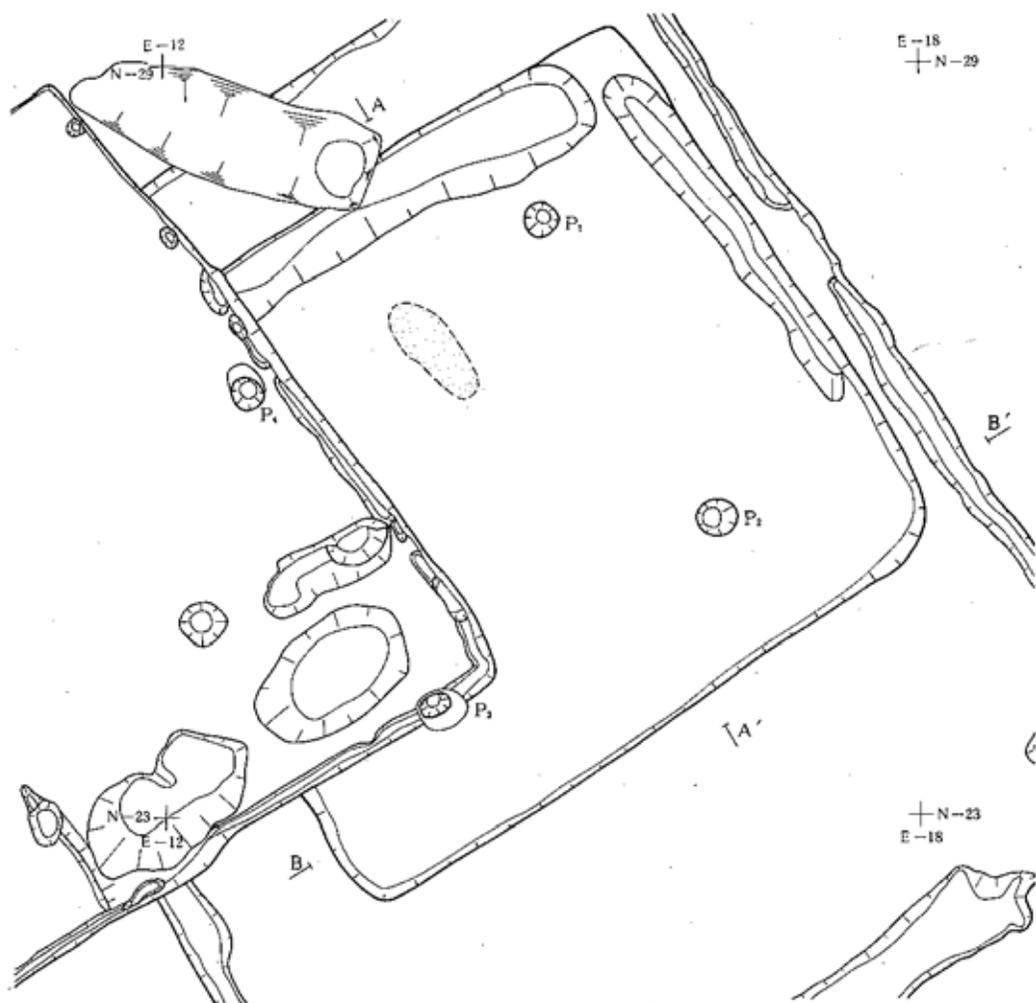
第53号住居跡

〔平面形・重複〕第53号住居跡は第28・29・52号住居跡と重複し、すべての住居跡によって堆積土の上部が切られている。また、住居南側は調査を行なったが、北側は調査区外にのびている。調査を行なった部分から住居平面形を推定すると、南壁中央がやや脹む方形である。

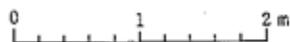
〔壁〕検出した壁は地山で、周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔周溝〕住居壁直下に周溝がめぐっている。周溝は断面「」状、幅15～20cm・深さ約5cmである。また同様な断面・規模（幅・深さ）をもつ溝が、南壁中央に直交してみられ、調査区外にのびている。



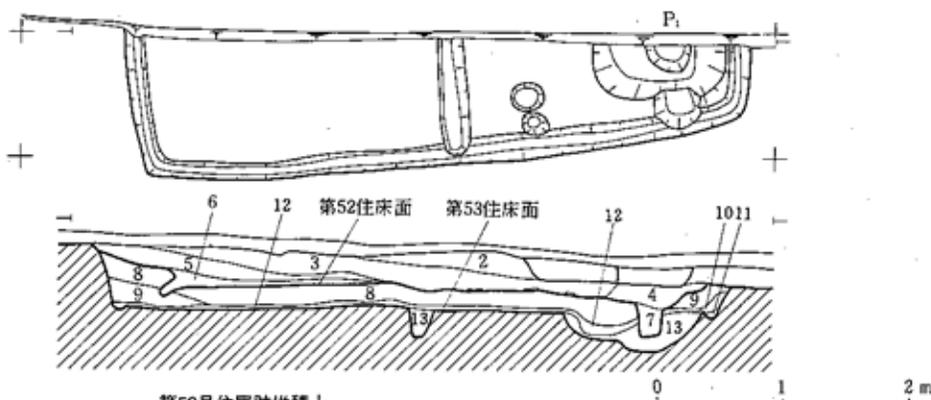
層位	層No	土色	土性	備考
第1層	6	暗褐色(7.5Y R 5)	シルト	非常に固い。
第2層	7	極暗褐色(7.5Y R 5)	シルト	やや固い。
第3層	8	褐色(10 Y R 5)	シルト	非常に固い。瀧り方埋土の可能性あり。



第76図 第51号住居跡

〔その他の施設〕住居南東隅の部分に貯蔵穴状ピット (P₁) がある。P₁は調査区外にのびているが、調査部分から隅丸方形と推定される。大きさは東西軸が105cmである。底面は二段になっており、全体の深さは35cm、上段の深さは20cmである。ピット内部には木炭を含む地山土の崩壊土 (黄褐色シルト) が堆積していた。この他、柱穴・炉などの施設は調査区内で検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層あり、第1・2層は将棋倒し状、第3層は水平状の堆積状況を示している。第1層は褐色の粘土質シルトで住居全体に分布し、第2層は暗褐色シルトで住居

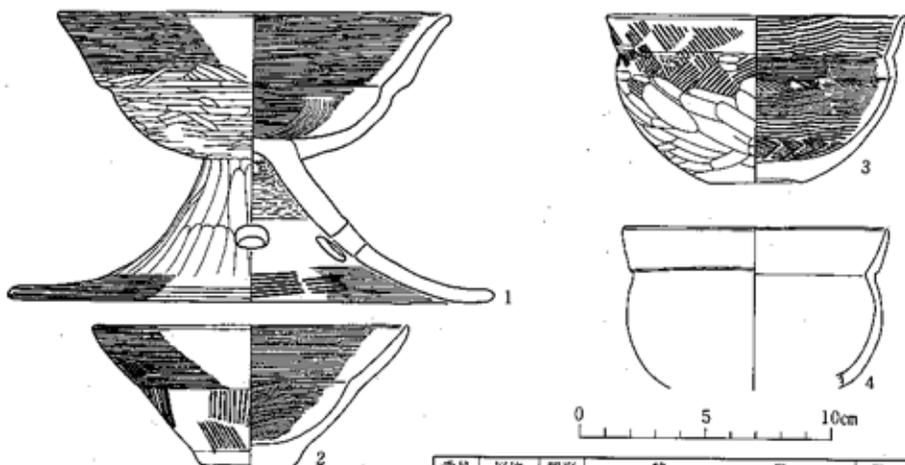


第52号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
掘り込み	1	暗赤褐色(5 YR 5)	シルト	焼土・木炭が非常に多い。
第1層	2	褐色(7.5 YR 5)	シルト	強い。
第2層	3	暗褐色(7.5 YR 5)	シルト	やや軟かい。
第3層	4	褐色(10 YR 5)	シルト	強い。
第4層	5	褐色(10 YR 5)	シルト	やや軟かい。木炭や多い。
第4層	6	黒褐色(7.5 YR 5)	シルト	軟かい。多量の木炭・焼土含む。
ピット	7	暗褐色(10 YR 5)	シルト	軟かい。地山上ブロックを崩壊に含む。

第53号住居跡堆積土

層位	層No	土色	土性	備考
第1層	8	褐色(10 YR 5)	粘土質シルト	若干木炭を含む。
第2層	9	暗褐色(10 YR 5)	シルト	強い。
第2層	10	褐色(10 YR 5)	シルト	強い。
階溝	11	暗褐色(10 YR 5)	粘土質シルト	地山の焼土を含む。
第3層	12	黒褐色(10 YR 5)	シルト	炭化物の層。
ピット	13	暗褐色(10 YR 5)	シルト	地山崩壊土に木炭混入。



番時	層位	器形	特徴	登録
1	貯蔵穴	高坪	三層構造: 外層: ヨコナデ・刷毛目 内層: ナデ	53住-Po. 3
2	床	坪	外層: ヨコナデ・刷毛目 内層: ナデ	53住-Po. 2
3	貯蔵穴	鉢?	外層: ヨコナデ・刷毛目 内層: ナデ	53住-Po. 4
4	貯蔵穴	鉢?	内・外層: 厚紙	53住-Po. 1

第77図 第53号住居跡

壁沿いに分布している。第3層は黒褐色シルトで炭化物の層で、床面全体を覆い、貯蔵穴状ピットにも及んでいる。床面に貼りついた状況と炭化物の層であることから、生活層と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 遺物貯蔵穴状ピット（P1）と床面から出土している。貯蔵穴状ピットからは高坏1点・鉢2点が出土している。これらの遺物は生活層（第3層）が貯蔵穴状ピットに及び、凹んだ状態になっている部分から出土している。また、床面からは坏が1点出土している。

第54号住居跡

〔平面形・重複〕 第54号住居跡は、第55・56号住居跡と重複し、両者を切っている。また、住居跡の大部分は残っていたが、南西隅周辺は削平によって失われている。残存部分から、住居平面形は隅丸正方形と推定され、規模は南北軸3.2m・東西軸3.5mである。

〔壁〕 住居壁は、第55・56号住居跡と重複している部分はその堆積土、その他は地山である。この壁は東壁など保存のよい所ではほぼ垂直に立ちあがるが、上部はかなり崩落している。

〔床面〕 床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。

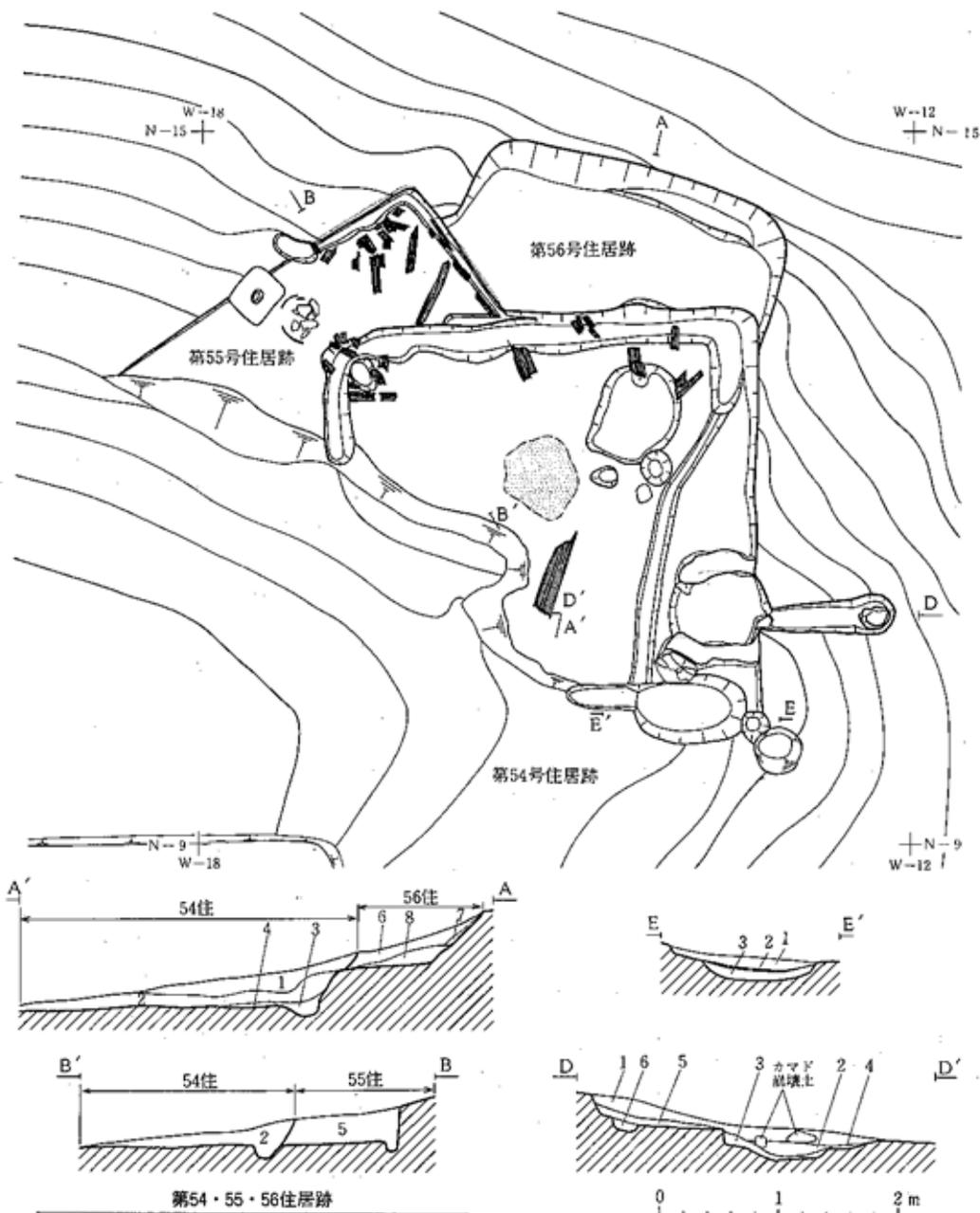
〔周溝〕 東壁を除き、ほぼ全体の壁直下に周溝がめぐっている。周溝の断面は「」状で幅20～30cm、深さ約5cmである。この他、東壁直下で周溝が途切れている部分をつなぐような溝がカマドの内側にある。この溝は断面「」状であるが、規模は周溝より小さく幅約15cm・深さ約5cmである。

〔カマド〕 住居東壁南側にカマドが設置されている。このカマドは燃焼部と煙道部からなり、全長190cmである。燃焼部は底面を僅かに掘りくぼめ、側壁・天井を粘土を積みあげて築いたもので、幅80cm・奥行90cmある。煙道は住居外にトンネル状に掘り抜いたもので、先端はピット状になっている（煙り出し）。煙道の長さは70cm・幅25cm、煙り出しの径は30cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 カマド右脇に楕円形のピットがある。このピットは南壁直下の周溝と接続している。ピットの大きさは長さ95cm・幅60cm・深さ18cmである。ピット内には暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト（第3層）が堆積し、その上にピットを覆うように炭化物の薄い層（第2層、1～3cm）がみられた。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層にわかれる。第1層は褐色粘土質シルトで住居北側に分布している。第2層はにぶい褐色の粘土質シルトで地山の土を多量に含み、住居全体に分布している。第3層は暗褐色粘土質シルトで、多量の炭化材・炭化物を含み、床面状に堆積している。第3層に含まれる炭化材は、住居の上部構造が崩れ落ちた出土状況を示し、火災によるものと推定される。

〔遺物の出土状況〕 遺物はいずれも土師器で床面・細部（貯蔵穴状ピット・カマド）からまと



第54・55・56住居跡

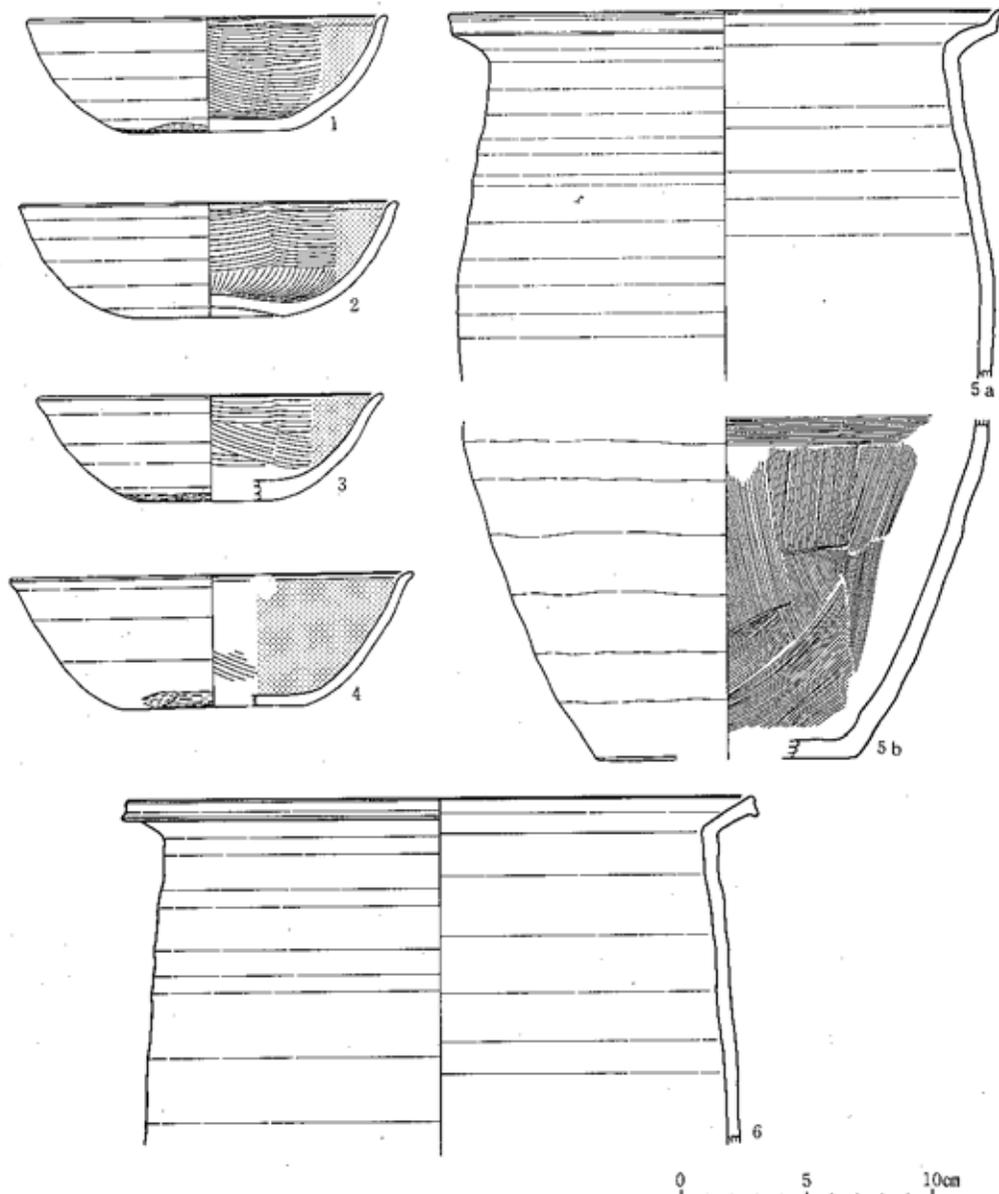
層位	順	土色	土性	備考
第56号住居跡	第1層	1 黄 色 (OYR3)	粘土質シルト	
	第2層	2 濃い黄褐色 (YR3)	粘土質シルト	地中の土を多量に含む。
	第3層	3 濃い黄褐色 (OYR3)	粘土質シルト	炭化物含む。陶器の破片も。
	第4層	4 黄 褐色 (OYR3)	粘土質シルト	多量の炭化物・炭化物を含む。大穴あり。
第55号住居跡	第1層	5 濃い黄褐色 (OYR3)	粘土質シルト	下部は炭化物を含む。
	第2層	6 黄 色 (OYR3)	粘土質シルト	
	第3層	7 黄 色 (OYR3)	粘土質シルト	
	第4層	8 黄 褐色 (OYR3)	粘土質シルト	炭化物も。

第54住居跡カマド

層位	順	土色	土性	備考
カマド跡 (灰層)	1	1 濃い黄褐色 (5YR3)	粘土質シルト	全体の層2層と同じ。
	2	2 黄 色 (5YR3)	粘土質シルト	炭化物・植土塊あり。灰面上は炭灰。
	3	3 黄 色 (5YR3)	粘土質シルト	焼土を含む。
	4	4 黄 褐色 (5YR3)	粘土質シルト	焼土・炭化物を含む。
	5	5 黄 色 (5YR3)	粘土質シルト	
	6	6 黄 褐色 (5YR3)	粘土質シルト	炭化物もを含む。

第78図 第54・55・56号住居跡

まって出土している。第1層：甕口縁部破片1点 貯蔵穴状ピット：坏2点・坏口縁部破片2点・甕1点・甕口縁部破片1点 カマド：坏2点・坏口縁部破片1点・甕2点 床面：甕1点・甕底部破片1点 層不明：甕底部破片1点



番号	層位	器形	特 徴	登 録	番号	層位	器形	特 徴	登 録
1	カマド	坏	外面：ロクロナデ・持ちあぐさリ・陶器焼 内面：ミダキ・黒	54住-Po. 1	5 a	埋込部端	甕	内・外面：ロクロナデ	54住-Po. 5a
2	カマド	坏	外面：ロクロナデ・厚縁 内面：黒粘土・ミダキ・黒	54住-Po. 2	5 b	埋込部端	甕	Po. 5aと同一個体？ 外面：不明調整 内面：ヘナナデ	54住-Po. 5b
3	貯蔵穴	坏	外面：ロクロナデ・持ちあぐさリ・厚縁 内面：ミダキ・黒	54住-Po. 3	6	カマド	甕	内・外面：ロクロナデ	54住-Po. 7
4	貯蔵穴	坏	外面：ロクロナデ・持ちあぐさリ・厚縁 内面：ミダキ・黒	54住-Po. 4					

第79図 第54号住居跡出土土器 (1)

第55号住居跡

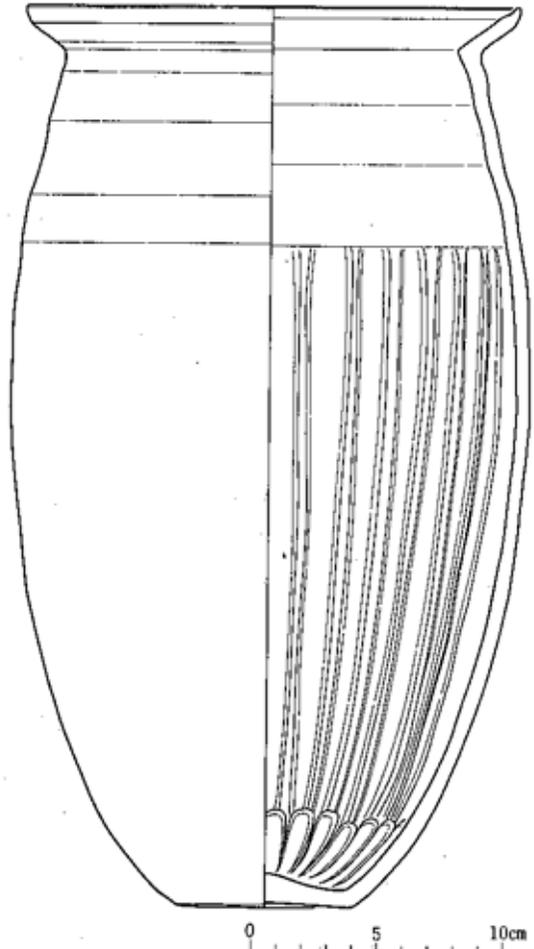
〔平面形・重複〕 第55号住居跡は第54・56号住居跡と重複し、第56号住居跡を切っているが、第54号住居跡によって切られている。住居残存部分から、平面形は方形と推定されるが、規模については不明である。

〔概要〕 検出された壁は、第56号住居跡と重複している部分の上部ではその堆積土、その他の部分では地山である。また、壁は保存の良い所ではほぼ垂直に立ちあがる。周溝は東壁と北壁東側の直下にみられ、断面「J」状で、壁の外側に喰い込んでいる。幅約15cm・深さ約10cmである。床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

この他、住居残存部分では柱穴等の施設は検出されなかった。

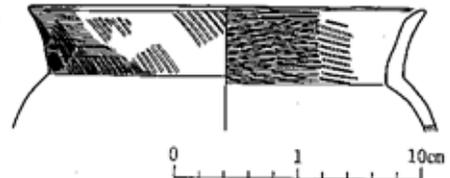
遺物としては、甕が1点床面から出土している。

〔堆積土・遺物の出土状況〕 住居内堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、下部は炭化材・炭化材を含む。炭化材は床面上に放射状に分布し、住居上部構造の崩落したもので、火災によるものと考えられる。



番号	層位	器形	特徴	登録
1	床+0.07F	甕	外面：ロクロナデ・厚壁 内面：ロクロナデ・ナゲツク	54住-Po. 6

第80図 第54号住居跡出土土器（2）



番号	層位	器形	特徴	登録
1	床	甕	外面：ロコナデ・厚壁 内面：ロコナデ・厚壁	55住-Po. 1

第81図 第55号住居跡出土土器

第56号住居跡

〔平面形・重複〕 第56号住居跡は第54・55号住居跡と重複し、両者に切られ住居中央から南側が失われている。残存部分から、住居平面形は隅丸方形と推定され、規模は東西軸2.6mである。

〔概要〕 壁・床面は地山である。壁面は崩壊著しく斜めになり、北壁では段状の部分もある。床面は掘り方底面（地山）と一致し、平坦である。住居残存部分からは柱穴等の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層あり、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色粘土質シルトで、広い範囲に分布する。第2層は黄褐色粘土質シルト層で壁際に分布し、壁崩落土と考えられる。遺物は出土していない。

第57号住居跡

〔平面形・重複〕第57号住居跡は第58号住居跡と重複し、堆積土・床面が切られている。また住居南側は削平され、失なわれている。残存している住居北側から平面形を推定すると、方形と考えられる。規模は東西軸5.5mである。

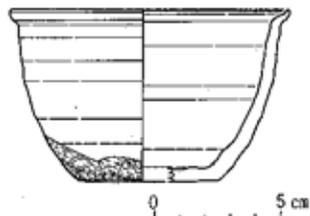
〔壁〕住居壁は地山で周溝からほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩壊が著しい。

〔床面〕床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔周溝〕壁直下に周溝がめぐっている。周溝は断面「」状で、幅約30cm・深さ10～15cmである。この他、住居東壁と平行に内側1.2mの所を溝が走っている。この溝は断面「」状、幅約15cm・深さ2～3cmで、第58号住居跡によって切られている部分まで続いている。

〔その他の施設〕住居内からピットは検出されたが、配置に規則性がみられず、柱穴とは認められない。この他、住居残存部分で施設等は検出されなかった。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は2層にあり、住居全体に水平状の堆積している。第1層は褐色（10YR4/4）粘土質シルト、第2層はにぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルトである。遺物としては土師器甕1点が第1層から出土している。



層位	層位	形状	種	出	登録
2	第1層	甕	外面：ロクロナデ・手持ち ケズリ 内面：ロクロナデ	57E	Pa.1

第82図 第57号住居跡出土土器

第58号住居跡

〔平面形・重複〕第58号住居跡は第57号住居跡と重複し、その堆積土・床面を切っている。しかし、住居南側は削平によって失なわれている。残存している住居北側から平面形を推定すると、方形と考えられる。規模は東西軸4.1mである。

〔壁〕住居壁は第57号住居跡と重複している部分ではその堆積土と地山、その他の部分は地山である。壁は周溝からほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩壊し、第57号住居跡堆積土を壁としている部分では特に顕著である。

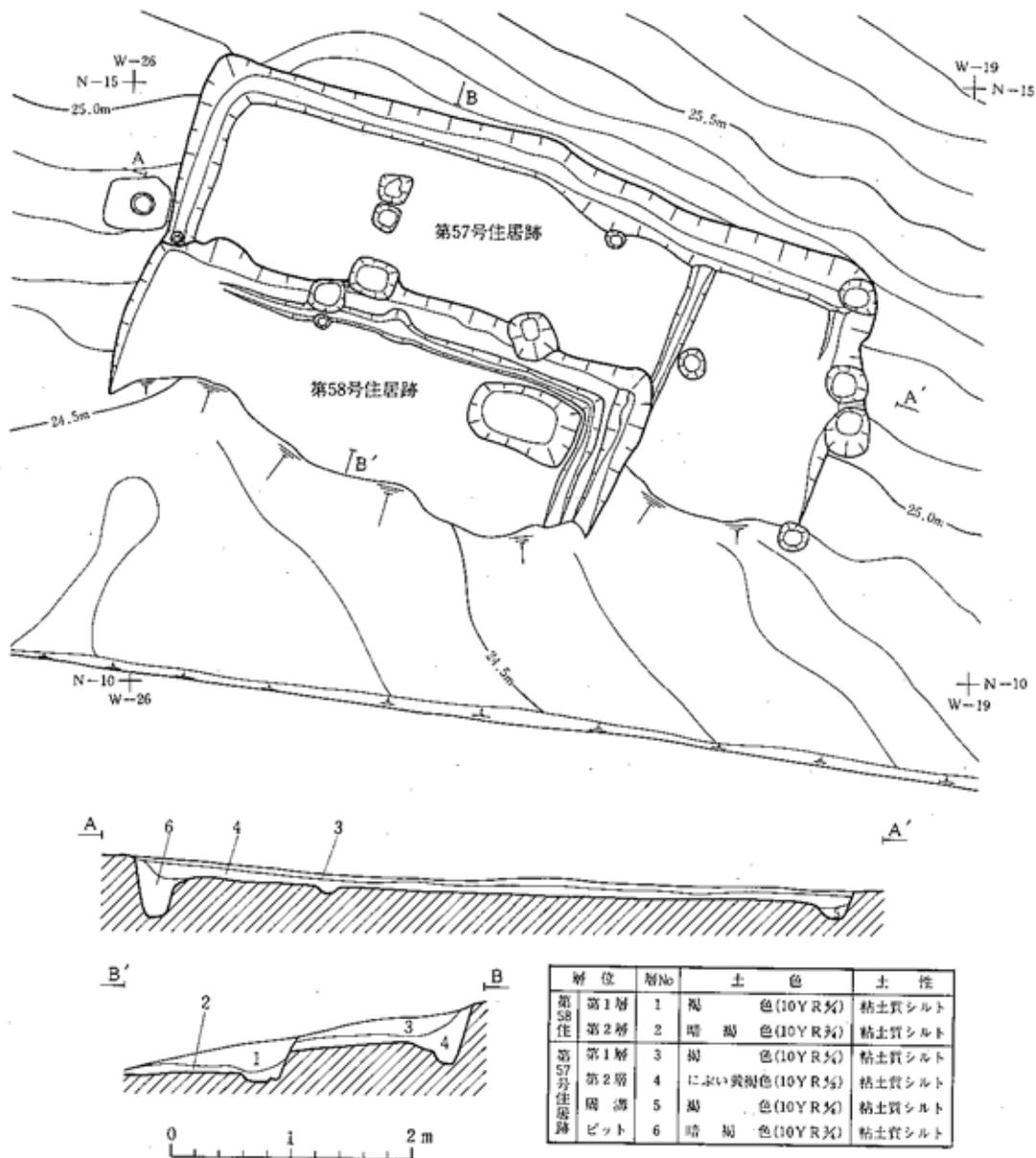
〔床面〕床面は掘り方底面と一致し、ほぼ平坦である。

〔周溝〕周溝は壁に沿って二重にめぐっているが、西壁付近では不明確となっている。周溝は両者とも断面「」状で、壁直下のものが幅約30cm・深さ約5cm、内側のものが幅15～20cm・深さ3～4cmである。ただ、壁直下の周溝は北壁部分で浅くなり、溝というより段に近い形状を示している。

〔その他の施設〕住居北東隅に貯蔵穴状のピットがある。平面形は隅丸長方形で、規模は東西軸90cm・南北軸55cm・深さは約10cmである。ピット内には黄褐色ないしは明黄褐色砂質粘土が水平状に3層堆積している。この他の施設等は住居残存部分では検出されなかった。

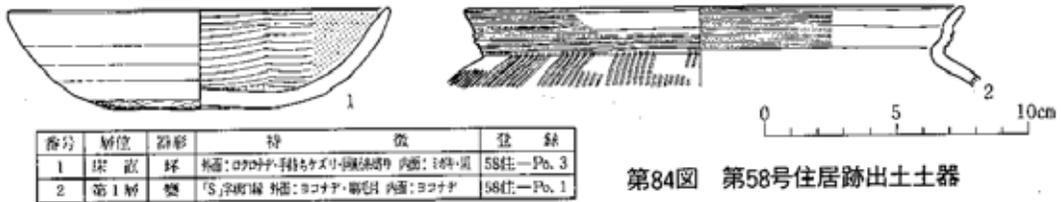
〔堆積土〕住居内堆積土は残存が少ないが2層ある。第1層は褐色粘土質シルト、第2層は暗褐色粘土質シルトである。

〔遺物の出土状況〕遺物は第1層と床面から出土している。第1層からは甕2点、床面からは



第83図 第57・58号住居跡

坏2点（1点は摩滅顕著で図化できなかつた）が出土している。床面から出土した坏2点は製作にロクロを使用した平安時代のものである。それに対し、第1層の甕は古墳時代前期のものである。第1層の甕のうち1点は、第49号住居跡第5層の甕と接合した。第49号住居跡は、第58号住居跡の斜面上方に位置し、住居南端部分が崩れて失われている。したがって第49号住居跡の南端部分が崩れた時、甕の一部が第58号住居跡に転落したものと考えられる（この甕は第49号住居跡の項に収録した）。このため、第83図2に示した甕も、同様に第49号住居跡から転落したものの可能性がある。



第84図 第58号住居跡出土土器

第2号土壇

平面形は楕円形で、北端部分が第45号住居跡と重複している。重複部分が小さいため、切り合いは明確にできなかった。規模は南北軸1.5m・東西軸0.8m・深さ0.6mである。底面は平坦で、壁は傾斜をもって立ちあがる。堆積土は3層に細別されるが、いずれも褐色ないしは黄褐色の粘土質シルトで、水平状の堆積状況を示している。遺物は出土していない。

第3号土壇

平面形は楕円形で、底面両端がピット状になっている。壁は垂直に近い角度で立ちあがる。規模は、南北軸1.2m・東西軸0.8m・深さ0.8m（両端のピット状部分では0.9m）である。堆積土は3層に細別されるが、いずれも褐色粘土質シルトで、下部程黒色中砂ブロックや浅黄色砂質粘土ブロックを斑状に含んでいる。堆積状況は水平状である。遺物は出土していない。

第4号土壇

平面形は楕円形で、東側部分が第40号住居跡を切っている。壁・底面は丸底状である。規模は南北軸0.8m・東西軸0.9m・深さ0.22mである。土壇内部から高坏・甕・甗が1点ずつ出土している。

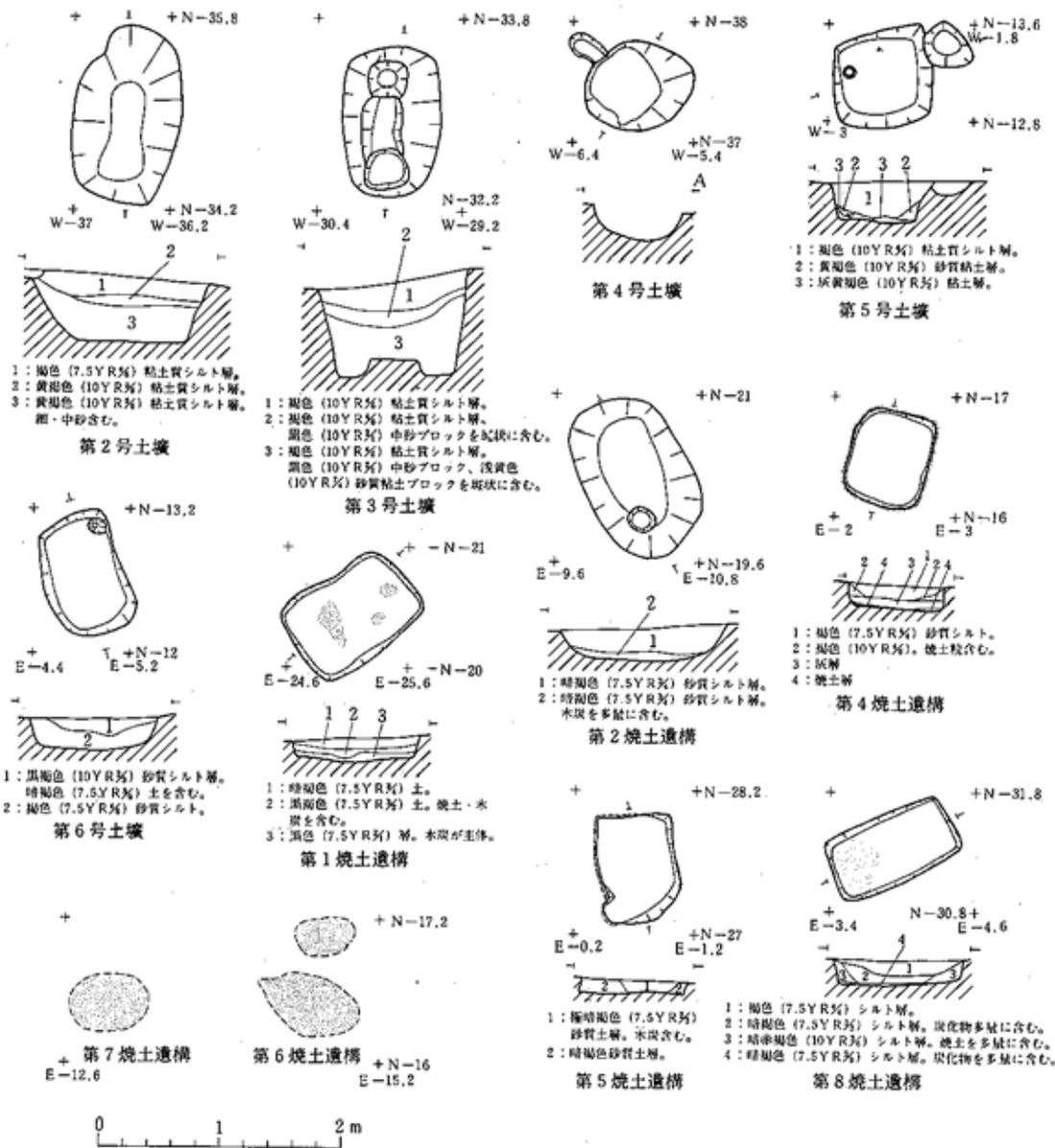
第5号土壇

平面形は歪んだ正方形で、規模は東西・南北軸とも0.9m・深さ0.3mである。底面は平坦で壁は僅かに傾斜して立ちあがる。堆積土の大部分は褐色粘土質シルト層で、底面に近い部分に

黄褐色砂質粘土層・灰黄褐色粘土層がみられる。土壌内から高坏・甕が1点ずつ出土している。

第6号土壌

平面形は長方形で、規模は南北軸1.0m・東西軸0.6m・深さ0.3mである。底面は平坦で、壁は緩かに立ちあがる。堆積土は2層にわかれる。第1層は明褐色土を含む黒褐色砂質シルト、第2層は褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。



第85図 焼土遺構・土壌

第1焼土遺構

平面形は長方形で、規模は南北軸1.1m・東西軸0.8m・深さ0.2mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、それは上部程顕著である。堆積土は3層あり、水平状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色土、第2層は焼土・木炭を含む黒褐色土、第3層は木炭を主体とする層である。遺物は出土していない。

第2焼土遺構

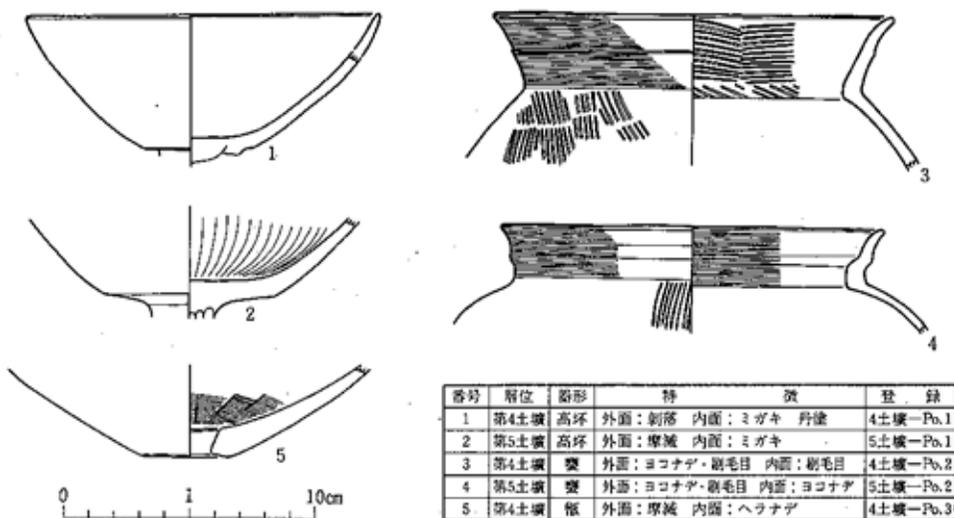
平面形は楕円形で、規模は南北軸1.4m・東西軸0.8m・深さ0.3mである。底面は中央部に向って、僅かに凹み、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土の大部分は暗褐色砂質シルトで、底面に近い部分に木炭を多量に含む暗褐色砂質シルト層がみられる。遺物は土師器細片が少量、底面近くから出土している。

第4焼土遺構

平面形は長方形で、規模は南北軸0.8m・東西軸0.65m・深さ0.2mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、壁上部程顕著である。堆積土は4層あり、第1・2層は将棋倒し状、第3・4層は水平状の堆積状況を示している。第1・2層は褐色シルト、第3層は灰層、第4層は焼土層である。遺物は出土していない。

第5焼土遺構

平面形は歪んだ長方形で、規模は南北軸0.9m・東西軸0.6m・深さ0.15mである。底面は平

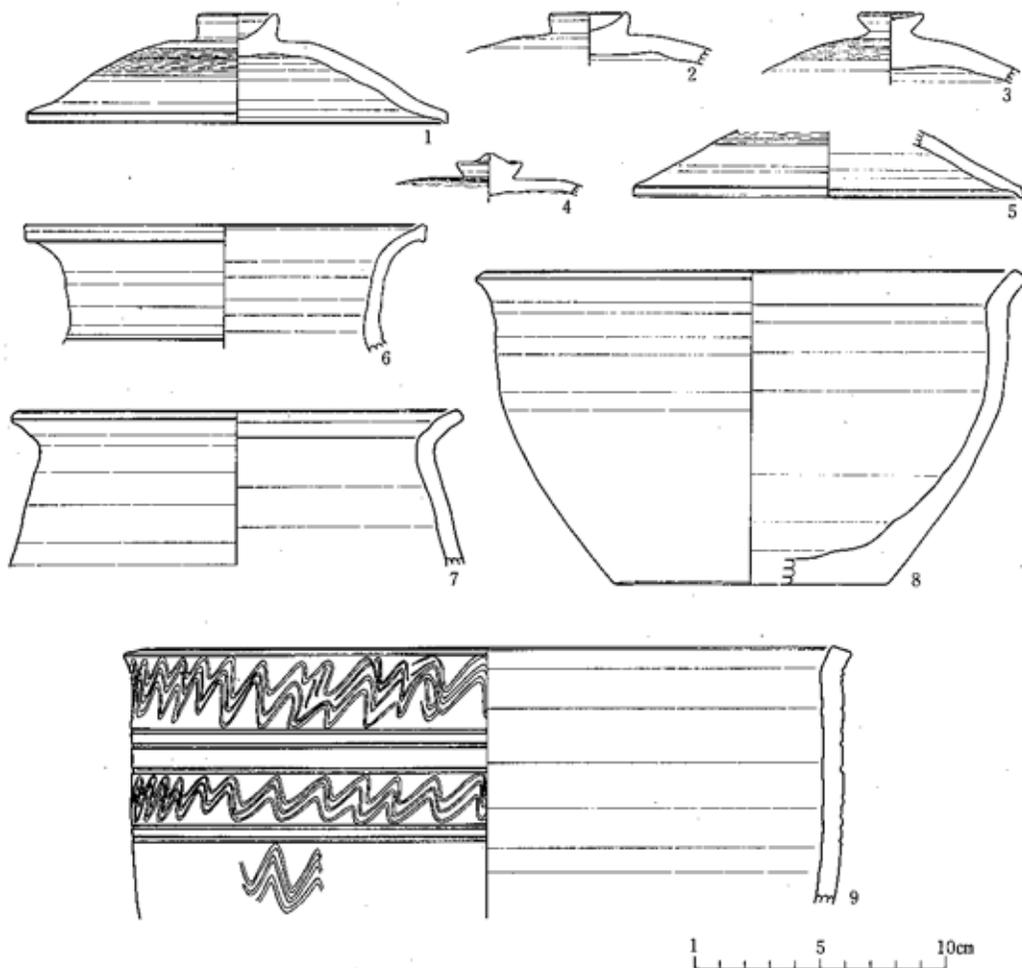


第86図 第4・5号土壌出土土器

坦で、壁は北・西部分が内傾して、東・南部分が外傾して立ちあがる。底・壁面は赤褐色に焼けており、壁上部程顕著である。堆積土は2層に細分され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は極暗褐色砂質土、第2層は暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。

第6・7焼土遺構

第6・7焼土遺構は焼面で、住居跡床面の一部である可能性もある。第6焼土遺構は不整楕円形(90×50cm)、第7焼土遺構は楕円形(60×50cm)である。第6焼土遺構の北側約15cmの所にも小規模な焼面(50×30cm)がある。

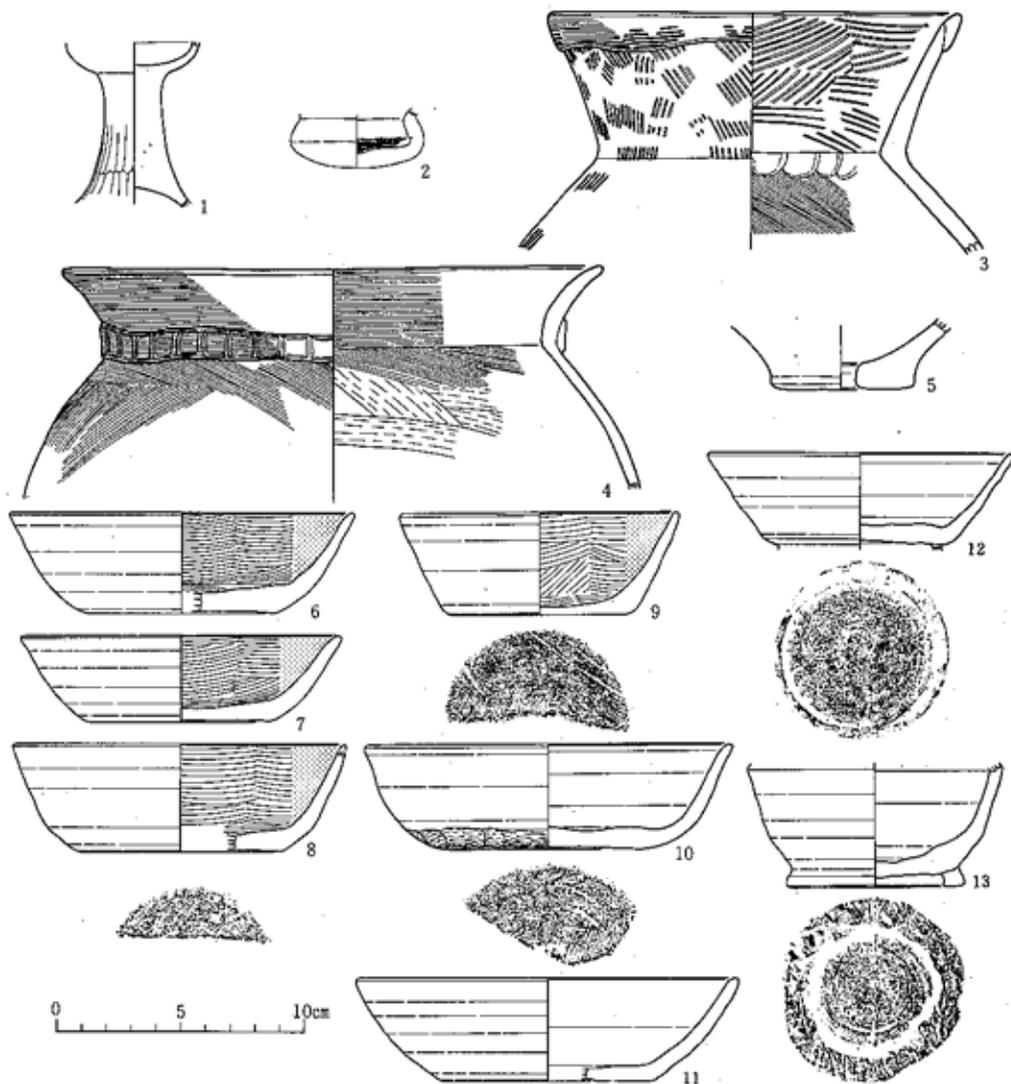


番号	層位	器形	特 徴	登 録	番号	層位	器形	特 徴	登 録
1	BC-54-3	甑	外面：ロクロナデ・回転ナズリ 内面：ロクロナデ	Po.16	6	BF-2	甕?	内・外面：ロクロナデ	Po.23
2	BC-54-3	甑	外面：ロクロナデ・回転ナズリ 内面：ロクロナデ	Po.19	7	BO-54-3	甕	内・外面：ロクロナデ	Po.2
3	BL-54-3	甑	外面：ロクロナデ・回転ナズリ 内面：ロクロナデ	Po.17	8	BL-54-3	甕	内・外面：ロクロナデ	Po.12
4	BL-54-3	甑	外面：ロクロナデ・回転ナズリ 内面：ロクロナデ	Po.18	9	BL-54-3	甕?	外面：ロクロナデ・波状文・流線 内面：ロクロナデ	Po.13
5	BE-F64-1	甑	外面：回転ナズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	Po.20	※ 1～6：須恵器 7～9：土師器				

第87図 各地区出土土器(1)

第8 焼土遺構

平面形は長方形で、第30号住居跡を切っている。規模は東西軸1.1m・南北軸0.6m・深さ0.2である。底面および壁面が焼けており、上部程顕著である。堆積土は4層あり、第1～3層は将棋倒し状の堆積状況を示し、第4層は底面に薄く堆積している。第1層は褐色シルト、第2層は炭化物を多量に含む褐色シルト、第3層は焼土を多量に含む暗褐色シルト、第4層は炭化物を多量に含む暗褐色シルトである。遺物は出土していない。



番号	層位	器形	特 徴	登 録	番号	層位	器形	特 徴	登 録
1	B1-68	高杯?	外面:ミガキ 内面:ミガキ・摩滅	区一Po.5	8	X-X	杯	外面:ロクロナデ・摩滅 内面:青釉状ミガキ・黒	区一Po.9
2	AP-66	碗	土製模造品	区一Po.7	9	BN-67-3	杯	外面:ロクロナデ・磨滅 内面:青釉状ミガキ	区一Po.8
3	AN-67	盃	外面:ヨコナデ・磨毛目 内面:刷毛目・オサエ・ナデ	区一Po.3	10	BL-54-3	杯	内・外面:ロクロナデ・手触チケズリ・磨毛目?	区一Po.14
4	AN-67	盃	外面:ヨコナデ・オサエ・磨毛目 内面:ナデ・ケズリ	区一Po.6	11	BL-54-3	杯	内・外面:ロクロナデ・ヘラ切り	区一Po.15
5	AN-68	瓶	内・外面:摩滅	区一Po.4	12	58住居跡	高脚杯	内・外面:ロクロナデ・ヘラ切り	区一Po.1
6	X-X	杯	外面:ロクロナデ・磨毛目 内面:青釉状ミガキ・黒	区一Po.10	13	BL-54-3	壺	内・外面:ロクロナデ	区一Po.21
7	X-X	杯	外面:ロクロナデ・摩滅 内面:青釉状ミガキ・黒	区一Po.11	※ 1～9:土師器 10:赤土器 11～13:須恵器				

第88図 各地区出土土器(2)

Ⅲ. 遺物の検討

弥生土器

弥生土器は口縁部資料25点（口縁上端部を破損しているものも含む）・底部資料1点・胴部資料平箱約1/2が出土している。このように、弥生土器は量的に少なく、いずれも破片で、出土状況の点でも、各地区・各層位から出土するなどまとまりはみられない。そこで、今回は口縁部資料25点と特徴の明瞭な胴部資料5点を取りあげて分類し、編年の位置づけを行なうことにする。

土器の分類

第1類：太い沈線によって文様を描いているもの（1～5）

1・2は蓋である。口縁部に数条の沈線をめぐらし、その上部に地文を施文している。1の地文は不明だが、2はLR縄文である。1の口縁部内面には一条の沈線がめぐっている。3は鉢である。口縁部には带状にLR縄文が施文され、口縁部下端に沈線がめぐっている。沈線は口縁部内面にもめぐっている。4・5は口縁部が内弯する鉢である。沈線で区画文様を描き、地文を施文している。4の地文は不明だが、5はLR縄文である。

第2類：横位連続刺突文のめぐるもの（6）

6は甕の頸部で、横長の刺突文がめぐっている。

第3類：沈線で文様を描き地文を充填するもの（7）

7は鉢の胴部で、地文は摩滅のため不明である。

第4類：細い沈線で文様を描くもの（8～10）

8は鉢の胴部で、重層する方形区画文を描いている。9・10は壺の胴部で、渦巻文を描いている。10の胴下部に施文されている地文はLR縄文である。

第5類：二条の平行沈線で文様を描くもの（11～13）

11・12は壺の口縁部で補修孔？がある（11は1個、12は2個確認される）。両者とも線間の狭い二条の平行沈線で、密接して重層する山形文を描いている。13は鉢の胴部で、重層する連弧文間に鋸歯状文を描いている。

第6類：口縁部下端に刺突文をめぐらすもの（14～30）

a類：交互刺突文をめぐらすもの（14～20）

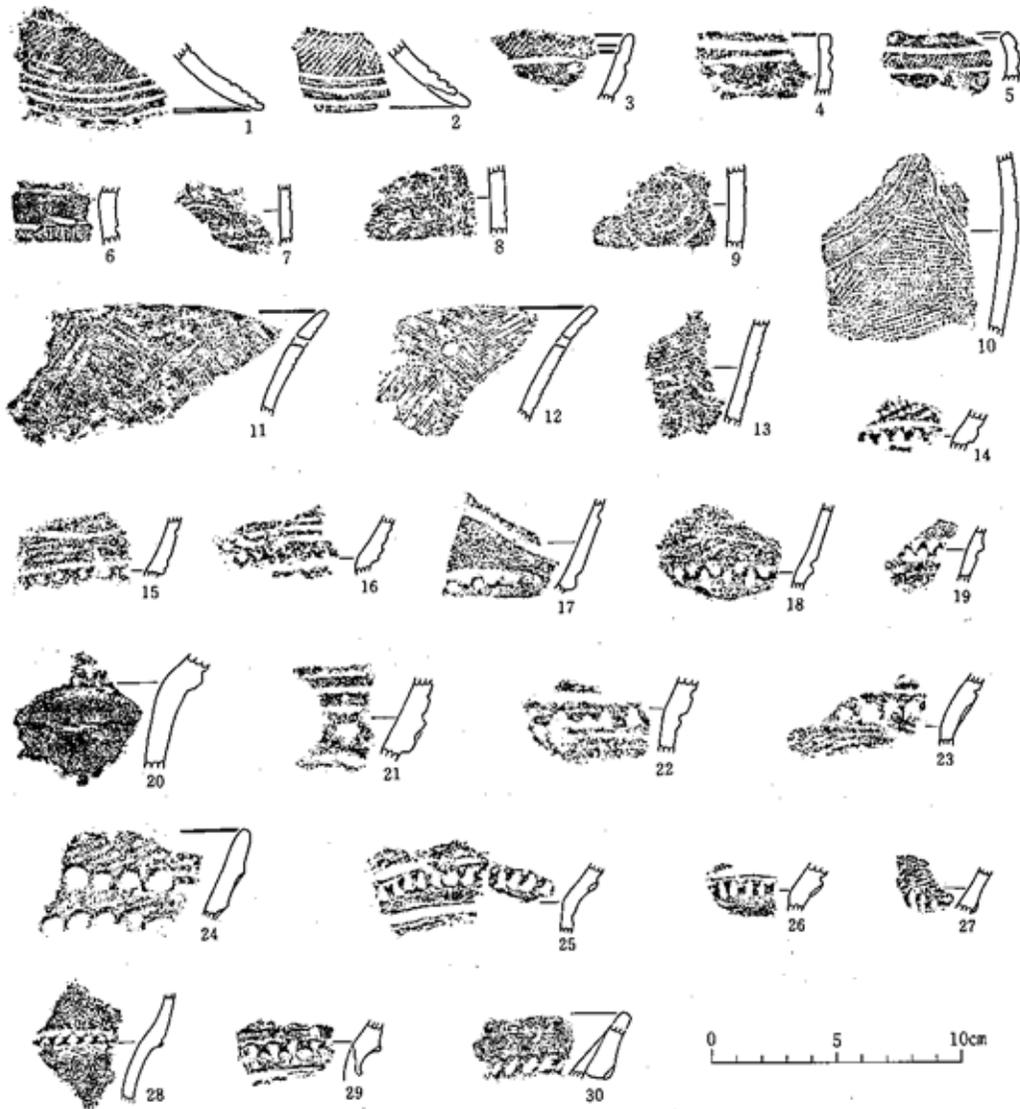
14～18は口縁部に太い沈線で平行状・弧状の文様を描いている。15にはLR縄文が施文されているが、その他は不明である。なお、19～20は口縁上半部を破損している。

b類：単純刺突文をめぐらすもの（21～22）

21・22とも口縁部に太い沈線で平行状文様を描いている。

c類：押圧状刺突文をめぐらすもの（23・24）

23は口縁部に沈線を引き、頸部にR L縄文を施文している。24は抑圧状刺突文が二段になっ



番号	地区・層位	登録番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1	BF-62区-第1層	Y.Po.1								AP-65区-第2層	Y.Po.8							α区-α層	Y.Po.16						α区-α層	Y.Po.34						
2	AQ-63区-第2層	Y.Po.2								第34住床面	Y.Po.9							α区-α層	Y.Po.17						第16住	Y.Po.25						
3	第1住P.	Y.Po.3								AP-65区-第2層	Y.Po.10							α区-α層	Y.Po.18						α住-第1層	Y.Po.26						
4	α区-α層	Y.Po.4								BG-60区-第3層	Y.Po.11							α区-α層	Y.Po.19						BM-60区-2層	Y.Po.27						
5	第5住第1層	Y.Po.5								BG-60区-第3層	Y.Po.12							第6住-第1層	Y.Po.20						第28住-周溝	Y.Po.28						
6	AB-61区-第1層	Y.Po.6								α区-α層	Y.Po.13							第60区-第3層	Y.Po.21						AQ-58区-第1層	Y.Po.29						
7	α区-α層	Y.Po.7								AP-66区-第1層	Y.Po.14							第21住-第1層	Y.Po.22						第29住	Y.Po.30						
										第4住-埋土	Y.Po.15							第26住-床面	Y.Po.23													

第89図 弥生土器

ている。

d類：刻目状刺突文をめぐらすもの（25～30）

25・26は口縁部に沈線、27はLR縄文を施文している。28～30は口縁部が無文である。

第6類の中で、a～c類（14～24）と口縁部に文様のあるd類（25～27）は口縁部が外傾し頸部でしまる深鉢状の器形をしているが、口縁部が無文のd類（28～30）は壺である。特に30は明瞭な壺で、複合口縁となっている。

土器の編年的位置

第1類は鱸沼遺跡（志間泰治：1971・12）・船渡前遺跡（宮教委：1973・3）などで出土しており、大泉式とされるもの（伊東信雄：1957・3）である。第3類の山形文は南小泉遺跡などで出土しており、柵形式とされるもの（伊東信雄：1957・3）である。第2類の甕は船渡前遺跡の大泉式や南小泉遺跡の柵形式の両者にあり、どちらに伴うものか区別ができない。第4類は北沢遺跡などにみられ（斎藤・真山：1978・3）円田式とされている。第5類は南小泉遺跡などから出土しており、十三塚式とされるものである（伊東信雄：1957・3 1981・10）。第6類は交互刺突文をもつ（a類）という点で、天王山式（坪井清足：1953・6）と共通する点が多い。しかし、b類～d類は単純な刺突文であつたり刻目をもつもので、かなり相違する要素をもっている。特にd類の一部は壺の器形を示し、口縁部無文化の傾向が著しい。さらに、d類の30は明瞭な複合口縁の壺で、土師器的要素が強い。近年、天王山式土器の細分や後続する土器の存在が指摘されているが、その内容については未だ明確でない（目黒吉明：1969・3 中村五郎：1976・10 伊東信雄：1974・11 興野・遠藤：1970・6）。ここでは第6類を天王山式として一括したが、いずれも新しい要素をもつものである。そして、d類については直接土師器との関連をうかがえる程である。

古代の土器

第 群土器

第I群土器は第・22・38・49・53号住居跡からまとまって出土している土器群で、高坏・器台・坏・壺・甕・甑から成っている（第90図）。しかし、これらの土器群も詳細に観察すると各々の住居跡において器形細部・器面調整などの特徴に種々の相違がみられる。このような相違がどのような理由に基づくものなのかを、土器の分類と住居跡における共伴関係を検討することによって明らかにしたい。

土器の分類

高坏

第1類：脚部が裾の広がる円錐台状のもの（1）

坏口縁部が外反気味に外傾し、胴・底部は脹みをもった丸底状をしている。脚部は円錐台状で、裾が強く広がる。丸窓が3個あり、直径は約1.4cmである。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、口縁下部から胴・底部・脚部がヘラミガキ、脚裾部がヨコナデである。ヘラミガキは丁寧である。内面の器面調整は坏部がヨコナデ・ナデ、脚上部がヘラケズリ、脚下部がヨコナデで、脚下部には前段階の刷毛目痕を残している。全体に力強く、丁寧に仕上げられている。

第2類：脚上部が柱状で、脚下部が円錐台状のもの（2）

坏部と脚下部を破損している。脚上部は柱実で、脚中央部が円錐台状に開き、直径約1.2cmの丸窓を3個（破損のため数は推定）もつ。器面調整は外面が丁寧なヘラミガキ、内面がヘラナデである。

第3類：脚上・中部が柱状で、脚下部が円錐台状のもの（3）

坏口縁・胴部は外傾し、底部は幾分丸味をもった平底である。脚上・中部は柱実で、脚下部が円錐台状に開くが、その大部分を破損している。器面調整は、脚柱状部分の外面はヘラミガキであるが、その他の部分は摩滅のため不明である。

器台

第1類：脚部が外反しながらのびる円錐台状のもの（4）

受け部は口縁部と胴部下端に段がある。口縁部は直立気味に外反する。胴部は外傾気味に外反する。底部は内面側で平坦となる。受け部と脚部の間には直径約6mmの貫通孔があり、その長さは約4cmである。脚部は高い円錐台状で、外反しながら裾部にのび、端部が内側に僅かに折れ曲る。脚中央部には直径約1.3cmの丸窓が3個あいている。器面調整は外面全体と受け部内面が丁寧なヘラミガキ、内面は脚上部がヘラケズリ、胸中部がナデツケ、脚下部がヨコナデである。

坏

第1類：有段の坏

a類：段が上部にあるもの（5）

口縁・胴部とも内弯気味に外傾する。底部は小さいが、平底である。器面調整は口縁上部外面から内面全体がナデ・ヨコナデ、口縁下部から胴部の外面が刷毛目である。底部外面は不明確な調整である。

b類：段が中央部にあるもの（6）

口縁部は内弯気味に外傾し、胴・底部は脹みのない丸底状である。器面調整は摩滅のため不

明である。

c類：段が中央下部にあるもの（7）

口縁部は内弯気味に外傾し、大きく開く。胴・底部の大部分を破損しているが、脹みをもつ丸底状になるものと推定される。器面調整は摩滅のため不明である。

d類：段が下部にあるもの（8）

口縁部は大きく内弯しながら開く。胴・底部は丸底状である。外面の器面調整は口縁部が不明調整、胴・底部がヘラケズリである。内面の器面調整は口縁上部がヨコナデ、口縁下部から底部がナデおよびヘラナデである。

第2類：口縁部が外傾し、胴部が内弯する鉢状のもの

a類：口縁部が肥厚するもの（9）

口縁部は上端が肥厚気味に外反し、中下部が脹みをもつ。胴部は上部で強く脹み、下部に向って丸味をもちながらすぼまる。底部は小さくて、凹んでいる。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、口縁部から胴部が刷毛目、胴中央部から底部がヘラミガキである。内面の器面調整は口縁部から胴中央部までが刷毛目で、胴上部ではその上をナデている。胴下部から底部はヘラナデである。全体に丁寧に仕上げられている。

b類：口縁部が複合口縁のもの（10）

口縁部は複合口縁で、内弯気味に外傾する。胴部は内弯し、中央部が強く脹む。底部は破損しているが、小さくなるものと推定される。器面調整は摩滅のため不明である。

壺

第1類：複合口縁の大型壺

a類：口縁部が強く外傾するもの（11）

内面の口縁部と頸部の境に軽い稜がある。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、頸部が刷毛目である。内面の器面調整は口縁・頸部ともヨコナデである。

b類：口縁・頸部の外傾が同じもの（12）

内外面の器面調整は口縁・頸部とも刷毛目であるが、口縁下部内面はその上をさらにナデられている。

第2類：胴中央部が強く脹む小型壺

a類：胴中央部の張りが強いもの（13）

胴中央下部に強く屈曲する部分がある。底部は中央が凹んでいる。外面の器面調整は胴下部がナデ、底部がヘラケズリであるが、胴上・中央部は摩滅のため不明である。内面の器面調整は胴上・中央部がヘラナデ、胴下・底部がナデである。

b類：胴中央部の張りが弱いもの（14）

胴中央下部に屈曲はあるが弱い。底部は全体が凹んでいる。器面調整は不明である。

甕

第1類：口縁部が外反し、胴部は球形になるもの

a類：外面の器面調整に刷毛目を多用するもの（15）

口縁中央下部が肥厚する。底部は平底である。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、頸部から胴部が刷毛目である。内面の器面調整は、底部がナデであるが、口縁・胴部は摩滅のため不明である。別個体の資料には刷毛目とヘラナデのものがある。

b類：外面の器面調整にヘラミガキ・ヘラナデを多用するもの（16）

口縁中央下部の肥厚はa類に較べて小さい。底部は破損している。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラミガキとヘラナデである。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が不明調整である。

第2類：口縁部が外反し、胴部は下半部が脹むもの（下脹み）

a類：器面調整に刷毛目を多用するもの（17）

口縁中央下部が肥厚する。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が刷毛目で、胴部の刷毛目が口縁下部に及ぶものもある。内面の器面調整は口縁部が刷毛目とヨコナデのものがある。胴部は摩滅のため不明である。

b類：器面調整にヘラミガキ・ヘラナデを多用するもの（18）

口縁部は頸部に向って肥厚する。外面の器面調整は口縁部がヨコナデで、胴部はヘラミガキ・ヘラナデを多用し、部分的に刷毛目を採用している。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデである。

第3類：口縁部が外反する小型の甕（19）

胴部に対する口縁部の比が、第1～3類に較べて大きい。胴部は球形で、胴中央下部に張りがある。底部は全体が凹んでいる。器面調整は摩滅のため不明である。

第4類：口縁部が直立気味に外傾し、胴部は上半部が脹むもの（20）

外面の器面調整は口縁部がヘラミガキとヨコナデ、胴部がヘラナデ・ナデで、部分的に刷毛目痕がある。内面の器面調整は口縁部がヘラミガキとヨコナデ、胴部が軽いヘラミガキとヘラケズリである。

第5類：「S」字状口縁のもの

a類：胴部が大きく脹むもの（21）

器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が単位の密接する刷毛目、胴部内面がナデ・オサエである。

b類：胴部の脹みが小さいもの（22）

器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が単位の間隔のあいた刷毛目である。

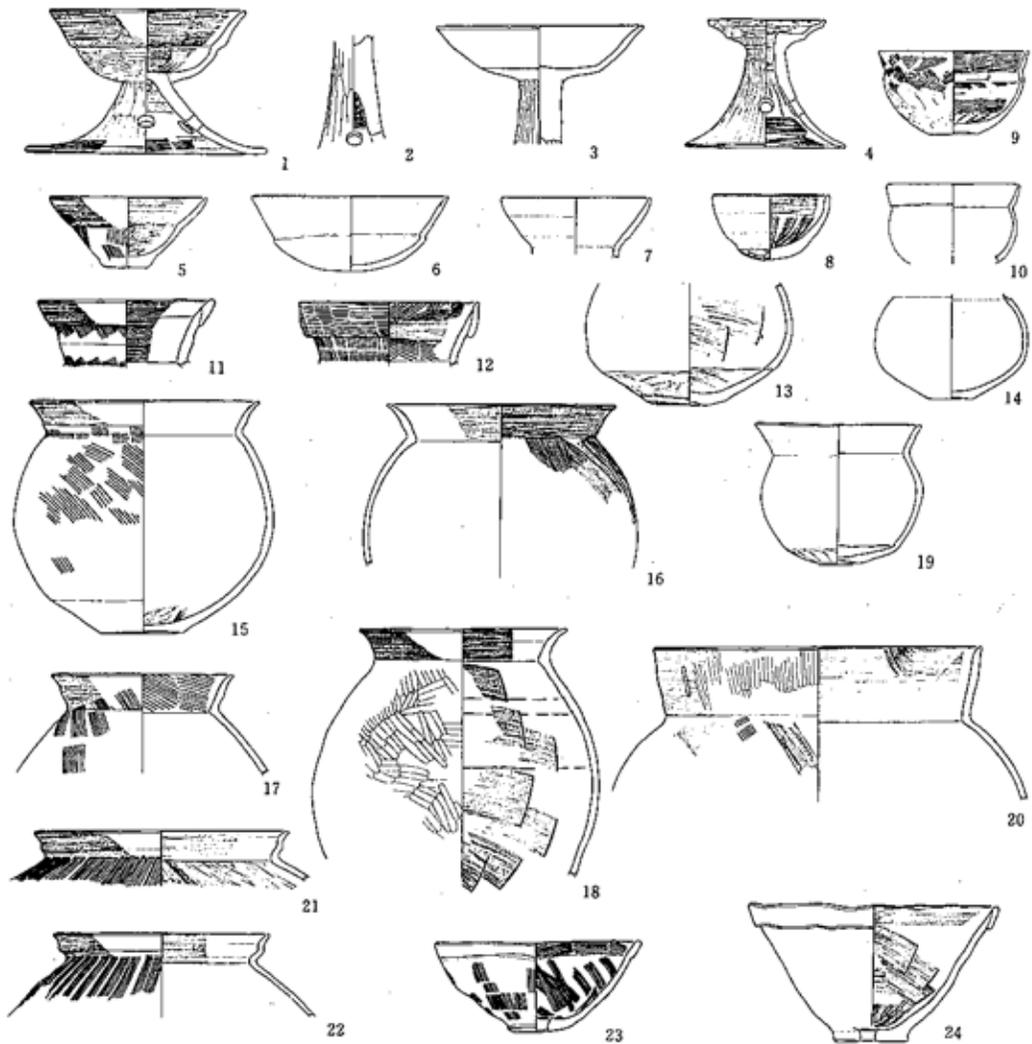
甑

第1類：複合口縁で、丸底の鉢状のもの (23)

複合口縁はあまり顕著でない。全体に丸味をもつ鉢状をした単孔の甑である。器面調整は口縁部外面がオサエ、胴部外面と内面全体が刷毛目、底部外面がヘラケズリである。

第2類：複合口縁で、平底の鉢状のもの (24)

複合口縁は顕著である。口縁・胴部が直線的に外傾し、底部が平底の鉢状になる単孔の甑である。平底の底部は全体が厚く、台状になっている。



第90図 第I群土器

土器の共伴関係

分類を行なった土器の各住居跡における出土状況を検討してみたい。土器群の組み合わせとその同時性を検証するには床面上の一括遺物が望ましい。しかし、宮前遺跡ではそのような良好な出土状況を示す資料があまり多いと言えず、そのみにこだわると各々の器形の欠落現象が顕著になり、相互の比較が困難となる。そこで、ここでは住居廃絶時から埋没終了時までの間に遺棄あるいは廃棄された土器群を広義の共伴関係の資料として取り扱うことにする。したがって、各住居跡における土器組成は一定の時間幅をもつことになる。ただし、この時間幅は土器の変化（形態・調整技法などの特徴）を引き起す程のものであってはならない。その点は、床面や貯蔵穴状ピットから出土した同時性の強い遺物によって補なうことにする。

住居跡における土器の出土状況

第2・22・38・49・53号住居跡における土器の出土状況をみると次のようになる。なお、第2・38・49・53号住居跡の土器は大部分が床面・貯蔵穴状ピット出土のものである。また第22号住居跡の土器は堆積土でも床面に近い部分から出土したものである。

第2号住居跡：高坏第3類2点・坏第1d類1点・壺第1b類1点・壺第2b類1点・甕第1b類1点・甕第2a類4点・甕第2b類3点・甕第4類1点・甕第5b類1点・甗第2類1点

第22号住居跡：高坏第2類1点・坏第1c類1点・甕第1a類2点。

第38号住居跡：器台第1類1点・壺第1a類1点・甕第1a類3点・甗第1類1点。

第49号住居跡：器台第1類1点・坏第1b類2点・壺第2a類1点・甕第1a類4点・甕第3類2点・甕第5a類1点。

第53号住居跡：高坏第1類1点・坏第1a類1点・坏第2a類1点・坏第2b類1点。

以上のような土器の出土状況を整理すると次の三つのグループにわかれる。

A群：高坏第1類・坏第1a類・坏第2a類・坏第2b類からなるグループ（第53号住居跡）

B群：高坏第2類・器台第1類・坏第1b類・坏第1c類・壺第1a類・壺第2a類・甕第1d類・甕第2a類・甕第3類・甕第5a類・甗第1類からなるグループ（第22・38・49号住居跡）

C群：高坏第3類・坏第1d類・壺第1b類・甕第1b類・甕第2a類・甕第2b類・甕第4類・甕第5b類・甗第2類からなるグループ（第2号住居跡）

これら三つのグループにおける土器の組み合わせをみると、甕第2a類をB群とC群が共有している以外は、それぞれ異なった土器組成となっている。また、甕第2a類についても、B群では僅か1点で、全体の中で1/13の比率で少ない存在であるのに対し、C群では4点で4/10の比率を占め非常に特徴的な存在である。このように、A・B・C群はそれぞれまとまりをもった土器群とすることができる。

編年的位置

第Ⅰ群土器は高坏・器台・坏・壺・甕・甑からなり、その器形的特徴から東北地方の土師器の編年で塩釜式に位置づけられる（氏家和典：1957・3）。また、第Ⅰ群土器は住居跡における共伴関係の相違からA・B・Cの三つの土器群にわかれることが明らかとなった。塩釜式土器におけるA・B・Cの三つの土器群の存在が、どのような理由に基づくものであろうか。このことを、これまで発見されている塩釜式土器と比較し、検討することにした。

A群土器

A群土器と共通した内容をもつ土器群としては刈田郡蔵王町大橋遺跡出土土器をあげることができる（太田昭夫：1980・9）。大橋遺跡では3軒の住居跡が調査され、塩釜式土器がまとまって出土している（第91図）。第1～3号住居跡からは高坏・器台・坏・壺・甕が出土し、ほぼ同時期のものと考えられている。

高坏第1類に類似するものは第1号住居跡から出土している。坏部は口縁部が内弯気味に外傾し、胴・底部は強い脹みをもつ丸底状のもので、脚部は裾の大きく広がる円錐台状で大きな円窓がある。口縁部が内弯気味に外傾することを除けば、高坏第1類と良く似ている。坏第1・2類は住居跡周辺の第Ⅰ・Ⅱ層、やや似たものが第2・3号住居跡から出土している。坏第1・2類は宮前遺跡第53号住居跡において床面・貯蔵穴状ピットから高坏第1類とともに出土しており同時性の高いものである。

大橋遺跡の土器は塩釜式でも古い段階の可能性が強いものと考えられている（太田昭夫：1980・9）。

B群土器

B群土器と共通した内容をもつものは、名取市清水遺跡第Ⅳ層出土土器（丹羽・阿部・小野寺：1981・3）・仙台市遠見塚古墳第12トレンチ第Ⅰ土器群（結城・工藤：1979・3）・加美郡色麻町色麻古墳群第12号住居跡出土土器（古川一明：1983・3）・栗原郡志波姫町鶴ノ丸遺跡第5・6号住居跡出土土器群（手塚均：1981・9）などがある（第91図）。清水遺跡第Ⅳ層からは高坏第2類・坏第1c類・甕第3類とともに、B群土器では欠落している脚部円錐台状の高坏、縁帯をもつ壺が出土している。遠見塚古墳第12トレンチでは自然溝の小さな段から多量の土器がまとまって出土し、坏3点（1点は高坏の可能性もある）・壺1点・甕4点が実測図で報告されている。これらのうち坏1点は第1c類、甕3点は第1a類である。ここで注意すべきことは有段口縁の壺が共伴していることである。有段口縁の壺は仙台市今泉城第19号土壙からも坏第1b類・壺第1a類・壺第2a類・甕第1a類・鼓形器台とともに出土している（篠原・工藤他：1980・8）。色麻古墳群第12号住居跡からは、坏第1b類1点・坏第1c類1点・壺第2a類1点・甕第1a類1点と、B群土器では欠落している高坏1点・坏4点が出土している。鶴ノ丸遺跡第5号住

居跡からは、坏第1 b類と第1 c類の中間的なもの2点・坏第1 c類1点・壺第1 a類2点・壺第2 a類1点・甕第2 a類の他脚部円錐台状の高坏1点・鉢状の坏1点が出土している。第6号住居跡からは第1号住居跡と同様な坏・壺とともに鼓形器台・円錐台状の短脚器台が出土している。

これらの土器群は、いずれも塩釜式として報告されている。その中で、清水遺跡・鶴ノ丸遺跡の報告では大橋遺跡と同様に古い段階に属するが、大橋遺跡の土器群とは相違する様相を示すことを指摘し、資料の増加を待つて解決すべき問題としている（丹羽・小野寺・阿部：1981・3、手塚均：1981・9）。

C群土器

C群土器と共通した内容をもつものは、名取市清水遺跡第Ⅲ層・第10溝出土土器（丹羽・小野寺・阿部：1981・3）・名取市西野田遺跡第5号住居跡出土土器（丹羽・柳田・阿部：1974・3）・古川市留沼遺跡第1・2次調査出土土器（手塚均：1980・3）などである（第91図）。

清水遺跡第Ⅲ層・第10溝からは、甕第1 b類1点・甕第2 a類2点とともにC群土器では欠落している高坏、退化した複合口縁や縦位浮文をもつ壺などが出土している。西野田遺跡第5号住居跡からは高坏第3類1点・壺第2 b類2点・甕第2類1点とともに鼓形の器台1点、退化した有段口縁の壺1点、台付甕の台部1点が出土している。このように、清水遺跡・西野田遺跡では出土量が限られているため、土器組成を知る上ではやや偏ったあり方をしている。この点、留沼遺跡第1・2次調査地区の第1号住居跡・竪穴遺構・第1～4遺物集中地点・遺物包含層からまとまって出土している。すなわち、高坏第1類・壺第2 b類・甕第2 a類・甕第2 b類・甕第2類とともに、各種の高坏・器台・坏・壺・甕が出土している。高坏・器台には丸窓や貫通孔の小さいものやないものが多い。坏は第1 b・c類にも似るが、張りや脹みが弱い。有段口縁の壺は退化した形態のものである。甕には口縁・胴部が内弯するものもあるが底部の形状は第2類と同じで台状になっている。器面調整の刷毛目・ヘラミガキはA・B群土器と較べると粗雑である。

これらの土器群は、塩釜式土器として位置づけられ、さらに西野田遺跡では大橋遺跡出土土器と比較した上で「塩釜式土器内部の新しい要素」をもつもの（丹羽・柳田・阿部：1974・3）、留沼遺跡では「西野田のもの強い類似性を示し」……中略……「西野田における器種の欠損をある程度まで補うもの」（手塚均：1980・3）、清水遺跡では「第Ⅱ群土器（第Ⅲ層・第10溝出土土器）は第Ⅰ群土器（第Ⅳ層出土土器）より新しいもの」（丹羽・小野寺・阿部：1981・3）としている。したがって、C群土器の類例としたものは、いずれも塩釜式土器の中で新しい段階のものとして理解されている。さらに、清水遺跡ではB群土器よりも新しいことが層位的（第Ⅳ層土器→第Ⅲ層土器）に確認されている。

塩釜式土器の諸段階

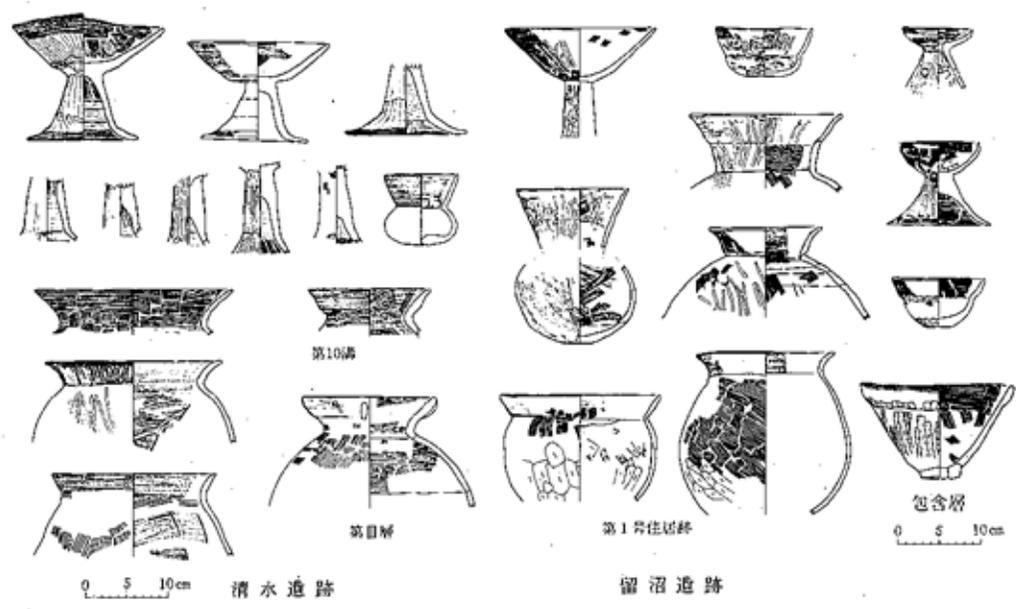
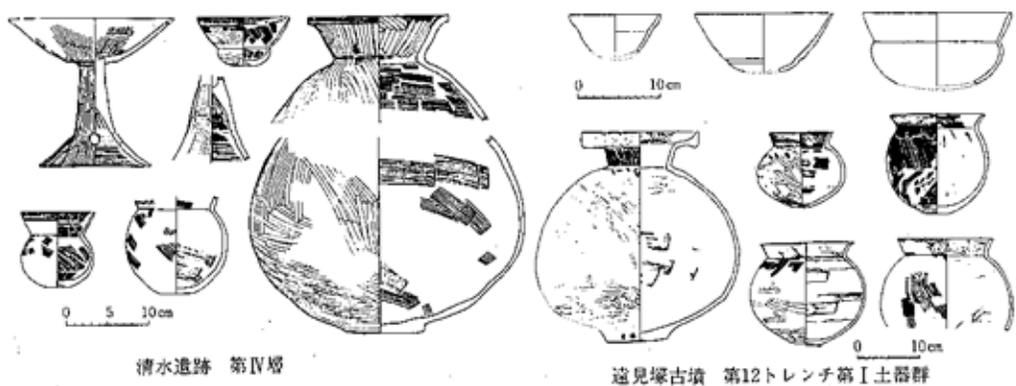
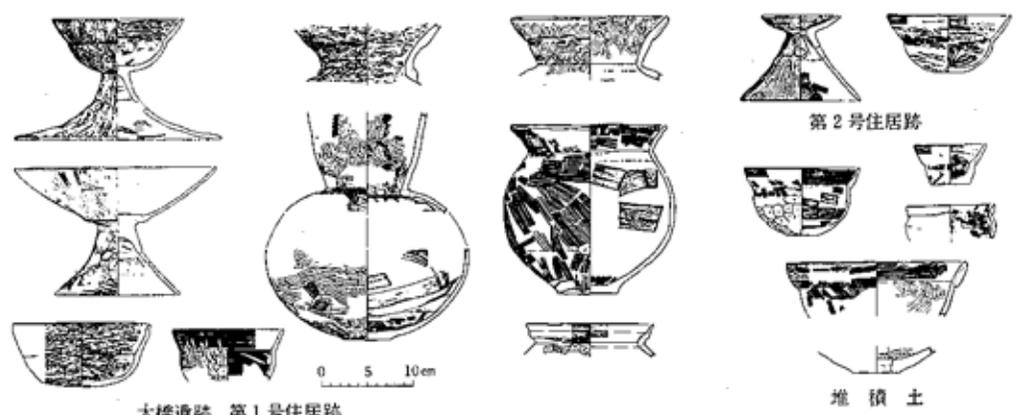
A群土器・B群土器・C群土器の類例を検討した結果、塩釜式土器の中でA群土器・B群土器は古い段階に、C群土器は新しい段階に属すること、さらにB群土器とC群土器の関係は清水遺跡において層的に示されることを確認した。次に問題となるのは、A群土器とB群土器の関係である。この点を器形ごとに各群の土器を比較し検討してみたい。

高坏：A群土器の高坏には、脚部が裾の大きく広がる円錐台状と単純な円錐台状のものがあり、両者とも大きい円窓を3個以上もっている。器面調整は丁寧である。C群土器の高坏には脚上・中部が柱状で下部が円錐台状になるものと、脚下部で屈曲をもつ円錐台状のものがある。これらの高坏に共通しているのは、脚部に円窓をもたないものが多く、あっても小さいことである。また、器面調整はA群土器の高坏に較べると粗雑である。この点B群土器の高坏は、脚上部が柱状で脚中・下部で円錐台状に開くものと、単純な円錐台状のものがある。円窓はあるが、A群土器の高坏に較べると小さく、その数も3個に限られる。器面調整はC群土器よりは丁寧であるが、A群土器程ではない。

器台：A群土器の器台は脚部が円錐台状で、大きな円窓と貫通孔をもち、丁寧に仕上げられている。B群土器の器台には脚部が円錐台状と鼓形のものがあり、貫通孔をもつ。円錐台状のものは円窓をもつが、A群土器の円窓と較べると小さい。また、円錐台状の器台は仕上げが丁寧であるが、鼓形のものには刷毛目やナデ・オサエを多用し、やや粗雑である。C群土器の器台にも脚部が円錐台状のものや鼓形のものがある。円錐台状のものには円窓をもつものもあるが円窓をもたないものも多い。また、脚部内面の仕上げが粗雑で、成形時のナデツケ痕や積み上げ痕を残すものもある。

坏：A群土器の坏には丸底状のもの、鉢状のもの、皿状のものがあり、いずれも丁寧に仕上げられている。丸底状のものはヘラミガキで仕上げられる。鉢状・皿状のものはヘラミガキの他に刷毛目・ナデが多用され、底部付近がヘラケズリされる。B群土器の坏にも丸底状・鉢状のものがあるが、A群土器の坏に較べ張りを失ない、仕上げもやや粗雑である。器面調整にヘラミガキ・刷毛目・ナデ・ヘラケズリが多用され、丸底状のものにもヘラケズリが及んでいる。C群土器の坏にも、丸底状・鉢状のものがあり、ヘラミガキ・刷毛目・ナデ・ヘラケズリで仕上げられるが、B群土器よりもさらに粗雑である。

壺：A群土器には、複合口縁で頸部に刻目の加えられた凸帯のめぐる大型壺がある。小型の壺は口縁部が直立気味に外傾し高くのび、胴部は中央部に脹みと張りのある横長楕円形をしている。器面調整はヘラミガキを多用し、力強くそして丁寧に仕上げられている。B群土器の大型壺には複合口縁と有段口縁のものがある。小型の壺は口縁部が僅かに外傾し、胴部は中央部に脹みと張りをもった横長楕円形もしくは球形である。器面調整として、ヘラミガキ・刷毛目



第91図 第I群土器の類例

を多用し、丁寧に仕上げられるが、A群土器程の力強さはない。C群土器の大型壺には複合口縁と有段口縁のものがあるが、いずれも退化した形態のものが多い。小型壺は口縁部が外傾し胴部は球形に近いものと横長楕円形のものがある。器面調整としてヘラミガキ・刷毛目を多用するが、B群土器よりさらに粗雑である。

甕：A・B・C群土器のそれぞれに単純口縁・「S」字状口縁の大型甕、単純口縁の小型甕がある。その中で主体を占めるのは単純口縁の大型甕である。また「S」字状口縁の大型甕は特徴の相違が顕著である。したがって、単純口縁と「S」字状口縁の大型甕について比較する。

A群土器の単純口縁大型甕の口縁部は、下部が屈曲をもって肥厚しながら外反し、胴部は中央部に脹みと張りをもち、力強い。器面調整として刷毛目を多用する。B群土器の単純口縁大型甕はA群土器の甕に似るが、口縁下部の屈曲が弱く、胴部の張りが小さい。C群土器の単純口縁大型甕は、B群土器の甕に似たものと胴下部が脹む下脹みのものがある。両者とも器形細部の屈曲が小さく、滑かに移行する。器面調整は刷毛目の他にヘラケズリ・ヘラナデのものが多い。

「S」字状口縁の甕は各群にあるが、A群土器では胴部を欠いている。このため、B群土器とC群土器の甕について比較する。B群土器の「S」字状口縁の甕は肩から胴部へ大きく脹み、器面調整の刷毛目は縦方向に密接して加えられる。C群土器の「S」字状口縁の甕は肩から胴への脹みが小さい。器面調整の刷毛目は縦方向に加えられるが、刷毛目は一単位ごとに間隔があいている。

甑：甑はいずれも複合口縁の鉢状をしており、単孔式のものである。また、器面調整に刷毛目を多用している。A群土器の甑は口縁部が外傾し、胴・底部の内弯する丸底状をしている。B群土器の甑は口縁・胴・底部の内弯する丸底状をしている。C群土器の底部には、口縁・胴部が内弯するものと口縁・胴部が直線的に外傾するものがある。両者とも底部は分厚い平底で、台状になっている。

以上、器形ごとにA群土器・B群土器・C群土器を比較した。その結果、器形・器面調整など種々の特徴において、B群土器はA群土器とC群土器の過渡的様相を備えていることが明らかとなった。A群土器からC群土器への変遷はB群土器の存在を介在させることによって容易に理解することが可能である。そして、その変遷は高坏にあっては円窓の消失化、器台にあっては貫通孔と円窓の消失過程にあらわれている。また器台における貫通孔の消失化は器台そのものの役割が失なわれることを示している。壺では複合口縁・有段口縁が次第に退化していく様子がうかがわれる。有段口縁の壺はB・C群土器のものは把握できたが、A群土器に伴うものがどのような形態をしているのか未だ明らかでない。甕は胴中央部に脹みと張りのあるものから、それらが失なわれ、下脹みのものへと変化する。そして、そのような器形変化に応じなが

ら器面調整も変化し、刷毛目からヘラナデ・粗いヘラミガキのものへと変化する。「S」字状口縁の甕も胴部の脹みの大きいものから小さいものへ、器面調整の刷毛目も密接しているものから間隔のあいたものへという変化がみられる。甕は単孔式という点では共通しながら、胴部の内湾するものから直線的に外傾するものへ、丸底状のものから平底状のものへという変化がみられる。

そして、A群土器の壺頸部にめぐる刻目凸帯は弥生土器末期の壺にみられる口縁下部の刻目と通ずる要素をもっている。また、C群土器の高坏にみられる円窓の消失化、壺にみられる複合口縁・有段口縁の退化現象、甕の下張り胴部にみられる長胴化の傾向、そして器面調整のヘラナデや粗いヘラミガキの盛行は、南小泉式土器との連続性をうかがわせるに充分である。

このように、宮前遺跡においてその出土状況の相違から摘出されたA群土器・B群土器・C群土器は、宮城県内の類似資料とあわせて時期的な差をもって変遷していることが明らかとなった。すなわち、A群土器・B群土器・C群土器は塩釜式土器における時期的な諸段階である。

なお、今回は宮城県内における塩釜式土器の細かな地域差の有無については検討できなかった。また、各段階における器形の変遷を知る上で未だ資料的に不十分なものもある。さらに、方形周溝墓・古墳出土の塩釜式土器については検討を加えることができなかった。これらの点は、今後の課題としたい。

第 群土器

第Ⅱ群土器は第25・42・45号住居跡からまとまって出土している土器群で、高坏・坏・壺・甕・甑からなっている（第92図）。器形組成の上で第Ⅰ群土器と相違するのは器台が消失していることである。第Ⅱ期土器も詳細に観察すると各々の住居跡において器形細部および器形の組み合わせに相違がみられる。そこで、第Ⅱ群土器についても第Ⅰ群土器と同様に土器の分類と住居跡における土器の共伴関係を検討し、そのような相違がどのような理由に基づくものか明らかにしたい。

土器の分類

高坏

第1類：脚部が外反気味に開く円錐台状のもの（1）

坏口縁・胴部は外傾し、胴下部から底部において器厚を増し平底状になる。脚部は下部へ向って外反気味に開く円錐台状をしているが、脚下・裾部を破損している。外面の器面調整はヘラミガキである。内面の器面調整は坏部が軽いミガキ・ナデ・ヘラナデ、脚上部がナデツケ、脚中央部がヘラナデである。

第2類：脚上半部が脹みをもち、下半部が外反して開く円錐台状のもの（2）

脚上半部は脹みをもちながら僅かに開き、下半部は強く外反しながら開き据へのびる。脚端部は裾が捲れた状態になっている。外面の器面調整は上半部がヘラミガキ、裾部がヨコナデである。内面の器面調整は上半部がヘラナデ、裾部がヨコナデである。

坏

第1類：口縁・胴部が内弯するもの

a類：口縁上部が内弯するもの（3）

a類には口縁上部が強く内弯するもの、内弯が弱いもの、直立気味のものなどがある。胴・底部は丸底状のものと小さな平底状になるものがある。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴・底部がヘラミガキである。平底の場合、木葉底のものもある。内面の器面調整はヨコナデ・ナデ・ヘラナデである。

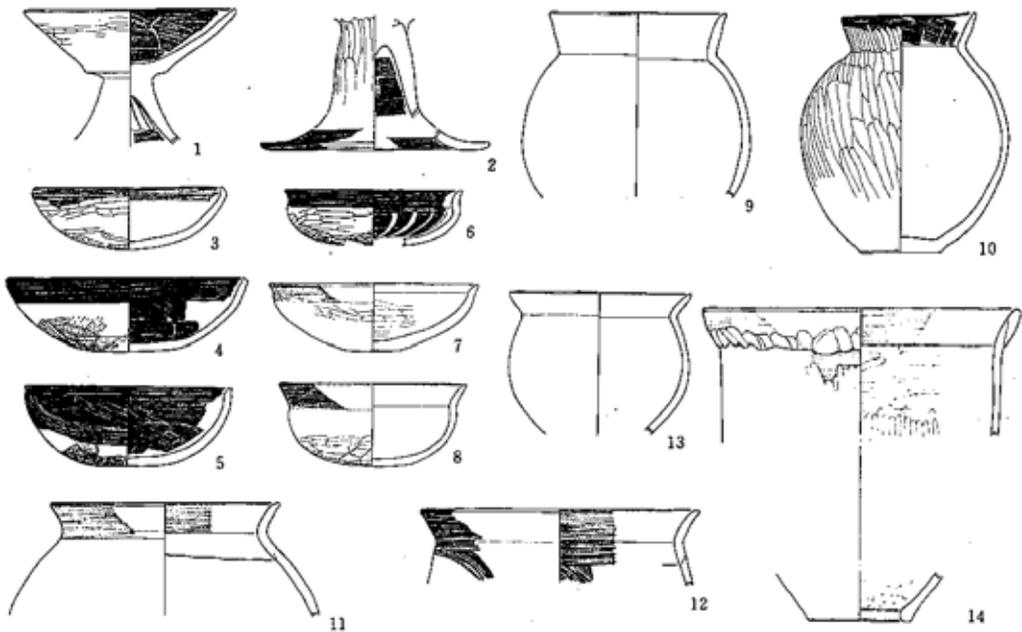
b類：口縁端部に変化をもつもの（4・5）

b類の口縁端部には、屈曲して内傾するもの（4）と外反するもの（5）がある。胴・底部は丸底状である。外面の器面調整は口縁・胴上半部がヨコナデ・ナデ、胴下半部から底部が軽いヘラミガキ・ヘラケズリである。内面の器面調整はヨコナデ・ナデ・ヘラナデである。

第2類：口縁部が小さく外反するもの

a類：直立気味に外反するもの（6）

口縁部は直立気味に外反し、胴部との屈曲が大きい。胴・底部は肩の張る丸底状をしている。



第92図 第II群土器

外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴上部がヘラミガキ、胴下・底部がヘラケズリである。内面の器面調整はヨコナデ・ナデで、胴部にはその上に間隔をおいた放射状のヘラミガキがある。

b類：外傾気味に外反するもの（7）

口縁部は外傾気味に外反し、胴部との屈曲が小さい。胴・底部は緩やかな弯曲の丸底状をしている。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴・底部がヘラミガキである。内面の器面調整は、口縁部は摩滅して不明であるが、胴・底部はヘラミガキである。

第3類：口縁部が大きく外反するもの（8）

口縁部が外傾気味に大きく外反し、胴・底部は肩の張る丸底状をしている。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラミガキ、胴下・底部がヘラケズリである。内面の器面調整は摩滅のため不明である。

壺

第1類：短頸壺

a類：口縁・頸部が直立気味に外傾し、胴部が球形のもの（9）

器面調整は摩滅のため不明である。

b類：口縁・頸部が外傾し、胴部が球形に近い長胴のもの（10）

口縁部はa類よりも僅かに開く。胴部もa類よりも僅かに長胴気味である。底部は平底である。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、頸・胴部がヘラミガキ、底部がヘラケズリである。内面の盤面調整は、口縁部がヘラナデであるが、胴・底部は剥落のため不明である。

甕

第1類：口縁部が「く」字状に外反し、胴部が緩やかに脹むもの（11）

胴中央部以下を破損しているが、胴部は長胴気味になるものと推定される。器面調整は口縁部内外面がヨコナデであるが、胴部は摩滅のため不明である。

第2類：口縁部が緩やかに外反し、胴部が僅かに脹むもの（12）

頸部の屈曲は第1類より小さい。胴中央部以下を破損しているが、胴部は中央部で僅かに脹む長胴のものとして推定される。器面調整は内外面とも口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。

第3類：口縁部が外反し、胴部が球形の小型甕（13）

口縁部は外傾気味で、端部は丸くおさまる。器面調整は摩滅のため不明である。

甔

第1類：無底式深鉢状のもの（14）

口縁部が外反し、胴上部は円筒状で胴下部がすぼまる。口縁部は複合口縁で、下半部が指頭状のもので連続してオサエられている。器面調整は内外面とも口縁部がヨコナデ、胴部がヘラミガキである。

土器の相伴関係

分類を行なった土器の各住居跡における出土状況を：第Ⅰ群土器の場合と同様な方法で検討してみたい。

住居跡における土器の出土状況

第25・42・45号住居跡における土器の出土状況をみると次のようになる。なお、第42・45号住居跡出土土器はいずれも床面・細部（カマド・柱穴・貯蔵穴状ピット・周溝）から出土したものである。第25号住居跡出土土器もその大部分は床面・細部から出土したものである。したがって、いずれも同時性の強いものである。

第25号住居跡：高坏第2類1点・坏第1 a類1点・坏第1 b類2点・坏第2 a類1点・坏第3類1点・壺第1 b類2点・甕第2類1点・甕第3類1点

第42号住居跡：高坏第1類1点・坏第1 a類3点・壺第1 a類1点

第45号住居跡：坏第1 a類1点・坏第2 b類1点・坏第3類1点・甕第1類2点・甗第1類1点

以上のような土器の出土状況を整理すると次の二つのグループにわかれる。

A群：高坏第1類・坏第1 a類・壺第1 a類からなるグループ（第42号住居跡）

B群：高坏第2類・坏第1 a類・坏第1 b類・坏第2 a類・坏第2 b類・坏第3類・壺第1 b類・甕第1類・甕第2類・甕第3類・甗第1類からなるグループ（第25・45号住居跡）

この二つのグループは、高坏・壺に相違がみられる。また、坏ではA群土器が第1 a類を主体としているのに対し、B群土器では第1 a・1 b・2・3類が同程度に存在し、第1 a類は主体とならない。したがって、A群土器・B群土器はそれぞれまとまりをもった土器群とみることができる。

また、A群土器・B群土器を出土する住居跡間には、重複して切り合っているものはない。したがって、第Ⅰ群土器の場合と同様に、これまでの研究成果・調査資料と比較し検討してみたい。

編年的位置

第Ⅱ群土器は高坏・坏・壺・甕・甗からなり、その器形的特徴から東北地方における土師器の編年で南小泉式に位置づけられる（氏家和典：1957・3 白鳥・加藤他：1974・3）。それではA群土器・B群土器は南小泉式土器の中でどのような位置づけを与えられるものであろうか。これまで発見されている南小泉式土器と比較してみたい。

A群土器

A群土器と共通した内容をもつ土器群としては、古川市留沼遺跡第3次調査出土土器（土岐山武：1981・3）・多賀城市山王遺跡第3号遺構出土土器（高倉敏明：1981・3）をあげること

ができる(第93図)。留沼遺跡は第1・2次調査で第I C群土器が多量に出土しているが、そこから北西に約40m離れた地点において第3次調査の際にBトレンチ第VI・VII層から南小泉式の土師器が少量ではあるがまとまって出土している(坏5点・壺1点・甕2点)。坏は4点が第1 a類で、もう1点は口縁部が小さく外反する鉢状のものである。壺は口縁部が外傾して開く小壺である。甕は第1・3類に似たものである。山王遺跡第3号遺構からは多量の土器が出土している。実測図で示された中で器形の判明するものは坏8点・高坏6点・壺3点・甕6点である。坏の大部分は第1 a類(6点)で、他の3点は留沼遺跡にもみられたような口縁部が小さく外反する鉢状のものである。高坏は第1類が1点、脚上・中部が円錐台状で下部が開くもの1点、脚上・中部が円筒状で下部が開くもの4点である。壺は大型壺2点と小型壺1点である。大型壺は複合口縁の退化した形態で、胴部は球形である。小型壺は外傾する頸部から折れ曲るようにして口縁部が直立するものである。大型甕は4点で、第1類に近い。小型甕は2点で第3類に近い。

このように、A群土器は留沼遺跡でも出土しているが出土量が少ないため高坏などを欠落している。この点山王遺跡第3号遺構出土土器は出土量が多く、甑を除きすべてそろっており、土器組成・器形の特徴を知る上で現在の所最も良好な資料である。

これらの土器群に対し、留沼遺跡では西野田遺跡出土土器・留沼遺跡第1・2次調査出土土器と比較した結果、両者の過渡的な様相を示すとし、「全体的な土器組成という意味では岩切鴻ノ巣遺跡に近い」ことから、「南小泉式に位置づけられ、岩切鴻ノ巣遺跡の資料より古い段階のものである可能性がみられる。」としている(土岐山武:1981・3)。山王遺跡では土器の分類を行なっているものの、遺構・遺物の細部検討は後日報告するとして、古墳時代(中期)とだけしている。

B群土器

B群土器と共通した内容をもつ土器群としては仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第1号住居跡出土土器がある(第93図)。坏7点・高坏2点・壺3点・甕2点・甑1点からなる良好な資料である。坏は第1類が3点・第2類が3点、第3類が1点である。高坏は脚上・中部が円錐台状で、下部の開くものが1点で、もう1点は坏部である。壺は第1 b類が1点で、他の2点は小型壺である。甕は第1類が1点、第2類が1点である。甑は無底式で、甕第1類に一对の把手をつけたものである。

このように、岩切鴻ノ巣遺跡第1号住居跡出土土器は、坏の形態が多種類におよぶこと、壺・甕の形態など、B群土器と強い類似性がうかがわれる。岩切鴻ノ巣遺跡では引田式とされてきた坏・壺・甕と類似するものを含んでいることに対して「本遺跡の住居跡における出土状況からみても、本群の土師器の中から引田式に類似する土器だけを抽出して分離することには、

多くの無理がある。……中略……引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式に位置づけるのが妥当と思われる。」としている。このような土器群のあり方は宮前遺跡においても第ⅡB群土器として確認されたことになる。

南小泉式土器の諸段階（ ）

A群土器・B群土器の類例を検討した結果、B群土器（岩切鴻ノ巣遺跡第1号住居跡など）は南小泉式の良好な資料であり、A群土器（留沼遺跡第3次調査地区・山王遺跡第3号遺構など）はB群土器よりも古い段階のものである可能性が生じてきた。ただ、留沼遺跡第3次調査地区の資料は量的に少なかつたため、相互の比較検討は必ずしも十分なものとは言い難い。そこで、ここでは器形ごとにA・B群土器を比較し、さらに確実性の高いものにしていきたい。

高坏：高坏はB群土器の宮前遺跡・岩切鴻ノ巣遺跡でそれぞれ1点ずつなので、A群土器の山王遺跡のものとは直接比較するのは困難である。そこで、山王遺跡の高坏は塩釜式土器の第Ⅲ段階に位置づけられた第ⅠC群土器の清水遺跡第Ⅲ層・第10溝出土のものと比較することにしたい。山王遺跡の高坏は脚上・中部が円筒状で下部で開くものが主体で、円錐台状のものは少ない。これに対し、清水遺跡の高坏は脚上部が円柱状で下部で開くものと円錐台状のものとの両者からなっている。脚が円錐台状のものは脚下部で裾に向かって開き円窓をもたない点両者は似ている。ただ、清水遺跡の高坏は脚内面をへラケズリしているものが多いのに対し、山王遺跡のものは脚上部が円筒状のものと同様にナデツケかへラナデとなっている点相違している。器面調整の相違を除けば第ⅡA群土器の山王遺跡と第ⅠC群土器の清水遺跡は相互に近似した器形の高坏を共有していることになる。

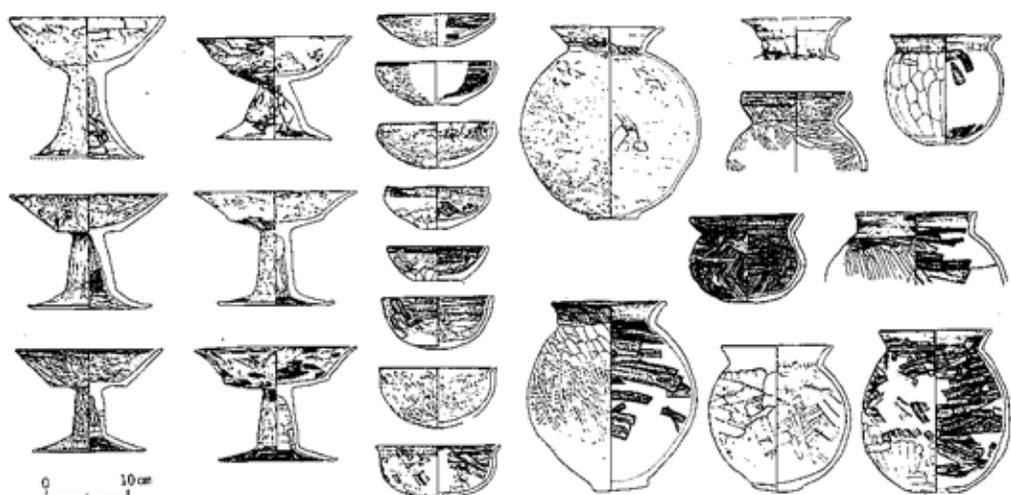
坏：坏はA・B群土器とも第1類を共有する。しかし、A群土器では第1類が主体となるのに対し、B群土器では第2類・第3類が同様な比率で存在する。

壺：壺は第1類で比較するとA群土器では胴部が球形に近いが、B群土器では長胴化の傾向がみられる。また、大型壺はA・B群土器で直接比較できないが、A群土器の複合口縁の壺は第ⅠC群土器のものと良く似ており、区別が難かしい程である。

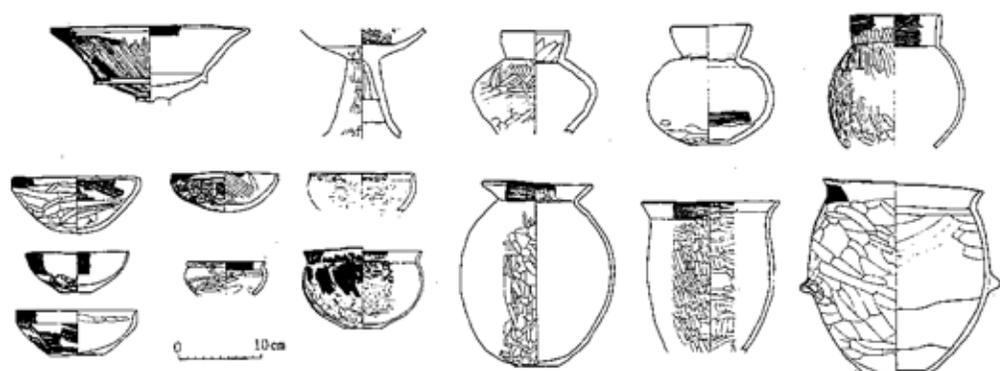
甕：甕の胴部はA群土器が球形に近いのに対し、B群土器では長胴に近い長胴である。なお、A群土器の甕は複合口縁の壺同様に第ⅠC群のものに良く似ている。

甑：甑はA群土器のものが不明なため直接比較できない。しかし、B群土器の甑は深鉢状か長胴化した甕に把手をつけたもので、第ⅠC群土器の甑とは隔絶感がある。

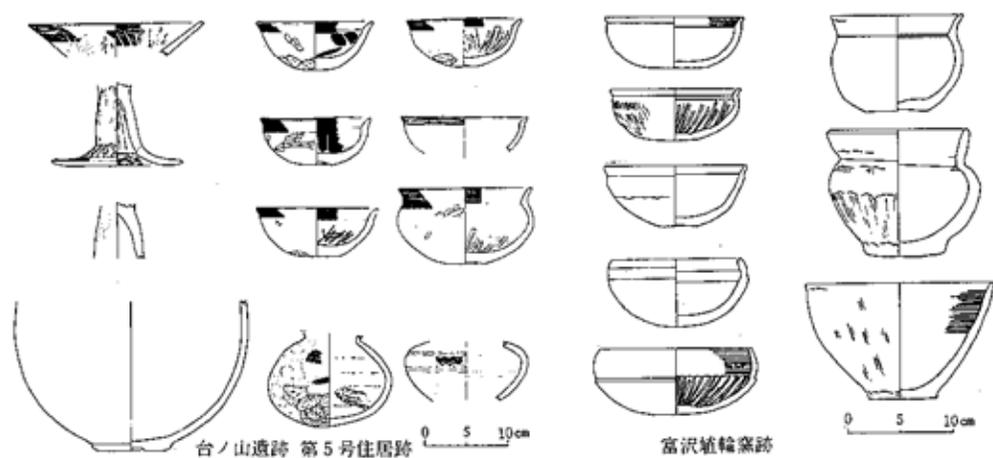
以上のようにA群土器・B群土器は南小泉式という点では共通しても、器形細部とその組み合わせという点で相違がみられた。そして、A群土器は高坏・壺・甕で検討したように第ⅠC群土器との関連が深く、両者は時期的に近接するものと考えられる。しかし、B群土器は第ⅠC群土器とは大きく相違し、A群土器を介在させない限り、両者の関連を理解することができな



山王遺跡 第13号遺構



岩切鴻ノ巣遺跡 第2号住居跡



台ノ山遺跡 第5号住居跡

富沢植輪窯跡

第93図 第Ⅱ群土器の類例

い。したがって、このような点に立脚するとA群土器はB群土器に先行し、留沼遺跡の報告における指摘は妥当なものと考えられる。

南小泉式土器の諸段階（ ）

南小泉式土器に位置づけられている土器群には上述したA・B群土器の他に柴田郡大河原町台ノ山遺跡第5号住居跡出土土器がある（阿部・千葉：1980・1）（第93図）。第5号住居跡からは土師器の坏6点・高坏3点・壺1点と須恵器壺？1点が出土している。坏はいずれも厚手のもので、口縁部が外反し、坏第2・3類に似ている。また、坏第1類に類似するものがみられない。このことは、坏第1類は存在したとしても少量で、主体となるのは坏第2・3類に類似するものであることを示している。高坏は脚上・中部が円筒状で下部の開くものである。壺は小型のものである。高坏や壺でA・B群土器と区別するのは困難であるが、坏の特徴と第2・3類に類似するものが主体を占めるという点で、相違がみられる。このような土器群はA・B群土器に先行する要素はみられず、それらに後続するものと考えられる。また、仙台市富沢埴輪窯跡の前庭部からは石製模造品とともに土師器坏5点・鉢3点がならべおかれた状態で出土し、埴輪窯の祭祀に関するものと考えられている（渡辺泰伸他：1974・9）（第93図）。これらの坏を見ると、第2類が3点で、その他に口縁部が直立気味に内弯する有投の坏が2点ある。このような坏のあり方は台ノ山遺跡第5号住居跡出土土器と共通するもので、B群土器に後続するものと考えられる。なお、有段の坏は須恵器有蓋坏の蓋を模倣したかの感をいだかせるものである。これらの土器群をC群土器としておきたい。

第Ⅱ群土器の年代

第Ⅱ群土器は南小泉式に位置づけられ、それらはA群土器→B群土器と変遷し、さらにそれらに後続するものとして台ノ山遺跡第5号住居跡・富沢埴輪窯跡祭祀土器群の存在を指摘した。台ノ山遺跡からは須恵器壺？が出土し、富沢窯跡は仙台市裏町古墳（伊東・伊藤・岩渕：1974・3）に埴輪を供給したとされていることから、これらを手懸りとして第Ⅱ群土器の年代について考えてみたい。渡辺泰伸氏の教示によると裏町古墳から出土した須恵器は仙台市大蓮寺窯跡のものより新しく、大阪府陶邑古窯跡群のTK208窯式の時期に比定されるという。また、台ノ山遺跡の須恵器壺？も裏町古墳の須恵器とほぼ同時期のもので、陶邑古窯跡群のTK208窯式の時期に比定されるという。TK208窯式の須恵器は、田辺昭三氏によれば古墳時代中期5世紀後葉のものでされている（田辺昭三：1981・7）。

また、B群土器については宮前遺跡・岩切鴻ノ巣遺跡では須恵器を伴出していないが、福島県国見町下入ノ内遺跡第1号住居跡では多量の土師器とともに須恵器蓋・蓋坏・把手付壺・壺が出土している（佐藤博重：1980・3）。下入ノ内遺跡の土師器は実見していないが、実測図と写真から判断すると坏は第1類・第2類・第3類が同程度に存在し、甕も第1・2・3類から

なり、B群土器の内容と共通している。須恵器については「TK216の時期か、TK216の特徴を強く残したTK208の初期の段階のもの」で「5世紀中葉末に想定されるものであろう。」としている（佐藤博重：1980・3）。この点、渡辺泰伸氏も大蓮寺窯とほぼ同じ時期のもので、5世紀中葉ではないかと言う。

このように、土師器の編年と須恵器の編年は相互に矛盾するところがない。したがって、B群土器を5世紀中葉、C群土器を5世紀後葉頃の土器群とみることは妥当なことと考えられる。そしてA群土器についてはB群土器に先行することが明らかであるから、5世紀前葉頃に比定して大きな誤りはないであろう。もちろん、このような年代観はまだ土師器と須恵器との共伴例があまり多くないことから、多少の時間幅は考慮しなければならないが、大きく変動することはないと思われる。

第 群土器

第14号住居跡から出土した土器群であるが、量的には少ない。土師器坏・甕・須恵器坏が1点ある。土師器坏は口縁部が外反し、胴・底部が丸底状のもので、内面の器面調整はヘラミガキで黒色処理されている。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴・底部がヘラケズリである。甕は口縁部が外反する長胴形のもので、肩から胴中央部へ僅かに脹みをもって移行する。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が刷毛目である。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。須恵器坏は口縁部が外傾し、段を境として胴底部は浅い丸底状をしている。このような土器群は、清水遺跡の第Ⅳ・Ⅴ群土器と類似している。土師器坏はやや特異な器形をしているが、甕は清水遺跡第Ⅵ群の第4類・第Ⅴ群の第3類、須恵器坏は清水遺跡第Ⅳ群の第1 a類、第Ⅴ群の第1類と似ている。第Ⅲ群土器としたものは量が少ないため、清水遺跡の第Ⅳ群か第Ⅴ群のいずれに該当するか定かでない。いずれにしても、清水遺跡の第Ⅳ・Ⅴ群土器は栗罎式に位置づけられており、第Ⅲ群土器も栗罎式の幅の中で理解するのが妥当と考えられる。（図は第14号住居跡の項を参照）

第 群土器

第20・54号住居跡からロクロ使用の土師器と赤焼土器・須恵器が出土しており、これらを第Ⅳ群土器とする。ロクロを使用して製作した土師器は、東北地方における土師器の編年で表杉ノ入式とされており（氏家典和：1957・3）、第Ⅳ群土器の土師器も表杉ノ入式に位置づけられる。また、第20・54号住居跡出土土器を詳細に観察すると、器形や器面調整技法などの特徴に相違が認められることから、前者をA群土器、後者をB群土器とする。

表杉ノ入式土器は近年資料の増加に伴い再検討が加えられ、細分の可能性が指摘されるとと

もに、具体的研究成果も積み重ねられてきている（阿部義平：1968・10 小笠原好彦：1976・10 早坂・阿部：1980・3 白鳥良一：1980・3 小井川和夫：1981・3 1982・9 丹羽・小野寺・阿部：1981・3 森貢喜：1982・3）。したがって、ここでは表杉ノ入式土器を細分する立場から、A群土器とB群土器について検討を加えてみたい。

A群土器（第20号住居跡出土土器）

第20号住居跡からは土師器坏8点・蓋口縁部1点・甕12点（口縁部1点・底部5点を含む）・赤焼土器坏5点・須恵器坏6点・蓋（つまみ1点・口縁部2点）・壺底部1点・甕肩部1点と土師器・赤焼土器・須恵器の小破片（表参照）が出土している（第94図）。第20号住居跡は遺構の項でも述べたように二度拡張を行っており、土器は掘り方・床面・カマド・ピット・周溝・堆積土から出土しているが、出土状況による土器の相違は認められない。したがって、このことは第20号住居跡出土土器が住居構築時から二度の拡張を経て廃絶後埋まるまでの時間幅をもち、その時間幅は土器の変化を引き起す程のものではなかったことを示している。

土器の分類

土器の分類は完形品を中心として行なうが、全体の数量が限られているのでやや個別説明に近い形になる。また、不十分な点については破片資料でさらに補うことにする。

土師器

坏

全体の器形が判明する坏は5点ある。いずれも製作にロクロを使用し、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。外面は口縁・胴部にロクロナデが加えられているが、ロクロ目は弱く不明瞭である。胴下端部から底部は回転ヘラケズリされているものが3点ある。他の2点は砂粒の動きが観察されずヘラ切りの可能性がある。底部破片ではこの種のものも多く（9点）、この他手持ちヘラケズリのもの（6点）回転糸切りのもの（1点）がある。内面のヘラミガキは口縁に平行で、底部では井桁状になる。

器形は底径が大きく分厚いのが特徴である。口径と底径の比は1：0.55～0.66で、0.6前後のものが多。また、底径は内面側が外面側よりもはるかに大きい。底部の器厚は口縁・胴部の1.5～2倍である。器形を細分すると次の二種類のものがある。

第1類：塊状のもの

口縁：胴部が内弯し、口縁端部が軽く外反する。（1・2）

第2類：皿状のもの

a類：口縁・胴部が外傾する（3）

b類：口縁・胴部が内弯し、口縁端部が軽く外反する。（4・5）

なお、碗状・皿状の用語は便宜的なもので、口径と器高の比がほぼ3：1、4：1のものを指している。以後使用する鉢状のものはほぼ2.5以下：1のものである。すなわち、深目のものを鉢状・浅目のものを皿状・両者の中間を碗状とし、その中で、口縁・胴部が外傾するものをa類、内弯するものをb類とした。

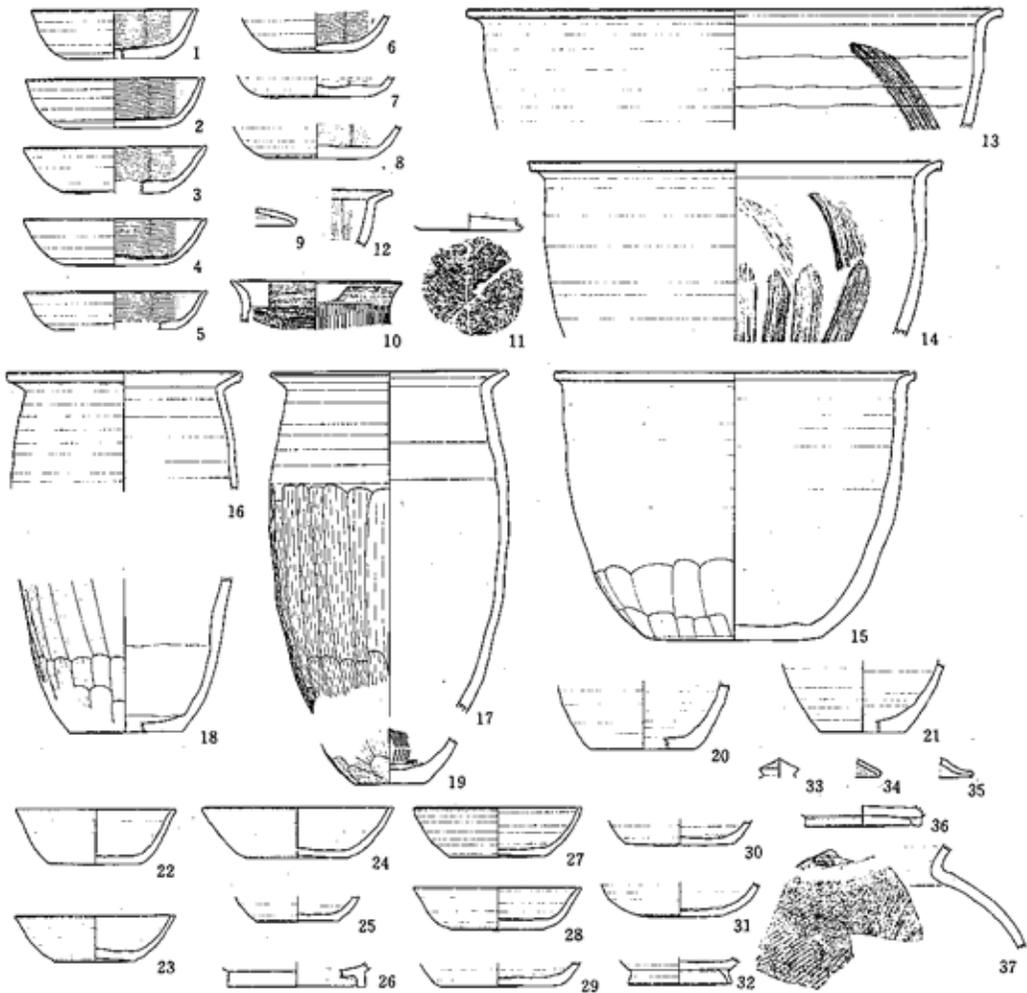
蓋

蓋は口縁端部を直角に折り曲げたもので、内外面はヘラミガキ・黒色処理されている。（9）

甕

甕はほぼ器形の判明するものが6点ある。

第1類：ロクロを使用せずに製作しているもの（10）



第94図 第ⅣA群土器

口縁・胴上部のものが1点ある。口縁部は外反し、肩から胴部に円筒状に移行する。胴部以下を破損しているが長胴形の甕と推定される。外面は口縁部がヨコナデ、胴部が刷毛目である。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がヨコナデである。

第2類：ロクロを使用して製作しているもの

a類：鉢状のもの（12～15）

a類は3点あり、完形に近いものでは器高より口径の方が僅かに大きい（15）。また、口径自体も29.7～43.5cmと大きい。器面は内外面ともロクロナデのものと、外面がロクロナデで内面がナデのものがあ。前者のものでも胴下部はヘラケズリされている。この他、破片ではあるが、内面がヘラミガキ・黒色処理されているものが1点ある（12）。

b類：長胴形のもの（16・17）

b類は2点ある。両者とも口径は20cm前後と小さい。器内外面はロクロナデであるが、胴中央部以下はヘラケズリされている。b類と推定される胴下・底部は2点あり（18・19）、外面はヘラケズリされている。ヘラケズリされた底部破片は8点あり、b類に含まれる可能性がある。

この他、回転糸切りの底部が2点（20・21）、木葉底の底部が1点ある（11）。前者は第2b類に含まれるのか、それとも小型の甕なのか明確でない。後者は第1類の可能性はあるが明確でない。

赤焼土器

坏

赤焼土器坏は内外面のロクロ目が明瞭である。底部は回転糸切りのものが9点、ヘラ切りのものが2点ある。器形として底径の大きいことが特徴であるが、口径と底径の比は1:0.51～0.59で土師器よりやや小さい。底部は分厚いものと、口縁・胴部と同程度のものがある。器形を細分すると次の3種類がある。

第1類：塊状のもの（22・23）

口縁・胴部が内弯する。口縁端部は軽く外反するものとそのままのものがある。

第2類：皿状のもの（24）

口縁胴部は内弯し、口縁端部はそのまま丸くおさまる。

第3類：高台付（26）

高台部分だけが残っている。高台は直立気味である。

須恵器

坏

須恵器坏内外面のロクロ目は明瞭である。底部は回転ヘラケズリのものが4点、回転ヘラケ

ズリであるが回転糸切り痕を残すものが2点、ヘラ切りのもものが3点である。器形としては底径の大きいことが特徴であるが、口径と底径の比は1 : 0.55と赤焼土器同様土師器よりやや小さい。底部も分厚いものと口縁・胴部と同程度のもがある。器形を細分すると次の3種類がある。

第1類：碗状のもの (27)

口縁・胴部が内湾し、端部はそのまま丸くおさまる。

第2類：皿状のもの (28)

胴部が内湾し、口縁部は軽く外傾する。

第3類：高台付 (32)

高台・底部が残っている。高台は「ハ」字状である。

須恵器はこの他に蓋つまみ（宝珠形）・蓋口縁部（口縁端部を直角に折り曲げている）・壺高台・底部・甕肩部がある。

編年的位置

第20号住居跡から出土したA群土器は、土師器・赤焼土器・須恵器からなり、土師器坏にあつては底径が大きいこと、底部が回転ヘラケズリされるか、ヘラ切りによって切り離されるものが多いという特徴をもっている。土師器坏のこのような特徴は表杉ノ入式土器の比較的古い段階に位置づけられている刈田郡蔵王町東山遺跡土器溜出土土器群（真山悟：1981・9）の一部と共通し、表杉ノ入式土器の後半に位置づけられている仙台市安久東遺跡第2号住居跡出土土器（土岐山武：1980・9）とは明らかに相違している。したがって、A群土器は表杉ノ入式土器の比較的古い段階のものと考えられるが、さらに詳細にみると東山遺跡出土土器とも相違し、国分寺下層式土器最終段階の名取市清水遺跡第58号住居跡出土土器（丹羽・小野寺・阿部：1981・3）と器形上共通点がみられる。このため、次にA群土器と東山遺跡土器溜出土土器・清水遺跡第58号住居跡出土土器との比較検討を行なうことにしたい。

東山遺跡

東山遺跡土器溜からは器形の判明する土師器坏45点・甕4点・須恵器坏19点・灰釉陶器坏1点の出土が報じられている（第96図）。この中で須恵器坏としたものの中には赤焼土器も少量含まれている^{注1)}。

ここでは土師器坏について検討する。土師器坏には鉢状のもの（1～9）、碗状のもの（10～29）、皿状のもの（30～45）の3種類があり、それらにはそれぞれの口縁・胴部が外傾するものと、口縁胴部が軽く内湾するものがある。前者は口縁部がそのままおさまるが、後者にはそのままおさまるものと口縁端部が軽く外反するものがある。口径と底径の比は1 : 0.36～0.56で、1 : 0.46前後に集中する傾向が

ある。底部から胴部への移行は、口縁胴部が外傾する鉢状

のものでは屈折しているが、その他のものでは緩やかである。この相違は内面のヘラミガキ、外面のヘラケズリ調整にもあらわれ、前者では底部のヘラミガキが井桁状、後者では放射状になるものが多い。

清水遺跡

清水遺跡第58号住居跡からは器形の判明する土師器杯9点・甕1点・須恵器杯1点が出土している(第96図)。土師器杯には内外面をヘラミガキして丁寧に仕上げているものと、ヘラケズリやヨコナデを多用し仕上げの粗雑なものがある。前者は器形が端正なのに対し、後者は歪んでいる。ここでは器形の整った前者の杯について検討する。

前者の杯には鉢状のもの(1)、壺状のもの(2~4)、皿状のもの(5)の3種類がある。いずれも丸底に近い平底で、口縁・胴部は内弯気味に外傾する。口縁端部は内弯気味のものそのまま丸くおさまるものがある。口径と底径の比は1:0.46~0.7で、1:0.5~0.6に集中する傾向がある。また、器厚は全体に平均しており厚手である。

A群土器と東山遺跡出土土器の関係

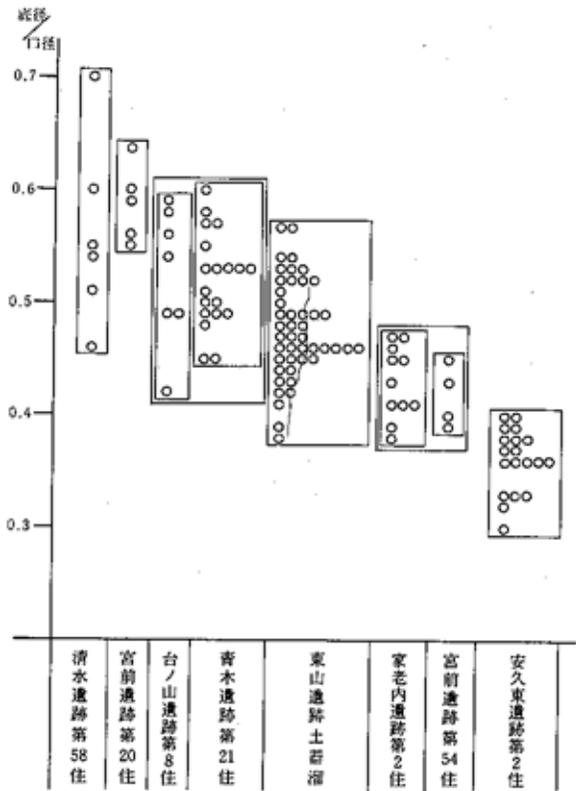
A群土器と東山遺跡土器溜出土土器は製作にロクロを使用しており表杉ノ入式土器という点では共通しているが、器形・器面調整のあり方などを比較すると次のような相違が認められる。

1. 口径と底径の比はA群土器が1:0.6前後に集中するのに対し、東山遺跡土器溜出土土器は、1:0.46前後に集中し、A群土器の方が底径の比率が大きい。

2. 底径の大きさはA群土器では内面側の方が外面側よりも大きいのに対し、東山遺跡土器溜出土土器群ではほぼ同じか外面側の方が大きい。

3. 内面側における底部から胴部への移行は、A群土器では屈曲をもつものに対し、東山遺跡土器溜出土土器群は一部の器形(口縁・胴部が外傾するもの)を除き、緩やかである。

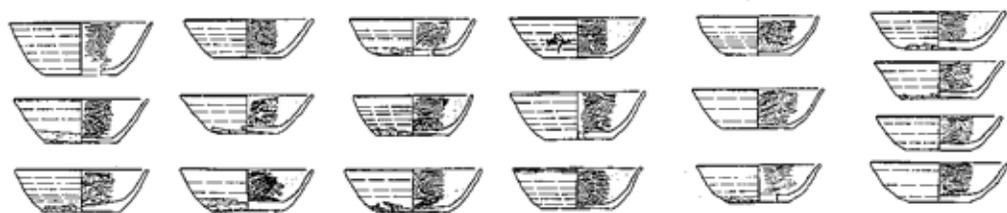
4. A群土器の底部内面のヘラミガキは井桁状であるのに対し、東山遺跡土器溜出土土器群では一部の器形(口



第95図 土師器杯の口径に対する底径の比



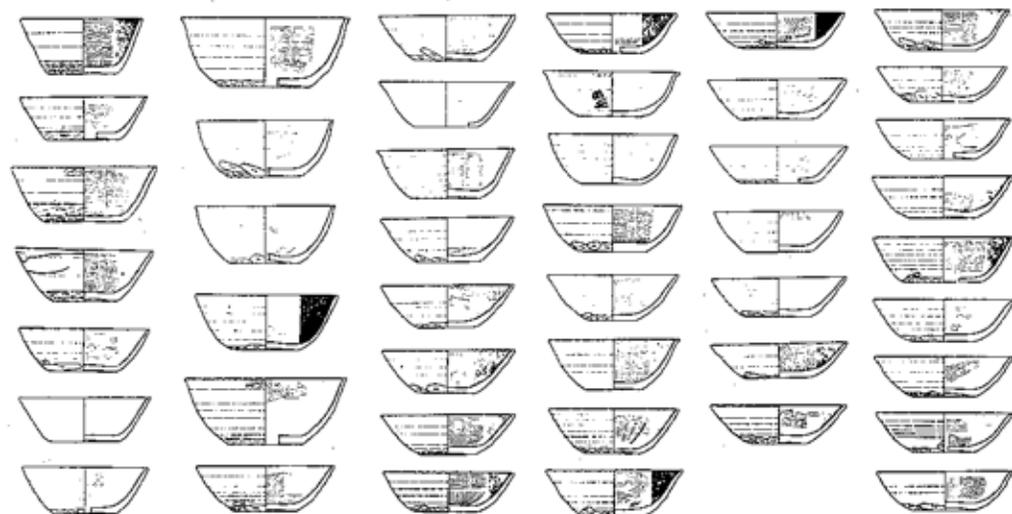
清水遺跡 第58号住居跡



青木遺跡 第21号住居跡



台ノ山遺跡 第8号住居跡



東山遺跡土器溜



家老内遺跡 第2号住居跡

第96図 第IV群土器関連資料

縁・胴部の外傾する鉢状のもの)を除き放射状である。

A群土器と清水遺跡出土土器の関係

A群土器は表杉ノ入式土器、清水遺跡第58号住居跡出土土器は国分寺下層式で、両者は異なった土師器の型式である。その相違点には次のようなものがある。

1. A群土器では製作にロクロを使用しているのに対し、清水遺跡第58号住居跡出土土器はロクロを使用していない。

2. A群土器の口縁端部は軽く外反するか、そのままおさまるのに対し、清水遺跡第58号住居跡出土土器は口縁端部が内弯気味になるものとそのまま丸くおさまるものがある。

3. A群土器は底部が分厚く、口縁・胴部が薄いのにに対し、清水遺跡第58号住居跡出土土器は全体が分厚い。

しかし、ここで大きく相違するのはロクロ使用の有無であり、口縁・胴部が薄くなり、口縁端部が外反気味になるのは小さな相違に過ぎない。このような点を除くと、口径と底径の比が1:0.5~0.6に集中し、底径が大きいという器形上の強い共通点がうかがわれる。また、底部内面のへらミガキも井桁状で同じである。

A群土器の位置

A群土器と東山遺跡土器溜出土土器・清水遺跡第58号住居跡出土土器を比較した結果導びき出されたことは、ロクロ使用の有無を除くとA群土器と清水遺跡第58号住居跡出土土器が器形上強い類似性をもっていることである。それは内面のへらミガキの方向によっても裏づけられた。すなわち、A群土器は清水遺跡第58号住居跡出土の国分寺下層式終末段階の土器を、ロクロを使用してそのまま製作したかの感がある。口縁・胴部が薄くなり、口縁端部が外反するのはその時に生じた小さな器形変化にすぎないものと考えられる。

一方、A群土器と東山遺跡土器溜出土土器との間には大きな器形上の差がある。すなわち、A群土器では口径に対する底径の比が1:0.6前後に集中するのに対し、東山遺跡では1:0.46前後に集中する。東山遺跡土器溜出土土器の口径に対する底径の比はかなり小さい。また内面のへらミガキの方向やロクロ目の特徴なども相違している。両者の間を埋める資料としては、白石市青木遺跡第21号住居跡出土土器をあげることができる(小川淳一:1980・9)(第96図)。すなわち、青木遺跡の坏は器形の判明するものが19点あり、口径と底径の比は1:0.45~0.60で、1:0.52前後に集中している。底径の大きさという点で、両者のほぼ中間に位置する。青木遺跡第21号住居跡出土土器はロクロ目が明瞭で、内面のへらミガキも放射状のものが多い^{注2)}。

以上のことから、A群土器は土師器にロクロが導入された最初の段階と考えられる。このため、国分寺下層式終末段階の器形を継承し、ロクロ目も弱いものとなったのであろう。すなわち、ロクロ技術導入の揺籃期とすることができる。器形と同様、内面のへらミガキの方向も前

段階のものを継承している。そして、土師器製作におけるロクロ技術が軌道にのったのは青木遺跡第21号住居跡出土土器や東山遺跡出土土器の段階であろう。ロクロ目は明瞭になり、内面のヘラミガキは放射状のものが多くなる。この放射状ヘラミガキは以後長い期間にわたって継承される^{注3)}。次に、A群土器の年代について検討してみたい。

A群土器の年代

上述のように、ロクロ技術が導入される前後の土師器は清水遺跡第58号住居跡土器群→A群土器→青木遺跡第21号住居跡土器群→東山遺跡土器溜土器群と変遷することがほぼ明らかである。この中で、年代推定が行なわれているのは東山遺跡土器溜出土土器群である。すなわち、東山遺跡土器溜では「平城宮跡SD65OA様式に類似する」灰釉陶器が共伴している。この灰釉陶器は9C中葉とされていることから、東山遺跡土器溜出土土器群もそれに近い年代のものと考えられている(真山悟:1981・9)。次に、清水遺跡第58号住居跡出土土器群に先行するものとして、陸奥国分寺増坊西建物南基段内側溝から出土した国分寺下層式土器がある(伊東信雄他:1961 氏家和典:1967)。この国分寺下層式土器は国分寺創建期の重弁蓮華文軒丸瓦とともに出土しており、その時期は「創建後まもなくか、あるいは後に瓦のふきかえの際に放置されたままであったとみるべきかもしれない。」とされている(氏家和典:1967)。したがって、この土師器の遺棄年代は8世紀中葉の創建時がそれ以降の改築時と考えられる。土師器の変遷とその年代を整理すると次のようになる。

国分寺下層式

表彰ノ入式

陸奥国分寺→清水遺跡第58住→宮前遺跡第IVA群(第20住)→青木遺跡第21住→東山遺跡土器溜
8C. 中葉以降
9C. 中葉付近

すなわち、陸奥国分寺僧坊西建物出土土器と東山遺跡土器溜出土土器群との間には、三段階の土器の変遷があり、A群土器はそれらのほぼ中間の位置にある。したがって、A群土器はまだ明確な決め手には欠けるが、ある程度の幅をもった8世紀末から9世紀初頭を中心とした時期、すなわち平安時代の初期の頃のものではないかと考えられる。土師器坏以外のものについては直接検討を加えなかったが、これらも平安時代初期の頃のものと考えられる。

次に赤焼土器についてふれておきたい。第20号住居跡からは、土師器・須恵器と同様にそれらに匹敵する量の赤焼土器が出土している。既に検討したように、土師器の坏は前段階の国分寺下層式の器形を継承しているのに対し、赤焼土器の坏はむしろ須恵器に近い。しかし、焼成という点では、土師器と同じであるか、それに近いものである。このことは、赤焼土器が器形の点で須恵器に近いものの、焼成という点で土師器の範ちゅうに含まれることを示している。すなわち、集落で消費される須恵器は須恵器窯から供給を受けなければならないのに対し、土師器・赤焼土器は集落内で生産・消費されるという基本的需給関係において相違がみられる。

そして、A群土器のあり方は、集落に対する須恵器供給の増加に伴ない土師器製作にロクロ技術が導入されると同時に須恵器を模倣したとも言える赤焼土器が集落内で生産・消費されるに至ったことを示している。ところが、このような赤焼土器はこの地域では定着をみず、その後青木遺跡や東山遺跡の段階から急速に減少し、衰退する。再び赤焼土器が盛行するのは須恵器の供給が減少する安久東遺跡第2号住居跡出土土器（土岐山武：1980・9）の段階である。

注1) 真山悟氏の教示による。

注2) このような土器群としては柴田郡大河原町台ノ山遺跡第8号住居跡出土土器群がある（阿部・千葉：1980・1）。土師器坏は8点あり、口径に対する底径の比は1：0.41～0.59で、1：0.52前後に集中している。

注3) 土師器坏における底部切り離し技法とその後の再調整技法について補足的に述べておきたい。時期差を指摘した各遺跡出土土器群の底部切り離し技法とその後の再調整のあり方を器形の判明する資料について整理すると次のようになる。

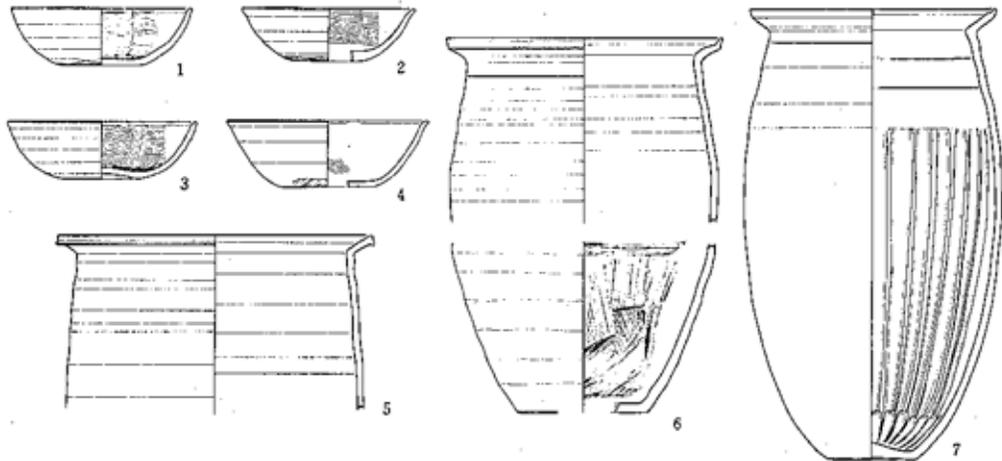
技法 土師器	回転ケズリ	回転ケズリ +ヘラ切り	回転ケズリ +糸切り	手持ケズリ	手持ケズリ +糸切り	ヘラ切り	回転糸切り
宮前遺跡第20住		2				3	
青木遺跡第21住	2	2		4	6		4
台ノ山遺跡第8住			1	1	3	2	
東山遺跡土器溜	4		1	25	9		6
安久東遺跡第2住							19

表を見ると技法的には、回転ケズリやヘラ切りは古い要素であり、回転糸切りは新しい要素であることが明らかである。手持ちケズリは青木遺跡や東山遺跡などに多く、両者の中間的様相を示している。また、東山遺跡にも回転ケズリのものが4点あるが、これらは口縁・胴部が直線的に外傾する鉢状のものに多い。これに対し、宮前遺跡・青木遺跡の場合には碗や皿状のものにもみられる点相違がある。

B群土器（第54号住居跡出土土器）

第54号住居跡からは土師器坏4点・甕3点が出土している（第97図）。坏はいずれも碗状のもので、胴部が内湾し口縁部が軽く外反するものである。口径に対する底径の比は1：0.39～0.45で、1：0.4前後に集中している。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は口縁・胴部が口縁に平行、底部が放射状である。底部は摩滅しているものが多いが、切り離し技法が判明するものとして回転糸切りが1点ある。また、3点は胴部下端が手持ちヘラケズリされている。甕はいずれも長胴甕で、製作にロクロが使用されている。このような土器群と類似するのは白石市家老内遺跡第2号住居跡出土土器である（真山悟：1981・9）。坏は口径と底径の比・口縁部の形状・内面のヘラミガキ・外面のヘラケズリなど種々の点で強い類似性がう

かがわれる。これらの土器群は口径・底径比という点では蔵王町東山遺跡の一部（底径が小さい値を示す部分）と共通する。しかし、口縁部の外反、胴部の内弯の程度が大きく、器形的に新しい特徴を備えている。このように、B群土器は東山遺跡出土土器と一部共通した特徴をもつと同時に相違する新しい特徴をもっていることになる。したがって、B群土器は東山遺跡出土土器に直接後続するものと考えられる。



第97図 第ⅣB群土器

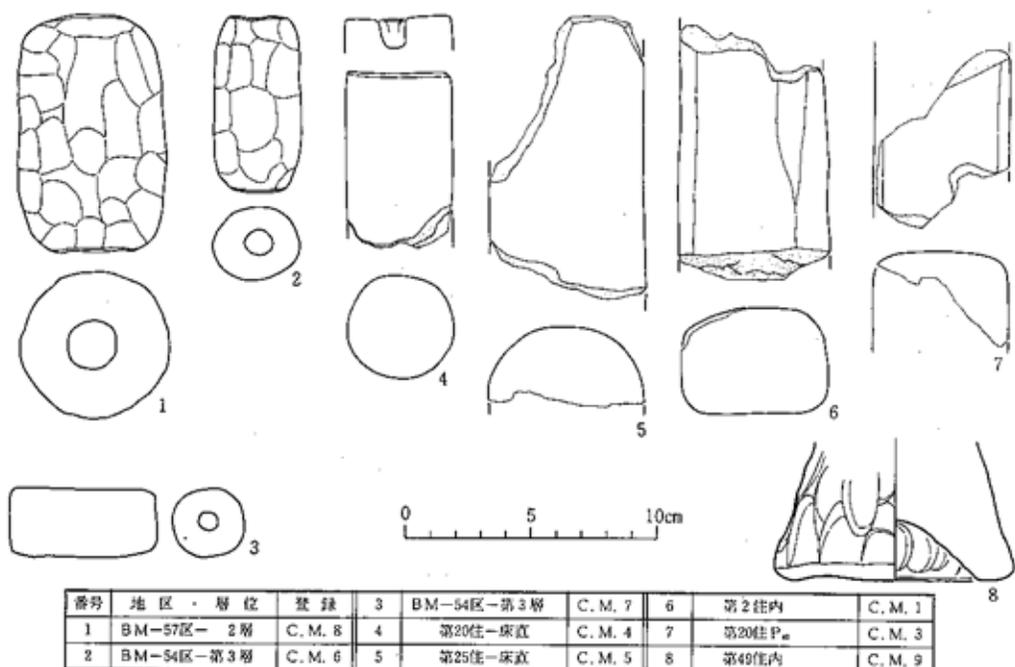
土製品

土製品としては土錘・柱状土製品・支脚・轆の羽口がある。土錘は3点あり南斜面の遺物包含層から出土している。1は大形、2は小形のものである。包含層からは表杉ノ入式土器が多く出土していることから平安時代頃のものと考えられる。

柱状土製品は断面が円形のものと同丸長方形のものがある。両者とも柱実で、直径ないしは厚さが5cm前後である。支脚の可能性はあるが明確でない。これらは塩釜式期・南小泉式期・表杉ノ入式期の住居跡から出土しており、時期を特定できない。

支脚は第49号住居跡から出土している。上半部を欠くが、下部は脚下部に向って台状に開き安定した形になっている。内・外面は指頭状のものによってオサエ調整がなされている。塩釜式土器とともに出土しており古墳時代前期のものと考えられる。

轆の羽口は第21号住居跡から1点出土している。破損が著しく図化できなかった。表杉ノ入式土器とともに出土しており平安時代のものと考えられる。



第98図 土 製 品

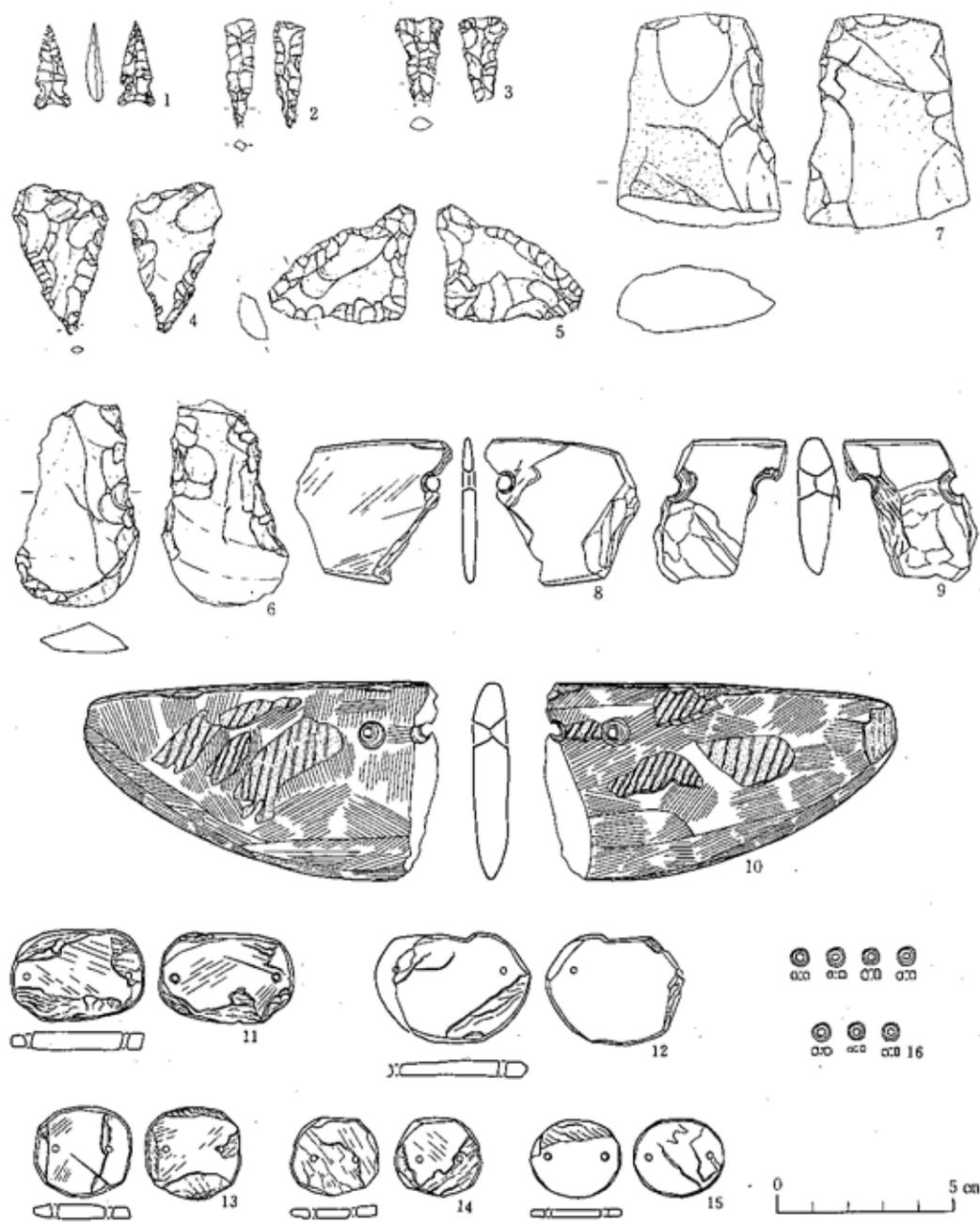
石製品

石製品としては石鏃・石錐・石匙・不定形剥片石器・石鋏状石器・石庖丁・石製模造品（有孔円板・白玉）・砥石がある。

1はアメリカ式石鏃で、基部両側に袂が入っている。2～4は石錐で基部は平たいが錐部は細身で厚味が増している。いずれも錐部先端を破損している。5は石匙で、つまみが主要刃部に対して斜目についている。6は不定形剥片石器で、縦長剥片の両側辺に調整剥離を加えたものである。7は石鋏状石器の基部である。8～10は石庖丁で、いずれも平背である。9は刃部を破損しているが、8・10は外弯刃である。紐孔は9・10は2孔である。8は破損のため1孔しか確認できない。これらの石器は各地区・各住居跡内から古代の土器に混入した状態で出土している。同様な状況で弥生土器も出土していることから、これらの石器も弥生時代のものと考えられる。

石製模造品としては有孔円板（11～15）と白玉（16）が出土している。有孔円板は出土状況が明確でないが、白玉は5点とも第25号住居跡の床面から南小泉式の土師器とともにまとまって出土しており、古墳時代中期のものと考えられる。

砥石は16点出土しており、いずれも肌理の細かいものである。第100図1～8は塩釜式期の住居跡から出土したもので古墳時代前期のものである。1～3は小形のもので整形され、複数面（4面以上）が使用されている。5～7は大形のもので、5・7・8は自然面（節理面を含む）を



番号	地区・層位	登録	6	第20住内	S. M. 64	12	第6住-第1層	S. M. 1
1	AR-6区-第2層	S. M. 26	7	第14住第4層	S. M. 30	13	第27住-第2層	S. M. 2
2	第13住-第2層	S. M. 28	8	x区-0層	S. M. 8	14	第27住-第2層	S. M. 3
3	第32住-床	S. M. 29	9	第16住-第2層	S. M. 7	15	第16住-第4層	S. M. 0
4	第16住内	S. M. 31	10	第20住-第1層	S. M. 6	16	第25住-床面	S. M. 5
5	AO-63区-第2層	S. M. 27	11	AD-61区-第2層	S. M. 4			

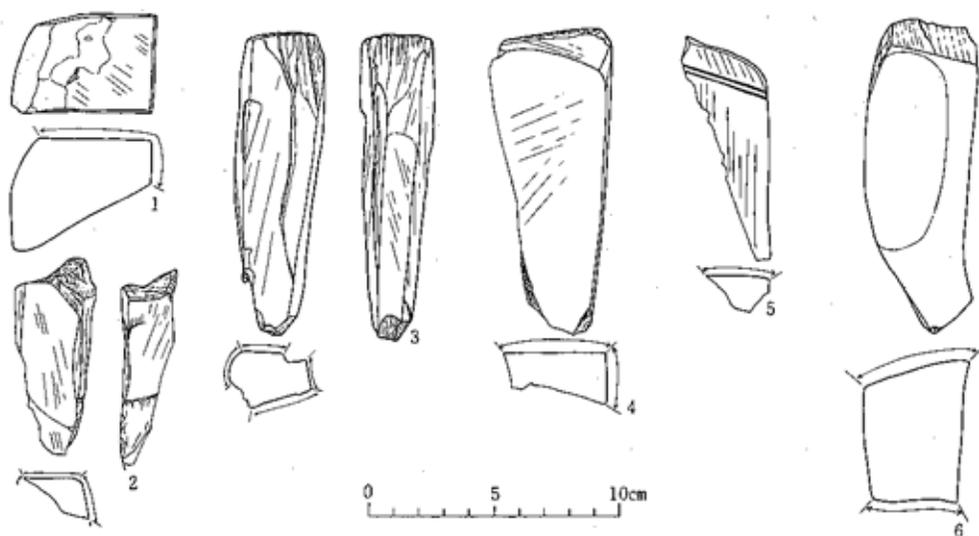
第99図 石製品 (1)



番号	地区・層位	登録	4	第24住-貯蔵穴	S. M. 18	8	第10住-床面	S. M. 15
1	第40住-床面	S. M. 16	5	第53住-第1層	S. M. 21	9	第42住-埋土	S. M. 20
2	第13住-床面	S. M. 10	6	第2住-床面	S. M. 9	10	第25住-床面	S. M. 19
3	第49住-周溝	S. M. 17	7	第5住-根1層	S. M. 12	11	第20住-P23	S. M. 15

第100図 石製品 (2)

多く残し、一面だけを使用している。4は小形であるが一面だけ使用、6はやや大形であるが複数面を使用している。大形のは床に置いて、小形のものは手で持って使用するもので、それぞれ使用方法が異なる。鉄器そのものは出土していないが、砥石の存在から、鉄製農工具が集落内にかなり普及していたと考えられる。第100図9・10は南小泉式期の住居跡から出土したもので古墳時代中期のものである。9は小形で4面の他に下端面も使用されている。10は楕円礫の自然面を残し、四面と上端面を使用している。この砥石を出土した第25号住居跡は土壌があり、粘土塊なども出土し、工房的性格をもつもので、何らかの関連が想定される。第100図11は表杉ノ入式期の住居跡から出土したもので、平安時代のものである。大形で自然面を多く残し、一面だけを使用している。第101図は時期を特定できない遺構や層から出土したものである。



番号	地区・層位	登録	番号	地区・層位	登録	地区・層位	登録	
1	BC-62区-第1層	S.M.24	3	第23住-埋土	S.M.14	5	AP-第6層	S.M.22
2	第37住-第1層	S.M.11	4	BB-62区-1層	S.M.23	6	B区包含層地区第1層	S.M.25

第101図 石製品 (3)

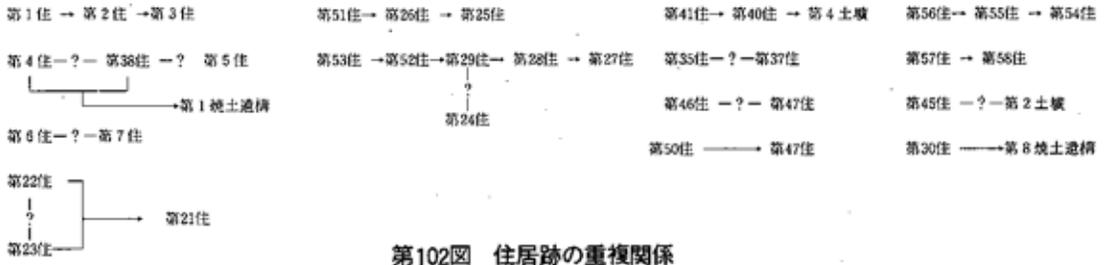
IV 遺跡の構成

遺構の年代

宮前遺跡からは今回の調査で住居跡・焼土遺構・土壌が発見されている。これらの遺構からは第Ⅰ～Ⅳ群土器が出土し、それらは第Ⅰ群土器：古墳時代前期・第Ⅱ群土器：古墳時代中期・第Ⅲ群土器：古墳時代後期・第Ⅳ群土器：平安時代に位置づけられ、さらに第Ⅰ群土器はA群土器・B群土器・C群土器、第Ⅱ・Ⅳ群土器はA群土器・B群土器に細分されることを指摘した。各遺構における土器群の出土状況は下表に示した通りである。また、宮前遺跡の遺構は重複しているものが多く、それらの切り合い関係を示したのが第102図である。遺構から出土した土器と遺構の重複関係に基づいて、遺構の年代を推定してみたい。出土土器によって遺構の年代を推定する場合、床面・細部のものを資料とするのが望ましい。しかし、床面・細部から土器が出土せず、堆積土からだけの場合もある。床面・細部および堆積土から土器を出土している遺構をみると、両者にあまり相違がみられないことが多い。したがって、堆積土だけから出土している場合も、それらを資料として使用する。その場合は廃絶後埋るまでという時間幅をもつことになる。しかし、それは分類された土器群の時間幅を越えるものではないと思われる。出土土器によって推定される遺構の年代は次のようになる。

遺構(住居跡・土壌)出土の土器群

住居跡	床面・細部	堆積土	住居跡	床面・細部	堆積土	住居跡	床面・細部	堆積土
第1号住居跡	第ⅠB群土器	———	第24号住居跡	第ⅠA・ⅠA群土器	第Ⅰ群土器	第45号住居跡	第ⅡB群土器	———
第2号住居跡	第ⅠC群土器	第ⅠC群土器	第25号住居跡	第ⅡB群土器	第ⅡB群土器	第46号住居跡	———	第ⅠB群土器
第3号住居跡	———	———	第26号住居跡	第ⅠB群土器	———	第47号住居跡	第ⅠB群土器	———
第4号住居跡	第ⅠBorC群土器	———	第27号住居跡	第ⅠA・B群土器	第ⅠB群土器	第48号住居跡	———	———
第5号住居跡	———	第ⅠBorC群土器	第28号住居跡	第ⅠB群土器	———	第48号新住居跡	第ⅠorⅡ群土器	———
第6号住居跡	第ⅠB・Ⅱ群土器	第ⅠB・Ⅱ群土器	第29号住居跡	———	———	第49号住居跡	第ⅠB群土器	第ⅠB群土器
第7号住居跡	———	第ⅠBorⅡ群土器	第30号住居跡	第ⅠB群土器	第ⅠB群土器	第50号住居跡	第ⅠB群土器	———
第8号住居跡	第ⅡB群土器	第ⅡB群土器	第31号住居跡	第ⅠorⅡ群土器	———	第51号住居跡	———	第Ⅰ群土器?
第10号住居跡	———	第ⅠBorC群土器	第32号住居跡	第ⅠC群土器	———	第52号住居跡	———	———
第11号住居跡	———	第ⅠBorC群土器	第34号住居跡	———	第Ⅰ群土器	第53号住居跡	第ⅠA群土器	———
第13号住居跡	———	第ⅠB群土器	第35号住居跡	———	第Ⅰ群土器?	第54号住居跡	第Ⅳ群土器	———
第14号住居跡	第Ⅲ群土器	第Ⅲ群土器	第37号住居跡	———	第Ⅰ群土器?	第55号住居跡	第ⅠB群土器	———
第15号住居跡	———	———	第38号住居跡	第ⅠB群土器	———	第56号住居跡	———	———
第16号住居跡	第ⅠB群土器	第ⅠB群土器	第39号住居跡	———	———	第57号住居跡	———	第Ⅳ群土器
第18号住居跡	———	第ⅠorⅡ・ⅣA群土器	第40号住居跡	———	第ⅠB群土器	第58号住居跡	———	第ⅠB・ⅣA群土器
第20号住居跡	第ⅣA群土器	第ⅣA群土器	第41号住居跡	———	———	第4土壌	———	第ⅠB群土器
第21号住居跡	第Ⅳ群土器	———	第42号住居跡	第ⅡA群土器	———	第5土壌	———	第ⅠBorC群土器
第22号住居跡	———	第ⅠB群土器	第43号住居跡	———	第ⅠorⅡ群土器?			
第23号住居跡	———	———	第44号住居跡	第ⅡB群土器	———			



第102図 住居跡の重複関係

古墳時代前期 (塩釜式期)

A群土器段階：第53号住居跡

B群土器段階：第1・13・16・22・26・28・30・38・40・46・47・49・50・55号住居跡・第4号土壌

C群土器段階：第2・32号住居跡

Aor B群土器段階：第27号住居跡

Bor C群土器段階：第4・5・10・11号住居跡・第5号土壌

A～C群土器段階：第34号住居跡

古墳時代中期 (南小泉式期)

A群土器段階：第42号住居跡

B群土器段階：第8・25・44・45号住居跡

古墳時代後期 (栗圀式期)

第14号住居跡

平安時代 (表杉ノ入式期)

A群土器段階：第20号住居跡

B群土器段階：第54号住居跡

Aor B群土器段階：第21・57号住居跡

遺跡の構成

今回の調査で出土した最も古い段階の遺物は弥生土器であるが住居跡などの遺構は発見されていない。住居跡などの遺構は、いずれも古墳時代と平安時代のものである。

微地形と集落：宮前遺跡の立地する独立小丘陵は、沢状の地形によって区画された平坦面をもつ三つの尾根状地形からなっている。東尾根は南北に長く、長井戸古墳群（前方後方墳1基・方墳1基・円墳4基からなるという。志間泰治：1975・10）が立地している。中央尾根は平坦面が広く、平坦面とその緩斜面から住居跡54軒・土壌5基・焼土遺構7基が密集して発見されている。西尾根は平坦面が狭く、遺物・遺構等の発見はない。したがって、宮前遺跡の古代集落

は中央尾根を中心として形成されたものと考えられる。住居跡は調査区の東端と北端で分布がまだのびているが、地形的な面からみると、調査区東端は中央尾根の東端に近く、調査区北端は約5mで斜面になっていることから、集落の東・北端が大きく拡大することはないものと思われる。

集落の立地

集落の立地を時代ごとにみると、古墳時代前・中期の住居は平坦面を中心として立地しているのに対し、古墳時代後期と平安時代の住居は緩斜面に立地するという大きな相違を示している。この点を少し詳しく検討してみたい。

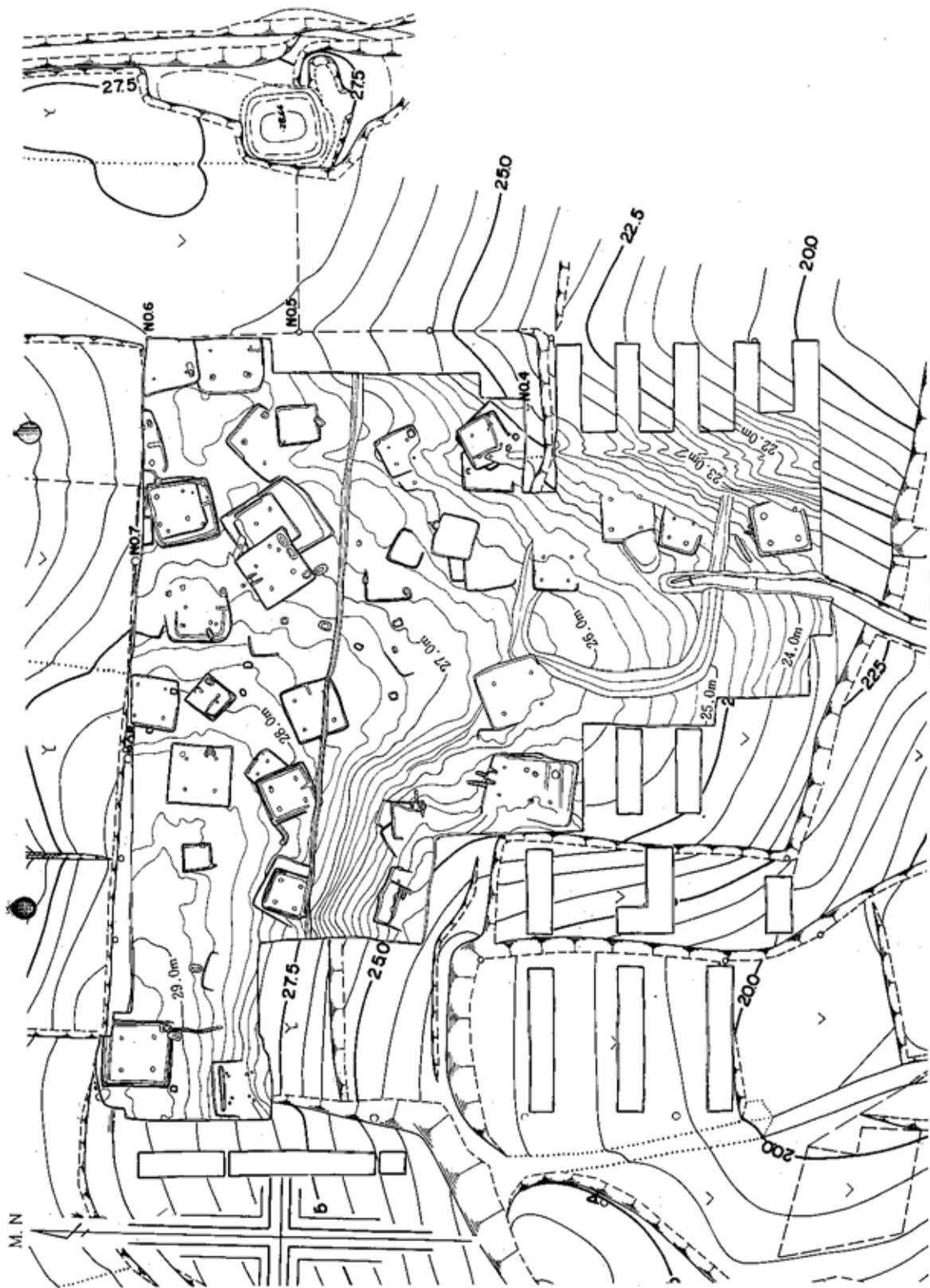
古墳時代前・中期の集落：古墳時代前・中期の住居跡は38軒あり、中央尾根平坦面と一部緩斜面にも分布し、時期的な変遷がみられる。すなわち、古墳時代前期A群土器段階のものは第53号住居跡1軒で、他にこの時期の可能性がみられるものは第24・52号住居跡などだけで、数が少なく、立地する場所も中央尾根平坦面の北東部分に限られている。したがって、A群土器段階では小規模な集落であったと考えられる。住居の数が増えるのは次のB群土器段階で、14軒を数え中央尾根の平坦面全体に広く分布し、さらには南西斜面の小さな平坦面にも立地するようになる。この時期は集落の発展期と考えられる。ところが、C群土器段階になると、明確なものは2軒だけとなり、立地も中央尾根の東側に限られ、集落の衰退期と考えられる。もちろん、時期不明の住居跡で、この時期のものが存在することも予想されるが、B群土器段階に比べ住居数は激減したものと思われる。

古墳時代中期の住居跡はA群土器段階が1軒、B群土器段階が4軒で、いずれも中央尾根北側平坦面を中心に立地している。A群土器段階からB群土器段階に移行すると住居数は増えているが、古墳時代前期のB群土器段階の比ではない。また、集落はこの時期で一時途絶えてしまう。

古墳時代後期・平安時代の集落：この時期の集落は、中央尾根南側が舌状にのびた部分の緩斜面に立地している。古墳時代後期の住居は第14号住居跡1軒で、中央尾根南端付近の緩斜面に立地するが、集落は再び途絶える。その後、集落が営まれるのは平安時代になってからで、5軒の住居が、中央尾根の舌状平坦面を囲むように緩斜面に立地している。また、これらの住居は緩斜面に立地しているにもかかわらず、住居の方向は斜面の傾斜方向に必ずしも一致せず、むしろ真北側に偏る傾向がある。古墳時代の住居にも真北に近い方向を示すものもあるが、それらは全体から見れば一部に過ぎず、集落構成の方向性を示すものではない。同時代の住居がまとまりをもって真北に対する方向性を示しているのは平安時代のものだけである。

住居構造の変化

古墳時代の前期から平安時代の住居は平面形が方形を基調とし、4個の柱（穴）が住居対角



第103圖 遺構配置圖

線上に配されるという点で共通している。しかし、平面形の細部形態・施設の種類・構造では相違を示している。

平面形：古墳時代前期の住居跡は平面形が隅丸正方形のものが多い。それに対し、中期の住居跡は小型のものを除くといずれも隅が直角か角張る正方形を示しているのが特徴である。古墳時代後期・平安時代代ものは正方形と長方形のものがみられるが、隅が特に丸くなったり角張ることはない。

施設：古墳時代前期の住居跡の炉は焼面である。これに対し、古墳時代中期以降はカマドを備えたものが多い。最も古いカマドはA群土器段階の第42号住居跡に設置されたものである。カマドは粘土で構築したもので燃焼部だけでなく煙道部も住居内にある。両者は底面の段と側壁にはさまれた幅によって区別されている。これに対し、B群土器段階の第25号住居跡では住居内にあるのは粘土構築による燃焼部だけで、煙道はトンネル式となり住居外にのびている。第25号住居跡にみられるカマドの基本形は以後継続され平安時代まで継承される。したがってA群土器期の第42号住居跡のカマドは出現期の姿を示すもので、構造的に完成されるのはB群土器期の第25号住居跡の段階ではないかと考えられる。

引用・参考文献

- 阿部義平（1968・10）：「東国の土師器と須恵器―多賀城外の出土土器をめぐって―」『帝塚山考古学』No.1
- 阿部・千葉（1980・1）：「台ノ山遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第62集
- 伊東信雄（1957・3）：「古代史」『宮城県史』第1巻
- 伊東信雄他（1961・ ）：『陸奥国分寺跡調査報告書』
- 伊東信雄（1974・11）：「弥生文化」『水沢市史』
- 伊東・伊藤・岩渕（1974・3）：「裏町古墳発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第7集
- 氏家和典（1957・3）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還歴記念論文集』
- 小笠原好彦（1976・10）：「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』
- 小川淳一（1980・9）：「青木遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集
- 太田昭夫（1980・9）：「大橋遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集
- 興野・遠藤（1970・6）：「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』
- 小井川和夫（1970・3）：「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集
- 小井川和夫（1982・9）：「御駒堂遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」『宮城県文化財調査報告書』第83集

- 佐藤博重 (1980・3) : 「下入ノ内遺跡」 『福島県文化財調査報告書』第82集
- 斎藤・真山 (1978・3) : 「北沢遺跡発掘調査概報」 『宮城県文化財調査報告書』第56集
- 志間泰治 (1971・12) : 『鱸沼遺跡』
- 志間泰治 (1975・10) : 「亘理町の原始・古代」 『亘理町史上巻』
- 篠原・工藤他 (1980・8) : 「今泉城跡」 『仙台市文化財調査報告書』第24集
- 白鳥・加藤他 (1974・3) : 「岩切鴻ノ巣遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」 『宮城県文化財調査報告書』第35集
- 白鳥良一 (1980・3) : 「多賀城跡出土土器の変遷」 『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』Ⅶ
- 田崎敬修 (1971・2) : 「沖積世における海面変化 (高度・時期) について」 『福島考古』第12号
- 田辺昭三 (1981・7) : 『須恵器大成』
- 高倉敏明 (1981・3) : 「山王遺跡」 『多賀城市文化財調査報告書』第2集
- 巽淳一郎 (1981・11) : 「平城京における平安時代の焼き物」 シンポジウム『平安時代の土器・陶器』発表要旨 (愛知県陶磁資料館)
- 高島忠平 (1971・7) : 「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」 『考古学雑誌』第57巻第1号
- 坪井清足 (1953・6) : 「福島県天王山遺跡の弥生式土器―東日本弥生式文化の性格―」 『史林』第36巻第1号
- 手塚均 (1980・3) : 「留沼遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」 『宮城県文化財調査報告書』第65集
- 手塚均 (1981・3) : 「鶴ノ丸遺跡」 『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 土岐山武 (1981・3) : 「安久東遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」 『宮城県文化財調査報告書』第72集
- 奈良国立文化財研究所 (1975・3) : 「平城宮発掘調査報告書Ⅵ」 『奈良国立文化財研究所学報』第23冊
- 中村五郎 (1976・10) : 「東北地方南部の弥生式土器編年」 『東北考古学の諸問題』
- 丹羽・柳田・阿部 (1974・3) : 「西野田遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」 『宮城県文化財調査報告書』第35集
- 丹羽・阿部・小野寺 (1981・3) : 「清水遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」 『宮城県文化財調査報告書』第77集
- 早坂・阿部 (1980・3) : 「西手取・手取遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」 『宮城県文化財調査報告書』第63集
- 古川一明 (1983・3) : 「色麻古墳群」 『宮城県文化財調査報告書』第95集
- 真山悟 (1981・9) : 「東山遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」 『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 真山悟 (1981・9) : 「家老内遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」 『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 宮教委 (1973・3) : 「船渡前遺跡」 『宮城県文化財調査報告書』第49集
- 目黒吉明 (1969・3) : 「弥生時代」 『福島県史』第1巻
- 森貢喜 (1982・3) : 「水入遺跡」 『宮城県文化財調査報告書』第84集
- 結城・工藤 (1979・3) : 「史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報」 『仙台市文化財調査報告書』
- 渡辺泰伸他 (1974・9) : 「富沢窯跡」 『古窯跡研究会研究報告』第3冊

昭和57年度発掘届等一覧

(昭和58年2月1日現在)

●宮城県文化財調査報告書第90集(1982)に収録されたあつた昭和57年2月3日以後のものを含む

(1) 文化財保護法第57条の2、3による届出及び通知

56年度

登録番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	登録番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
369	中新田城跡	中新田町	宮城県知事	都市計画道路改良工事	城跡跡	394	刈野遺跡	仙台市	栗田勝男	共同住宅新築工事	寺跡
370	市川橋遺跡	多賀城市	多賀城市長	上水路の改良工事	集落跡	395	堤町遺跡	仙台市	佐藤和雄	住宅増築工事	窯跡
372	舞堂平遺跡	仙台市	武山忠勝	宅地造成工事	住居跡	396	内親館	白石市	日朝建設組合役員長	のり面のコンクリート敷	館跡
373	二の森遺跡	仙台市	きぼう園々長	排水管敷設工事	包含地	397	谷地田遺跡	仙台市	仙台市ガス事業管理者	事務所建設工事	集落跡
374	海ノ巣遺跡	仙台市	近江富男	住宅新築工事	集落跡	399	長命館跡	泉市	泉市長	公園整備工事	城跡跡
375	下の内遺跡	仙台市	庄子幸一郎・誠司	。	集落跡	400	山崎跡	仙台市	水道事業管理者	下水道管敷設工事	包含地
376	上野遺跡	仙台市	大場利雄	。	集落跡	401	大運寺遺跡	仙台市	下水道管理	道路拡幅工事	窯跡
377	野添杉原遺跡	仙台市	森直彦	。	瓦窯跡	402	北目城跡	仙台市	。	下水処理敷設工事	城跡跡
378	国分館跡	仙台市	三原任士郎	。	城跡跡	403	土手内宮跡	仙台市	。	下水管敷設工事	窯跡
379	今泉城跡	仙台市	渡辺久夫	。	。	404	鶴巻1遺跡	仙台市	菅野清治	車庫及び物置増築工事	包含地
380	梨ノ木園貝塚	仙台市	熊谷茂一	宅地造成工事	貝塚	405	仙台城跡	仙台市	柳沢三雄	工作物の新築工事	城跡跡
381	千石館跡	松山町	松山町長	林道拡幅・改良工事	城跡跡	406	神掛遺跡	仙台市	澤野陽子	住宅新築工事	包含地
382	跡地跡	泉市	関兵衛孝 K.K	宅地造成工事	蔵跡	407	茂河原遺跡	仙台市	鈴木和子	共同住宅建築工事	包含地
383	大畑B遺跡	白石市	大畑土地改良事業 共同組合役員長	開場整備事業	包含地	408	小輪城跡	仙台市	佐藤真	倉庫付住宅新築工事	城跡跡
387	山王遺跡	多賀城市	八嶋信彦	宅地造成工事	集落跡	409	砂押古墳	仙台市	佐藤時宜	駐車場造成工事	古墳
388	南小泉遺跡	仙台市	庄子正一・黄枝子	住宅新築工事	集落跡	410	畑中遺跡	仙台市	佐藤隆治郎	宅地造成工事	集落跡
389	滝ノ巣遺跡	仙台市	鶴戸康弘	。	集落跡	411	出花遺跡	仙台市	郡山昭子	アパート新築工事	集落跡
390	南小泉遺跡	仙台市	日下研池	倉庫新築工事	集落跡	412	郡山遺跡	仙台市	水戸富久司	住宅新築工事	官衙跡
391	北目城跡	仙台市	菅野庄作	事務所建築工事	城跡跡	413	郡山遺跡	仙台市	栗田敏夫	倉庫付住宅新築工事	。
392	仙台城跡	仙台市	坂橋勇	住宅新築工事	城跡跡	414	西台畑遺跡	仙台市	坂田重哉	病院建設工事	包含地
393	郡山遺跡	仙台市	寺沢テル子	。	官衙跡						

(2) 文化財保護法第57条の2、3による届出及び通知

昭和57年度

登録番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	登録番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
1	郡山遺跡	仙台市	中村みよ子	住宅増築工事	官衙跡	21	若宮前遺跡	仙台市	永野誠	住宅新築工事	集落跡
2	海ノ巣遺跡	仙台市	永野豊治	。	集落跡	22	鶴巻1遺跡	仙台市	佐藤博俊	。	。
3	鶴巻1遺跡	仙台市	川上清	。	包含地	23	熊沢遺跡	仙台市	針生真寿	住宅増築工事	包含地
4	南小泉遺跡	仙台市	仙台市水道管理者	下水道管敷設工事	集落跡	24	南小泉遺跡	仙台市	小沼武英	住宅新築工事	集落跡
5	仙台城跡	仙台市	小野満夫	住宅新築工事	城跡跡	25	栗遺跡	仙台市	庄司興一	。	。
6	人來田遺跡	仙台市	小松實	。	集落跡	26	志保城跡 (宮城分屯地)	仙台市	仙台市水道事業管理者	上水道配水管敷設工事	尾寺跡
7	神ノ布織跡	多賀城市	加藤展蔵	水道管理敷工事	窯跡	27	細谷遺跡	角田市	宮城県公営企業管理者	送水管敷設工事	包含地
8	高野館跡	白石市	宮城県公営企業管理者	送水管敷設工事	城跡跡	28	山中遺跡	角田市	斎藤正志	土取工事	。
9	栗田遺跡	柴田町	柴田町長	園路建設工事	瓦窯跡	31	竹ノ内遺跡	仙台市	佐藤清三郎	住宅新築工事	集落跡
10	城生館跡	中新田町	中新田町長	防火用貯水構築工事	城跡跡	32	南小泉遺跡	仙台市	小畑義昭	。	。
11	城生館跡	中新田町	山田勇一	住宅改築工事	。	33	南小泉遺跡	仙台市	渡辺橋	事務所新築工事	。
19	下藤沢目遺跡	瀬峰町	瀬峰町教育委員会教育長	保育所新築工事	塚	34	南小泉遺跡	仙台市	渡辺重男	住宅新築工事	。
20	皮塚集落跡	瀬峰町	七浦建設物	宅地造成工事	集落跡	35	仙台城跡	仙台市	千葉保彦	。	城跡跡

整理番号	道路名	所在地	申請者	発起の原因	道路の性格	整理番号	道路名	所在地	申請者	発起の原因	道路の性格
36	相馬郡道	仙台市	村上ハキミ	住宅増築工事	城館路	84	北星教道	仙台市	菊地 敏 雄	住宅新築工事	集落路
37	八幡沢道	仙台市	高野 輝・美 美子	住宅新築工事	集落路	85	福田町道	仙台市	菊 池 光 明	＊	＊
38	人來田道	仙台市	佐々木 恒 彦	＊	＊	86	羽黒川本道	羽黒町	岩 出 山 町 長	駐車場整備工事	包含地
42	今泉城	仙台市	山 田 繁 雄	＊	城館路	87	茂ヶ崎城	仙台市	仙 台 市 長	下水道敷設工事	城館路
43	燕沢道	仙台市	原 一 一	＊	集落路及び 町道	88	南小泉道	仙台市	大 久 礼 次 郎	住宅新築工事	集落路
44	南小泉道	仙台市	早 坂 寅 吉	＊	集落路	89	八幡道	桃生町	桃 生 町 長	道路改良工事	城館路
45	南小泉道	仙台市	見 田 伸 昌	＊	＊	90	仙台城	仙台市	庄 子 善 子	住宅新築工事	＊
46	燕沢道	仙台市	地主統一・フジエ	＊	集落路及び 町道	91	今泉城	仙台市	坪 子 文 男	＊	＊
47	高瀬沢道	仙台市	大 上 剛 司	＊	集落路	92	向山高瀬道	仙台市	木村源治・ますえ	住宅増築工事	包含地
48	南小泉道	仙台市	高 橋 陽 一	＊	＊	93	鶴巻1道	仙台市	遠 藤 武 夫	住宅新築工事	＊
49	十三塚道	名取市	浅 野 喜 代 治	老人ホーム建設工事	集落路	94	南原道	仙台市	遠 藤 み い 子	長屋建築工事	＊
51	吉岡路	大和町	大 和 町 長	多目的集合施設建設工事	城館路	95	高柳B道	仙台市	安 藤 徳 夫	倉庫及び事務所建設工事	＊
52	越田台道	石巻市	鈴 木 嘉 太郎	畑地改良工事	包含地	96	郡山道	仙台市	白 鳥 修 一	住宅新築工事	官街路
53	郡山道	仙台市	鈴 木 誠	住宅増築工事	官街路	97	郡山道	仙台市	目々 澤 光 壽	＊	＊
54	人來田道	仙台市	佐 藤 道 之	住宅新築工事	集落路	98	福田町道	仙台市	森 み さ を	＊	包含地
55	柳沢B地点	仙台市	菊 田 正	＊	瓦葺路	99	南小泉道	仙台市	佐々木 忠 夫	住宅増築工事	集落路
56	鶴巻1道	仙台市	平 山 浩	住宅増築工事	集落路	100	御殿道	宮城町	宮 城 町 長	小規模林道開設工事	城館路
57	鶴巻1道	仙台市	小 野 孝 邦 夫	車庫新築工事	＊	101	南小泉道	仙台市	東 北 少 年 院 長	東北少年院新築工事	集落路
58	南小泉道	仙台市	庄 司 鶴 夫	住宅増築工事	＊	102	六反田道	仙台市	東 北 電 気 通 信 局 長	住宅建設工事	＊
59	泉崎湖道	仙台市	松 浦 亨	住宅新築工事	包含地	103	高柳道	泉 市	宮 城 県 知 事	河川改修工事	包含地
60	南小泉道	仙台市	川 村 博	住宅増築工事	集落路	104	南小泉道	仙台市	高橋忠一・山田忠	旅館新築工事	集落路
61	鶴巻1道	仙台市	李 野 崇 一	＊	＊	105	津野城	仙台市	小 島 一 吉 衛 門	店舗併用住宅新築工事	城館路
62	人來田道	仙台市	小 形 廣	住宅新築工事	＊	106	和田屋敷	仙台市	森 倉 誠	雨水排水溝工事	＊
63	郡山道	仙台市	佐 藤 章・弘 子	住宅増築工事	官街路	107	堤町宮	仙台市	菊 田 正	住宅新築工事	瓦葺路
64	高瀬沢道	仙台市	齊 藤 春 男	物置新築工事	集落路	108	六反田道	仙台市	白 岩 義 孝	＊	集落路
65	高瀬沢道	仙台市	中 村 喜 兵 衛	宅地造成工事	＊	109	郡山道	仙台市	秋 本 昭 彦	住宅増築工事	官街路
66	南小泉道	仙台市	渡 辺 一 男	住宅新築工事	＊	110	郡山道	仙台市	生 井 金 藏	＊	＊
67	鶴巻B地点	仙台市	浅 谷 弘	＊	桑里路	111	仙台城	仙台市	寺 島 貞 吉	住宅新築工事	城館路
68	福田町道	仙台市	昆 野 昭 二	＊	集落路	112	六反田道	仙台市	庄 子 幸 一 郎・誠 司	＊	集落路
69	今泉城	仙台市	今 野 武 雄	＊	城館路	113	北目城	仙台市	仙 台 市 長	下水道敷設工事	城館路
70	小瀬川道	仙台市	大 友 信 一	住宅増築工事	瓦葺路	118	北目城	仙台市	村 井 汎 二	住宅新築工事	＊
71	人來田道	仙台市	東 峰 勝 彦	住宅新築工事	集落路	119	仙台城	仙台市	田 中 武 夫	＊	＊
72	山口道	仙台市	最 上 次 郎	車庫併用住宅新築工事	＊	120	鶴巻B道	仙台市	浅 野 正 志	＊	包含地
73	田子道	仙台市	徐 采 演	住宅新築工事	＊	121	湖ノ菜道	仙台市	高 橋 政 和	＊	集落路
74	土手内家路	仙台市	安 藤 う め	ヨウ登工事	堂 路	122	山口道	仙台市	松 本 幸 彦	＊	＊
75	福田町道	仙台市	瀬 戸 文 雄	住宅新築工事	集落路	125	杉ノ木・河原	高瀬町	宮城電気通信部長	公衆電気通信施設工事	包含地
76	上野山道	仙台市	仙 台 市 長	道路改良工事	＊	124	御堂平道	仙台市	宮城県教育委員会教育長	県立高等学校建設工事	集落路
77	長 尾 城	松山町	松 山 町 長	町道改良工事	城館路	125	園分館路	仙台市	宮城県教育委員会教育長	図書館新築工事	城館路
78	大野田道	仙台市	畑 山 武	向棟建築工事	古墳路	126	上野道	仙台市	高 山 尚 喜	基礎工事、給排水工事	集落路
79	南小泉道	仙台市	佐 藤 繁	住宅新築工事	集落路	127	福田町道	仙台市	早 坂 ち よ	住宅新築工事	包含地
80	新根道	仙台市	鶴 本 英 男	＊	＊	128	栗 邊 路	仙台市	大 友 由 治	＊	集落路
81	高瀬沢道	仙台市	七 井 英 雄	＊	瓦葺路	129	栗 邊 路	仙台市	高 橋 信 行	＊	＊
82	高瀬沢道	仙台市	竹 元 火 三	＊	＊	130	仙台城	仙台市	佐 藤 昇	店舗付住宅新築工事	城館路
83	仙台城	仙台市	佐 野 啓 園 郎	＊	城館路	131	六反田道	仙台市	中 村 忠 夫	住宅新築工事	集落路

番号	道路名	所在地	申請者	発願の原因	道路の性格	番号	道路名	所在地	申請者	発願の原因	道路の性格
132	六反田遺跡	仙台市	仙台市ガス事業管理委	ガス本管敷設工事	集落跡	180	新組遺跡	仙台市	太田良一	埋蔵倉庫工事	集落跡
133	宮城野新築跡	宮城町	宮城県教育委員会	県立高等学校建設工事	〃	181	中田中遺跡	仙台市	佐藤権治郎	宅地造成工事	〃
134	神明社遺跡	岩沼町	宮城県知事	河川改修工事	〃	182	小田原遺跡	仙台市	阿部良見・マサミ	共同住宅新築工事	瓦葺跡
135	高畑遺跡	丸森町	穴戸豊英	住宅新築工事	〃	183	旗塚原遺跡	仙台市	高橋勝	住宅新築工事	桑畑跡
136	郡山遺跡	仙台市	中村記康	住宅増築工事	官衙跡	184	人米田遺跡	仙台市	近野達雄	〃	集落跡
137	明星敷遺跡	仙台市	斎藤さのへ	住宅新築工事	集落跡	185	上野遺跡	仙台市	仙台市長	道路改良工事	〃
138	牛小倉遺跡	仙台市	菅野辰男	郡城跡コンクリート	包含地	187	藤ヶ浜貝塚	唐桑町	鈴木邦夫	実務所兼住宅新築工事	貝塚
139	郡山遺跡	仙台市	松谷六郎	共同住宅建築工事	官衙跡	188	南遺跡	泉市	泉市土地改良区理事長	臨時整備事業	包含地
140	栗遺跡	仙台市	柳野雅夫	住宅新築工事	集落跡	189	対馬住居跡	迫町	迫町長	道路改良工事	集落跡
141	栗遺跡	仙台市	佐藤順	〃	〃	193	岩切跡/集落跡	仙台市	阿部満	住宅新築工事	集落跡
142	南目城跡	仙台市	永井秀男	ビル新築工事	城跡跡	194	横江遺跡	仙台市	鈴木誠三	事務所・倉庫新築工事	遺跡
143	鳥居原遺跡	仙台市	佐藤謙夫	住宅新築工事	包含地	195	泉崎前遺跡	仙台市	阿部権右衛門	共同住宅新築工事	包含地
144	郷田町遺跡	仙台市	鈴木勲	〃	集落跡	196	泉崎前遺跡	仙台市	阿部権右衛門	住宅新築工事	包含地
145	山口遺跡	仙台市	加藤義明	〃	〃	197	愛宕山横穴群	仙台市	相沢保	〃	横穴遺跡
146	砂押遺跡	仙台市	伊東栄悦	上水道配水管敷設工事	包含地	198	仙台城跡	仙台市	小島孝	〃	城跡跡
147	柳一本杉遺跡	仙台市	中野隆夫	給水管埋設工事	瓦葺跡	199	西沢遺跡	多賀城市	佐藤清吉	〃	集落跡
149	長地遺跡	泉市	今野作之	宅地造成工事	包含地	200	若林城跡	仙台市	東北少年院長	国家公園記念館新築工事	城跡跡
150	神棚遺跡	仙台市	仙台市水道事業管理委	上水道配水管敷設工事	包含地	204	泉崎遺跡	仙台市	仙台市長	病院建設工事	集落跡
152	旗原水遺跡	岩沼町	岩出山町長	駐市場整備工事	包含地	205	藤原・岡分線跡跡ほか	仙台市	仙台市長	街路築造工事	城跡跡
153	色森古墳群	色森町	高橋司人	畑地造成工事	古墳群	206	萩ヶ丘遺跡	仙台市	仙台市長	市内運動場増設改修工事	包含地
154	栗遺跡	仙台市	笠原貞幸	住宅新築工事	集落跡	207	北目城跡	仙台市	日本石油株式会社	給油所新築工事	城跡跡
155	下ノ内浦遺跡	仙台市	みやぎ生活協同組合 専任管理員	宅地造成工事	〃	208	明星敷遺跡	仙台市	佐藤幸雄	倉庫及び事務所新築工事	包含地
156	製鉄遺跡	泉市	泉市中山土地開発 整理組合理事長	〃	製鉄跡	209	安久遺跡	仙台市	渡辺洋三	住宅新築工事	集落跡
158	郡山遺跡	仙台市	伊藤克己	住宅増築工事	官衙跡	210	南小泉遺跡	仙台市	佐司清信	〃	〃
159	南小泉遺跡	仙台市	丸山森男	住宅新築工事	集落跡	211	田子遺跡	仙台市	新川大吉	工場・事務所建築工事	包含地
160	人米田遺跡	仙台市	井口泰孝	〃	〃	212	西沢遺跡	仙台市	佐藤 潤	住宅新築工事	〃
161	新田遺跡	多賀城市	釜石西製鉄代表取締役	宅地造成工事	〃	213	郡山遺跡	仙台市	関つや子	〃	官衙跡
162	北原敷遺跡	仙台市	石田昇	住宅新築工事	包含地	214	南小泉遺跡	仙台市	秋山亮一	〃	集落跡
163	上野遺跡	仙台市	高石一嘉	住宅増築工事	集落跡	215	藤田城跡跡	仙台市	木材富久子	建売住宅新築工事	城跡跡
164	山口遺跡	仙台市	中沢 巖	住宅新築工事	包含地	216	惣堀馬込跡	仙台市	薬師寺晴生	住宅新築工事	寺院跡
166	新畑中遺跡	柴田町	柴田町長	水道管敷設工事	〃	217	後河原遺跡	仙台市	加藤文教	宅地造成工事	集落跡
167	免田遺跡	柴田町	柴田町長	遊歩道整備工事	瓦葺跡	218	萩ヶ丘遺跡	仙台市	遠藤映子・榮一	住宅新築工事	包含地
168	砂押遺跡	仙台市	遠藤昭夫	基礎工事及び外構工事	包含地	219	郡山遺跡	仙台市	土屋 明	住宅新築工事	官衙跡
169	仙台城跡	仙台市	大沼佐四郎	住宅新築工事	城跡跡	220	明星敷遺跡	仙台市	佐藤勝美	〃	包含地
170	仙台城跡	仙台市	武田忠貞	〃	〃	221	産野原遺跡	萩原町	瀬戸文雄	宅地造成工事	〃
171	下ノ内浦遺跡	仙台市	庄子栄一郎	貸家住宅新築工事	集落跡	222	室ヶ峰遺跡	河内町	河内町長	一部地上、基礎築造工事	〃
172	南小泉遺跡	仙台市	鎌尾 絃夫	倉庫新築工事	〃	223	北目遺跡	仙台市	建設局仙台工事部部長	道路拡幅工事	城跡跡
173	山田上ノ台遺跡	仙台市	堀田行男	事務所付倉庫新築工事	集落跡	225	郡山遺跡	仙台市	尾形周祝	住宅増築工事	寺院・官衙跡
174	南小泉遺跡	仙台市	高橋孝夫	住宅新築工事	集落跡	226	長者館遺跡	河内町	石巻加減林造監製	浄水場建設工事	包含地
175	後河原遺跡	仙台市	井筒康治	〃	包含地	227	西沢遺跡	仙台市	渋谷直行	店舗併用住宅新築工事	集落跡
176	南小泉遺跡	仙台市	柳津和子	〃	集落跡	228	南小泉遺跡	仙台市	白石国昭	住宅新築工事	集落跡
177	養圃園遺跡	仙台市	木村 諒	〃	〃	229	藤ヶ峰遺跡	仙台市	関口克己	〃	包含地
178	五本松家跡	仙台市	高橋 剛市	〃	瓦葺跡	230	北前遺跡	仙台市	下山茂行	事務所新築工事	集落跡
179	新田遺跡	仙台市	小林公夫	〃	包含地	231	愛宕山横穴群	仙台市	佐藤 は 全	住宅新築工事	横穴遺跡

整理番号	道路名	所在地	申請者	発願の原因	道路の性格	整理番号	道路名	所在地	申請者	発願の原因	道路の性格
232	羽黒堂道跡	仙台市	中安留 夫	宅地造成工事	包含地	279	茂ヶ崎道跡	仙台市	繁 頭 か つ	住宅新築工事	城跡跡
233	波河原道跡	仙台市	石 田 清 一	宅地造成工事	集落跡	280	若林 城 跡	仙台市	宮 城 刑 務 所 長	庁舎新築工事	○
234	福田町道跡	仙台市	波 辺 政 美	住宅建築工事	包含地	281	下ノ内道跡	仙台市	加 藤 晋 夫	住宅新築工事	集落跡
235	福田町道跡	仙台市	大 宮 歳 美	住宅増築工事	包含地	284	若林 城 跡	仙台市	宮 城 刑 務 所 長	家畜舎移転工事	城跡跡
236	仙台城ノ丸跡	仙台市	東 北 大 学 長	研究棟新築工事	城跡跡	285	郡山 道 跡	仙台市	畑 中 実	住宅新築工事	官街跡
237	新田A道跡	岩沼町	宮 城 県 知 事	農免農道整備工事	包含地	286	安藤下町道跡	仙台市	宮 城 県 知 事	○	郷 跡
238	一本松門前跡	岩沼町	○	○	古 墳	287	赤井 道 跡	矢本町	手 代 木 や す み	宅地造成工事	包含地
239	成田山道跡	岩沼町	○	○	包含地	288	郡山 道 跡	仙台市	大 沼 春 夫	住宅新築工事	官街跡
240	向山B道跡	岩沼町	○	○	○	289	陣形跡跡跡	仙台市	菊 地 邦 夫	○	古 墳
241	一本松道跡	岩沼町	○	○	○	290	福田町道跡	仙台市	加 藤 国 寿	○	集落跡
242	岩ノ入道跡	丸森町	○	○	○	291	鶴巻目道跡	仙台市	東 海 林 昭 一	○	包含地
243	千賀田道跡	丸森町	○	○	○	292	牛小倉道跡	仙台市	阿 部 尚 樹	貸家新築工事	集落跡
244	矢の目道跡	丸森町	○	○	○	293	山口 道 跡	仙台市	木 村 泰 三	住宅新築工事	集落跡
245	温泉館跡・温泉道跡	色麻町	○	○	○	297	明原敷道跡	仙台市	角 田 萬 蔵	宅地造成工事	包含地
246	色麻寺道跡	色麻町	○	○	○	298	新江 道 跡	仙台市	奥 山 秀 男	住宅増築工事	瓦葺跡
247	郡山 道 跡	色麻町	高 橋 莊 五 郎	共同住宅新築工事	官街跡	299	茂ヶ崎城跡	仙台市	仙台市ガス事業管理者	都市ガス本管敷設工事	城跡跡
248	南小泉道跡	仙台市	水 倉 信 雄	住宅増築工事	集落跡	300	若林 城 跡	仙台市	宮 城 刑 務 所 長	国家公務員住宅新築工事	○
249	南小泉道跡	仙台市	鈴 木 直 彦	住宅新築工事	○	301	若林 城 跡	仙台市	○	農耕小屋新築工事	○
250	南小泉道跡	仙台市	菅 原 榮 治	ビル新築工事	○	304	中新田城跡	中野町	宮 城 県 知 事	都市計画街路改良工事	城跡跡
251	南小泉道跡	仙台市	菅 原 榮 治	○	○	305	南小泉道跡	仙台市	斎 藤 富 夫	倉庫新築工事	集落跡
252	南小泉道跡	仙台市	今 橋 保	住宅新築工事	○	306	羽黒台道跡	仙台市	藤 長 澤 組	道路及び水道埋設工事	包含地
253	五本松道跡	仙台市	内 海 敏	○	瓦葺跡	307	下ノ内道跡	仙台市	庄 子 末 吉	住宅増築工事	集落跡
254	泉崎道跡	仙台市	三 国 文 治 郎	事務所新築工事	包含地	308	観音崎道跡	白石市	白 石 市 長	公共下水道事業工事	包含地
255	鶴巻目道跡	仙台市	仙 台 市 消 防 局 長	防火水槽設置工事	○	309	福田町道跡	仙台市	市 川 栄 二	店舗増築工事	集落跡
256	上野 道 跡	仙台市	○	○	集落跡	310	南小泉道跡	仙台市	高 橋 裕 弘	アパート新築工事	集落跡
257	沼津 貝 塚	石巻市	石巻市環境水道企業局長	上水道配水管埋設工事	貝 塚	311	地蔵道跡	仙台市	油 井 寛 治	住宅新築工事	包含地
258	磯田 貝 塚	石巻市	○	○	貝 塚	312	明原敷道跡	仙台市	石 田 昇	住宅増築工事	○
259	泉崎道跡	仙台市	奈 良 義 美	車庫増築工事	包含地	315	陸奥国分寺跡	仙台市	薬 師 寺 典 夫	住宅新築工事	寺院跡
261	塚原A道跡	古川市	宮 城 県 知 事	国庫築屋・土留工事	○	316	深田原西道跡	仙台市	阿 部 喜 三	住宅増築工事	集落跡
262	塚原古墳群	古川市	○	○	古 墳	317	鶴巻目道跡	仙台市	村 岡 祐 藏	住宅新築工事	包含地
263	柳 道 跡	泉 市	○	○	包含地	318	南ノ目城跡	仙台市	山 形 ミ ヨ シ	基礎掘削工事	城跡跡
264	郡山 道 跡	仙台市	菅 原 藤 治	住宅建築工事	官街跡	319	郡山 道 跡	仙台市	千 葉 慶 太 郎	住宅新築工事	官街跡
265	郡山 道 跡	仙台市	沼 田 権 右 工 門	医舎増築工事	官街跡	320	南小泉道跡	仙台市	市 川 忠 作	○	集落跡
266	人果田道跡	仙台市	高 橋 敏 彦	住宅新築工事	集落跡	321	下ノ内道跡	仙台市	内 館 晟	店舗建設工事	集落跡
267	郡山 道 跡	仙台市	半 沢 薫	○	官街跡	322	南小泉道跡	仙台市	小 沢 幸 治	住宅新築工事	集落跡
268	明神森道跡	蔵王町	沼 沢 み つ 子	倉庫新築工事	包含地	323	郡山 道 跡	仙台市	今 野 忠 雄	住宅増築工事	包含地
269	欠ノ上道跡	仙台市	鈴 木 昭 太 郎	住宅新築工事	包含地	324	鶴巻目道跡	仙台市	東 北 電 気 通 信 局 長	電線ケーブル敷設工事	水田跡
270	福田町道跡	仙台市	山 口 昭 二	○	○	325	泉崎道跡	仙台市	松 浦 孝	ビル新築工事	包含地
271	葛原上台道跡	仙台市	社 本 憲 幸	○	集落跡	326	老ヶ崎道跡	角田市	浅 川 純 直	墓道掘土取場	○
272	田子 道 跡	仙台市	佐 藤 孝	○	包含地	332	湯ノ根道跡	仙台市	堂 嶋 求 三	住宅新築工事	集落跡
274	山口 道 跡	仙台市	横 山 睦 子	○	集落跡	333	深田原西道跡	石巻市	農 林 事 務 所 長	磐石町志モククリート土留工事	墳・墓
275	南小泉道跡	仙台市	千 葉 雅 彦	○	集落跡	334	吹付 道 跡	大衡村	大 衡 村 長	村道改良工事	集落跡
277	下ノ内道跡	仙台市	阿 部 嘉 南 治	○	包含地	335	深野原道跡	利府町	小 山 田 喜 徳	宅地造成工事	包含地
278	今泉 道 跡	仙台市	佐 藤 忠 美	○	城跡跡	336	保呂羽館跡	登米町	稲 部 一 郎	住宅新築工事	○

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
337	八谷館	大和町	大和町長	都市緑地公園整備工事	城館跡	345	若林城跡	仙台市	宮城副務所長	保護所新築工事	城館跡
338	上野遺跡	仙台市	今野益男	住宅新築工事	集落跡	346	南小泉遺跡	仙台市	菅野源三郎	建築物解体工事	集落跡
339	船町遺跡	仙台市	船藤国寿	＊	包含地	347	郡山遺跡	仙台市	庄子忠雄	住宅新築工事	官衙跡
340	明屋敷遺跡	仙台市	斎藤雪義	＊	＊	348	仙台城跡	仙台市	今野清志	＊	城館跡
341	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市	菱沼二郎	＊	＊	351	花田城(虎ヶ嶋)	迫町	迫町長	都市公園整備工事	城館跡
342	出花遺跡	仙台市	大槻功二	店舗建築工事	＊	352	西沢遺跡	仙台市	栗田賢蔵	住宅新築工事	包含地
343	天神館跡	大和町	高橋東	土取り工事	城館跡	353	新井城跡	角田市	宮城早知事	駐宮ほり整備事業	集落跡
344	南小泉遺跡	仙台市	佐藤吉治	住宅新築工事	集落跡						

(3) 文化財保護法第57条の6による通知

56年度

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
386	舟越穴古墳跡	松山町	松山町教育委員会	林園工事に伴う掘削作業による	横穴古墳						

(3) 文化財保護法第57条の5、6による届出及び通知

昭和57年度

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
148	長崎遺跡	泉市	石器文化研究会	分布調査の際発見	包含地	328	諏訪島南遺跡	角田市	角田市教育委員会	工事に伴う発掘中に発見	包含地
190	宮林宮跡	色麻町	色麻町教育委員会	玄米研究会の一角発見	瓦葺跡	329	新浜A遺跡	塩釜市	塩釜市教育委員会	定規パトロール中に発見	貝塚
282	米ヶ浦遺跡	若柳町	若柳町教育委員会	住民からの通報による	包含地	330	内郷島遺跡	塩釜市	塩釜市教育委員会	定規パトロール中に発見	＊
296	五松山調査遺跡	石巻市	石巻市教育委員会	雑物撤去作業中に発見	城館跡	331	新浜B遺跡	塩釜市	塩釜市教育委員会	定規パトロール中に発見	＊
327	梶賀遺跡	角田市	角田市教育委員会	排水管理工事	包含地	350	稲倉院下貝塚	松島町	松島町教育委員会	埋蔵文化財調査	＊

(4) 文化財保護法第98条の2による通知

56年度

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	担当者	発掘の原因	遺跡の性格
371	保原平遺跡	白石市	宮城県教育委員会	文化財保護課	県道改良工事に伴う事前調査	包含地
384	鉄砲御堂蔵跡	泉市	泉市長	泉市教育委員会	宅地開発	蔵跡
385	小野横穴古墳小高支群	古川市	古川市教育委員会	古川市教育委員会	安全確保のための発掘調査	横穴古墳
398	大畑B遺跡	白石市	白石市教育委員会	白石市教育委員会	土地改良事業のための緊急調査	包含地

(4) 文化財保護法第98条の2による通知

昭和57年度

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	担当者	発掘調査の目的	遺跡の性格
12	城生橋跡	中新田町	中新田町教育委員会	中新田町教育委員会	防火用貯水槽建設工事に伴う事前調査	官衙跡
13	北前遺跡	仙台市	仙台市	仙台市教育委員会	土地改良事業に伴う事前調査	集落跡
14	小梁川遺跡	七ヶ宿町	宮城県	文化財保護課	七ヶ宿ダム建設工事に伴う	包含地
15	矢ノ目遺跡	丸森町	宮城県	＊	限家地区前並排水機場建設に伴う	集落跡
16	色麻古墳群上郷支群	色麻町	宮城県	＊	宮城県営開場整備事業に伴う	古墳群及び包含地
17	民生病院裏遺跡	瀬峰町	瀬峰町	瀬峰町教育委員会	宅地造成工事に伴う	集落跡
18	下藤沢Ⅱ遺跡	瀬峰町	瀬峰町	＊	遺跡の範囲確認調査	塚
29	郡山遺跡	仙台市	仙台市	仙台市教育委員会	郡山遺跡の範囲、遺構調査	官衙跡
30	西台畑遺跡	仙台市	仙台市	仙台市教育委員会	開発に伴う事前調査	包含地
39	泉崎浜遺跡	仙台市	仙台市	仙台市教育委員会	仙台市高速鉄道南北線建設工事に伴う	集落跡

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	担当者	発掘調査の目的	遺跡の性格
40	下の内遺跡	仙台市	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	仙台市高速鉄道南北線建設工事に伴う事前調査	集落跡
41	御堂平遺跡	仙台市	宮城県 *	文化財保護課	宮城県立高等学校建設に伴う *	*
50	十三塚遺跡	名取市	名取市 *	名取市教育委員会	遺構確認調査	包含地
114	南小泉遺跡	仙台市	宮城県 *	文化財保護課	東北少年院建築工事に伴う *	包含地
115	坂下吉墳跡	村田町	村田町 *	村田町教育委員会	宅地造成工事に伴う *	円墳
116	城生権跡	中新田町	中新田町 *	中新田町教育委員会	遺構確認調査	古代城跡
117	中田畑中遺跡	仙台市	仙台市 *	仙台市教育委員会	宅地造成工事に伴う *	集落跡
151	鴻ノ巣遺跡	仙台市	仙台市 *	仙台市教育委員会	*	*
157	下ノ内浦遺跡	仙台市	仙台市 *	仙台市教育委員会	倉庫新築に伴う *	*
165	越田台遺跡	石巻市	石巻市 *	石巻市教育委員会	土取り工事に伴う *	包含地
186	燕沢遺跡	仙台市	仙台市 *	仙台市教育委員会	仙台市山崎東土地区画整理事業に伴う *	包含地
191	藤ヶ浜貝塚	唐桑町	唐桑町 *	文化財保護課	美容所兼住宅建築に伴う *	包含地
192	高柳遺跡	泉市	泉市 *	泉市教育委員会	高柳川改修工事に伴う *	*
201	千貫田遺跡	丸森町	宮城県 *	文化財保護課	宮城県営運動場整備事業に伴う *	*
202	矢ノ目遺跡	丸森町	宮城県 *	*	揚水機場建設工事に伴う *	集落跡
203	岩ノ入遺跡	丸森町	宮城県 *	*	宮城県営運動場整備事業に伴う *	包含地
224	菅野原遺跡	利府町	利府町 *	*	宅地造成工事に伴う事前調査	散布地
260	瀧沢山遺跡	宮城町	宮城町 *	宮城町教育委員会	遺跡の範囲確認調査	包含地
273	名生館遺跡	古川市	宮城県 *	宮城県教育委員会	重要遺跡確認調査	古代玉造館推定地
276	長者館跡	河南町	河南町 *	文化財保護課	浄水場建設工事に伴う事前調査	城館跡
283	吉野城跡	角田市	角田市 *	角田市教育委員会	市道改良工事に伴う事前調査	城館跡
294	製鉄遺跡	泉市	泉市 *	泉市教育委員会	宅地造成に伴う *	製鉄遺跡
295	竹ノ内遺跡	泉市	宮城県 *	文化財保護課	免許センター建設に伴う *	包含地
302	吉田遺跡(朝栗遺跡)	米山町	米山町 *	米山町教育委員会	重要遺跡確認調査	宮内跡
303	五松山洞窟遺跡	石巻市	石巻市 *	石巻市教育委員会	予防治山事業掘削工事に伴う事前調査	包含地
313	中新田城跡	中新田町	中新田町 *	中新田町教育委員会	都市計画街道改良工事に伴う *	城館跡
314	南小泉遺跡	仙台市	仙台市 *	仙台市教育委員会	倉庫新築に伴う事前調査	集落跡
349	梶賀・諏訪橋南遺跡	角田市	宮城県 *	文化財保護課	用水管埋設工事の事前調査	集落跡
358	鳥居原遺跡	仙台市	仙台市 *	仙台市教育委員会	仙台市高速鉄道南北線建設工事に伴う *	水田跡
359	泉崎前遺跡	仙台市	*	*	地下鉄工事に係る事前調査	水田跡
360	中谷地、鳥居原遺跡	仙台市	*	*	仙台市高速鉄道南北線建設工事に伴う *	水田跡

宮城県文化財調査報告書刊行一覧

刊行年月日	報 告 書 名
1954 (昭和29年3月)	宮城県文化財調査報告書第1集「仙台東照宮・遠見塚・かめ塚古墳」
1956 (昭和31年3月)	宮城県文化財調査報告書第2集「菜切谷廃寺跡」
1958 (昭和33年3月)	宮城県文化財調査報告書第3集「高蔵寺阿弥陀堂・高蔵寺の仏像」
1958 (昭和33年3月)	「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」
1962 (昭和37年3月)	「昭和36年度多賀城発掘調査概報」
1963 (昭和38年3月)	「昭和37年度多賀城発掘調査概報」
1964 (昭和39年3月)	「昭和38年度多賀城跡発掘調査概報」
1965 (昭和40年3月)	宮城県文化財調査報告書第8集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報 (崎山団洞窟・糠塚古墳調査概報・田町裏遺跡・敷味遺跡・合味原古墳群)」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第9集「宮城県遺跡地名表」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第10集「宮城の民俗(民俗資料緊急調査報告)」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第11集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書(宇ノ崎古墳)」
1967 (昭和42年3月)	宮城県文化財調査報告書第12集「埋蔵文化財発掘調査報告書 (掛形横穴古墳群・鷹の巣古墳群・松崎古墳)」
1967 (昭和42年3月)	宮城県文化財調査報告書第13集「(新産業都市指定地区)埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (西ノ浜貝塚・三十三間堂)」
1967 (昭和42年12月)	宮城県文化財調査報告書第14集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 陸奥国分寺跡東北部発掘調査報告」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第15集「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第16集「埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報(西ノ浜貝塚)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第17集「埋蔵文化財緊急調査概報 (東北縦貫自動車道遺跡地名表・同試掘調査略報)」
1968 (昭和43年3月)	「蔵王山麓民俗図誌(釜房ダム水没地区)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第18集「埋蔵文化財緊急調査概報 東北縦貫自動車道遺跡地名表・湯ノ倉館試掘調査概報」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第19集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報(長根貝塚)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第20集「埋蔵文化財第四次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第21集「蔵王山麓の社会と民俗」
1970 (昭和45年3月)	宮城県文化財調査報告書第22集「日の出山窯跡群」
1970 (昭和45年3月)	宮城県文化財調査報告書第23集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 (下原田遺跡・二屋敷遺跡・持長地遺跡)」
1971 (昭和46年3月)	宮城県文化財調査報告書第24集 「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(刈田郡蔵王町地区)」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第25集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 (白石市:柴田郡村田町地区)」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第26集「宮城県指定天然記念物球状斑れい岩調査報告」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第27集「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書 (地名表・試掘調査概報(白石・高清水地区))」

1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財報告書第28集「宮城県遺跡地名表」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第29集「菅生田遺跡調査概報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第30集「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第31集「東北自動車道関係遺跡発掘調査略報 (白石市・仙台市～大和町地区)」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第32集「山畑装飾横穴古墳群発掘調査概報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第33集「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」
1974 (昭和49年3月)	宮城県文化財調査報告書第34集「山中七ヶ宿の民俗」
1974 (昭和49年3月)	宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ(荒屋敷横穴古墳群・山下横穴古墳群・北沢遺跡・西野田遺跡・岩切鴻ノ巣遺跡・中ノ墓A遺跡)」
1974 (昭和49年3月)	「宮城県の古民家」(宮城県民家緊急調査報告書)
	第37集 欠番
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第38集「宮前遺跡」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第39集「土平遺跡発掘調査概報」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第40集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年度分)」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第41集「天然記念物ヨコグラノキ北限地帯調査報告書」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第42集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和50年度分)」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第43集「貞山堀運河」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第44集「砂山横穴古墳群調査報告書」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第45集「特別名勝松島(保存管理計画策定書)」
1976 (昭和51年10月)	宮城県文化財調査報告書第46集「宮城県遺跡地名表」
1976 (昭和51年10月)	宮城県文化財調査報告書第47集「宮城県遺跡地図」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第48集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第49集「清太原西遺跡・船渡前遺跡」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第50集「清水側遺跡」
1977 (昭和52年10月)	宮城県文化財調査報告書第51集「宮城県民俗分布図」緊急民俗資料分布調査報告書
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第52集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅰ(上深沢遺跡)」
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第53集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)」
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第54集「湯ノ坪遺跡」
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第55集「歴史の道調査結果略報」
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第56集「北沢遺跡」

1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第57集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和53年度分)」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第58集「ほ場整備関連遺跡詳細分布調査報告書」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第59集「宇南遺跡」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第60集「歴史の道調査結果略報」
1979 (昭和54年8月)	宮城県文化財調査報告書第61集「五輪C遺跡」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第62集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第63集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第64集「ほ場整備関連遺跡詳細分布調査報告書」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第65集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第66集「歴史の道調査報告書」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第67集「金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎一号墳他」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第68集「玉造遺跡」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第69集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅲ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第70集「金取遺跡」
1980 (昭和55年9月)	宮城県文化財調査報告書第71集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅳ」
1980 (昭和55年9月)	宮城県文化財調査報告書第72集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第73集「宮城県遺跡地名表」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第74集「宮城県遺跡地図」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第75集「宮城県営ほ場整備関連遺跡調査報告書」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第76集「東北地建バイパス関連遺跡調査報告書」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第77集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第78集「長者原貝塚・上新田遺跡」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第79集「仙南仙塩広域水道関係遺跡調査報告書」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第80集「歴史の道調査報告書」
1981 (昭和56年6月)	宮城県文化財調査報告書第81集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第82集「宮城県の民俗芸能」
1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第83集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」
1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第84集「多賀城市水入遺跡発掘調査報告書」
1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第85集「青木畑遺跡」

1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第86集「宮城県営ほ場整備関連遺跡等調査報告書」
1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第87集「松島有料道路関連遺跡」(館山館・山下)
1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第88集「仙南仙塩広域水道関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第89集「天神山遺跡」
1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第90集「文化財発掘調査略報」
1982 (昭和57年3月)	宮城県文化財調査報告書第91集「宮城県におけるニホンカモシカの生息状況 —特別天然記念物カモシカ緊急調査—」
1982 (昭和57年9月)	宮城県文化財調査報告書第92集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ」
1983 (昭和58年3月)	宮城県文化財調査報告書第93集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」
1983 (昭和58年3月)	宮城県文化財調査報告書第94集「南小泉遺跡」
1983 (昭和58年3月)	宮城県文化財調査報告書第95集「宮城県営圃場整備関連遺跡調査報告書」
1983 (昭和58年3月)	宮城県文化財調査報告書第96集「朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」
1983 (昭和58年3月)	宮城県文化財調査報告書第97集「御堂平遺跡」
1983 (昭和58年3月)	宮城県文化財調査報告書第98集「近世社寺建築緊急調査報告書」